

教育年報

第18号
2024年度



岩手医科大学薬学部
大学院薬学研究科



Iwate Medical University School of Pharmacy
Graduate School of Pharmaceutical and Health Sciences

目 次

薬学部長挨拶	4
I. 概況	
1. 薬学部	6
(1) 人材養成および教育研究上の目的	6
2. 大学院薬学研究科	8
(1) 人材養成および教育研究上の目的	9
(2) 入学から学位取得までの概要	12
博士課程	
3. 岩手医科大学組織図	15
4. 薬学部講座・分野編成	16
5. 教育活動	
① 3つのポリシーについて	17
② カリキュラムとカリキュラムマップについて	28
③ 薬学部開講授業一覧	
1) 1 学年	33
2) 2 学年	35
3) 3 学年	36
4) 4 学年	38
5) 5 学年	40
6) 6 学年	41
7) 自由科目	42
④ 大学院薬学研究科授業科目一覧	43
⑤ 多職種連携のためのアカデミックリテラシー	45
⑥ 早期体験学習	51
⑦ 早期臨床体験	53
⑧ 工場見学実習	57
⑨ チーム医療リテラシー	61
⑩ 看護体験実習	64
⑪ 薬学共用試験 OSCE	65
⑫ 薬学共用試験 CBT	67
⑬ 実務実習	69
⑭ 実践チーム医療論（病棟実習）	70
⑮ 卒業研究発表会	71
⑯ 岩手医科大学4学部合同学生セミナー	72
⑰ 第110回薬剤師国家試験について	75
⑱ 授業アンケート	77
6. その他の活動	
① 薬学部主催のセミナー、シンポジウム等	83
② キャリア支援センターの活動	84
③ 薬学部学生会	90
④ 薬学部教員研修	91
⑤ 出張講義・オープンキャンパス等	94
⑥ ひらめき☆ときめきサイエンス	97
⑦ 模擬患者（SP）養成にかかる広報活動および講習会	100
⑧ 高大連携「ウインター・セッション」	102
⑨ 卒後研修	104
⑩ 新聞記事等	106

II. 各講座の教育業績

創薬有機化学分野	110
天然物化学分野	118
構造生物薬学分野	120
分析化学分野	124
機能生化学分野	126
生体防御学分野	129
分子細胞薬理学分野	134
臨床医化学分野	137
薬剤治療学分野	141
創剤学分野	147
薬物代謝動態学分野	151
衛生化学分野	154
臨床薬剤学分野	159
情報薬科学分野	165
地域医療薬学分野	170
薬学教育学分野	176

薬学部長挨拶

令和 6 年度、岩手医科大学薬学部では第 13 期生が卒業しました。また、論文提出による学位申請・最終試験を経て、昨年度に引き続き、社会人 1 名が、博士（薬学）の学位を取得しました。

昨年度までは、教育・研究年報として薬学部の 1 年間の教育活動および研究実績について編纂してまいりましたが、本学では、全学部を通しての研究業績集が発行されていることから、今年度からは、薬学部での教育に特化した内容に注力した「教育年報」として新たなスタートを切ることとなりました。

令和 6 年度からの薬学教育は、「未来の社会や地域を見据え、多様な場や人をつなぎ活躍できる医療人の養成」をキャッチフレーズとし、高齢人口の最大化と生産年齢人口の激減が同時に起こるとされる 2040 年の薬剤師のあるべき姿を見据えた、新しい薬学教育モデル・コア・カリキュラム（令和 4 年度改訂版）に基づく教育プログラムが開始されました。この新プログラムは、これまでの「卒業時での基本的な資質・能力」ではなく、「生涯にわたって医療に貢献することのできる「薬剤師として求められる基本的な資質・能力」を掲げた学修成果基盤型教育です。この新展開により、各大学は、その理念やディプロマ・ポリシーに基づき独自性のある教育プログラムを作成できるようになりました。本学は、医学部、歯学部、看護学部をもつ医療系総合大学であることを本学の独自性とし、他の大学では学ぶことのできない学修プログラムを今後、順次提供してまいります。

この教育年報（第 18 号）は、その新プログラム 1 年目の教育内容（1 年）と、以前のモデル・コア・カリキュラムでの教育（2～6 年）をまとめたものとなります。ここに記された内容および成果に対しまして、ご評価・ご指導賜りますようお願い申し上げます。

令和 7 年 5 月

河野 富一

I .概況

1. 薬学部

岩手医科大学・薬学部は平成 18 年 11 月に設置が認可され、平成 19 年 4 月に開設された。

本学では、建学の精神である「誠の人間の育成」の理念に基づき、生命の尊厳を重視する深い教養と豊かな人間性の涵養を重視する教育がおこなわれてきた。

薬学部においては、建学の精神を受け継ぎながら、医学部・歯学部との密接な連携のもと『総合的な視野から問題発見と解決の能力を持ち、実践を重視した専門的な知識と技術を修得した人材』を育成することを目的としている。特に新しい時代の高度な医療のニーズに対応し、東北地方ならびに全国、そして国際社会に貢献できるレベルの高い人材を育成することを目指す。

以下に、本学の人材養成および教育研究上の目的と、薬学部の組織図、講座編成等について概略をまとめる。なお、本学薬学部は薬学科 6 年制であり、各学年の入学定員は、平成 28 年度までは 160 名であり、平成 29 年度に 140 名、平成 30 年度に 120 名、令和 3 年度に 80 名、令和 6 年度に 50 名としている。令和 6 年度の 6 学年までの総定員は 530 名となる。

(1) 人材養成および教育研究上の目的

(趣旨)

本学の教育研究方針を明確にし、学部等における教育の質を保証するとともにその基準を内外に示すため、医学部・歯学部・薬学部・看護学部の人材養成および教育上の目的を以下のように定めている。

(各学部の目的)

医学・歯学・薬学・看護学の四学部をもつ医療総合大学としての特色を活かし、各学部間の緊密な連携のもとに人類の健康・福祉の向上に貢献することを目指す。

- ① 医学部：教育・診療・研究において、主導的役割を担う豊かな人間性を備えた人材を養成する。人としての教養を高め、医師としての十分な知識と技能を修得させ、発展を続ける医学に対応する生涯学習のための自己啓発能力を涵養する。
- ② 歯学部：豊かな教養と人間性を涵養し、全人的医療を実践し、歯科医学、歯科医療ならびに口腔保健の進歩発展に寄与することのできる人材を養成する。
- ③ 薬学部：基礎薬学から医療・臨床薬学の教育研究を通し、豊かな人間性と広い視野から問題を発見し解決する能力を備え、薬学の進歩と地域医療の発展に貢献する人材を養成する。
- ④ 看護学部：人々の尊厳と権利を尊重し、最新の高度医療に対応する実践能力を持

ち、自律的に責務を遂行できる看護専門職として、看護学の発展に寄与し、地域社会に貢献する人材を養成する。

- ⑤ 全学教育推進機構教養教育センター：地域医療と国際社会に貢献する基盤として、学則に謳う「人としての教養」と、人文科学も含めた広い意味での科学を修得し、医学、歯学、薬学、看護学、またそれらの複合領域等において、自己研鑽を継続できる人材を養成する。

2. 大学院薬学研究科

令和元年度（2019 年度）までは、薬学研究科の博士課程は医療薬学コースおよび生命薬学コースの 2 つの区分が存在し、入学者はコースにより履修する科目の制限が設けられていた。この制限は、博士課程の学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）と照らし合わせた場合に望ましくないものと考えられた。このため、このコース設定に関わる規定の変更と岩手医科大学薬学研究科の教育課程編成方針・実施方針（カリキュラム・ポリシー）の改定を行った。その結果、医療薬学専攻に分子病態解析学、分子薬効解析学、薬物療法解析学、創薬基盤薬学、生命機能科学の 5 つの専攻分野が設定され、入学者はいずれかの専攻分野を選択することとした。これに伴い、コースによる科目選択の制限が無くなり、学生の履修に関する自由度が高くなった。更に、博士課程のディプロマ・ポリシーに掲げられた教育内容を満たすために、薬学研究科では初めての必修科目として「薬学研究概論」を新設した。令和 6 年度（2024 年度）は、薬学研究科のディプロマ・ポリシーの改訂を行い、全ての卒業生に求められる共通した学位授与方針として内容が一新された。さらに、これに基づく岩手医科大学大学院薬学研究科修了時コンピテンシーを初めて制定した。

薬学研究科修士課程は、開設以降入学者は 1 名に留まっており、機関別認証評価において、入学定員の管理に関して改善が求められていた。志願者を増やすために、入学説明会や広報活動を継続的に実施していたが、その後も入学者がいなかったため、薬学研究科委員会は、令和 5 年度（2023 年度）に薬学研究科修士課程の学生募集停止及び廃止を検討し、学長を議長とする教学運営会議において薬学研究科修士課程の廃止が決定した。

令和 6 年度（2024 年度）は、令和 7 年度（2025 年度）入学試験を実施し、博士課程に 1 名の入学者が決まった。研究科委員会において、博士課程の医療薬科学講座薬物創剤学分野の 1 名について、最終試験及び学位論文の審査における合格判定を行い、博士（薬学）の学位授与が行われた。また、論文提出による学位申請においても 1 名の申請者があり、最終試験及び学位論文の審査における合格判定を行い、博士（薬学）の学位授与が行われ、乙第 2 号の認定が行われた。

研究科委員会では、入学生の研究指導教員の選出を行うとともに、該当者の初期審査や中間審査及び最終試験や学位論文審査を実施した。また、履修科目の申請受付と単位認定を実施した。入学試験に関しては、募集要項の送付、出願の受付を行い、入学試験を実施した。

薬学研究科では、学生募集に関するガイダンスを学部生に対して実施した。ガイダンスは 2 月 6 日の第 5 学年の授業終了後に実施し、募集要項の一部を配布し、研究科教務委員長から大学院の概要に関して説明が行われ、更に、在学中の 1 名の研究科生（社会人学生）から、志望動機や在学中の様子などの説明が行われた。

更に、令和 6 年度（2024 年度）は、薬学研究科専攻分野の廃止、薬学研究科授業科目の変更を行うと共に、薬学研究科コンピテンシー達成ロードマップマトリックスを作成し、学修成果の可視化に向けた取り組みを開始した。

(1)人材育成および教育研究上の目的

研究科教務委員長 奈良場 博昭

岩手医科大学大学院の人材育成および教育研究上の目的は、岩手医科大学大学院学則第 1 章第 1 条に規定され、「医学、歯学及び薬学に関する学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めて文化の進展に寄与することを目的及び使命とする」と定められている。学部教育における「地域医療に貢献する医療人の養成」・「先進医療の発展に尽くす医療人の養成」を礎とし、大学院では、それを「学術の理論及び応用」に発展させ、より先進的で実践的な人材の育成を目指している。

薬学研究科の博士課程では、国際的な視野に立って自立して研究活動を行うに足る高度な研究能力及びその基礎となる学識を養い、医療薬学と医療の発展に貢献する臨床薬剤師、医薬品開発研究者及び生命薬学研究者、そして後進の指導を担う薬学教育者の育成を目指している。

博士課程では、リーダーとなれる薬剤師や生命薬学研究者及び薬学教育者の育成という観点から 4 つ（令和 6 年度以降は 5 つ）の項目を掲げている。下記に薬学研究科の学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を示す。

（令和 5 年度まで）

大学院薬学研究科の理念と教育目標に則り、所定の教育課程を修了し、以下の各項目を身につけ、学位論文審査に合格した学生に“修士（薬科学）”“博士（薬学）”の学位を授与します。

【修士課程】（令和 5 年度末で廃止）

修士課程（薬科学専攻）においては、以下の人材となりうるための知識・能力を修得します。

1. 薬学関連業界の幅広い領域で活躍できる人材

薬学に関する最新かつ十分な知識を身につけ、製薬企業の医薬情報担当者や医薬品開発担当者あるいは製剤技術者、医薬品開発業務受託機関におけるモニター、治験施設支援機関における治験コーディネーター、創薬科学研究者などとして、薬学関連業界における多くの分野で活躍できる。

2. 最新の知識を身につけた薬剤師

これからの薬剤師界は、6 年制薬学部を卒業した薬剤師によって活性化される一方、現に活躍している薬剤師によって牽引されていくことが望ましい。十分な実務経験の上に、薬学に関する最新の知識をバランスよく修得し、薬剤師界の発展に寄与するこ

とができる。

以上の教育成果を達成することができるように修士課程のカリキュラムが構成されています。定められた期間内に所定の講義と実習を受けて（学則第6条と第8条）、高度な薬学の知識と技能および態度を身につけることが求められます。また、研究活動で得られた科学的知見を学位論文として提出し、審査を受けて最終試験に合格することが、学位授与の要件となります。

【博士課程】

博士課程（医療薬学専攻）においては、以下の人材となりうるための知識・能力を修得します。

1. 科学的な視野に立ち、臨床の場においてリーダーとなれる薬剤師

臨床の場におけるリーダーとして活躍するとともに、高度な専門知識を持った臨床薬剤師を教育することができる。また、がん専門薬剤師、感染制御薬剤師などの専門薬剤師認定資格取得に向けた学術基盤を構築している。

2. 臨床におけるニーズを理解した医薬品開発研究者

リード化合物の探索、医薬分子の構造設計、有機分子と生体分子との相互作用、天然物由来の医薬品及びリード化合物、分子標的薬などの物理化学、有機化学、天然物化学、医薬品化学に関する知識、研究手法を修得している。これに加えて、これらの知識、研究技術を有効に活用するために、臨床での医薬品に対する要求について理解することができる。

3. 新規医薬品、新規治療法の開発に向けたシーズを提供できる生命薬学研究者

生体高分子の構造、酵素反応、分子遺伝学、遺伝子の解析、生体膜の輸送の分子機構などに関する知識、研究手法を修得し、生命薬学研究者としての基礎を構築している。さらに医療分野における生命薬学の重要性を認識し、新規医薬品、新規治療法の開発に向けたシーズを提供できる。

4. 6年制薬学部、大学院薬学研究科、臨床の場における薬学教育者

高度な専門知識と技能を備えた臨床薬剤師、医薬品開発研究者、生命薬学研究者、これらを教育することのできる人材となりうる。さらには実務実習に関する教育ができる。

以上の教育成果を達成することができるように博士課程のカリキュラムが構成されていま

す。定められた期間内に所定の講義と実習を受けて（学則第 6 条と第 8 条）、最先端の生命科学や薬学知識を学び、卓越した技能を修得することが求められます。主体的に研究者として自立していることを証明するため、研究活動で得られた科学的知見を学術論文として、査読制度のある学術雑誌に掲載し、公表する（あるいは掲載予定として受理される）ことが求められます。国際的に評価される質の高い研究を企画し遂行するためには、しっかりした実験計画の立案と遂行途中での適切な見直しが必要となります。そこで、研究開始時、遂行途中および終了時の各段階で、それぞれ初期審査、中間審査を受けて最終試験に合格することが、学位授与の要件となっています。

（令和 6 年度以降）

【博士課程】

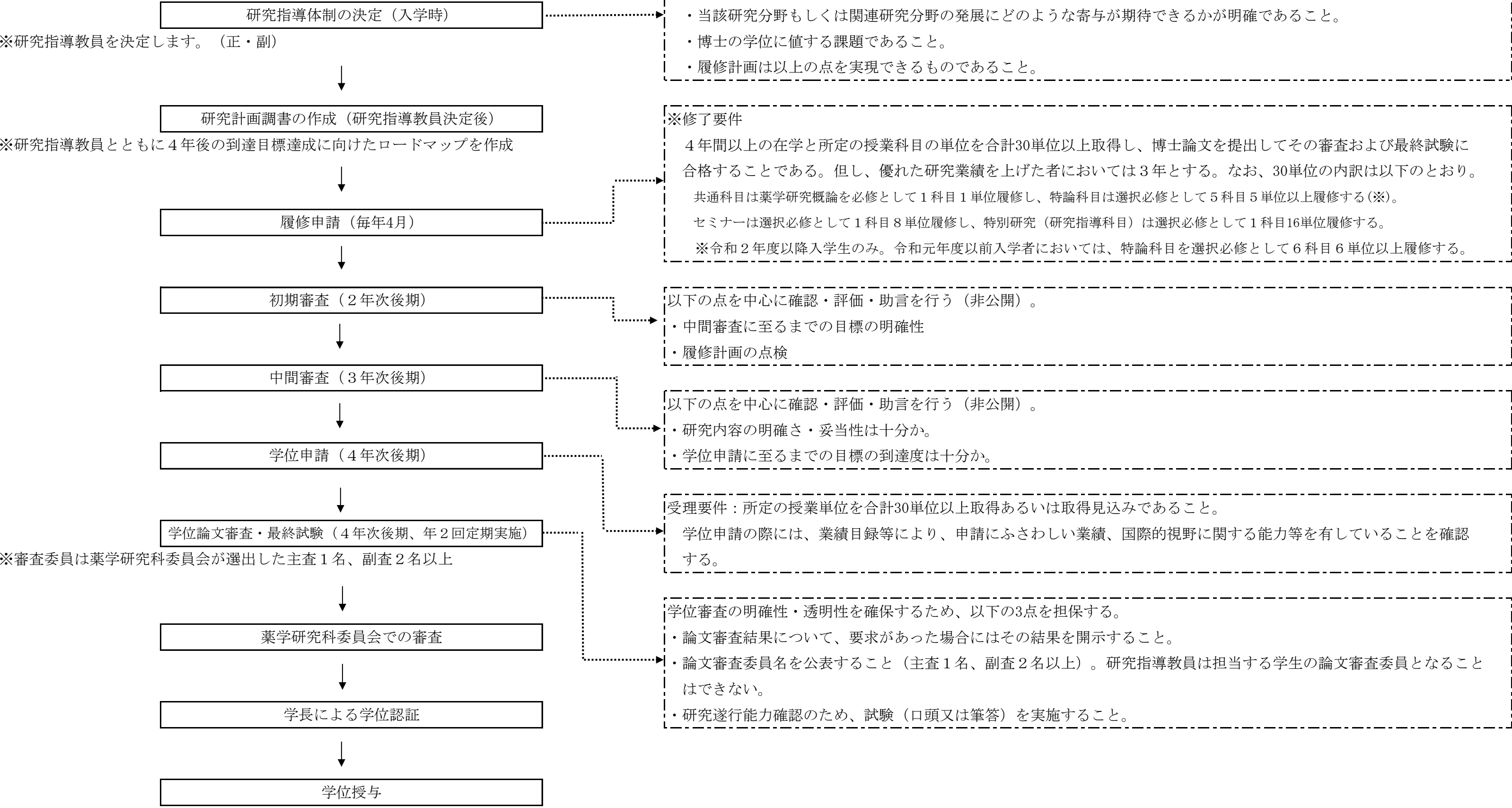
大学院薬学研究科の理念と教育目標に則り、所定の教育課程を修了し、以下の各項目を身につけ、学位論文審査に合格した学生に “博士（薬学）” の学位を授与します。

博士課程（医療薬学専攻）においては、高い倫理観と高度な専門的知識および先端的な技能を有し、生命薬学や創薬科学における研究者や教育者、臨床研究を遂行する臨床薬剤師、国際的な医薬品開発を担える人材などの育成を目的として、以下の資質および能力を修得した者に学位を授与します。

1. 研究者として、高い倫理観と社会に対する責任を担えるもの。
2. 専門領域において、高度な知識と技能を有するもの。
3. 自ら課題を発見し、論理的かつ柔軟な発想で、それを解決できるもの。
4. 国際的な視野を備え、専門分野における成果を国内外に情報発信できるもの。
5. 次世代の研究者を教育指導することができるもの。

以上の教育成果を達成することができるように博士課程のカリキュラムが構成されています。定められた期間内に所定の講義と実習を受けて（学則第 6 条と第 8 条）、最先端の生命科学や薬学知識を学び、卓越した技能を修得することが求められます。主体的に研究者として自立していることを証明するため、研究活動で得られた科学的知見を学術論文として、査読制度のある学術雑誌に掲載し、公表する（あるいは掲載予定として受理される）ことが求められます。国際的に評価される質の高い研究を企画し遂行するためには、しっかりした実験計画の立案と遂行途中での適切な見直しが必要となります。そこで、研究開始時、遂行途中および終了時の各段階で、それぞれ初期審査、中間審査を受けて最終試験に合格することが、学位授与の要件となっています。

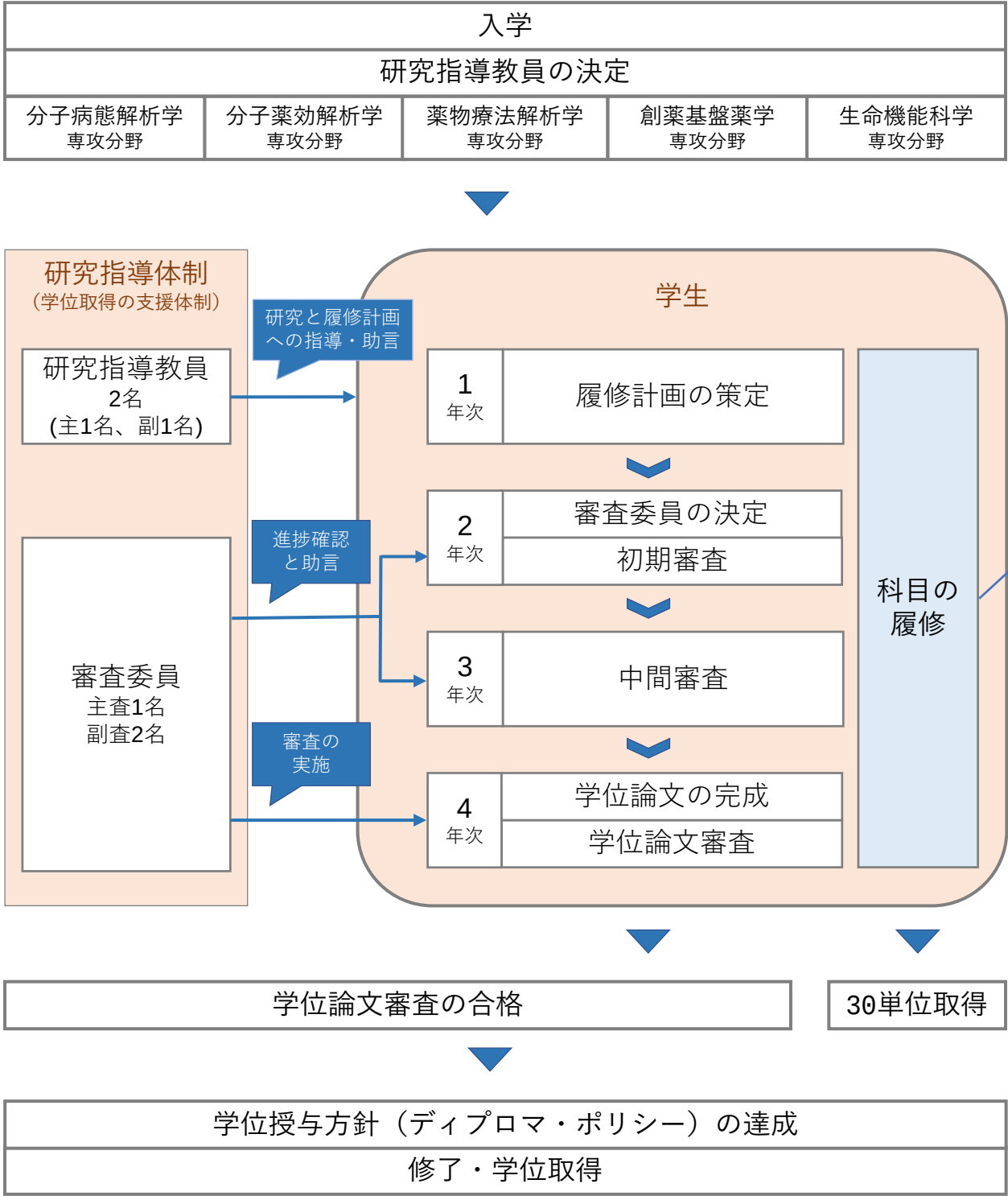
(2) 入学から学位取得までの概要
博士課程



【倫理審査について】

研究計画を遂行するにあたって、相手方の同意・協力を必要とする研究、個人情報の取り扱いの配慮を必要とする研究、生命倫理・安全対策に対する取組を必要とする研究など法令等に基づく手続きが必要な研究が含まれている場合には、研究開始前に学内の倫理委員会等の承認を得る必要がある。倫理委員会の承認には時間がかかることから、倫理委員会の承認を必要とする研究計画については、事前に研究指導教員と相談し研究の実施に支障をきたさないよう注意すること。

岩手医科大学大学院 薬学研究科 研究指導体制と履修科目の概要



履修科目の構成

薬学研究への導入となる科目

1単位

全専攻分野共通の必修科目「薬学研究概論」



研究指導教員による論文作成・研究指導科目

計24単位

専攻分野で異なる必修科目（原則4年間継続して履修）

- ・ セミナー科目：8単位
- ・ 特別研究科目：16単位

専攻分野	セミナー科目	特別研究科目
分子病態解析学専攻分野	分子病態解析学セミナー	医療薬学特別研究（分子病態解析学）
分子薬効解析学専攻分野	分子薬効解析学セミナー	医療薬学特別研究（分子薬効解析学）
薬物療法解析学専攻分野	薬物療法解析学セミナー	医療薬学特別研究（薬物療法解析学）
創薬基盤薬学専攻分野	創薬基盤薬学セミナー	生命薬学特別研究（創薬基盤薬学）
生命機能科学専攻分野	生命機能科学セミナー	生命薬学特別研究（生命機能科学）



研究領域等に合わせて自由に履修する科目

5科目5単位以上

全専攻分野で共通の科目群（特論科目）から選択必修



修了要件30単位

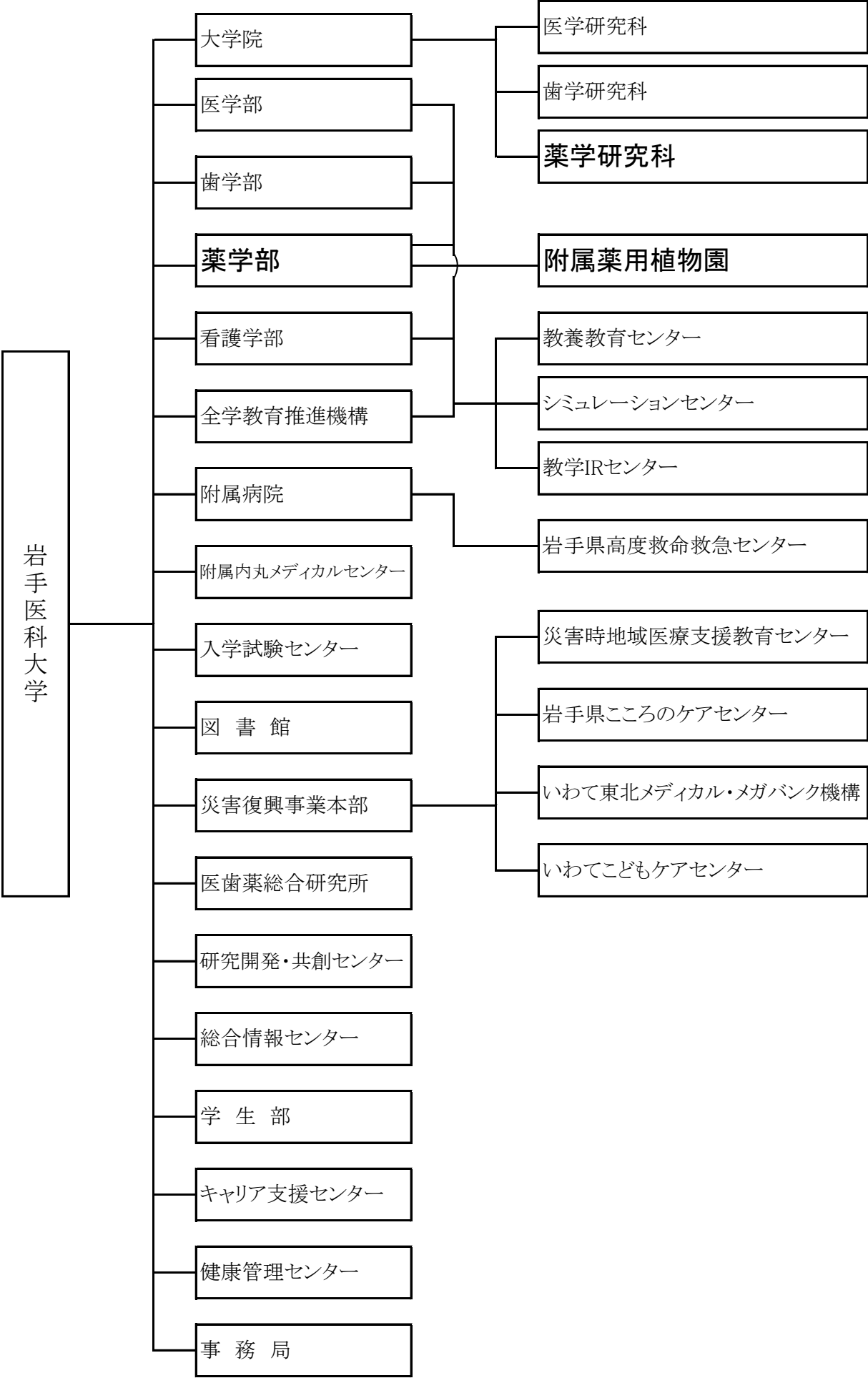
岩手医科大学大学院薬学研究科 博士課程修了要件(専攻分野別)

※授業科目の名称等:令和6年4月改定

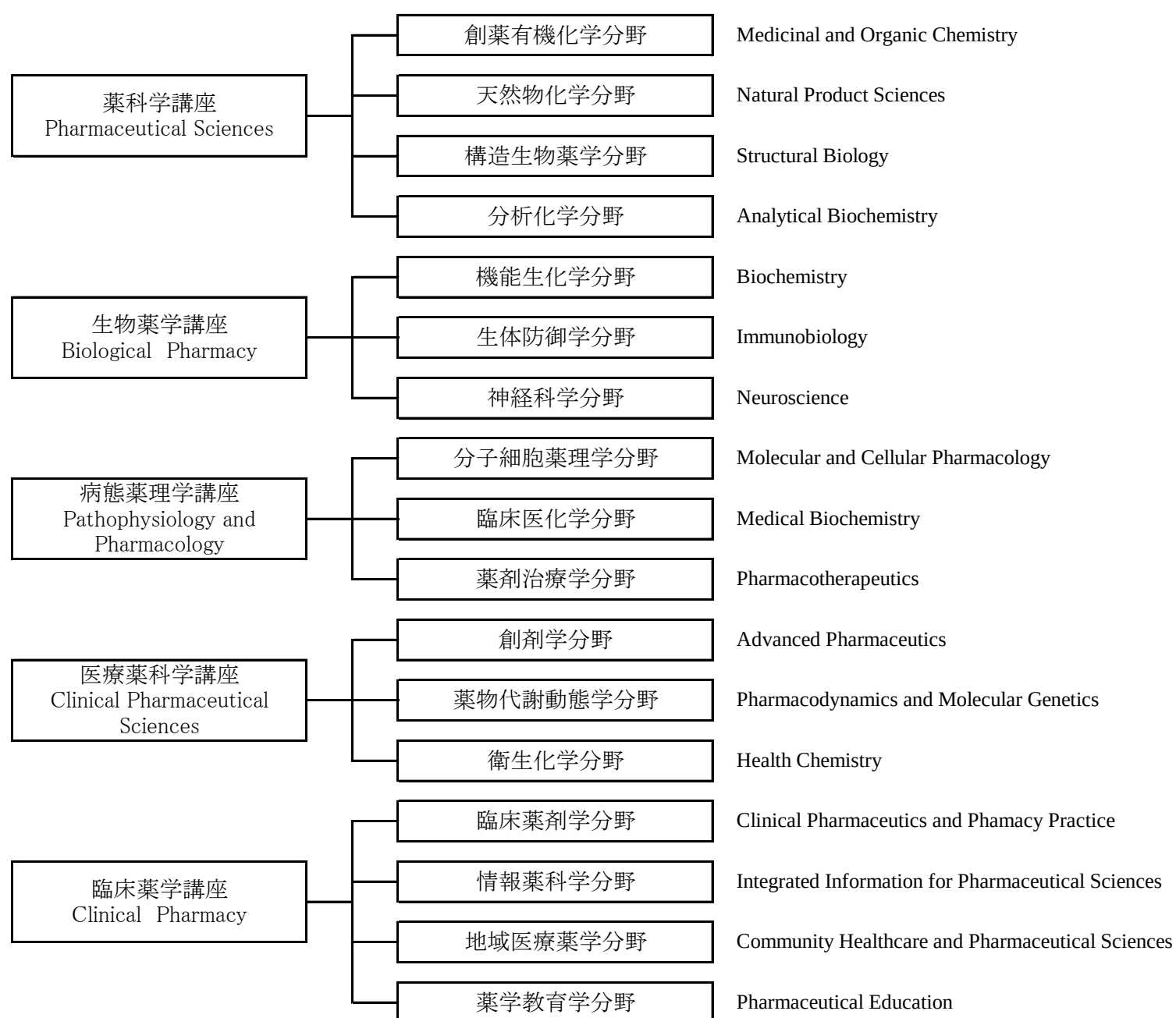
専攻分野名	必修科目		選択科目	博士 学位論文
	1年次履修	1～4年次履修	単年度履修	
分子病態解析学専攻分野	薬学研究概論	分子病態解析学セミナー 医療薬学特別研究(分子病態解析学)	病態医化学特論 病態薬理学特論 分子薬剤治療学特論	審査 最終試験
分子薬効解析学専攻分野		分子薬効解析学セミナー 医療薬学特別研究(分子薬効解析学)	実践地域医療薬学特論 薬物送達学特論 がん薬物療法学特論	
薬物療法解析学専攻分野		薬物療法解析学セミナー 医療薬学特別研究(薬物療法解析学)	分子腫瘍学特論 医療統計学特論 ゲノム情報薬学特論	
創薬基盤薬学専攻分野		創薬基盤薬学セミナー 生命薬学特別研究(創薬基盤薬学)	創薬分子科学特論 創薬触媒化学特論 創薬立案学特論	
生命機能科学専攻分野		生命機能科学セミナー 生命薬学特別研究(生命機能科学)	創薬有機化学特論 代謝生化学特論 生命科学計測制御特論	
単位数	1単位	24単位（セミナー8単位、特別研究16単位）	5単位以上（1科目1単位）	

修了要件(①と②を満たす)	① 30単位以上取得 ② 博士学位論文の審査及び最終試験の合格
---------------	------------------------------------

3. 岩手医科大学組織図



4. 薬学部講座・分野編成



5. 教育活動

① 3つのポリシーについて

薬学部教務委員長 奈良場 博昭

2023 年度までに本学薬学部に入学者に対するディプロマ・ポリシー（以下、DP）は以下のとおりである。

本学の建学の精神「医療人たる前に、誠の人間たれ」を深く理解したうえで薬剤師として必要な知識・技能・態度を修得し、薬学の進歩と地域医療の発展に貢献する人材として以下のような資質・能力が育成されており、かつ所定の単位を修めた者に対して学位（薬学）を授与します。

1. 医療人としての倫理観を備え、患者・生活者の視点を考慮し行動する。
2. 医薬品を理解して適正に取り扱う。
3. 医薬品及び関連する法規・制度、公衆衛生等について、医療人のみならず一般人にも分かりやすく適切に説明する。
4. 適正な医療の提供及び国民の健康維持・増進のサポートに貢献する。
5. チーム医療において、患者・生活者、他職種から情報を適切に収集し、これらの人々に有益な情報を提供するためのコミュニケーション能力を有する。
6. 医療施設や地域におけるチーム医療に積極的に参画し、相互の尊重のもとにファーマシューティカルケアを実践する能力を有する。
7. 薬学・医療の進歩と改善に資する研究を遂行する意欲とそれを実践するための基本的な知識・技能・態度を有する。
8. 医療における問題点を抽出し、科学的・論理的に問題解決を実践する意欲と態度を有する。
9. 薬学・医療の進歩に対応するために、医療と医薬品を巡る社会的動向を把握し、生涯学習を実践していく意欲と態度を有する。
10. 次世代を担う医療人を育成する意欲と態度を有する。

以上の教育成果を達成することができるよう六年一貫でカリキュラムが構成されています。本学のすべてのカリキュラムを完遂し、年次ごとの科目を着実に修得することが必要です。そのため、学則第2条に定める期間を在学し、かつ第6条に定める所定の授業科目及び単位を履修修得することが要件になります。

DPでは、「誠の人間」の育成、すなわち、教養や専門の知識と技能を修得し、実地の修練を積むことで研究や医療において社会に貢献するという、本学の理念を強調しつつ、学生が卒業までに身につけるべき資質と能力を示している。これらは、本学薬学部の教育研究上の目的から薬剤師に求められる資質・能力をさらに細分化するとともに2013（平成25）年度に示された「薬剤師として求められる基本的な10の資質」を参考として具体的な到達目標を盛り込んだものである。作成に際しては、教務委員会が示した原案について全教員によるFDで議論・検討を行い、最終案が完成した。これを薬学部教授会で審議・承認し、最終的に教学運営会議で決定された。

カリキュラム・ポリシー（以下、CP）では、DPに掲げる資質と能力を備えた「誠の人間」の育成

のために、本学薬学部での学修過程を具体的かつ分かりやすく示している。2023 年度までに本学薬学部に入学者に対する CP は、以下のとおりである。なお、2024 年度に本学薬学部に入学者に対する CP は、基準 1-3 に記載する。

学位授与に要求される能力を修得するために、薬学部は、以下の方針でカリキュラムを編成します。

1. 6 年間の全カリキュラムを通じ、生命と真摯に向き合う、温かい心を持つ「誠の人間」を育成します。
2. 「薬学教育モデル・コア・カリキュラム」及び医療現場のニーズに基づき学習目標を設定し、学年進行に伴い順次達成していきます。
3. 共通教育科目を通してヒューマニズムの基本や一般教養を身につけることにより豊かな人間性を育みます。
4. 薬学専門科目を学び、医療を担う薬剤師に必要な知識・技能・態度を身につけます。
5. 医学部・歯学部・薬学部・看護学部連携科目を通じ、チーム医療において薬剤師として活躍するために必要な知識・技能・態度とコミュニケーション能力を身につけます。
6. 薬学実習及び卒業研究を通して、薬学研究の重要性を認識し、科学的・論理的な思考力、課題発見・問題解決能力を養うとともに、学ぶ姿勢や自己研鑽能力を身につけます。
7. 病院と薬局における実務実習を通して医療現場の実際を体験し、臨床に資する薬剤師としての倫理観や実践力を養います。

この CP は 2007（平成 19）年度の本学薬学部開設時のものから、2013（平成 25）年度の新カリキュラム導入に合わせて改訂されている。CP は、DP の方針を踏まえて、ヒューマニズムや一般教養を基礎とした豊かな人間性、薬剤師に必要な知識・技能・態度、チーム医療に必要なコミュニケーション能力、卒業研究による思考力、課題発見・問題解決能力、薬剤師に必要な実践力などを醸成すべき能力として、教育内容・方法を具体的に示している。さらに、CP に関連し、6 年間の教育プログラムにおける一貫した学修成果の評価を目的として、2016（平成 28）年度に教務委員会がアセスメント・ポリシーを作成し、教授会で審議・承認された。本学薬学部の学修成果の評価は教育課程の実施と密接な関係にあり、CP とアセスメント・ポリシーは相互に支え合う関係性にあるといえる。

本学薬学部のアセスメント・ポリシーは以下のとおりである。

本学薬学部は、医療人として備えるべき資質を学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に定めて、それに沿ってカリキュラムを構成しています。「誠の人間を育成する」との大学・学部の理念に立脚し、以下の指針に則り、単位制を採用し、学年ごとに、あるいは科目ごとに、知識、技能並びに態度を多面的に評価します。

1. 講義科目では、知識とその応用を査定します。実習や演習科目では、技能、態度、コミュニケーション能力も評価します。臨床現場での実習科目では守秘義務や法を守る精神をもち、医療の担い手として相応しい態度をとっているかを評価します。
2. 知識とその応用に関しては筆記試験、技能は実技試験、その他の能力は実習現場評価（レポート、段階的スキル・行動表、および自己進捗度表等を取りまとめたポートフォリオ）で査定します。

3. 筆記試験、実技試験は数値化して達成度を査定します。実習現場評価では、可能な限り数値化できる評価法を用いて達成度を査定します。
4. 評価方法の選定と合否基準の設定にあたっては、その妥当性、客観性ならびに実現可能性を考慮し、担当委員会にて定期的に見直しを行い、次年度開始時に被評価者と評価者にシラバスで呈示します。
5. 薬学教育における順次性を考慮し、原則的に年度ごとの評価（進級判定）を行います。また、別途基準を設けて卒業判定を行います。
6. 科目合否判定や進級あるいはまた卒業時の判定に用いる総括的評価に加え、形成的評価を随時行うことで到達目標に至る道程を明らかにします。
7. 定期試験で、所定の到達目標に達しなかった場合は、再試験を行います。また定期試験を何らかの事情で受験できなかった場合は、追試験を行うことがあります（獲得した点数の9割に減じられたのが、最終評価になります）。
8. 第5学年次で実務実習を行うことができる知識・技能・態度が備わっているか否かは、共用試験（CBT と OSCE）と定期試験で判定します。
9. 科目履修は出席することが前提ですので、講義・演習・実習を1/3以上欠席した学生は、原則として評価対象から外れます（欠点となります）。評価に出席状況は加えられません（出席点は、ありません）。
10. 各学年の進級・卒業要件と各科目の合否基準の詳細は、シラバスに明示するとともに、学年当初に被評価者に確認をとります。
11. 各科目の査定をもとに Grade Point Average; GPA を算出し、進路に対する助言をします。
12. 試験問題の正答等に関し、被評価者からの照会に応じる体制を整備します。

2024年度に本学薬学部に入学者に対するアドミッション・ポリシー（以下、AP）は、以下のとおりである。

本学は、「医療人たる前に、誠の人間たれ」という建学の精神のもとに、地域医療に貢献する医療人育成を使命として設立されました。学則には、「まず人間としての教養を高め、十分な知識と技術とを習得し、更に進んでは専門の学理を極め、実地の修練を積み、出でては力を厚生済民に尽くし、入っては真摯な学者として、斯道の進歩発展に貢献する」ことが掲げられています。薬学教育・教養教育を通して、優れた資質と深い人間愛を有する医療人、研究者、人格的に成長できる人材の育成が、本学の目指すところです。

薬学部では、次のような人材を求めています。

1. 薬剤師となる明確な目的意識を持った人
2. 生命の大切さを知り、問題解決能力を身につける姿勢を持った人
3. 高度なチーム医療に薬の専門家として参加したい人
4. 医療と薬の専門性を基に疾病解明や医薬品の設計・開発に携わりたい人
5. 医療人として地域社会や国際社会に貢献したい人

上記の資質を備えた人材を募るために、一般選抜、学校推薦型選抜、社会人入学者選抜、

帰国子女入学者選抜という4つの方式により、知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性などを多面的・総合的に評価し、入学者を選抜します。また、大学入学共通テストを利用した入学試験も行います。

一般選抜では、入学後の学修に必要な基本的な知識と論理的思考能力を判断するために、理科及び数学の学力試験を課しています。学力試験は、知識にくわえて観察能力や応用的思考力も記述から評価しています。更に、学力試験のほか、面接試験を実施し、基本的なコミュニケーション能力及び大学での学びに対する姿勢も判断します。

大学入学共通テスト利用選抜では、大学入学共通テストの結果をもとに、理科、数学、外国語について基本的な学力を有するかを判定します。

学校推薦型選抜、社会人入学者選抜、帰国子女入学者選抜では、志望理由書や調査書に基づき、薬学を学ぶための準備状況や熱意、志望動機を確認するとともに、薬学部での学びに大切な理科の中から化学に関する学力試験や口頭試問を実施し、基礎的知識の確認をおこないます。更に、面接試験を実施し、薬学を志す熱意を確認するとともに、科学に対する関心及び医療や薬事に対する考えを聞き、本学において学ぶ姿勢が備わっているか総合的に判断します。

また、上記面接（社会人入学者選抜、帰国子女入学者選抜を除く）では、高校における学修態度、課外活動などを調査書で評価します。

なお、入学者の受け入れにあたっては、民族、宗教、国籍、年齢、性別、家庭環境、居住地域及び性的指向などを問わず、多様な人材を募集します。

APは、「誠の人間」の育成という本学の理念と薬学部が求める人材を5つの観点から説明している。ここでは、医療系総合大学としての本学の特色を生かした「チーム医療」についても強調されている。入試形態は、一般選抜、学校推薦型選抜、社会人入学者選抜、帰国子女入学者選抜という4つの方式があり、知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・協働性などを多面的・総合的に評価することにより、多様な学生を評定・選抜することを可能としている。それに続く文章の後半では、各入試区分において、学生を評価・選抜する意図と方法を具体的に示している。

本学の三つの方針は、他学部のものに合わせて大学ホームページや「岩手医科大学 運営方針と中長期計画 2017-2026」に掲載しており、教職員や社会に対し広く公表している。これらの刊行物等に加えて、APは「学生募集要項」において、試験概要（薬学部）の冒頭に掲載し、それに続き入学試験情報を説明している。このように本学薬学部のAPを入学希望者に周知している。

薬学部では、改訂モデル・コア・カリキュラム（令和4年度改訂版）の導入に合わせて、2023年度にDP及びCPの見直しを行った。この際には、学部内で組織したワーキンググループが作成した素案を元にして、教員によるFDの議論等で得られた意見を集約するなど、丁寧な検討を行った。新たな方針は、改訂モデル・コア・カリキュラム（令和4年度改訂版）と本学の理念、薬学部の教育研究上の目的を踏まえつつ、「チーム医療」という本学の特色や「地域医療」への貢献をより強調し、学生が理解しやすい明瞭かつ的確な表現となるように努めて作成され、最終的に、薬学部教授会の審議・承認を経て制定された（資料24）。なお、APに関しても、求める人材を適切に判断するための選抜方法の変更（受験科目の変更、面接での口頭試問の導入、一般入試における面接の導入など）に伴い、適宜修正を行っている。

2024 年度に本学薬学部に入学者に対する DP は以下のとおりである。

本学の建学の精神「医療人たる前に、誠の人間たれ」を深く理解したうえで薬剤師として必要な知識・技能・態度を修得し、薬学の進歩や地域医療の発展において活躍できる人材として以下のような資質・能力が育成されており、かつ所定の単位を修めた者に対して学位（薬学）を授与します。

1. プロフェッショナリズム： 薬剤師として医療に携わることを理解し、高い倫理観と豊かな人間性、及び生涯研鑽を通して社会の変化に対応できる意欲と態度を有するもの。
2. 地域医療： 地域における人々の健康に関心をもち、多様な環境や価値観に配慮し、献身的な態度で適切な医療の提供と健康維持・増進に寄与できるもの。
3. 多職種連携： チーム医療に積極的に参画し、他職種の相互の尊重と理解のもとに総合的な視点をもってファーマシューティカルケアを実践する能力を有するもの。
4. 研究マインド： 国際的な視野を備え、様々な情報・科学技術を活用し、薬学・医療の進歩に資する総合的な素養と能力を有するもの。

これらの教育成果を達成することができるよう六年一貫でカリキュラムが構成されています。本学のすべてのカリキュラムを完遂し、年次ごとの科目を着実に修得することが必要です。そのため、学則第2条に定める期間を在学し、かつ第6条に定める所定の授業科目及び単位を履修修得することが要件となります。

2024 年度に本学薬学部に入学者に対する CP は、以下のとおりである。

学位授与に要求される能力を修得するために、薬学部は、以下の方針でカリキュラムを編成します。

1. 6年間の全カリキュラムを通じ、生命と真摯に向き合うプロフェッショナルとして、温かい心を持つ「誠の人間」を育成します。
2. 「薬学教育モデル・コアカリキュラム」および医療現場のニーズに基づき学修目標を設定し、学年進行に伴い順次到達していきます。
3. リベラルアーツを通して一般教養と多様な視点を身につけることにより、豊かな人間性を育みます。
4. 薬学専門科目を学び、医療を担う薬剤師に必要な知識・技能・態度を身につけます。
5. 医学部・歯学部・薬学部・看護学部の連携科目を通じ、チーム医療において活躍するために必要な専門知識とコミュニケーション能力を身につけます。
6. 病院・薬局における実務実習やその他の参加型体験実習を通して地域医療の現場を体験し、薬剤師としての倫理観や臨床実践力を身につけます。
7. 薬学実習および卒業研究を通して、薬学研究の重要性を認識し、科学的・論理的な思考力、課題発見・問題解決能力を養うとともに、学ぶ姿勢や自己研鑽能力を身につけます。

薬学研究科においては、研究科委員会において修士課程および博士課程のディプロマ・ポリシーを検討し、平成 25 年 9 月 11 日開催の研究科委員会において設定を承認し、随時見直しを行なっている。

薬学研究科では、修士課程では、薬学関連業界で活躍できる人材及び最新の知識を身につけ臨床で活躍する人材という観点から 2 つの項目を掲げている。博士課程では、それに加え、リーダーとなれる薬剤師や生命薬学研究者及び薬学教育者の育成という観点から 4 つの項目を掲げている。以下に 2023 年度までに入学した学生の薬学研究科の学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を示す。

大学院薬学研究科の理念と教育目標に則り、所定の教育課程を修了し、以下の各項目を身につけ、学位論文審査に合格した学生に“修士（薬科学）”“博士（薬学）”の学位を授与します。

【修士課程】

修士課程（薬科学専攻）においては、以下の人材となりうるための知識・能力を修得します。

1. 薬学関連業界の幅広い領域で活躍できる人材

薬学に関する最新かつ十分な知識を身につけ、製薬企業の医薬情報担当者や医薬品開発担当者あるいは製剤技術者、医薬品開発業務受託機関におけるモニター、治験施設支援機関における治験コーディネーター、創薬科学研究者などとして、薬学関連業界における多くの分野で活躍できる。

2. 最新の知識を身につけた薬剤師

これからの薬剤師界は、6 年制薬学部を卒業した薬剤師によって活性化される一方、現に活躍している薬剤師によって牽引されていくことが望ましい。十分な実務経験の上に、薬学に関する最新の知識をバランスよく修得し、薬剤師界の発展に寄与することができる。

以上の教育成果を達成することができるよう修士課程のカリキュラムが構成されています。定められた期間内に所定の講義と実習を受けて（学則第 6 条と第 8 条）、高度な薬学の知識と技能および態度を身につけることが求められます。また、研究活動で得られた科学的知見を学位論文として提出し、審査を受けて最終試験に合格することが、学位授与の要件となります。

【博士課程】

博士課程（医療薬学専攻）においては、以下の人材となりうるための知識・能力を修得します。

1. 科学的な視野に立ち、臨床の場においてリーダーとなれる薬剤師

臨床の場におけるリーダーとして活躍するとともに、高度な専門知識を持った臨床薬剤師を教育することができる。また、がん専門薬剤師、感染制御薬剤師などの専門薬

剤師認定資格取得に向けた学術基盤を構築している。

2. 臨床におけるニーズを理解した医薬品開発研究者

リード化合物の探索、医薬分子の構造設計、有機分子と生体分子との相互作用、天然物由来の医薬品及びリード化合物、分子標的薬などの物理化学、有機化学、天然物化学、医薬品化学に関する知識、研究手法を修得している。これに加えて、これらの知識、研究技術を有効に活用するために、臨床での医薬品に対する要求について理解することができる。

3. 新規医薬品、新規治療法の開発に向けたシーズを提供できる生命薬学研究者

生体高分子の構造、酵素反応、分子遺伝学、遺伝子の解析、生体膜の輸送の分子機構などに関する知識、研究手法を修得し、生命薬学研究者としての基礎を構築している。さらに医療分野における生命薬学の重要性を認識し、新規医薬品、新規治療法の開発に向けたシーズを提供できる。

4. 6年制薬学部、大学院薬学研究科、臨床の場における薬学教育者

高度な専門知識と技能を備えた臨床薬剤師、医薬品開発研究者、生命薬学研究者、これらを教育することのできる人材となりうる。さらには実務実習に関する教育ができる。

以上の教育成果を達成することができるように博士課程のカリキュラムが構成されています。定められた期間内に所定の講義と実習を受けて（学則第6条と第8条）、最先端の生命科学や薬学知識を学び、卓越した技能を修得することが求められます。主体的に研究者として自立していることを証明するため、研究活動で得られた科学的知見を学術論文として、査読制度のある学術雑誌に掲載し、公表する（あるいは掲載予定として受理される）ことが求められます。国際的に評価される質の高い研究を企画し遂行するためには、しっかりした実験計画の立案と遂行途中での適切な見直しが必要となります。そこで、研究開始時、遂行途中および終了時の各段階で、それぞれ初期審査、中間審査を受けて最終試験に合格することが、学位授与の要件となっています。

薬学研究科においては、研究科委員会において修士課程および博士課程のカリキュラム・ポリシーを検討し、平成25年9月11日開催の研究科委員会において設定を承認している。修士課程では、薬学関連業界で活躍できる人材及び最新の知識を身につけ臨床で活躍する薬剤師という観点から2つの項目を掲げている。博士課程では、それに加え、リーダーとなれる薬剤師や生命薬学研究者及び薬学教育者の育成という観点から3つの項目を掲げている。薬学研究科のカリキュラム・ポリシーは、令和元年度までは、入学後に2つのコースに分かれることとなっており、これに伴い、学生は履修科目が制限されることとなっていた。令和2年度に向けて、カリキュラム・ポリシーの改訂が検討され、令和2年2月の研究科委員会において、改訂案が審議、承認された。これにより、研究科博士課程におけるコース設定は撤廃され、履

修制限もなくなることとなった。

以下に 2023 年度までに入学した学生の薬学研究科の教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）を示す。

【修士課程】

薬科学専攻の目指している下記の人材を育成するため、薬科学専攻では、A 領域（構造・創薬）、B 領域（細胞・薬理）、C 領域（臨床・薬物）の 3 領域と共通科目に分類した講義科目のほか、実習及び演習を設けるとともに、より緻密な教育・研究指導を行うため、入学者には各 1 名の研究指導教員を定めます。

1. 薬学関連業界の幅広い領域で活躍できる人材の育成

21 世紀に入ってもなお、がん、成人病、感染症、遺伝病など、未解決の疾病に対して新しい薬が必要とされており、日本は高度な創薬科学の研究を効果的に進め、製薬工業に貢献することが求められています。そこで、4 年制薬学部をはじめとする理系学部出身者が創薬科学研究の場で活躍できるための教育を行います。また、製薬企業の医薬情報担当者や医薬品開発担当者あるいは製剤技術者、医薬品開発業務受託機関におけるモニター、治験施設支援機関における治験コーディネーターなど、薬学関連業界において多くの分野で活躍できる最新かつ十分な知識を身につけた人材を育成します。

2. 最新の知識を身につけた人材の育成

現在の病院や薬局で勤務する薬剤師は、その多くが 6 年制薬学部の実務実習を担当しています。既に社会で活躍している薬剤師を 2 年制修士課程に迎え、薬剤師の学問的な資質、特に臨床における創薬科学の能力向上を目指し最新の知識を身につけた実務教育者として養成します。さらに、地域医療の担い手としての現役薬剤師が、最新の薬学知識を習得する場を提供します。

【博士課程】

医療薬学専攻の目指している下記の人材を育成するため、医療薬学専攻に分子病態解析学、分子薬効解析学、薬物療法解析学、創薬基盤薬学、生命機能科学の 5 つの専攻分野を置き、入学者はいずれかの専攻分野を選択し、専攻分野の教員と相談して研究指導教員を決定します。また、専攻分野に応じた特別研究、セミナーを履修します。

1. 科学的な視野に立ち、臨床の場においてリーダーとなれる薬剤師の育成

薬物治療における高度な知識、技能、態度を修得した臨床薬剤師を育成するための教育・研究プログラムが設置されています。これにより、臨床の場においてリーダーとなれる人材、さらには高度な専門知識を持った臨床薬剤師を教育することのできる人材の育成を目指します。また、がん専門薬剤師、感染制御専門薬剤師などの専門薬剤師認定資格取得に向けた学術基盤を構築します。

2. 臨床におけるニーズを理解した医薬品開発研究者の育成

物理化学、有機化学、天然物化学、医薬品化学に関する教育・研究プログラムを通して、リード化合物の探索、医薬分子の構造設計、有機分子と生体分子との相互作用、天然物由来の医薬品およびリード化合物、分子標的薬などに関する知識、研究手法を修得します。

3. 新規医薬品、新規治療法の開発に向けたシーズを提供できる生命薬学研究者の育成

生体高分子の構造、酵素反応、分子遺伝学、遺伝子の解析、生体膜の輸送の分子機構などに関する教育・研究プログラムを通して、生命薬学研究者としての基礎を構築します。

本カリキュラム・ポリシーは、学生に対して、シラバスおよび年度初めのガイダンスにおいて周知させている。また、ホームページ上で社会に公開している。

薬学研究科では、学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）として以下を定めている。

本学大学院学則では「医学、歯学及び薬学に関する学術の理論および応用を教授研究し、その深奥を究めて文化の進展に寄与することを目的及び使命とする」と謳っています。薬学研究科では、これを踏まえ、高い研究能力と地域医療の実践能力を有する人材の育成を目指しています。

薬学研究科の博士課程（医療薬学専攻）にあつては、国際的な視野に立って自立して研究活動を行うに足る高度な研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養います。医療薬学と医療の発展に貢献する臨床薬剤師、医薬品開発研究者及び生命薬学研究者、そして薬学教育者を目指す人を求めています。

薬学研究科では、一般選抜試験と社会人特別選抜試験、外国人留学生特別選抜試験を行います。

選抜試験では、外国語試験によって国際的な研究水準および研究成果の発信に必要な語学力を有することを確認します。さらに、専門試験によって、先進的な研究に必要な専門領域の知識・技能の基礎的な力の有無を判断します。

なお、入学者の受け入れにあたっては、民族、宗教、国籍、性別および性的指向などを問わず、多様な人材を募集します。

薬学研究科では、3つのポリシーの自己点検等を行い、令和6年度以降は、改正したディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーのもとで学生の受入を開始した。また、近年、入学者の見込めない状態が続いていた修士課程を廃止することとした。

以下に 2024 年度以降に入学した学生の薬学研究科の学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）を示す。

学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）

大学院薬学研究科の理念と教育目標に則り、所定の教育課程を修了し、以下の各項目を身につけ、学位論文審査に合格した学生に“博士（薬学）”の学位を授与します。

博士課程（医療薬学専攻）においては、高い倫理観と高度な専門的知識および先端的な技能を有し、生命薬学や創薬科学における研究者や教育者、臨床研究を遂行する臨床薬剤師、国際的な医薬品開発を担える人材などの育成を目的として、以下の資質および能力を修得した者に学位を授与します。

1. 研究者として、高い倫理観と社会に対する責任を担えるもの。
2. 専門領域において、高度な知識と技能を有するもの。
3. 自ら課題を発見し、論理的かつ柔軟な発想で、それを解決できるもの。
4. 国際的な視野を備え、専門分野における成果を国内外に情報発信できるもの。
5. 次世代の研究者を教育指導することができるもの。

以上の教育成果を達成することができるよう博士課程のカリキュラムが構成されています。定められた期間内に所定の講義と実習を受けて（学則第6条と第8条）、最先端の生命科学や薬学知識を学び、卓越した技能を修得することが求められます。主体的に研究者として自立していることを証明するため、研究活動で得られた科学的知見を学術論文として、査読制度のある学術雑誌に掲載し、公表する（あるいは掲載予定として受理される）ことが求められます。国際的に評価される質の高い研究を企画し遂行するためには、しっかりした実験計画の立案と遂行途中での適切な見直しが必要となります。そこで、研究開始時、遂行途中および終了時の各段階で、それぞれ初期審査、中間審査を受けて最終試験に合格することが、学位授与の要件となっています。

教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）

医療薬学専攻の目指している下記の人材を育成するため、医療薬学専攻には、分子病態解析学、分子薬効解析学、薬物療法解析学、創薬基盤薬学、生命機能科学の5つの専攻分野があります。入学者はいずれかの専攻分野を選択し、専攻分野の教員と相談して研究指導教員を決定します。また、専攻分野に応じた特別研究、セミナーを履修します。

1. 科学的な視野に立ち、臨床の場においてリーダーとなれる薬剤師の育成
薬物治療における高度な知識、技能、態度を修得した臨床薬剤師を育成するための教育・研

究プログラムが設置されています。これにより、臨床の場においてリーダーとなれる人材、さらには高度な専門知識を持った臨床薬剤師を教育することのできる人材の育成を目指します。また、がん専門薬剤師、感染制御専門薬剤師などの専門薬剤師認定資格取得に向けた学術基盤を構築します。

2. 臨床におけるニーズを理解した医薬品開発研究者の育成

物理化学、有機化学、天然物化学、医薬品化学に関する教育・研究プログラムを通して、リード化合物の探索、医薬分子の構造設計、有機分子と生体分子との相互作用、天然物由来の医薬品およびリード化合物、分子標的薬などに関する知識、研究手法を修得します。

3. 新規医薬品、新規治療法の開発に向けたシーズを提供できる生命薬学研究者の育成

生体高分子の構造、酵素反応、分子遺伝学、遺伝子の解析、生体膜の輸送の分子機構などに関する教育・研究プログラムを通して、生命薬学研究者としての基礎を構築します。

② カリキュラムとカリキュラム・マップについて

薬学部教務委員長 奈良場 博昭

本学薬学部の薬学教育カリキュラムにおける学修課程はすべて科目として単位を付与しており、CP に基づき構築されている。このことは、カリキュラム・マップとして、全学年のシラバスの巻末に、各学年の入学年度のカリキュラムに準拠したカリキュラム・マップとして明示している。また、薬学教育モデル・コア・カリキュラム（平成 25 年度版）の内容を含有しつつ、本学の特色である多職種連携を意識したチーム医療を学ぶ学部横断的科目や地域医療への貢献を重視した独自科目を設定している。なお、2024 年度入学生については、薬学教育モデル・コア・カリキュラム令和 4 年度改訂版に沿った教育内容としている。

1) 教養教育

本学薬学部の教養教育は、2～6 年次以上の CP3：「共通教育科目を通してヒューマンイズムの基本や一般教養を身につけることにより豊かな人間性を育みます。」および 1 年次の CP3：「リベラルアーツを通して一般教養と多様な視点を身につけることにより、豊かな人間性を育みます。」という方針に基づき編成されている。教養教育センターの教員と連携・協力することにより、1、2 年次に一般教養や倫理・ヒューマンイズム等に関する教養教育科目を設置している。一例として、1 年次には、人文系の科目として「法学」、「哲学の世界」、「道徳のしくみ」、「自然・文化人類学」等の科目に加えて、医療と社会及び文化などの関係を学ぶ科目として「医療と物語」、「医療とスポーツ」、「医療と法律」、「医療と福祉」等を選択必修科目として開講している。このように CP に基づき、教養教育を体系的に整理し、効果的に編成している。

2) 語学教育

本学薬学部の語学教育は、2～6 年次の CP5：「医学部・歯学部・薬学部・看護学部連携科目を通じ、チーム医療において薬剤師として活躍するために必要な知識・技能・態度とコミュニケーション能力を身につけます。」および 1 年次の CP5：「医学部・歯学部・薬学部・看護学部の連携科目を通じ、チーム医療において活躍するために必要な専門知識とコミュニケーション能力を身につけます。」という方針に基づき編成されている。教養教育センターが担当する必修科目「English Speaking & Listening」及び「English Reading & Writing」が実施されており、少人数制により、ネイティブスピーカーを含めた教員による授業が行われている。また、選択必修科目として、「科学英語」「実践英語」（2024 年度より実践英語のみ）が開講されている。さらに、薬学専門科目として、2 年次後期に「薬学実践英語 1」、3 年後期に「薬学実践英語 2」が実施されている。このほか、学生の海外研修として、自由科目「海外英語演習」が全学部生対象に開講されている。英語を学ぶ語学教育においては、1～3 年次の全ての科目において、医学・薬学と健康科学に関連する事項を含んでおり、更に医療現場において患者に対応することを想定したロールプレイなども実施している。一部の授業では、医療に関する最新のトピックスを含むとともに、医療系専門用語や薬の説明書および処方箋など、医療現場で活用できる語学力の修得に努めている。4～6 年次の卒業研究では、低学年での学修成果をもとに研究テーマに関連した英語論文を読解することで、実践的な語学力を磨く機会を提供している。卒業研究における英語文献の読解は、シラバスに掲載しているルーブリック評価表に含めており、成績評価項目の一つとしている。このように、語学教育は、医療の進歩・変革に対応し、医療現場で活用できる語学力

を身につける教育を含み、体系的に整理され、効果的に編成されている。これらの語学教育は、本学薬学部 DP や CP に示す生涯学習や自己研鑽といった方針にも即したものである。

3) 人の行動と心理に関する教育

本学薬学部の人々の行動と心理に関する教育は、2～6 年次の CP1：「6 年間の全カリキュラムを通じ、生命と真摯に向き合う、温かい心を持つ「誠の人間」を育成します。」および 1 年次の CP1：「6 年間の全カリキュラムを通じ、生命と真摯に向き合うプロフェッショナルとして、温かい心を持つ「誠の人間」を育成します。」という方針に基づき編成されている。薬学専門教育のみならず、教養教育センター担当科目と連携・協力することにより、1、2 年次に倫理・ヒューマニズム等に関する教養教育科目を設置している。一例として、1 年次に「生命倫理学」、2 年次に「早期臨床体験：医療人としてのヒューマニズム」、「医療における社会・行動科学」、「心理学」、「医療面接の基礎」を開講している。さらに、4 年次には薬学専門科目の学修が進んだ状態の学生に対して、「医療倫理とヒューマニズム」を開講している。この科目では、現代医療が直面している倫理的な問題をより具体的に理解し、医療の現状に対して自分なりの見解や心構えをもつことを目指している。これらの科目の他にも、1 年次から 6 年次までの各学年において開講される教養教育科目、薬学専門科目、多職種連携教育（IPE）科目の中で、医療従事者や患者・家族の行動と心理を考察する講義やグループワークを提供している。

4) 薬学教育モデル・コア・カリキュラムへの対応

本学薬学部の教育カリキュラムにおける薬学教育モデル・コア・カリキュラムへの対応は、2～6 年次の CP2：「「薬学教育モデル・コアカリキュラム」および医療現場のニーズに基づき学修目標を設定し、学年進行に伴い順次達成していきます。」および 1 年次の CP2：「「薬学教育モデル・コア・カリキュラム」及び医療現場のニーズに基づき学修目標を設定し、学年進行に伴い順次到達していきます。」という方針に基づき編成されている。さらに、これらの教育カリキュラムは、全学年共通の CP4：「薬学専門科目を学び、医療を担う薬剤師に必要な知識・技能・態度を身につけます。」の達成にも繋がっている。本学薬学部の教育カリキュラムは、薬学教育モデル・コア・カリキュラムに準拠し、体系的に整理され、順次性をもって効果的に編成されている。なお、2024 年度 2～6 年次の学年のシラバスの巻末に、薬学教育モデル・コア・カリキュラム平成 25 年度改訂版の各項目と、本学薬学部のカリキュラムの教育内容の対応表が収載されている。また、2023 年度には、学部内において、令和 4 年度改訂薬学教育モデル・コア・カリキュラムに基づく新教育プログラムの構築が行われたが、これは、各教育領域の担当者により構成された会議から起案・検討された素案を基に、科目の順次性や学年・学期間のバランス、学生負担等に配慮して編成されたものである。2024 年度 1 年次のシラバス巻末には、改訂モデル・コア・カリキュラムの小項目と新カリキュラム（1 年次科目）との対応表が収載されている。これらは、薬学教育・モデル・コア・カリキュラムの全ての項目を網羅している。

5) 大学独自の科目

本学薬学部の大学独自の科目は、CP に掲げた「チーム医療の基礎となるコミュニケーション能力」を重視したものとなっている。これらは、2～6 年次の CP5 および 1 年次の CP5 と密接に関わっている。さらに、本学薬学部では、CP に掲げた「地域医療への貢献」も重視しており、これは 2～6 年次の CP7：「病院と薬局における実務実習を通して医療現場の実際を体験し、臨床に資する薬剤師としての倫理観や実践力を養います。」および 1 年次の CP6：「病院・薬局における実務実習やその他の参加型体験実習を通して地域医療の現場を体験し、薬剤師としての倫理

観や臨床実践力を身につけます。」と密接に関連している。1年次の「早期体験学習」、2年次の「早期臨床体験」および3年次の「看護体験実習」では、様々な医療・福祉現場を見学して薬剤師の果たす役割に触れる機会となっている。更に、医学部、歯学部、看護学部が併設されている本学の特色を活かした学部混成によるグループワーク等を行う科目として、1年次の「多職種連携のためのアカデミックリテラシー」、3年次の「チーム医療リテラシー」、さらに、6年次の「4学部合同セミナー」といった多職種連携教育科目を実施している。これらは、「チーム医療の基礎となるコミュニケーション能力」の醸成において体系的に整理され、効果的に編成された教育課程である。また、岩手県という東日本大震災の被災地であることを踏まえて、2年次の「早期臨床体験」では、岩手県沿岸地区でのフィールドワークを通して災害医療を学び、災害時に薬剤師が果たす役割を考える機会を持っている。また、自由選択科目であるが6年次「実践チーム医療論」は、5年次の実務実習を終えた学生が、本学附属病院の各診療科において1週間の実地研修を行うものであり、医師による医学生に近い指導として診察や治療を間近に見学し、最新の医療を学ぶ貴重な機会となっている。この科目の最終日には、各学生が学修成果を発表することとなり、質疑応答を含めて総括を行っている。6年次の「地域医療マネジメント概論」は、地域医療の担い手としての意識を高める科目として設定している。さらに全学部全学年共通の自由選択科目「地域医療課題解決演習」を開講しており、この中では本学の所在地である岩手県紫波郡矢巾町と連携し、地域特有の医療問題を考え、学ぶ機会としている。これらは、「地域医療への貢献」について学修する本学の特徴的な教育課程である。以上の様に本学薬学部では、多彩な独自科目を実施しているが、これらは地域医療や多職種連携の重要性を理解するための科目群として開講している「早期体験学習」、「早期臨床体験」、「多職種連携のためのアカデミックリテラシー」、「チーム医療リテラシー」、「4学部合同セミナー」、「地域医療マネジメント概論」に対して、臨床現場において、それらの実践を学ぶための科目群として開講している「看護体験実習」、「実務実習」、「実践チーム医療論」というように棲み分けられており、効果的な学修体型を構築している。

大学独自の科目は他にも、本学医学部教員による薬学生のための2年次の「解剖学（解剖見学実習を含む）」、さらに2年次の「薬学実習1」及び3年次の「薬学実習2」に連動した岩手県内に工場を有する製薬企業の見学など、本県、本学の特徴を活かした独自科目が全学年において配置されている。なお、大学独自の教育やアドバンスト教育の内容を含む科目に関しては、シラバスの到達目標（SB0s）の文末に（☆）印を付すことになっている。

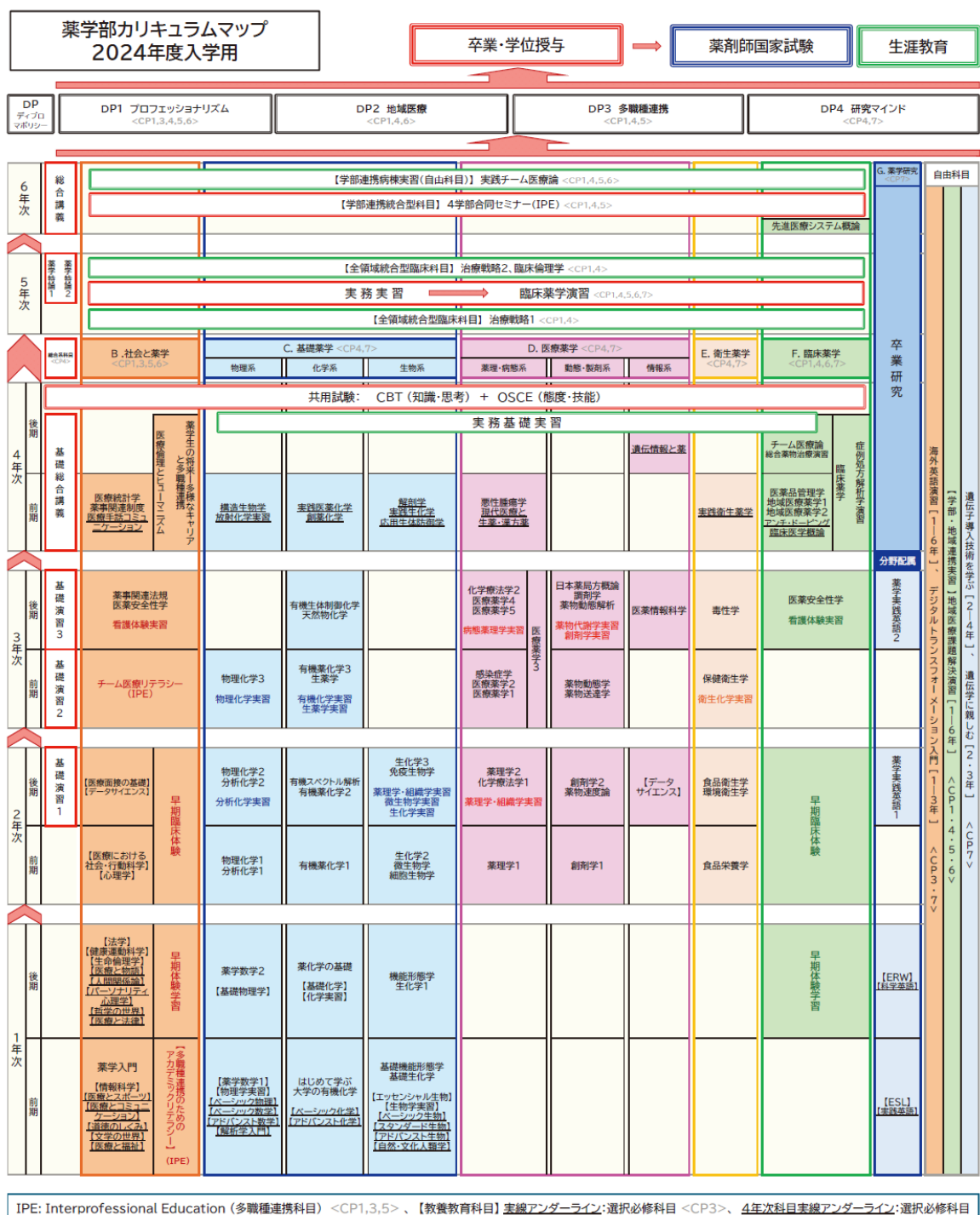
6) 問題発見・問題解決能力の醸成のための教育

本学薬学部の問題発見・問題解決能力の醸成のための教育は、2～6年次のCP6：「薬学実習および卒業研究を通して、薬学研究の重要性を認識し、科学的・論理的な思考力、課題発見・問題解決能力を養うとともに、学ぶ姿勢や自己研鑽能力を身につけます。」および1年次のCP7：「薬学実習及び卒業研究を通して、薬学研究の重要性を認識し、科学的・論理的な思考力、課題発見・問題解決能力を養うとともに、学ぶ姿勢や自己研鑽能力を身につけます。」という方針に基づき編成されている。本学薬学部の教育課程において問題発見・解決能力の醸成は多くの科目において期待されているが、主に高学年における「卒業研究1」「卒業研究2」「実務実習」に加え、各学年における全ての実習系科目、多職種連携教育科目、また、医療や創薬の現状と問題点を多様な外部講師陣が提供する4年次「医療倫理とヒューマニズム」、同「薬学生の将来 - 多様なキャリアと多職種連携」、6年次「地域医療マネジメント概論」、更に、ペーパーペイシェント

を基に標準医療を考える4年次「症例・処方解析学」、同「総合薬物治療演習」、5年次「治療戦略概論」および「医薬品情報セミナー」、6年次「臨床薬学総合演習」などがその役割を担っている。

以上の様に、本学薬学部教育カリキュラムはCPに基づき構築され、平成25年度版あるいは令和4年度改訂版の薬学教育モデル・コア・カリキュラムの内容を含有しつつ、大学独自の教育や問題発見・解決能力の醸成のための教育を充実させており、薬学共用試験や薬剤師国家試験の合格率の向上のみを目的とした編成とはなっていない。また、基準2-1に詳述したように、教育プログラムの内部質保証として、薬学部の教務委員会が計画、改善を行い、その評価を教務委員会とは独立した薬学教育評価委員会が行う体制を整備しており、学外有識者及び代表学生が構成委員に含まれる薬学教育評価委員会は、教務委員会の活動を確認・評価することで、教育プログラムの透明性を確保するとともに、社会や学生の意見・要望を反映できるような体制を整備している。

図 1 2024 年度入学生用カリキュラム・マップ



IPE: Interprofessional Education (多職種連携科目) <CP1,3,5>、【教養教育科目】実線アンダーライン:選択必修科目 <CP3>、4年次科目実線アンダーライン:選択必修科目

岩手医科大学薬学部の教育課程編成・実施方針(カリキュラム・ポリシー(CP))

- CP1. 6年間の全カリキュラムを通じ、生命・真摯に向き合うプロフェッショナルとして、温かい心を持つ「誠の人間」を育成します。
- CP2. 「薬学教育モデル・コアカリキュラム」および医療現場のニーズに基づき学習目標を設定し、学年進行に伴い順次到達していきます。
- CP3. リベラルアーツを通して一般教養と多様な視点を身につけることにより、豊かな人間性を育みます。
- CP4. 薬学専門科目を学び、医療を担う薬剤師に必要な知識・技能・態度を身につけます。
- CP5. 薬師・歯学部・薬学部・看護学部との連携科目を通じ、チーム医療において活躍するために必要な専門知識とコミュニケーション能力を身につけます。
- CP6. 病院・薬局における実務実習やその他参加型体験実習を通して地域医療の現場を体験し、薬剤師としての倫理観や臨床実践力を身につけます。
- CP7. 薬学実習および卒業研究を通して、薬学研究の重要性を認識し、科学・論理的な思考力、課題発見・問題解決能力を養うとともに、学ぶ姿勢や自己研鑽能力を身につけます。

③ 薬学部開講授業一覧

1) 1 学年

区分		科目名	担当講座(学科・分野)	担当者
教養教育科目	講義科目	生命倫理学	人間科学科哲学分野	林 研
		法学	人間科学科法学分野	廣瀬 清英
		薬学数学1	情報科学科数学分野	長谷川 大
		基礎物理学	物理学科	小松 真
		情報科学	情報科学科医用工学分野、情報科学科数学分野、物理学科	小野 保、長谷川 大、奥村 健一
		基礎化学	化学科	中島 理
		エッセンシャル生物	生物学科	松政 正俊、三枝 聖、内藤 雪枝、菅 孔太朗
		English Reading & Writing	外国語学科英語分野	松田 竜宙
		English Speaking & Listening	外国語学科英語分野	Jonathan Levine-Ogura
		健康運動科学	人間科学科体育学分野、教養教育センター	佐々木 亮平、佐々木 康允、谷藤 玲二
		ベーシック生物	生物学科	菅 孔太郎、内藤 雪枝、松政 正俊
		スタンダード生物	生物学科	三枝 聖、松政 正俊
		アドバンスト生物	生物学科、解剖学講座細胞生物学分野、生化学講座細胞情報科学分野、機能生化学分野、分子細胞薬理学分野、情報薬科学分野、教養教育センター	松政 正俊、菅 孔太朗、内藤 雪枝、三枝 聖、坂上 和弘、安達 登、栃内 新、齋野 朝幸、帖佐 直幸、奈良場 博昭、中西 真弓、西谷 直之
		自然・文化人類学	生物学科、生理学講座統合生理学分野、教養教育センター	松政 正俊、大沼 仁美、佐藤 洋一、中隋 克己、坂上 和弘、安達 登、栃内 新、飛内 悠子
		ベーシック化学	化学科	中島 理
		アドバンスト化学	化学科	東尾 浩典
		ベーシック物理	物理学科	奥村 健一
		ベーシック数学	情報科学科数学分野	長谷川 大
		解析学入門	情報科学科数学分野	長谷川 大
		文学の世界	人間科学科心理学・行動科学分野、教養教育センター	藤澤 美穂、塩谷 昌弘
		医療とコミュニケーション	人間科学科心理学・行動科学分野、教養教育センター	藤澤 美穂、駒野 宏人、平野 順子、大関 信隆、塩谷 昌弘
		道德のしくみ	人間科学科哲学分野	林 研
		医療とスポーツ	人間科学科体育学分野、教養教育センター	佐々木 亮平、藤野 恵美、佐藤 恵、内城 寛子
		実践英語	外国語学科英語分野	松田 竜宙
		医療と福祉	人間科学科(法学分野、心理学・行動科学分野、体育学分野)、神経精神科学講座、救急・災害医学講座、地域医療薬学分野、成育看護学講座、教養教育センター、医療福祉相談室	廣瀬 清英、相馬 一二三、藤澤 美穂、八木 淳子、最上 玲子、小野澤 章子、眞瀬 智彦、佐々木 亮平、高橋 智幸、近藤 昭恵、伊藤 美穂子、田沢 光正、高橋 寛
		医療と物語	外国語学科英語分野、緩和医療学科、臨床遺伝学科、救急・災害医学講座、教養教育センター	柳谷 千枝子、木村 祐輔、眞瀬 智彦、平林 香織、熊谷 治子、佐藤 洋一、山本 佳世乃
		パーソナリティ心理学	人間科学科心理学・行動科学分野、教養教育センター	藤澤 美穂、中島 淳子
		哲学の世界	人間科学科哲学分野	林 研
		人間関係論	人間科学科心理学・行動科学分野	香川 由美
		医療と法律	人間科学科法学分野	廣瀬 清英
		科学英語	外国語学科英語分野	Jonathan Levine-Ogura

区分		科目名	担当講座(学科・分野)	担当者
教養教育科目	実習・演習科目	多職種連携のためのアカデミックリテラシー	人間科学科(哲学分野、心理学・行動科学分野、法学分野、体育学分野)、情報科学科(数学分野、医用工学分野)、物理学科、化学科、生物学科、外国語学科英語分野、附属図書館	林 研、三浦 康宏、藤澤 美穂、香川 由美、廣瀬 清英、司書、佐々木 亮平、小松 真、内藤 雪枝、松田 竜宙、江尻 正一、高橋 史朗、奥村 健一、小田 泰行、中島 理、東尾 浩典、吉田 潤、松政 正俊、三枝 聖、柳谷 千枝子、長谷川 大、菅 孔太朗、小野 保、Jonathan Levine-Ogura、Robert Ken Asano
		物理学実習	物理学科	奥村 健一、小松 真、小田 泰行
		化学実習	化学科	中島 理、東尾 浩典、吉田 潤
		生物学実習	生物学科	松政 正俊、三枝 聖、内藤 雪枝、菅 孔太朗
薬学専門科目	薬学特別科目	はじめて学ぶ大学の有機化学	創薬有機化学分野	河野 富一、稲垣 祥
		薬学入門(全人的医療基礎講義含む)	構造生物薬学分野、機能生化学分野、地域医療薬学分野、生体防御学分野、薬剤治療学分野、薬物代謝動態学分野、創薬有機化学分野、情報薬科学分野、衛生化学分野、薬学教育学分野、教養教育センター	中西 真弓、高橋 寛、河野 富一、野中 孝昌、阪本 泰光、西谷 直之、小笠原 邦昭、中島 理、大橋 綾子、白石 博久、幅野 渉、杉山 晶規、三部 篤
	学・物理・衛生系科目	薬学数学2	薬物代謝動態学分野	寺島 潤
		薬化学の基礎	創薬有機化学分野	辻原 哲也
	生薬系科目・薬理	基礎機能形態学	分子細胞薬理学分野	奈良場 博昭
		基礎生化学(生体分子)	機能生化学分野	中西 真弓、關谷 瑞樹
		機能形態学	分子細胞薬理学分野	奈良場 博昭、藤原 俊朗、高橋 巖
	実習科目	早期体験学習	薬科学講座(創薬有機化学分野、天然物化学分野、構造生物薬学分野、分析化学分野)、生物薬学講座(機能生化学分野、生体防御学分野)、病態薬理学講座(分子細胞薬理学分野、臨床医化学分野、薬剤治療学分野)、医療薬科学講座(創剤学分野、薬物代謝動態学分野、衛生化学分野)、臨床薬学講座(臨床薬剤学分野、情報薬科学分野、地域医療薬学分野、薬学教育学分野)、教養教育センター	高橋 寛、白石 博久、会田 薫子、中島 理、朝賀 純一、那谷 耕司、杉山 晶規、西谷 直之、田浦 太志、河野 富一、辻原 哲也、稲垣 祥、野中 孝昌、阪本 泰光、大橋 綾子、錦織 健児、奈良場 博昭、藤原 俊朗、高橋 巖、杉山 育美、幅野 渉、寺島 潤、三部 篤、手塚 優、米澤 穂波、山下 典生、小守林 靖一、大橋 一晶、照井 克俊、藤本 康之、關谷 瑞樹、對馬 桃子、山田 恵美子、藤澤 春美、阿部 理、佐京 智子、松浦 誠、浅野 孝、高橋 宏彰、氏家 悠貴、川田 龍平

2)2学年

区分		科目名	担当講座(学科・分野)	担当者
育教 科養 目教	講義 科目	医療面接の基礎	人間科学科心理学・行動科学分野	藤澤 美穂、香川 由美
		データサイエンス	情報科学科数学分野	長谷川 大、江尻 正一
		医療における社会・行動科学	人間科学科心理学・行動科学分野	香川 由美
		心理学	人間科学科心理学・行動科学分野	藤澤 美穂
薬学専門科目	薬学特別科目	基礎演習1	創薬有機化学分野、分子細胞薬理学分野、薬物代謝動態学分野、分析化学分野、機能生化学分野、天然物化学分野	河野 富一、稲垣 祥、寺島 潤、高橋 巖、關谷 瑞樹、浅野 孝、藤本 康之
		分析化学計算演習	分析化学分野、天然物化学分野、機能生化学分野	藤本 康之、浅野 孝、關谷 瑞樹
		薬学実践英語1	外国語学科英語分野、創薬有機化学分野、臨床医化学分野、薬物代謝動態学分野、薬学教育学分野	白石 博久、大橋 一晶、河野 富一、Jonathan Levine-Ogura、寺島 潤
		解剖学	解剖学講座細胞生物学分野、分子細胞薬理学分野	齋野 朝幸、奈良場 博昭、山内 仁美、成田 啓之、Abdail Sayed sharif、平川 正人
	物理・化学・衛生系科目	環境衛生学	衛生化学分野	杉山 晶規
		食品衛生学	衛生化学分野	杉山 晶規
		物理化学1(分子の性質と電磁波)	構造生物薬学分野	野中 孝昌
		物理化学2(物質のエネルギーと平衡)	構造生物薬学分野	阪本 泰光
		分析化学1	分析化学分野	藤本 康之
		分析化学2	分析化学分野	藤本 康之
		有機スペクトル解析	創薬有機化学分野	河野 富一
		有機薬化学1(炭素-炭素多重結合の化学)	創薬有機化学分野	河野 富一、稲垣 祥
		有機薬化学2(炭素-ヘテロ原子単結合の化学)	創薬有機化学分野	河野 富一
	生物・薬理系科目	化学療法学1	情報薬科学分野、臨床検査医学講座	西谷 直之、小野寺 直人
		細胞生物学	分子細胞薬理学分野	奈良場 博昭、高橋 巖
		免疫生物学1	生体防御学分野	大橋 綾子
		生化学1(タンパク質科学)	機能生化学分野	中西 真弓
		生化学2(エネルギー代謝)	機能生化学分野	關谷 瑞樹
		生化学3(ゲノムサイエンス)	機能生化学分野	中西 真弓
		微生物学	生体防御学分野	大橋 綾子、錦織 健児
		薬理学1	薬剤治療学分野、分子細胞薬理学分野	三部 篤、奈良場 博昭
		薬理学2	分子細胞薬理学分野	奈良場 博昭
	医療系科目	薬物動態学	薬物代謝動態学分野	幅野 渉
		創剤学1	創剤学分野	杉山 育美、山内 貴
	実習科目	早期臨床体験:医療人としてのヒューマニズム	分子細胞薬理学分野、薬物代謝動態学分野、臨床医化学分野、生体防御学分野、地域医療薬学分野、情報薬科学分野、衛生化学分野、薬学教育学分野、分析化学分野	大橋 綾子、白石 博久、錦織 健児、那谷 耕司、大橋 一晶、幅野 渉、高橋 巖、佐京 智子、高橋 寛、湊谷 寿邦、松橋 昌平、金野 良則、米澤 穂波、熊谷 明知、野村 尚司、佐々木 いずみ、戸部 徹、杉山 晶規
		薬学実習1	分析化学分野、分子細胞薬理学分野、機能生化学分野、生体防御学分野、薬学教育学分野	藤本 康之、奈良場 博昭、關谷 瑞樹、錦織 健児、藤原 俊朗、高橋 巖、中西 真弓、大橋 綾子、白石 博久

3)3学年

区分		科目名	担当講座(学科・分野)	担当者
薬学専門科目	薬学特別科目	基礎演習2	創薬有機化学分野、臨床医化学分野、情報薬科学分野、臨床薬剤学分野、薬物代謝動態学分野、生体防御学分野、構造生物薬学分野、天然物化学分野	那谷 耕司、河野 富一、辻原 哲也、錦織 健児、佐京 智子、氏家 悠貴、幅野 渉、朝賀 純一、阪本 泰光、浅野 孝
		基礎演習3	創薬有機化学分野、地域医療薬学分野、生体防御学分野、臨床医化学分野、情報薬科学分野、臨床薬剤学分野、薬物代謝動態学分野、天然物化学分野	松浦 誠、辻原 哲也、高橋 宏彰、幅野 渉、大橋 一晶、浅野 孝、錦織 健児、氏家 悠貴、朝賀 純一
		薬学実践英語2	分析化学分野、創剤学分野、構造生物薬学分野	阪本 泰光、杉山 育美、藤本 康之
		チーム医療リテラシー	全学教育推進機構、各学部担当講座	【医学部、歯学部、薬学部、看護学部】担当講座・分野教員
	物理・化学・衛生系科目	有機薬化学3(炭素-ヘテロ原子多重結合の化学)	創薬有機化学分野	河野 富一
		物理化学3(平衡と反応速度論)	構造生物薬学分野	阪本 泰光
		毒性学	衛生化学分野	杉山 晶規
		構造生物学	構造生物薬学分野	野中 孝昌、阪本 泰光
		有機生体制御化学	創薬有機化学分野	辻原 哲也
		天然物化学1(生薬と漢方薬)	天然物化学分野	田浦 太志
		天然物化学2	天然物化学分野	田浦 太志
		臨床分析化学	分析化学分野、法科学講座法医学分野	藤本 康之、新津 ひさえ
		放射化学	衛生化学分野	杉山 晶規、世良 耕一郎
		保健衛生学	衛生化学分野、薬物代謝動態学分野	杉山 晶規、米澤 穂波、幅野 渉
	生物・薬理系科目	感染症学	情報薬科学分野、臨床検査医学講座	西谷 直之、小野寺 直人
		化学療法学2	情報薬科学分野	西谷 直之、佐京 智子、氏家 悠貴
		免疫生物学2	薬学教育学分野	白石 博久
		応用生体防御学	生体防御学分野、薬学教育学分野	大橋 綾子、白石 博久、丹治 貴博、錦織 健児、黒田 英介
		医薬安全性学	分子細胞薬理学分野	奈良場 博昭
	医療系科目	創剤学2	創剤学分野	杉山 育美、鈴木 一由
		薬物動態解析1	薬物代謝動態学分野	幅野 渉
		薬物動態解析2	薬物代謝動態学分野	幅野 渉
		薬物送達学	創剤学分野	杉山 育美、伊藤 薫樹
		臨床薬学入門	地域医療薬学分野、臨床薬剤学分野	松浦 誠、高橋 宏彰
		薬事関係法規・制度1	地域医療薬学分野、臨床薬剤学分野	高橋 寛、朝賀 純一
		医療薬学1(消化器・呼吸器・骨・関節疾患の病態と治療)	臨床医化学分野	那谷 耕司、大橋 一晶
		医療薬学2(内分泌・生殖器・感覚器・皮膚疾患の病態と治療)	薬剤治療学分野	三部 篤
		医療薬学3(血液・代謝・免疫・アレルギー・神経・筋・遺伝性疾患の病態と治療)	臨床医化学分野、分子細胞薬理学分野	大橋 一晶、那谷 耕司、奈良場 博昭
		医療薬学4(循環器・泌尿器疾患の病態と治療)	薬剤治療学分野	三部 篤

区分		科目名	担当講座(学科・分野)	担当者
薬学専門科目	実習科目	看護体験実習	薬剤治療学分野、地域医療薬学分野	三部 篤、手塚 優、松浦 誠
		薬学実習2	構造生物薬学分野、創薬有機化学分野、天然物化学分野、衛生化学分野、分子細胞薬理学分野、創剤学分野、薬物代謝動態学分野、薬剤治療学分野、実験動物医学研究部門、動物研究センター	河野 富一、幅野 渉、辻原 哲也、稲垣 祥、若井 淳、野中 孝昌、阪本 泰光、田浦 太志、浅野 孝、杉山 晶規、米澤 穂波、寺島 潤、杉山 育美、佐塚 泰之、三部 篤、手塚 優、高橋 智輝、千葉 美里、菅原 智美

4) 4学年

区分		科目名	担当講座(学科・分野)	担当者
薬学専門科目	薬学特別科目	薬学生の将来-多様なキャリアと多職種連携	臨床医化学分野、附属病院薬剤部、附属病院看護部、医療福祉相談室	那谷 耕司、大橋 一品、大竹 宏典、高圓 幸、佐藤 悦子、宮手 義和、松葉 智哉、荒井 俊光、近藤 昭恵、佐々岡 沙羅
		総合薬物治療演習	構造生物薬学分野、創薬有機化学分野、天然物化学分野、生体防御学分野、機能生化学分野、分子細胞薬理学分野、情報薬科学分野、創剤学分野、薬物代謝動態学分野、臨床医化学分野、薬剤治療学分野、臨床薬剤学分野、地域医療薬学分野、分析化学分野、衛生化学分野、薬学教育学分野	野中 孝昌、高橋 寛、杉山 晶規、奈良場 博昭、三部 篤、白石 博久、關谷 瑞樹、大橋 綾子、中西 真弓、藤本 康之、河野 富一、田浦 太志、西谷 直之、那谷 耕司、杉山 育美、幅野 渉、寺島 潤、工藤 賢三、手塚 優
		医療倫理とヒューマニズム	臨床薬剤学分野、薬剤治療学分野、臨床医化学分野、地域医療薬学分野、生体防御学分野、分子細胞薬理学分野、人間科学科文学分野、外国語学科英語分野、臨床遺伝学科	大橋 綾子、工藤 賢三、藤澤 美穂、中田 義仁、松浦 誠、平林 香織、相澤 文恵、柳谷 千枝子、関 安孝、山本 佳世乃、那谷 耕司、三部 篤、高橋 寛、奈良場 博昭
	薬学系科目	実践医薬化学	創薬有機化学分野	河野 富一
		実践衛生薬学	衛生化学分野、薬剤治療学分野、臨床薬剤学分野、衛生学公衆衛生学講座	杉山 晶規、朝賀 純一、米澤 穂波、上山 昭、丹野 高三、手塚 優
	薬理系科目	実践生化学	機能生化学分野、天然物化学分野	關谷 瑞樹、中西 真弓、浅野 孝
	医療系科目	臨床薬学1	地域医療薬学分野、臨床薬剤学分野	松浦 誠、工藤 賢三、高橋 宏彰、中原 保裕
		臨床薬学2	地域医療薬学分野	高橋 寛、牟岐 和房、熊谷 明知、平山 智宏、大森 眞樹
		臨床薬学3	臨床薬剤学分野、地域医療薬学分野、情報薬科学分野	工藤 賢三、朝賀 純一、松浦 誠、西谷 直之、高橋 寛、高橋 宏彰、遠野 千尋、小原 道子
		医薬情報科学	情報薬科学分野、薬物代謝動態学分野	西谷 直之、奥 祐介、寺島 潤、佐京 智子、氏家 悠貴
		医療統計学	薬物代謝動態学分野、情報科学科医用工学分野	寺島 潤、高橋 史朗
		症例・処方解析学	薬剤治療学分野、情報薬科学分野、臨床薬剤学分野、地域医療薬学分野、附属病院薬剤部	三部 篤、松浦 誠、工藤 賢三、二瓶 哲、西谷 直之
		日本薬局方概論	創剤学分野	杉山 育美
		薬事関係法規・制度2	臨床薬剤学分野、情報薬科学分野	工藤 賢三、西谷 直之、小林 江梨子、佐藤 信範
		臨床医学概論	内科学講座血液腫瘍内科分野、内科学講座糖尿病・代謝・内分泌内科分野、耳鼻咽喉科頭頸部外科学講座、産婦人科学講座、脳神経外科学講座、小児科学講座、臨床検査医学・感染症学講座、放射線腫瘍学科、緩和医療学科、歯科補綴学講座冠橋義歯・口腔インプラント学分野、歯科保存学講座歯周療法学分野、情報科学科医用工学分野、臨床医化学分野	庄子 忠宏、松本 敦、石垣 泰、志賀 清人、赤坂 俊英、木村 祐輔、有賀 久哲、伊藤 薫樹、今 一裕、赤松 洋祐、八重柏 隆、高橋 史朗、橋谷田 眞樹、菅原 明、藤原 亨

区分		科目名	担当講座(学科・分野)	担当者
薬学専門科目	実習科目	薬学実習3	薬剤治療学分野、臨床医化学分野、地域医療薬学分野	那谷 耕司、三部 篤、高橋 寛、松浦 誠、手塚 優、大橋 一品
		卒業研究1	創薬有機化学分野 天然物化学分野 構造生物薬学分野 分析化学分野 機能生化学分野 生体防御学分野 分子細胞薬理学分野 臨床医化学分野 薬剤治療学分野 創剤学分野 薬物代謝動態学分野 衛生化学分野 臨床薬剤学分野 情報薬科学分野 地域医療薬学分野 薬学教育学分野	河野 富一、辻原 哲也、稲垣 祥 田浦 太志、浅野 孝 野中 孝昌、阪本 泰光 藤本 康之 中西 真弓、關谷 瑞樹 大橋 綾子、錦織 健児 奈良場 博昭、藤原 俊朗、高橋 巖 那谷 耕司、大橋 一品 三部 篤、手塚 優 杉山 育美 幅野 渉、寺島 潤 杉山 晶規、米澤 穂波 工藤 賢三、朝賀 純一、高橋 宏彰 西谷 直之、佐京 智子、氏家 悠貴 高橋 寛、松浦 誠 白石 博久 遠藤 寿一
		実務基礎実習	臨床薬剤学分野、地域医療学分野、情報薬科学分野、薬学教育学分野、衛生化学分野、天然物化学分野、薬物代謝動態学分野、創剤学分野、創薬有機化学分野、構造生物学分野、臨床医化学分野、分析化学分野、機能生化学分野、生体防御学分野、薬剤治療学分野、分子細胞薬理学分野、共通基盤看護学講座	工藤 賢三、朝賀 純一、高橋 寛、西谷 直之、松浦 誠、白石 博久、高橋 宏彰、佐京 智子、氏家 悠貴、杉山 晶規、浅野 孝、米澤 穂波、幅野 渉、手塚 優、菖蒲澤 幸子、柏木 ゆきえ、小林 由美子、松田 悠史、稲垣 祥、辻原 哲也、那谷 耕司、大橋 一品、杉山 育美、阪本 泰光、中西 真弓、藤本 康之、關谷 瑞樹、錦織 健児、三部 篤、高橋 巖、大橋 綾子

5)5学年

区分		科目名	担当講座(学科・分野)	担当者
薬学専門科目	薬学特別科目	医薬品情報セミナー	情報薬科学分野、地域医療薬学分野	西谷 直之、松浦 誠
		薬学特論(衛生・分析・動態)	衛生化学分野、薬物代謝動態学分野、創薬有機化学分野	杉山 晶規、幅野 渉、河野 富一
		薬学特論(生物・薬理)	薬物代謝動態学分野、分子細胞薬理学分野	寺島 潤、高橋 巖
	医科療目系	治療戦略概論	情報薬科学分野、薬剤治療学分野、地域医療薬学分野	西谷 直之、松浦 誠、氏家 悠貴、三部 篤
	実習科目	実務実習	臨床薬剤学分野、構造生物薬学分野、創薬有機化学分野、天然物化学分野、衛生化学分野、機能生化学分野、情報薬科学分野、生体防御学分野、分子細胞薬理学分野、創剤学分野、薬物代謝動態学分野、分析化学分野、臨床医化学分野、薬剤治療学分野、地域医療薬学分野、薬学教育学分野	各分野教員
		卒業研究2	創薬有機化学分野 天然物化学分野 構造生物薬学分野 分析化学分野 機能生化学分野 生体防御学分野 臨床医化学分野 分子細胞薬理学分野 薬剤治療学分野 創剤学分野 薬物代謝動態学分野 衛生化学分野 臨床薬剤学分野 情報薬科学分野 地域医療薬学分野 薬学教育学分野	河野 富一、辻原 哲也、稲垣 祥 田浦 太志、浅野 孝 野中 孝昌、阪本 泰光 藤本 康之 中西 真弓、關谷 瑞樹 大橋 綾子、錦織 健児 那谷 耕司、大橋 一晶 奈良場 博昭、藤原 俊朗、高橋 巖 三部 篤、手塚 優 杉山 育美 幅野 渉、寺島 潤 杉山 晶規、米澤 穂波 工藤 賢三、朝賀 純一、高橋 宏彰 西谷 直之、佐京 智子、氏家 悠貴 高橋 寛、松浦 誠 白石 博久

6)6学年

区分		科目名	担当講座(学科・分野)	担当者
	薬学特別科目	総合演習	創薬有機化学分野、天然物化学分野、構造生物薬学分野、分析化学分野、機能生化学分野、生体防御学分野、分子細胞薬理学分野、臨床医化学分野、薬剤治療学分野、創剤学分野、薬物代謝動態学分野、衛生化学分野、臨床薬剤学分野、情報薬科学分野、地域医療薬学分野、薬学教育学分野	奈良場 博昭、杉山 晶規、工藤 賢三、朝賀 純一、松浦 誠、氏家 悠貴、杉山 育美、幅野 渉、野中 孝昌、藤本 康之、田浦、太志、河野 富一、大橋 綾子、關谷 瑞樹、錦織 健児、中西 真弓、白石 博久、西谷 直之、三部 篤、那谷 耕司、寺島 潤
		総合講義	創薬有機化学分野、天然物化学分野、構造生物薬学分野、分析化学分野、機能生化学分野、生体防御学分野、分子細胞薬理学分野、臨床医化学分野、薬剤治療学分野、創剤学分野、薬物代謝動態学分野、衛生化学分野、臨床薬剤学分野、情報薬科学分野、地域医療薬学分野、薬学教育学分野	河野 富一、奈良場 博昭、工藤 賢三、高橋 寛、松浦 誠、朝賀 純一、高橋 宏彰、杉山 晶規、佐京 智子、手塚 優、米澤 穂波、杉山 育美、幅野 渉、野中 孝昌、阪本 泰光、藤本 康之、浅野 孝、田浦 太志、白石 博久、中西 真弓、西谷 直之、大橋 一晶、那谷 耕司、三部 篤、寺島 潤、關谷 瑞樹、錦織 健児、氏家 悠貴
		4学部合同セミナー	全学教育推進機構、各学部担当講座	【医学部、歯学部、薬学部、看護学部】 担当講座・分野教員
	医療系科目	臨床薬学総合演習	臨床薬剤学分野、地域医療薬学分野、情報薬科学分野、薬学教育学分野	朝賀 純一、松浦 誠、高橋 宏彰、氏家 悠貴、高橋 寛、白石 博久、西谷 直之、佐京 智子、工藤 賢三
		地域医療マネジメント概論	地域医療薬学分野、緩和医療学科、歯科補綴学講座有床義歯・口腔リハビリテーション学分野、高度看護研修センター	高橋 寛、松浦 誠、紀平 哲也、岩井 正勝、長井 貴之、長澤 昌子、小林 琢也、森田 英仁、伊藤 美穂子、湊谷 寿邦、木村 祐輔
	実習科目	卒業研究2	創薬有機化学分野 天然物化学分野 構造生物薬学分野 分析化学分野 機能生化学分野 生体防御学分野 臨床医化学分野 分子細胞薬理学分野 薬剤治療学分野 創剤学分野 薬物代謝動態学分野 衛生化学分野 臨床薬剤学分野 情報薬科学分野 地域医療薬学分野 薬学教育学分野	河野 富一、辻原 哲也、稲垣 祥 田浦 太志、浅野 孝 野中 孝昌、阪本 泰光 藤本 康之 中西 真弓、關谷 瑞樹 大橋 綾子、錦織 健児 那谷 耕司、大橋 一晶 奈良場 博昭、藤原 俊朗、高橋 巖 三部 篤、手塚 優 杉山 育美 幅野 渉、寺島 潤 杉山 晶規、米澤 穂波 工藤 賢三、朝賀 純一、高橋 宏彰 西谷 直之、佐京 智子、氏家 悠貴 高橋 寛、松浦 誠 白石 博久

7)自由科目

区分		科目名	担当講座(学科・分野)	担当者
育教 科養 目教	演習・実習科目	海外英語演習	外国語学科英語分野	柳谷 千枝子
薬学専門科目	薬学特別科目	一般用医薬品入門	地域医療薬学分野	高橋 寛、押切 昌子、岡崎 光洋
		デジタルトランスフォーメーション入門	構造生物学分野、情報薬科学分野、株式会社アクシス	野中 孝昌、阪本 泰光、新上 幸二、松尾 琴美、水町 謙太、山口 雄一郎、氏家 悠貴
		地域医療課題解決演習	総合診療医学講座、補綴・インプラント学講座 摂食嚥下・口腔リハビリテーション学分野、口腔医学講座 予防歯科学分野、法科学講座 法歯学・災害口腔医学分野、地域医療薬学分野、地域包括ケア講座	下沖 収、高橋 智弘、岸 光男、小林 琢也、熊谷 章子、高橋 寛、松浦 誠、岩渕 光子、赤井 純子、大間々 真一
		多職種連携地域医療演習	地域医療薬学分野、医学教育学講座(医学教育学分野、地域医療学分野)、補綴・インプラント学講座 摂食嚥下・口腔リハビリテーション学分野、地域包括ケア講座	高橋 寛、高田 亮、田島 克己、伊藤 智範、小林 琢也、岩渕 光子、藤原 弥生
	医療系科目	救急救命の基礎	構造生物薬学分野、情報薬科学分野	阪本 泰光、氏家 悠貴
		アンチ・ドーピング	創剤学分野、りんどう薬局、スポーツファーマシスト	杉山 育美、本田 昭二、金子 宜令
	実習科目	放射科学実習	分子細胞薬理学分野、情報薬科学分野、アイソトープ研究室	奈良場 博昭、佐京 智子、清水 津志
		実践チーム医療論(病棟実習)	分子細胞薬理学分野、臨床医化学分野、分析化学分野、情報薬科学分野、臨床薬剤学分野、内科学講座：消化器内科分野、糖尿病・代謝・内分泌内科分野、腎・高血圧内科分野、循環器内科分野、呼吸器内科分野、リウマチ・膠原病・アレルギー内科分野、血液腫瘍内科分野、脳神経内科・老年科分野	奈良場 博昭、工藤 賢三、朝賀 純一、那谷 耕司、藤原 俊朗、藤本 康之、高橋 宏彰、氏家 悠貴、大泉 智史、長澤 幹、吉川 和寛、二宮 開、堀井 洋祐、鈴木 悠地、佐々木 了政、鈴木 真紗子、村田 興則
		医療手話コミュニケーション	分子細胞薬理学分野、地域医療薬学分野、岩手県聴覚障害者協会	奈良場 博昭、高橋 健一、高橋 寛
		遺伝子導入技術を学ぶ	生体防御学分野、薬学教育学分野	大橋 綾子、錦織 健児、白石 博久

④ 大学院薬学研究科授業科目一覧

博士課程

1. 隔年開講科目一覧

(1) 2024年度開講科目(偶数年度) ※2024年4月1日時点

区分			科目名	担当講座(学科・分野)	担当者
特論科目	講義科目	薬物療法学解析	薬物送達学特論	創剤学分野	杉山 育美
			がん薬物療法学特論	臨床薬剤学分野、血液腫瘍内科分野、放射線腫瘍学科	工藤 賢三、伊藤 薫樹、有賀 久哲、朝賀 純一
			実践地域医療薬学特論	地域医療薬学分野	松浦 誠、高橋 寛
			小計(3 科目)		
		創薬基盤薬学科	創薬立案学特論	情報薬科学分野	西谷 直之
			創薬分子科学特論	構造生物薬学分野	阪本 泰光、日高 興士、石原 司
			創薬触媒化学特論	創薬有機化学分野	辻原 哲也
			天然物化学特論	天然物化学分野	田浦 太志
			小計(4 科目)		
		生命科学機能	代謝生化学特論	分析化学分野	藤本 康之
	遺伝子機能解析学特論		生体防御学分野、臨床医化学分野、薬学教育学分野	大橋 綾子、大橋 一晶、白石 博久、青木 淳賢、堀 昌平、関水 和久	
	分子系統解析特論		臨床医化学分野	大橋 一晶	
	小計 (3 科目)				
	合計(10科目)				

(2) 2025年度開講科目(奇数年度)

区分			科目名	担当講座(学科・分野)	担当者
特論科目	講義科目	分子病態解析 学 科 目	病態医化学特論	臨床医化学分野	那谷 耕司、山本 靖彦
			病態薬理学特論	分子細胞薬理学分野	奈良場 博昭、藤原 俊朗、高橋 巖
			小計（2科目）		
		分子薬効解 析 学 科 目	分子薬剤治療学特論	薬剤治療学分野	三部 篤
			小計（1科目）		
		薬物療法 解 析 学 科 目	ゲノム情報薬学特論	薬物代謝動態学分野	幅野 渉
			分子腫瘍学特論	衛生化学分野、医歯薬総合研究所腫瘍生物学研究部門	杉山 晶規、前沢 千早
			医療統計学特論	薬物代謝動態学分野	寺島 潤
			小計（3科目）		
		創薬基盤 薬 学 科 目	薬品構造生物化学特論	構造生物薬学分野	野中 孝昌
			創薬有機化学特論	創薬有機化学分野	河野 富一
			生命科学計測制御特論	構造生物薬学分野、株式会社アクシス	阪本 泰光、新上 幸二
			小計（3科目）		
		生命科学機能 科 学 科 目	応用生化学特論	機能生化学分野	中西 真弓
			生命科学画像解析特論	薬学教育学分野	白石 博久
			微生物酵素薬学特論	機能生化学分野	關谷 瑞樹
			小計（3科目）		
	合計（12科目）				

2. 毎年開講科目一覧

区分		科目名		担当講座(学科・分野)		担当者			
共通科目	講義科目	薬学研究概論		分子細胞薬理学分野、地域医療薬学分野、情報薬科学分野、機能生化学分野、創薬有機化学分野、薬剤治療学分野、薬物代謝動態学分野、構造生物薬学分野、薬学教育学分野		奈良場 博昭、高橋 寛、西谷 直之、中西 真弓、河野 富一、三部 篤、幅野 渉、阪本 泰光、白石 博久、松浦 誠			
		小計（ 1 科目）							
セミナー	講義科目	分子病態解析学 分子病態解析学 科目	分子病態解析学セミナー		臨床医化学分野、分子細胞薬理学分野		那谷 耕司、奈良場 博昭、藤原 俊朗、高橋 巖		
			小計（ 1 科目）						
		分子薬効解析学 分子薬効解析学 科目	分子薬効解析学セミナー		薬剤治療学分野		三部 篤		
			小計（ 1 科目）						
		薬物療法解析学 薬物療法解析学 科目	薬物療法解析学セミナー		臨床薬剤学分野、地域医療薬学分野、衛生化学分野、薬物代謝動態学分野、創剤学分野		工藤 賢三、高橋 寛、松浦 誠、杉山 晶規、幅野 渉、朝賀、純一、寺島 潤、杉山 育美		
			小計（ 1 科目）						
		創薬基盤薬学 創薬基盤薬学 科目	創薬基盤薬学セミナー		構造生物薬学分野、創薬有機化学分野、情報薬科学分野		野中 孝昌、河野 富一、西谷 直之、阪本 泰光、田浦 太志、辻原 哲也		
			小計（ 1 科目）						
		生命科学機能 生命科学機能 科目	生命機能科学セミナー		生体防御学分野、機能生化学分野、薬学教育学分野、分析化学分野、臨床医化学分野		大橋 綾子、中西 真弓、白石 博久、藤本 康之、大橋 一晶、關谷 瑞樹		
			小計（ 1 科目）						
		特別研究	実習科目	医療薬学特別研究(分子病態解析学)		臨床医化学分野、分子細胞薬理学分野		那谷 耕司、奈良場 博昭、藤原 俊朗、高橋 巖	
				医療薬学特別研究(分子薬効解析学)		薬剤治療学分野		三部 篤	
医療薬学特別研究(薬物療法解析学)				臨床薬剤学分野、地域医療薬学分野、衛生化学分野、薬物代謝動態学分野、創剤学分野		工藤 賢三、高橋 寛、松浦 誠、杉山 晶規、幅野 渉、朝賀、純一、寺島 潤、杉山 育美			
生命薬学特別研究(創薬基盤薬学)				構造生物薬学分野、創薬有機化学分野、情報薬科学分野		野中 孝昌、河野 富一、西谷 直之、阪本 泰光、田浦 太志、辻原 哲也			
生命薬学特別研究(生命機能科学)				生体防御学分野、機能生化学分野、薬学教育学分野、分析化学分野、臨床医化学分野		大橋 綾子、中西 真弓、白石 博久、藤本 康之、大橋 一晶、關谷 瑞樹			
小計（ 5 科目）									
合計（ 11 科目）									

【単位取得の要件】
共通科目は1科目1単位を必修として1単位履修し、特論科目は1科目1単位を選択必修として5単位以上履修する(※)。
セミナーは1科目8単位を選択必修として8単位履修し、特別研究(研究指導科目)は1科目16単位を選択必修として16単位履修する。

※令和元年度以前入学者においては、共通科目は必修ではなく、特論科目6単位以上を選択必修として履修する。

⑤多職種連携のためのアカデミックリテラシー

(第1学年・通年・必修・2単位・4学部共修・IPE科目)

責任者・コーディネーター 藤澤美穂
(人間科学科心理学・行動科学分野)

近年、医療系大学において多職種連携教育(IPE: Interprofessional Education)の重要性が増している中、本学でも現在、3学年(1年次、3年次、6年次[看護学部4年次])において学部横断的なIPE科目を開講している。本科目「多職種連携のためのアカデミックリテラシー」(以下「多職種アカリテ」と略記)は、第1学年向けのIPE関連科目であり、多職種連携のための基礎的事項に関する教育とスタディスキルの修得を目的としている。

以下、1.「多職種アカリテ」全体に関わる概略的な報告を行い、次いで2.「アカデミックリテラシー」、3.「PBLワークショップ」に授業内容を分けて実践報告を行う。

1. 「多職種連携のためのアカデミックリテラシー」の実践記録

【日時】前期・16回。実施日・内容を資料1に示す。

【対象】4学部1年生(医学部136名、歯学部33名、薬学部33名、看護学部91名[薬学部・看護学部の前年度単位取得留年生を除く])

【単位】2単位

【目的】この授業では、将来の医療専門職に求められる多職種連携に必要な能力の基盤づくりを目指した。具体的には、相互に他の職種についての理解を深め・協力する姿勢の涵養およびアカデミックスキル能力の育成を目標とした。

【テキスト】「スタディ・ナビゲーション」(人間科学科・附属図書館・PBL-WS-WG作成)/プリント教材(人間科学科作成)

【実施内容】「アカデミックリテラシー」「PBLワークショップ」に分けて報告する。

2. 「アカデミックリテラシー」の実践記録

【実施内容】

形態：昨年度に続き「アカデミックスキル」は4学部の1年生全員を対象に、人間科学科教員6名および附属図書館司書が担当した。担当内訳は、図書館演習・文献検索演習は人間科学科教員と司書が担当し、それ以外の回は人間科学科教員が担当した。講義回数は昨年と同様10回であった。各学部ホームルームにて学部ごとに着席し、オンライン会議ツールのzoomを利用し、講義室に映像・音声を配信し、4学部同時に進行した。回数は「多職種・ALガイダンス」を1回、「考える技術」を2回、「書く技術」を2回、「マインドマップ」を2回実施した。またコロナ禍以降実施を見合わせていた、多職種を理解するための教材であるiPEG(後述)のグループワークを対面にて1回実施した。各回教材は人間科学科教員にて作成をした。

・図書館演習・文献検索演習：人数が多い医学部・看護学部は各2クラスに分け実施した。図書館演習では、学生はPCやタブレット、スマホを使って図書館利用法・専門雑誌

の探し方の講義を受けた。文献検索演習では、学生は PC を操作して、国内医学文献データベースの「医中誌 Web」の利用法などを学んだ。図書館演習・文献検索演習とも、学生は「スタディ・ナビゲーション」や図書館作成の配布資料に基づき学習した。

- ・**考える技術**：講義とワークによる授業を 2 回実施した。第 1 回目は「議論の明確化」「隠れた前提」、第 2 回目は「主張を支える根拠」を中心に説明し、内容に対応したワークを実施した。

- ・**書く技術**：論理的な文章作法であるロジカルライティングを修得するための授業と、レポートの基本的な書き方を学ぶ授業を行った。1 回目はロジカルライティングの特徴や書き方を説明し、小論文課題を課し、後日提出させた。小論文は評価の観点・指標を採点者間で共有し、客観性を持たせる工夫をした。2 回目はレポートの基本的な書き方・姿勢について講義とワークを行った。

- ・**マインドマップ**：与えられたテーマについて、思考を整理し、発想を展開させて、創造的な問題解決につなげるマインドマップ手法を修得する授業を 2 回行った。1 回目はマインドマップの基本構造を理解するためのミニ・マインドマップの説明とワークを、2 回目は多色イラストを用いたフルマインドマップの説明とワークを行い、作成したマップの画像は WebClass 経由で提出を求めた。

- ・**iPEG**：iPEG とは医療と保健に関わる職種とその役割を理解するためのゲームで、本学 3 年次「チーム医療リテラシー」でも導入経過がある。1 年次の本科目においては、この教材を本学 1 年生向けの内容に作成した教材（pre-iPEG）にて、翌回以降の PBL ワークショップと同じグループメンバーにて実施した。内容は保健・医療・福祉に関わる職種、スタディ・ナビゲーション掲載の本学関連用語、保健・医療・福祉や学校生活の様々な場面に関するもので、個人の考えをグループで共有するワークを行った。

- ・**個人評価方法**：アカデミックリテラシーの個人評価配分は多職種アカリテ全体の 60% とした。評価対象は、授業ごとの出席態度、ふりかえりワーク課題、ロジカルライティング課題、マインドマップ課題とした。

3. 「PBL ワークショップ」の実践記録

【実施内容】

テーマと評価に関する PBL-WS-WG による準備検討：今年度のテーマについて、4 学部のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーと照らし検討した結果、前年度から引き続き「信頼される医療とは 地域におけるチーム医療」とした。また個人評価基準について検討し、ループリックを定めた。

形態について：今年度の参加者は、4 学部 1 年生全員と教員 24 名（教養教育センター全教員 24 名）で、前年度と同様に全 6 回の日程で実施した。ワークショップ 1・2 回目は大堀記念講堂で全員に対するオリエンテーションと講義ののち、各ホームルームでの作業とした。ワークショップ 3～6 回目は学部混成グループで、1 グループ 7～8 人、全 37 グループに分かれ、マスク着用の上でディスカッションと作業、発表を行った。指導については原則としてチューター 1 名が 2 グループを担当した。会場については、密閉空間を避けるため、コロナ禍以前の SGL 室から変更し、実習室を使用した。1 会場に 5～8 グループを配置し、5 つの実習室にて実施した。全体の進行については zoom を利用し、講義室に映像・音

声を配信し、各教室で同時に進行した。

内容について：内容について資料 2 に示す。

ワークショップ 1・2 回目は、大堀記念講堂にて、オリエンテーション、KJ 法・二次元展開法についての講義、ならびに今回のテーマに含まれる「地域医療」について、地域医療にも関与し保健師資格をもつ実務家教員でもある体育学分野佐々木助教による「地域医療ミニ講義」を行った。そして各ホームルームに移動し、KJ 法・二次元展開法についての個人ワークをおこなった。

ワークショップ 3～6 回目はテーマ「信頼される医療とは 地域におけるチーム医療」について、KJ 法・二次元展開法を用いながらディスカッションを行った。そして作成したプロダクトを使用して、ギャラリーウォーク方式での発表と質疑応答を行った。

配慮した点など：配付資料には資料番号を記載し、いつどのタイミングで使用するかを明示した。感染症対策のため、教材の事前セッティングと消毒液の設置を行った。

個人評価について：WS の個人評価配分を多職種アカリテ全体の 40%とした。昨年と同様、①授業態度、②自己学習課題、③ふりかえりワーク、④討議・グループ作業態度の 4 点を個人評価対象とした。②～④の評価に際しては、資料 3 のループリック式の評価基準を採用した。①授業態度については WG メンバーが評価を担当した。個人評価方法・基準は学生に資料配布し、PBL オリエンテーションの際に学生に説明を行って、ワークショップにおける修得目標を明示化した。その他、WS 事前・事後アンケートを実施し、PBL に参加した学生の意識変化も調べた。

* 本稿は下記に報告した内容と一部重複する。

岩手医科大学教養教育センター

『学窓-教養教育の実践記録 令和 6 年度-』 p.135-148. 2025 年 3 月.

R6年度 多職種連携のためのアカデミックリテラシー日程表

回	日程	時間 / 教室	学生編成単位			
			医C1/医C2	歯	薬	看護C1/C2
			以下は授業内容・教室			
1	4/15(月)	1 教室	多職種・ALガイダンス			
2	4/16(火)	4 教室	東1A	東2C	西1E	西1A
	4/17(水)	1 教室	図書館演習 C1			西1A
	4/18(木)	1 教室	東1A			
	4/18(木)	1 教室	図書館演習 C2			
	4/19(金)	1 教室	東1A	図書館演習		
	4/22(月)	2 教室			図書館演習	
	4/22(月)	3 教室			西1E	図書館演習 C2
	4/22(月)	教室				西1A
3	5/10(金)	3 教室	考える技術1			
			東1A	東2C	西1E	西1A
4	5/17(金)	3 教室	考える技術2			
			東1A	東2C	西1E	西1A
5	5/24(金)	3 教室	書く技術1			
			東1A	東2C	西1E	西1A
6	5/31(金)	3 教室	書く技術2			
			東1A	東2C	西1E	西1A
7	6/7(金)	3 教室	マインドマップ1			
			東1A	東2C	西1E	西1A
8	6/10(月)	1 教室			文献検索演習	
					西1E	
	6/11(火)	3 教室	文献検索演習 C1			
			東1A			
8 (Dは9)	6/12(水)	1 教室				文献検索演習 C1
						西1A
		3 教室	マインドマップ2			
	6/14(金)	教室	東1A	東2C	西1E	西1A
8 (Dは9)	6/17(月)	1 教室		文献検索演習		
				東2C		
	6/17(月)	2 教室	文献検索演習 C2			
			東1A			
10	6/18(火)	4 教室				文献検索演習 C2
						西1A
	6/21(金)	3 教室	IPEG			
			東1A	東2C	西1E	西1A
11	7/5(金)	3 教室	WS①			
		東1A	東2C	西1E	西1A	
12		4 教室	WS②			
		東1A	東2C	西1E	西1A	
13	7/12(金)	1 教室	WS③			
			実習室			
14		2 教室	WS④			
			実習室			
15		3 教室	WS⑤			
			実習室			
16		4 教室	WS⑤			
			実習室			

2024 年度 PBL-WS の流れ

日時			場 所	内 容	担当
7/5 (金)	3 限 ～ 4 限	WS ①	大堀記念 講堂 ↓	1) オリエンテーション：WS の特徴、評価基準、 WS の流れ、 KJ 法・二次元展開法の説明 2) 地域医療ミニ講義（佐々木亮平部会員） （部会員：自己学習課題チェック） 3) WS 事前アンケート	PBL-WS 部会員
		WS ②	各学部 ホームルーム	4) オリエンテーション 2：練習 テーマ：「よりよい後期の学生生活」 KJ 法・二次元展開法の練習	
7/12 (金)	1 限 ～ 2 限	WS ③	実習室	進行：zoom 5 会場（実習室）で実施する 1) タイムテーブル等説明 2) 自己紹介・役割分担	チューター 全員
		WS ④		3) 討議とプロダクト作成 テーマ：信頼される医療とは-地域におけるチーム医療- ・ KJ 法による問題点の抽出（討議とプロダクト作成） ・ 基本ポイントチェック表によるチェックと修正	
		昼休み			
	3 限	WS ⑤	実習室	・ 二次元展開法による最優先課題の決定 ・ 基本ポイントチェック表によるチェックと修正 ・ （時間にゆとりがあるグループのみ：課題解決のための具体案の提示） ・ 発表準備	
	4 限	WS ⑥	実習室	4) 発表 各会場内でのギャラリーワーク方式 5) 会場片づけ・プロダクト提出 6) 講評 7) 提出物記入・提出 記入と提出：ふりかえりワーク WS 事後アンケート WS 授業評価アンケート 多職種事後アンケート 提出：自己学習課題	

資料 3 2024 WS 個人評価基準（教員用）ループリック

			評価				
			E	D	C	B	A
項目	I	自己学習課題	課題 1～課題 4 のうち に問いの条件に沿った 記載がない、もしくは 未提出。	課題 1～課題 4 のう ち 1 つ以上に問いの 条件に沿った記載が ある。	課題 1～課題 4 の うち 2 つ以上に問い の条件に沿った記 載がある。	課題 1～課題 4 のうち 3 つ以上に問 いの条件に沿った記載がある。	課題 1～課題 4 のすべてに問いの条 件に沿った記載があり、文献の引用も 適切である。
	II	4. 他グループとの相違点と改善点 MS、ふりかえりワークの について	180 字以上の記述が ない。もしくは未提出。	180 字以上記述して いる。	自他のプロダクトの 相違をきちんと認 識したうえで、改善 点を明確に 180 字 以上記述している。	自他のプロダクトの相違をきちんと認 識したうえで、改善点を明確に 180 字 以上記述している。 加えて、 i) 2. の自分のグループ以外で一番 刺激を受けた発表を行ったグルー プの良かった点 ii) 3. の自分が担当した発表につい てのふりかえり のいずれかに言及している。	自他のプロダクトの相違をきちんと認 識したうえで、改善点を明確に 180 字 以上記述している。 加えて、 i) 2. の自分のグループ以外で一番 刺激を受けた発表を行ったグルー プの良かった点 ii) 3. の自分が担当した発表につい てのふりかえり の両方に言及している。
	III	討議・グループ作業態度	欠席	<u>無関心</u> 議論に参加しない、 離席が多い、遅刻な どグループ作業に対 して無関心さが目立 つ。	<u>自己中心的な態度</u> グループ作業を前 進させようとしな い態度が目立つ。	<u>グループ志向だが、まだ受動的</u> グループ作業を前進させるための発 言、行動が一部見受けられる。	<u>グループ志向で、能動的態度</u> グループの目標達成のため、他者発 言の言い換えによって視点を明確に したり、論点の整理等によって議論を 円滑に促進したり、グループ作業に貢 献できる。

※スマホの頻回使用等、討議に関係ないと判断される行動が顕著な場合は「項目Ⅲ」で「D：無関心」と判断願います

⑥ 早期体験学習（全人的医療基礎講義含む）

担当者

地域医療薬学分野 高 橋 寛

薬学教育学分野 白 石 博 久

本学薬学部1期生以来、毎年第1学年の秋に実施されてきた当科目は、今年度で18回目を数えることとなった。そして、『令和4年度改訂 薬学教育モデル・コア・カリキュラム』に基づく本学薬学部での新教育プログラムへの移行に伴い、令和5度までの7年間、科目責任者として当科目を企画・運営してきた奈良場博昭(分子細胞薬理学分野教授)、中西真弓(機能生化学分野教授)、高橋寛(地域医療薬学分野教授)に代わり、今年度より高橋寛(地域医療薬学分野)と新たに白石博久(薬学教育学分野特任教授)の2名を科目責任者として行われた。当科目の位置付けとその意義については別途監修済の『2024年度早期体験学習報告書』における河野学部長の巻頭言「はじめに」に詳述されているとおりであり、当科目は学内各部署の教職員に加えて、地域の医療関連施設の皆様のご理解、ご協力と連携によって成り立っている。この場をお借りして改めて心よりお礼申し上げたい。

今年度は、移転後5年を迎えた本学附属病院、近隣の保険薬局、ケアセンター南昌、薬学部研究室、ドクターヘリ施設、高磁場MRI施設の見学、調剤・化学実験体験、心肺蘇生法講習、不自由体験、地域包括ケアシステムの学習、など、学内外の様々な医療・研究関連施設において、2週間に渡って多種多様な体験型実習を行った。薬学部に入學して約半年が経過し、大学生活には慣れてきたものの、基礎系の座学や実習が先行する中で、「薬剤師を目指す薬学部ってこんなイメージだったかな」と思い始めたところにこのような複合的な体験実習を経験することで、今学んでいる事の意味を理解し、以降の大学教育への期待を膨らませることが出来たと思われる。その証左は、先述の報告書に収載されている学生の感想文や、発表スライド、さらには巻末の写真の数々に認められる。感想文は、当科目終了後に各学生から提出してもらった後、2名の同級生に査読をお願いし、執筆した学生がその添削結果を自ら吟味して校正に活かしたプロダクトとなっている。

また、専門職連携教育(IPE)の一環として、全人的医療基礎講義において医・歯・薬・看護学部の学生が合同で受講する年3回の講義のうち、会田薫子客員教授による「長寿社会のエンドオブライフ・ケア」、並びに川田龍平客員教授による「薬学を考える」の2回分を今年度より当科目に紐付けし、聴講後に提出されたレポートで評価を行った。

慣れない科目責任者の任を預かるにあたり、関連資料の引き継ぎや丁寧な助言を頂いた奈良場教授、中西教授、高橋教授には心より感謝申し上げたい。また、学内外の関係各所との綿密な連絡、調整を行い、報告書の作成にあたって膨大な記録写真の中から素敵なシーンを厳選し編集頂いた本学学務部全学教育企画課の米澤元基教務担当にもお礼申し上げる。

スケジュールと担当教員

日付	時間	学習内容	責任者	対応教員
10/1(火)	AM	グループ討議・発表	白石	高橋(寛)、白石
	PM	病院見学	朝賀 白石	那谷、杉山(晶)、西谷
10/3(木)	AM	地域包括ケア講義 他	白石	白石
	PM	ドクヘリ／ 7 テスラ MRI 見学	白石	大橋(一)、藤原
10/4(金)	AM	不自由体験 事前説明	白石	白石
	PM	不自由体験・ 心肺蘇生法講習	白石	白石、高橋(巖)、藤本、幅野、 關谷、杉山(育)
10/2(水) 10/7(月) 10/8(火)	AM～PM	保険薬局見学	高橋(寛) 白石	高橋(寛)
	AM	ケアセンター南昌見学	高橋(寛) 白石	高橋(寛)、白石、寺島、佐京
	PM	研究室見学	白石	奈良場、藤原、高橋(巖)、河野、 辻原、稲垣、杉山(育)、野中、 阪本、大橋(綾)、錦織、幅野、 寺島、杉山(晶)、米澤
10/9(水)	AM～PM	模擬体験	松浦 辻原	松浦、朝賀、高橋(宏)、手塚、 浅野、氏家、辻原、阪本、稲垣
10/13(金)	AM～PM	グループ討議・発表	白石	高橋(寛)、白石

⑦早期臨床体験：医療人としてのヒューマニズム

科目責任者

薬学教育学分野 白石 博久

「人の一生と医療に関わる生命倫理」(大橋綾子)

医療人になる前に考えておきたい「基本的な生命倫理と医療倫理」に関するプログラムである。難病となった患者とその家族の実話に基づく映画「ロレンツォのオイル」(1992 年)を教材とした。第 1 回目に生命倫理の導入講義を行った後、第 2、3 回目に映画を鑑賞、第 4～6 回目には、映画に関する 3 つの課題(課題 1「患者の生きる権利は尊重されていたか?」、課題 2「広い意味でのチーム医療とは何だろうか?」、課題 3「登場する様々な人たちの倫理と価値観を考える」)について、PBL 形式のグループ討論を行った。今年度も、グループ討論は 4 名以下の少人数で実施した。主な変更点として、(1)昨年度試行したグループ討論の一部へのディベートの導入を実施し、各課題の肯定派・否定派の立場で議論する機会を追加したこと、(2)ディベート後の作業時間を 1 コマ分増やしたこと、があげられる。第 7 回目にプレゼンテーション(スライドを用いた口頭発表)用のプロダクトと原稿を作成し、第 8～9 回目は、班ごとの口頭発表と質疑応答の後、本パートの総評を行った。最後に、「医療人を目指す薬学生に、なぜ多様な価値観や倫理を考える学びが必要なのか」を学生に問う時間を設け、本企画の意義を各自振り返るように促した。また、新聞形式プロダクト制作は個人作品とし、振り返り課題とした。例年通り投票による学生相互評価を行い、後日投票結果を公表し学びに貢献した学生を表彰した。

「薬学共用試験および薬剤師国家試験について考える」(那谷耕司)

2019 年度まで「基礎総合講義 1」の中で実施されていた薬学共用試験および薬剤師国家試験に関する SGL および発表会は、2020 年度より「早期臨床体験」の中で実施している。近い将来に自分たちが受験することになる薬学共用試験(CBT と OSCE)や薬剤師国家試験をテーマに、調査、グループワーク、発表を行い、その理解を深めることを目的としている。各発表について全員がループリック評価表を用いて採点を行った。自分たちの将来を見据えてそれぞれの切り口で発表スライドが作成されており、今後、薬剤師となるために要となる全国規模の試験に向けた対策について早期に考える機会を持つことができたと思われる。

「被災地と災害時の薬剤師の役割を学ぶ」(白石博久)

平成 30 年度に 2 年生に早期臨床体験の科目を新設するにあたり、岩手県に学び舎を構える本学薬学部として、「被災地と災害時の薬剤師の役割を学ぶ」をテーマとして、集中的な取り組みを行うこととした。以来 6 年間に渡り科目責任者の奈良場博昭教授がオーガナイザーとして当体験学習を担当してきたが、7 年目となる今年度よりその任を白石が務めることとなった。学生は、宮古・田老地区、大槌・釜石地区、大船渡・陸前高田地区の 3 カ所の被災地に分かれて現地訪問を実施し、震災対応に奔走された宮古市、大槌町、大船渡市の職員、ならびに現地の薬局薬剤師の方々の体験談や現在に至る防災体制の整備状況についてお話を伺った。この現地訪問に先駆けて

事前学習として各地の歴史、文化を含めた震災時の状況の調査と発表会を行い、更に訪問後は学びの総括と報告会を行った。また、最終日には、被災地で対応されてきた薬剤師および岩手県薬剤師会の取り組みに関して、非常勤講師による講義を実施した。他にも、避難所運営ゲームや震災に関連するNHKのビデオ教材の視聴も行った。

なお、これらの取り組みは、岩手日報社、河北新報社、NHKに取材頂き、各社の新聞やTVニュースにて報道された。

「施設での介護を体験する」(高橋寛)

1年次の早期体験学習で地域包括ケアシステムを学び、地域の介護施設を見学した。2年次に、実際に患者さんとコミュニケーションを取る体験や介護施設で行われている薬剤師の役割を知る機会として南昌病院で介護体験実習を行った。今年度も学生は実習当日の朝に新型コロナウイルスの抗原検査で陰性を確認した上で実習を行った。午前中はリハビリを行う患者さんと理学療法士と学生の3名1組になり、お互いにコミュニケーションを取り、理学療法士がどのように患者さんの意欲を引き出し、リハビリの支援をしているか見学した。また、昼食は病院で入院患者さんに提供している病院食を食べ、管理栄養士から献立の説明を聞いた。午後の実習では輸液や経腸栄養剤に関する講義を聞き、経腸栄養剤の味見をした。さらには錠剤やカプセル剤を粉砕せずに飲ませやすくする簡易懸濁法を体験したり、注射剤を混ぜて配合変化が起きるのを観察したりした。簡易懸濁法の体験では、患者さんの家族と同じ作業を体験することでその負担感や注意するポイントを薬剤師が説明する必要性を学ぶよい機会となっていた。シリンジの中で錠剤が溶ける様子を観察することで、胃の中で薬が溶けていく状態が初めて理解できたようだ。これらの体験から薬剤師のコミュニケーション能力や医薬品の物性に対し興味を持つ学生が増えたのではないかとと思われる。

「コミュニケーション入門と地域医療を学ぶと未来の薬剤師像を描く(ドリームナビ)」(高橋寛)

今年度も「コミュニケーション入門」を介護体験実習前に学内で行った。学生同士でコミュニケーションスキルを試し、スキルの効果を考えた。その中でコーチングのスキルも体験させ、相手から意欲を引き出す傾聴や質問の理論とスキルを学習し、聞く力や質問力を養った。また、矢巾町地域包括支援センターの方を講師に、認知症サポーター研修を行い、認知症の方に声掛けの仕方や対応のやり方について学んだ。

地域医療を学ぶでは、矢巾町の高齢者福祉計画を調べ、矢巾町の健康保健に関する問題点を話し合った。その後、元薬学部教員の方を患者さんとして講師に招き、患者として自らの体験談や医療に対する期待を講義していただいた。その上で、グループ単位でこの講師と質疑応答や直接コミュニケーションを取る機会をもった。実際の患者さんと会話する機会が少ないため、学生は改めてコミュニケーションの重要性を感じていた。

ドリームナビ(ドリームナビゲーションの略)では、「医療人としての自分の将来の夢」をコラージュ(写真や印刷物を貼り付ける)にして表現する実習を行った。この実習では、学生がとても意欲的になり、今後医療人として学習の動機付けに役立つと思われた。これらの実習を通じて、学生の積極的な学びの姿勢を養う一助となった。

スケジュールと担当教員

人の一生と医療に関わる生命倫理

日付	時間	学習内容	責任者	対応教員
4/12 (金)	2 限	講義	大橋(綾)	
4/15 (月)	1・2・4 限	教材視聴、SGD	大橋(綾)	
4/17 (水)	3・4 限	SGD	大橋(綾)	白石、錦織
4/18 (木)	2 限	発表準備	大橋(綾)	
4/19 (金)	1・2 限	発表	大橋(綾)	白石、錦織

薬学共用試験および薬剤師国家試験について考える

日付	時間	学習内容	責任者	対応教員
5/1 (水)	4 限	概要説明、テーマ設定	那谷	大橋(一)、幅野
5/10 (金)	4 限	テーマの選定・確認、 資料調査	那谷	大橋(一)
5/22 (水)	2 限	テーマ公表、資料調査	那谷	大橋(一)、幅野
5/24 (金)	4 限	資料調査、取りまとめ、 発表準備	那谷	大橋(一)、幅野
6/11 (火)	3・4 限	全体発表会	那谷	大橋(一)、幅野

被災地と災害時の薬剤師の役割を学ぶ、及び 施設での介護を体験する

日付	時間	学習内容	責任者	対応教員と現場スタッフ
5/13 (月)	1・2 限	被災地と災害時の薬剤師の役割を学ぶ・避難所運営ゲーム	白石	高橋(巖)、佐京
	3 限	被災地と災害時の薬剤師の役割を学ぶ・事前学習	白石	大橋(綾)、高橋(寛)
5/14(火)～ 5/16 (木)	1～4 限	被災地と災害時の薬剤師の役割を学ぶ・被災地訪問	白石	松橋、金野、湊谷 [薬剤師] 四戸、金野、山崎 [市町職員]
		施設での介護体験	高橋(寛)	幅野、錦織、米澤 岩渕、藤岡、柏谷、高橋 [薬剤師] 三浦 [リハビリ統括主任] 阿部 [主任管理栄養士]
5/17 (金)	1・2 限	被災地と災害時の薬剤師の役割を学ぶ・事後学習 (グループワーク)	白石	
	3・4 限	被災地と災害時の薬剤師の役割を学ぶ・事後学習 (発表会)	白石	大橋(綾)、高橋(寛)、 熊谷 [岩手県薬剤師会]

コミュニケーション入門と地域医療を学ぶと未来の薬剤師像を描く（ドリームナビ）

日付	時間	学習内容	責任者	対応教員
4/11（木）	3・4 限	コミュニケーションの基本的スキルを学ぶ	高橋（寛）	
5/1（水）	2・3 限	認知症サポーター研修	高橋（寛）	鱒沢 [非常勤講師]
5/31（金）	2 限	地域医療を学ぶ	高橋（寛）	
9/10（火）	3・4 限	地域医療とは何かを学ぶ、地域医療における薬剤師の役割を学ぶ	高橋（寛）	戸部 [非常勤講師]
10/7（月） 10/21（木）	4 限 2 限	未来の薬剤師像を描く（ドリームナビ）	高橋（寛）	杉山（晶）

⑧ 工場見学実習(第2学年)

薬学実習 1 科目責任者 藤本 康之

11月14日に医薬品製造企業シミック CMO 株式会社 西根工場を訪問し、見学実習を実施した。今年度は31名の学生が参加し、教員3名で引率した。新型コロナウイルス感染症が感染症法の5類へ移行後、流行が見られないことから、見学前の健康チェック（体温、体調、行動記録）は省略し、移動は大型バス1台とした。ただし、移動・見学中の常時マスク着用と手指消毒に努めた。

見学実習では、はじめに同社西根工場および国内関連施設等の概要について紹介された。続いて医薬品の製造工程、品質管理、製造管理に関して説明を受けた。薬学部での学修項目と関連した衛生管理、製品管理、微生物検査などについても詳しく説明していただき、医薬品製造工程における製造管理者としての薬剤師の役割についても十分な説明を受けることができた。場内の見学では、品質管理部門に加えて、今年は製造部門の一端も拝見させていただくことができ、新型コロナウイルス感染症の終息によるところが大きいように思われた。全体をとおして、学生は活発に質問しており、質問内容も多岐にわたっていて学ぶところが大きかった。これらにより、2学年までに履修した講義科目（分析化学、細胞生物学、生化学、薬理学など）や薬学実習1の内容と医薬品製造とを関連付けて理解することができたものと思われる。

見学後にアンケートを実施し、(1)製薬企業への関心や興味、(2)医薬品製造工程の理解、(3)医薬品製造に関わる人々の心構えや考え方の理解、(4)関連する実習や講義への理解、の4項目について、見学参加による学生の意識の変化を調査した。いずれの項目においても、回答は概ね肯定的であった（次頁の円グラフ参照）。工場見学の実施時期については、第2学年での実施に賛同する回答が最も多く、薬学専門科目をある程度学んだ段階での見学実施が効果的であることを示していた。個別の記載においても、他の実習項目との関連の上で、効果的に学べたとするもの、就職に際し視野が広がったとするもの、実際に働いている方の様子を知ることができたとするもの、などがあった。このように、今回の工場見学実習は、学生の学習意欲を刺激するとともに、視野を広げ、将来への展望を与えうるものであった。

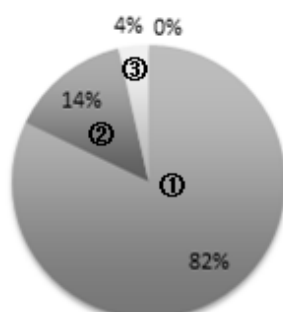
令和6年度 岩手医科大学薬学部 薬学実習1 製薬企業工場見学

1. 実施日：令和6年11月14日（木）9:30～11:30
2. 見学先：シミック CMO 西根工場 八幡平市大更第2地割154-13
3. プログラム

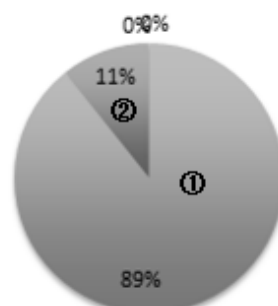
9時30分	会社及び工場概要説明
9時50分	製造概要説明、製造工程の紹介
10時10分	品質管理課試験室見学と紹介
10時50分	製造管理者（薬剤師）お仕事紹介
11時10分	質疑応答
11時30分	終了

2学年 薬学実習1 工場見学アンケート

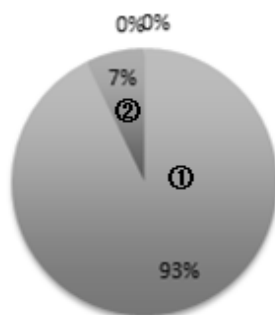
製薬企業への関心や興味



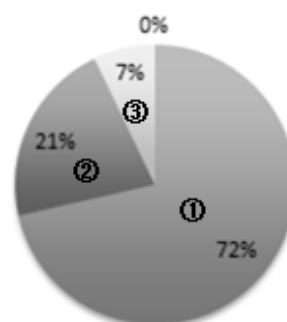
医薬品製造工程の理解



医薬品製造に関わる人々の 心構えや考え方の理解

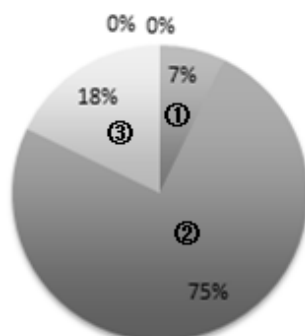


関連する実習や講義内容の理解



- ① 見学前より見学後の方がかなり深まった
- ② 見学前より見学後の方が少し深まった
- ③ 見学前後で変わらない
- ④ 見学前のほうが見学後よりも深かった

2年次に実施することについて



- ① 1年次の早期体験学習期間が良い
- ② 少し薬学の専門を学んだ2年次が良い
- ③ 1年次、2年次のどちらでも変わらない
- ④ 3年次以降が良い
- ⑤ 実施しなくて良い

⑧ 工場見学実習(第3学年)

薬学実習 2 実習担当者 幅野 渉

工場見学は、薬学実習 2 (3 年次通年開講) 終了後にその実習内容に連動する形で、2019 年度までは塩野義製薬(現・シオノギファーマ)金ヶ崎工場およびニプロファーマ大館工場の御協力を頂き実施してきた。2020 年度からはシオノギファーマ金ヶ崎工場のみで実施しており、本年度もご厚意により、すべての学生の見学を引き受けて頂いた。

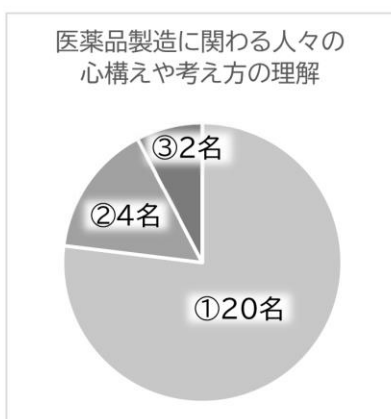
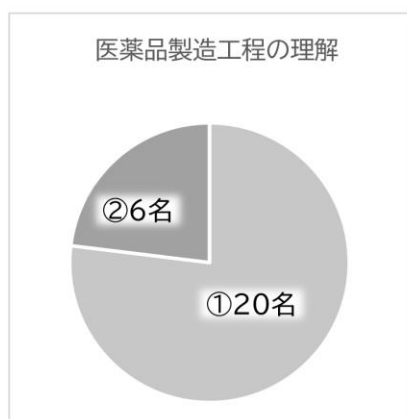
なお、新型コロナウイルス感染症は令和 5 年 5 月 8 日から「5 類感染症」に変更されたが、見学前の 14 日間、検温を行い発熱、倦怠感、咳、のどの痛み、味覚・臭覚異常等がないことを記録させた健康記録票の提出を義務付けるとともに、当日の体温を確認した。移動の際も 2 人席にひとりずつとして感染防止に努めた。また、抗生物質に対するアレルギーのある学生がいないことを事前の説明会において確認した。

シオノギファーマ金ヶ崎工場では、工場の概要説明ののち、2 班に分かれ、原薬製造、製剤・包装、注射製剤・包装をそれぞれ見学した。錠剤やカプセル剤等の製剤関連施設は製薬工場にしかない部分であり、医療現場で使用されている製品の製造を見学することは、薬剤師業務との関連において意義あるものであった。様々な医薬品の製造現場を見学できたことは、薬学実習 2 で実施された合成から製剤に至る広範な薬学の知識の集約のもとで医薬品が製造されていることを理解するのに最適であったと考えられる。工場見学終了後に学生に回答させたアンケート結果を次ページに示す。ほとんどの学生が「医薬品製造工程や業務に関する理解が深まった」、「製薬企業への関心や興味が深まった」と回答したことから、学習効果があったものと考えられる。また、見学内容の違いより、「工場見学を 2 年次、3 年次両方で実施したほうが良い」と回答した学生も大半を占めた。なお、引率は薬学実習 2 実施分野で担当することとし、本年度は、天然物化学、創薬有機化学分野の 2 分野が担当した。

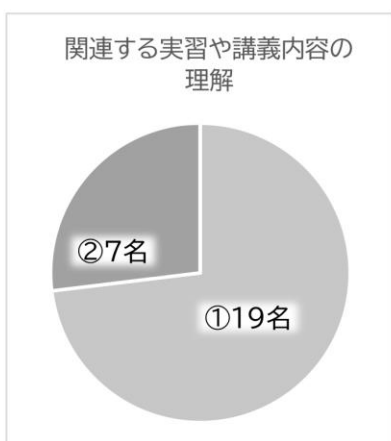
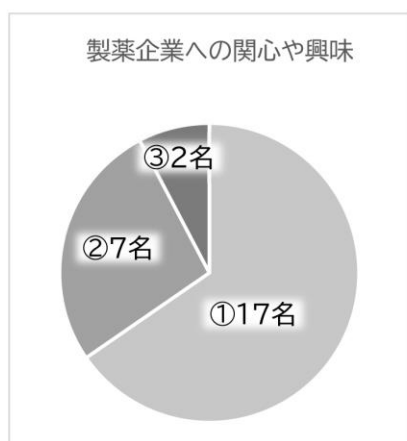
令和 6 年度 岩手医科大学薬学部 薬学実習 2 製薬工場見学

1. 実施日：令和 6 年 10 月 21 日(月)、22 日(火)
2. 見学先：シオノギファーマ金ヶ崎工場
3. 班編成：学生 13 名及び教員 1 名
4. 引率教員：10 月 21 日 田浦 太志 教授 (学生 13 名)
10 月 22 日 稲垣 祥 助教 (学生 13 名)

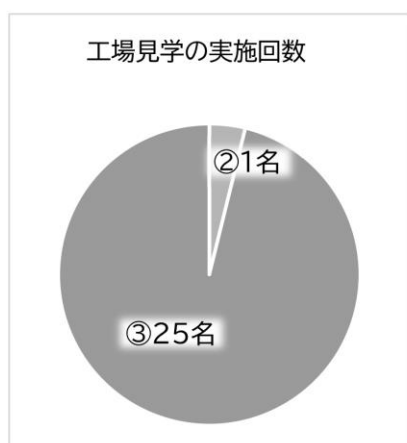
3学年 製薬企業工場見学アンケート 2024 (シオノギファーマ金ヶ崎工場)



回答数: 26



- ① 見学前より見学後の方がかなり深まった
- ② 見学前よりも見学後の方が少し深まった
- ③ 見学前後で変わらない
- ④ 見学前の方が見学後よりも深かった



- ① 2年次の工場見学だけで良い
- ② 3年次の工場見学だけで良い
- ③ 2年次、3年次両方実施したほうが良い
- ④ 実施しなくて良い

⑨チーム医療リテラシー

(第3学年・前期・必修・1単位・四学部共修・IPE科目)

チーム医療リテラシー科目責任者 高田 亮

本科目は2015年度に専門職連携教育（Inter Professional Education）の一環として3学部合同で開講した科目であり、2019年度から看護学部を加えた4学部合同科目となった。本年度が10回目となる。

2024年度より科目責任者が高田へ変更となったが、2023年度までのカリキュラム（講義、講演、WS）を踏襲し、対面で実施している。WSのファシリテーター、チューターは医・歯・薬・看護・教養の教員が担当した。また本年度も、附属医療専門学校歯科衛生学科の学生が本科目に参加した。

1. 科目スケジュール

日時	内容	担当	会場
5/14(火)	13:00-13:20	講話：多職種連携教育について 田島 克巳 全学教育推進機構長	各会場 (チーム毎)
	13:20-13:50	カリキュラム説明、事前アンケートの回答 高田 亮 准教授	
	13:50-14:50	医療安全講義 肥田 圭介 教授	
	14:50-15:10	講義確認問題、休憩	
	15:10-15:40	iPEG 講義、マインドマップ講義 「多様な場面における多職種の役割 (WS1)」課題説明 高田 亮 准教授	
	15:40-17:40	WS1：多様な場面における多職種の役割 高田 亮 准教授 医・歯・薬・看・教養 教員	
5/21(火)	13:00-14:10	行動科学講義 「健康段階に応じた多職種の役割(WS2)」 課題説明 相澤 文恵 非常勤講師	各会場 (チーム毎)
	14:10-14:30	講義確認問題、休憩	
	14:30-17:10	WS2：健康段階に応じた多職種の役割 相澤 文恵 非常勤講師 医・歯・薬・看・教養 教員	
5/28(火)	13:00-14:05	緩和医療講義 「緩和医療における多職種の役割(WS3)」 課題説明 木村 祐輔 特任教授	各会場 (チーム毎)
	14:05-14:30	講義確認問題、休憩	
	14:30-17:10	WS3：緩和医療における多職種の役割 木村 祐輔 特任教授 医・歯・薬・看・教養 教員	
6/4(火)	13:00-15:10	代表チームによる WS 発表会 高田 亮 准教授 医・歯・薬・看・教養 教員	大堀記念 講堂
	15:10-15:20	講義確認問題、休憩	
	15:20-16:50	講演：多職種連携・医療の現場から・ 村上 雅彦 先生 (岩手県立大船渡病院) 高田 亮 准教授	
	16:50-17:10	科目まとめ、事後アンケートの記入と提出 高田 亮 准教授	

2. 到達目標

- (1) 医学・歯学・薬学、看護学のそれぞれの立場でチーム医療について考えることができる。
- (2) 3 学年までに学修した知識を基に、多様な場面に関わる医療専門職の名称と役割を理解し、問題解決におけるチーム医療の必要性を説明することができる。
- (3) 行動科学的アプローチの意義を概説できる。
- (4) 医学・歯学・薬学、看護学のそれぞれの立場で、医療安全、緩和ケア、地域医療、災害医療の問題を考え、全人的医療を実現する誠の医療人として何をなすべきかを見定めることができる。
- (5) 自分の価値観や判断の仕方を再認識し、他者の価値観を理解することができる。
- (6) グループで意思決定する際のプロセスとグループダイナミクスについて説明することができる。

3. チーム構成、担当者構成

- (1) 学生：320 名
(医：134 名、歯：36 名、薬：27 名、看護学部：90 名、医療専門学校：33 名)
- (2) チーム数：38 (9 名チーム：15、8 名チーム：23)
- (3) 8 会場に分かれて WS を行い、各会場に 1 名ずつファシリテーターが配属され司会進行を行った。また全てのチームに、1 名ずつチューターが配属され、WS のマネジメントと学生評価を行った。

4. 教育実践

- (1) [WS-1] 多様な場面における多職種の役割
 - ・ iPEG のディスカッションカードを基に、職種の理解と多様な場面への対応の理解を目的としたマインドマップを作成し、以降の WS「健康段階に応じた多職種の役割」、「緩和医療における多職種の役割」への導入とした。
- (2) [WS-2] 健康段階に応じた多職種の役割
 - ・ 「手術前、手術後、退院前～退院後」の 3 時点のいずれかを各チームに割り当て、症例の患者、家族の思い(不安、期待、意欲、症状の感じ方、自己効力感、コンプライアンス等)から、患者の解釈モデルを推測した。
 - ・ 症例において解決すべき問題点(疾患)と患者の解釈モデル(やまい)の双方を考慮し、チームの合意目標として最優先課題を設定した。
 - ・ 最優先課題を解決するために患者と家族に関わりをもつ多職種とその役割(対応方法)を考え、多職種連携の必要性について考えた。
- (3) [WS-3]緩和医療における多職種の役割
 - ・ 症例から類推される患者・家族の苦痛を想像し、患者の「全人的苦痛(つらさ)」を身体的苦痛、社会的苦痛、精神的苦痛、スピリチュアルペインに分類し、苦痛への対応方法をチームで話し合い、主体的に携わる専門職を考えた。
 - ・ 自らの専門性(医師、歯科医師、薬剤師)を基盤とした苦痛(つらさ)への関わり、他の医療

職との連携による対応方法を考えた。

(4) WS 発表会と講演会

- ・ 各会場から選出されたチーム(WS-2 : 8 チーム、WS-3 : 8 チーム)の代表が大堀記念講堂で成果を発表した。質疑応答後に、全体のまとめを行った。また WS-1 の優秀マインドマップを選出してホワイトボードに提示した。
- ・ 発表会には WS 担当以外の教員も参加し、質疑応答に加わった。
- ・ 最後に医療現場における多職種連携についての講演を行い、科目を終了としている。

5. 成績評価

学生の成績評価は、①各講義後の確認テスト、②講演・WS の後に提出させたふりかえりシート、③WS 課題レポート、④チームで討議した結果をまとめたプロダクト、⑤ファシリテーター、チューターによる WS 評価（ルーブリックによる）を総合して行った。

6. 科目評価

全学生を対象として科目開始時と終了時の 2 時点において質問紙調査を実施し、各自の将来の職種の役割に関する理解度、将来の職種が臨床において個性を発揮するイメージ、社会的スキルと多職種連携教育の準備状況の変化を評価するとともに、各 WS 後のふりかえりで各自の到達度について自己評価させ、科目の有効性についての検討を行った。

また、科目終了後に学生と担当教員を対象としてアンケート調査を実施し、改善点についての検討を行い、次年度におけるカリキュラムの充実を図った。

⑩看護体験実習(第3学年)

看護体験実習担当 三部 篤

今年度の看護体験実習は、11月5日から8日までの4日間の日程で附属病院にて行われました。今年度の実習対象者は薬学部3年生26名でした。看護体験実習は、薬学部3年生が受講する体験実習科目です。本実習は、平成27年度から開講された科目であり、今回で節目の10年目を迎えました。看護体験実習は、薬学部のカリキュラムの中で、比較的早期に実際の臨床現場を体験できる実習科目です。6年制薬学教育では、チーム医療に貢献できる薬剤師を育成するため、実践的な医療人教育を1年次から「体系的」に行うことが求められています。看護体験実習は、その一環として行われ、多数の医療系科目を既に履修した3年生をあえて対象とし、看護領域を体験学習しながら医療現場における倫理観や実践力を養い、実際の多職種連携や患者さんを中心とするチーム医療の現場を肌で感じる事ができる貴重な機会となっています。そして、看護体験終了後、参加した学生には、「薬剤師は看護領域に何ができるか？あるいは、何をしたら患者さんにとってもっと良くなるか？看護体験実習を通じて感じたこと、考えたことを述べなさい」という課題を与え、報告書を提出させています。個々の学生は、それぞれ視点や感想が異なっており、報告書を読むと、指導して頂いた看護師先生のコミュニケーション能力の高さや仕事量の多さにとても驚いたとの感想が多かったです。さらに、学生にとっては、将来の目標を改めて自覚するとともに、5年次に行われる実務実習までにしっかりと勉学に励むモチベーションとなっていると思われます。

看護体験実習は、附属病院を有している岩手医科大学だからこそ実現可能な実習科目です。本実習の実施に様々な形でご尽力を頂いた岩手医科大学附属病院看護部の佐藤悦子看護部長、高橋弘江副看護部長に心から感謝申し上げます。さらに、実習期間中、コロナ禍の中で薬学部学生に丁寧に指導して下さいました附属病院の看護部に所属しているすべての看護師の先生に心から感謝申し上げます。

⑪ 薬学共用試験 OSCE

OSCE 実施責任者 杉山 晶規

委員会構成

2024 年度（令和 6 年度）の OSCE 委員会の構成員は、杉山 晶規（委員長）、奈良場 博昭、幅野 渉、藤本 康之、大橋 一品、朝賀 純一、手塚 優、佐京 智子、浅野 孝、氏家 悠貴の 10 名で活動した。

実施準備

本試験は令和 6 年 12 月 1 日（日）、追再試験は、令和 7 年 2 月 19 日（水）として計画し、予定通り行われた。本年度の受験予定学生数は 40 名であった。新型コロナウイルス感染症が 5 類移行にともない今年度も 6 課題での試験が行われた。6 つの課題それぞれに、責任者を 1 名として対応することとした。試験会場は SGL 教室を利用し、5 つの課題では 1 部屋を試験室としたが、1 つの課題でのみ、2 部屋をつなげて 2 倍の広さの試験室とした。各ステーションは 4 レーン（運用 3 レーン＋予備 1 レーン）で準備し、実施時間は半日で行えた。新規評価者講習会 2 回、模擬医師養成講習会 2 回、模擬患者（SP）養成講習会 2 回、直前評価者講習会 2 回、直前模擬医師講習会 1 回、直前模擬患者講習会 1 回を実施した。今年度も SP の新規募集を計画した。感染症の拡大防止を目的として、試験日の 14 日前から、受験生は健康管理表に朝晩記録し、試験当日提出することとしたが、評価者、模擬医師及び模擬患者には注意喚起のみとし、健康管理表の記録や提出は行わなかった。学生への事前ガイダンスは、試験の 18 日前に講義室で行うこととし、欠席者が発生した場合は後日登校後、追加説明することとした。また試験の 3 日前に最終注意を行った。試験における受験上の配慮申請や医療用電子機器の使用の有無については、7 月中に調査を計画した。一昨年度からの継続で課題漏洩事故防止強化のため、事前配付資料は時間、会場、役割分担、注意事項などを記載したもの（事前配付資料①）と課題に関する情報を記載したもの（事前配付資料②）の 2 分冊とした。課題ごとに作成した事前配付資料②は、当該課題担当者にのみ配布し、かつ学内でのみ使用とし直前講習会終了後一旦回収し、試験当日再配布することとした。

本試験及び追試験の実施

受験学生は 40 名で、欠席者は無く、全員が全課題を受験した。3 人を 1 班とする 14 班を構成し、会場は 1 ステーション 3 レーンで 6 ステーションを設定し、試験時間は半日で実施した。評価者は 48 名（内部評価者が 6 名、他大学教員が 4 名、薬局薬剤師が 19 名、病院薬剤師が 19 名）で、模擬医師は 6 名、模擬患者も 7 名で行った。実施運営スタッフは、ステーション担当が 24 名（うちステーション責任者が 6 名、副責任者は 0 名）、実施本部が 25 名で、合計 49 名であった。このうち学生スタッフは、5 年生 15 名で、受付係と原状復帰係を担当した。試験会場への移動を円滑にするため専属の誘導係を設定し、ステーションごとに誘導係を配置した。試験関係者は、すべてマスクを着用し手指消毒を励行した。直前の連絡方法としては Web 掲示板を活用した。評価表のフォント変更や番号入力部分の追加も共用試験セン

ターの許可の範囲内で、例年同様に行った。追・再試験は、東研究棟 2 階模擬薬局を会場とし、再試験対象者 1 名が受験した。本試験の実施、運営に関しては、ステーションごとに責任者が 1 名で副責任者は配置できなかったが、試験自体は問題なく行えた。また、SGL 個室での実施のため隣接レーンから声や音が聞こえる等の問題はなかった。受験生の試験中の怪我や体調不良などもなく無事完了した。当日の検温、記録表の回収、マスク着用、手指消毒などはスムーズに行えた。感染防止対策として評価者、SP の控え室は指定席とし、会話の縮小もお願いし上手く行えた。試験実施後の新型コロナ発症の報告もなく安全な実施ができたと考えている。半日で試験が行えたため、「スタッフの疲労への配慮」が少し達成できたと思われる。各ステーションでは、学生スタッフの多くが担当する原状復帰係用に例年通りチェックリストを作成し、作業の確認に役立てた。

今後の課題等

今後の OSCE は 6 課題での実施が予想される。会場は、発生した声や音の漏れを遮断するため SGL での実施を計画する。また、受験学生が 24 名となるため実施形態の再考を計画する。SGL での実施では、目隠しのためのパーティションを数多く廊下に配置する必要があるが、学生やスタッフの移動に支障が無いように注意する必要がある。また、試験室内での動線や立ち位置などを分かりやすく掲示することで、学生に不利益が及ばないようにする必要がある。これらについては、今後も継続して注意していく必要がある。評価表の記入漏れは、評価者への注意喚起や、入力者の確認対応で防止できているので、次年度以降も意識を継続する。試験後のアンケートでは、昨年同様、学生の試験の成果に関する事項が指摘されており、学内の教育に反映させ改善していく必要がある。今年度は、半数の評価者を学生 14 名の担当としたが、途中トイレ休憩が欲しいとの意見があった。70 分連続評価、10 分休憩のあと 70 分連続評価となるため、10 分休憩の際に行ける様な配慮工夫が必要と考えられる。学生にも同様の配慮ができると良いと思われる。試験で必要な模擬スタッフについて、模擬医師は、現行の OSCE では 2 種類の課題で必要とされており、これに対応するため、今後も継続的な模擬医師養成講習会の開催が必要であるが、講習会ではロールプレイを行うため、必要スタッフ人数が多くなる。日程や分担担当などを工夫し、休日出勤など過剰労働の軽減は継続して行う必要がある。一方、模擬患者についても試験では必ず必要であり、新規に模擬患者を募集し、養成講習会を実施した。結果として 3 名の新規の模擬患者を養成することができたが、参加者の高齢化も見られるため、継続的な模擬患者養成講習会の実施が必要と思われる。受験学生の人数減少とともに教員の人数も減少しており、当日までの講習会の実施や試験準備における人手不足が懸念される。業務が過度になりすぎないように、役割分担を行い個々のスタッフの担当日数の削減を考慮する必要がある。試験課題で使用する物品の準備に関しては、出荷調整などの対象医薬品の可能性があるので、課題決定後速やかに納品状況を確認する必要がある。また、放送設備の事前点検も確実に行う必要がある。次年度は、新コアカリに対応できる OSCE の実施に向けて、トライアルの実施を計画する必要がある。

2024 年度（令和 6 年度）の OSCE も、概ね滞りなく実施することが出来た。OSCE 運営に携わられた、全ての関係者の方々に心より御礼を申し上げたい。

⑫ 薬学共用試験 CBT

CBT 実施委員長 野中孝昌

薬学共用試験 CBT への対応として、本学では平成 19 年に CBT 準備委員会（平成 22 年度より CBT 実施委員会）が設置され、以来、CBT 中継サーバーの設置、他大学 CBT トライアル見学、CBT テストランの実施など、CBT 本試験実施に向けて準備を進めてきた。平成 22 年度には PC を一斉制御できる瞬快システムを導入し、本学にとって最初の CBT を実施した。平成 25 年度からは、新たに PC を一括制御する独自のシステムを構築し、CBT を実施している。平成 27 年度から、東 2-AB 講義室の LAN 環境を整備し、当時の定員 160 人が同時に受験できるようにした。在学生の減少に伴い、平成 30 年度より再びマルチメディア教室で試験を実施することとした。令和 5 年度に、それまで使用していたノート PC を更新し、これまでの PC の 10～15 倍程度の CPU 性能をもつ PC を 41 台購入した。PC の起動、操作、および停止時にストレスを感じるものがほとんどなくなった。また、無線 LAN 対応であるため、設置と片付けの手間が軽減されたが、ネットワーク接続が不安定になることがあった。

1) CBT 体験受験

実施日：令和 6 年 7 月 19 日

実施場所：マルチメディア教室

受験申請者数：39（欠席 0 名）

試験実施責任者：野中 孝昌

管理者：阪本 泰光

主任監督者：白石 博久

予備管理者：高橋 巖

補助監督者：本学教員（ゾーン 2 が 2 名、他ゾーン 3 名）

モニター委員：輪島 輝明（青森大学薬学部）

2) CBT 本試験

実施日：令和 6 年 12 月 13 日

実施場所：マルチメディア教室

受験申請者数：40（欠席 0 名）

試験実施責任者：野中 孝昌

管理者：阪本 泰光

主任監督者：白石 博久

予備管理者：杉山 育美

補助監督者：本学教員（ゾーン 2 が 2 名、他ゾーン 3 名）

モニター委員：輪島 輝明（青森大学薬学部）

3) CBT 追再試験

実施日：令和 7 年 2 月 21 日

実施場所：東 2-A 講義室

受験申請者数：4（欠席 0 名）

試験実施責任者： 野中 孝昌

管理者： 阪本 泰光

主任監督者： 白石 博久

予備管理者： 杉山 育美

モニター委員： 輪島 輝明（青森大学薬学部）

4) CBT 試験結果

全受験生 40 名に関し、薬学共用試験センターより連絡があった試験成績について、標準合格基準である正答率 60 %以上を合格基準として、教授会において 38 名を合格と判定した。試験結果を、OSCE の結果と併せて「薬学共用試験結果」として以下に示す大学のウェブページに掲載した。

<https://www.iwate-med.ac.jp/education/information/r6/>

5) 総括

補助監督者、試験の予備室、監督者用の控え室、および委員の役割については前年度を踏襲した。学生の人数が少なくなったため、学生用の控え室の設置は廃止した。また、学生に対する説明会、監督者に対する説明会、およびテストランについては、薬学共用試験センターの指示通り、忠実に実施した。

ブラウザ上で動作するオフラインのテストアプリを改訂し、注意事項の確認テストを説明会の度の実施した結果、不注意による試験中の不適切行為は見られなかった。

⑬実務実習

実務実習部会長 松浦 誠

実務実習の実施概要

新型コロナウイルス感染症の分類が「第 5 類感染症」へと移行されたことを受け、社会全体において各種制限が段階的に緩和される中、本学部においても感染拡大防止に十分配慮しつつ、前年度までに講じてきた実務実習における対策を継続して実施しました。薬局実習および病院実習については、すべての実習施設においてリモート対応や実習の中断・中止といった措置は発生せず、計画通り円滑に実施されました。一部の施設において、指導体制等に課題が見られる場面もありましたが、大きなトラブルはなく、全体として実務実習は順調に終了しました。こうした実務実習の円滑な運営が実現した要因の一つとして、例年通りに所属分野の教員が所属学生の実務実習施設の担当教員を務める体制を継続したことが挙げられます。このことにより、学生の実習状況の的確な把握や施設との連絡調整が円滑に行われ、実務実習の質的担保にも寄与しました。教員による指導は感染対策に留意しつつ、実習施設と予め取り決めた方法で実施しました。実習中の連絡・指導に用いた手段としては、実務実習管理指導システム（7 件）、E メール（10 件）、電話（63 件）、テレビ会議（13 件）、および施設訪問（11 件）などがありましたが、いずれの方法においても大きな混乱や支障は生じておりませんでした。

実務実習成果発表会の開催

令和 6 年 12 月 18 日（水）、大堀記念講堂ホワイエにおいて「令和 6 年度 実務実習成果発表会」を対面によるポスターセッション形式にて開催いたしました。当日は、出席番号の奇数・偶数により 2 グループに分けた時間帯制を設け、全学生が個別にポスター発表を行いました。発表者は自身のポスター前で 60 分間にわたり参加者と質疑応答を行い、さらに座長教員に対しては 10 分程度の口頭発表および質疑応答を実施しました。実習受入施設の関係者にも多数ご参加いただき、会場内では学生との活発な意見交換が行われ、盛況のうちに終了しました。今回の成果発表会を通じて、学生は薬剤師として必要な知識や技能の深化に加え、コミュニケーション能力や人間性の向上を実感することができ、実務実習が薬学教育において果たす重要な役割を改めて確認する機会となりました。

全体として、実務実習における教育的効果は十分に得られたものと評価できます。本発表会の運営には、23 名の教員が座長として参加し、円滑な進行にご協力いただきました。また、実務実習部会の教員に加え、教務課の花田様には多大なるご尽力を賜りました。ここに改めて深く感謝申し上げます。

令和 6（2024）年度も、多くの実習施設より引き続きご協力を賜り、学生に対して実りある実務指導を提供することができました。こうした成果は、実務実習に携わるすべての皆様のご尽力の賜物であり、心より感謝申し上げます。

⑭ 実践チーム医療論（病棟実習）

責任者・コーディネーター 工藤 賢三

実践チーム医療論（病棟実習）は、「様々な医療スタッフと協働・連携して、医療の担い手として患者中心の診療・治療・ケアを実践するチーム医療に参加できる専門性・実践能力を高めるため、病院実務実習を修了後にアドバンストな知識・技能・態度を病棟実習を通して修得させる」ことを目標として、医学部の全面的な協力の下、平成 25 年（2013 年）から開講されている自由科目である。現在、薬剤師には、有効性・安全性を確保する観点から薬物療法に主体的に関与することが強く求められており、また、実際の医療現場においても安全な薬物療法には薬剤師が欠かせないものとなっている。薬剤師は、自ら処方箋を作成することはできないものの、患者さんの情報を収集し、治療効果の確認や副作用のモニタリングを行い、医師への処方提案等を介して、薬物療法への関与や医薬品の適正使用に寄与することが可能である。そのために医師の診療過程（情報収集、評価と診療計画の立案、診療計画の実施）等に同行し、処方箋が作成されるまでの過程等を見学、体験し、診断・治療に関わる医療スタッフ（医師、看護師、薬剤師等）の役割を理解することは、将来、地域におけるチーム医療、また、病院内でのチーム医療において、薬剤師として薬物療法に主体的に関わるために大変に重要なことである。

令和 6 年度、薬学生の臨床実習教育にあたる医学部講座は、薬物療法を行う内科学講座の 8 分野（消化器内科分野、糖尿病・代謝・内分泌内科分野、腎・高血圧内科分野、循環器内科分野、呼吸器内科分野、リウマチ・膠原病・アレルギー内科分野、血液腫瘍内科分野、脳神経内科・老年科分野）に担当いただき、本学附属病院にて実習を行った。10 名の学生が当該科目を履修した。

4/24（水）5 限に全体ガイダンスを実施、5/13（月）～5/17（金）の期間に病棟実習、その後 7/8（月）3・4 限に症例報告会を行った。実習では、診療分野ごとに学生を 1 名～2 名とし、およそ 5 日間のスケジュールで、診察・治療への同行、カンファランスへの参加等を行った。また、学生は各診療分野での代表的な症例を与えられ、短い期間ではあったが疾患と薬物療法を詳細に深く学ぶと共に、実習終了後には症例について報告会（疾病の特徴、治療方針、薬物療法、薬歴、薬学的に介入すべき点等のプレゼン）を行った。実習の成果報告となる症例報告会には、薬学部の教員はもちろんのこと、担当した医師なども参加し、活発な質疑も行われ、大変有意義な報告会ができた。

実習終了後には学生にアンケートを行い、改善すべき課題もあったが、当該科目の有用性を確認できた。履修した学生の評価は高く、チーム医療や薬物療法に関する理解が深まっていた。また、学生に対する指導した医師の評判も良く、今後も継続して実施していく必要があると考える。今年度の履修学生は 10 名と例年に比べるとやや多くはなったものの、医学部との連携により、チーム医療に資する更に多くの薬剤師の育成に貢献したいと考えている。当該科目については報告書を作成しており、詳細は報告書を参考にしていきたい。

⑮ 卒業研究発表会

第6学年学年長 高橋 寛

薬学部では、第4学年の卒業研究1および第5、6学年の卒業研究2の集大成として、例年7月に卒業研究発表会を実施している。新型コロナウイルス感染症が5類に移行したこともあり、昨年に引き続き、2024年度もこれまで通りキャンパスモールを会場に、学生が一堂に会して卒業研究発表会を開催した。各分野において教員の指導のもと学生が進めてきた基礎から臨床に至る幅広い研究課題に関する成果がポスター形式で発表された。

発表会では、6年生54名は評価を担当する薬学部教員や同級生と取り組んできた研究内容について活発な議論を行い、感心の高い薬学部学生や薬学研究科大学院生も参加していた。

午前中に父兄懇談会が開催されたこともあり、ご父兄にも多数参加して頂けることができた。6年生がご父兄に自分の研究内容を説明している様子や、発表ポスターの前で記念写真を撮る様子なども見受けられ、ご父兄にとってもご子息・ご息女の成長が実感できた1日となった。

1. 開催日時：令和6年7月6日（土）13：00～16：10
2. 会 場：矢巾キャンパス 1階キャンパスモール
3. 発表者：薬学部6年生（54名）
4. 参加者：薬学部教員、薬学部学生、薬学研究科大学院生、岩手医大職員、ご父兄ほか
5. スケジュール

13：00～	会場に集合
13：05～ 13：25	ポスターの貼付、Aグループ準備
13：25～ 13：30	薬学部長挨拶
13：30～ 14：30	Aグループ発表
14：30～ 14：40	ポスター貼り替え、Bグループ準備
14：40～ 15：40	Bグループ発表
15：40～ 16：10	閉会の挨拶（学年長）、後片付け



卒業研究発表会の様子

⑩ 岩手医科大学 4 学部合同セミナー

薬学部教務委員長 奈良場 博昭

本学では、専門職連携教育(Interprofessional Education)の一環として、最終学年までに修得した医学・歯学・薬学・看護学の専門知識と経験をもとに、患者と家族の福利を最優先する倫理観に基づいて、病院内での治療と地域社会での生活支援を最適に進めるために医療系専門職がどのように貢献できるかを、Paper Patient で多角的に検討する「4 学部合同セミナー」を実施している。

新型コロナウイルス感染症の蔓延以降、本学では、授業や実習などに関して、感染防御に努めながら、従来の方法にて行うこととしていた。この 4 学部合同セミナーは、グループ討論と発表会を基本とし、更に、普段から学習環境を共にしていない各学部の学生が混成となるチームを形成する。このため、感染のリスクやクラスターの発生が危惧され、令和 2 年度は実施を中止し、学生個人が、課題に取り組み、それを提出させて評価する形態に変更を行った。令和 3 年度にほぼ 1 年をかけて、多職種連携ワーキンググループにおいて、実施準備が進められた。令和 3 年 4 月 17 日(土)に医学部、歯学部、薬学部、薬学部の 4 学部の混成グループによるセミナーがオンラインで実施された。令和 4 年度は、オンラインと集合開催の両方の可能性を考えて準備を進めていたが、結果的には、前年度同様にオンラインにて令和 4 年 4 月 16 日(土)に実施された。令和 5 年度は、新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行したこともあり、令和元年から実に 4 年ぶりに学部混成チームによるグループワーク形式にて 4 月 15 日(土)に実施された。令和 6 年度も前年に引き続き、グループワーク形式にて 4 月 20 日(土)に実施された。

ファシリテーター

奈良場 博昭 教授、白石 博久 特任教授

チューター (事前課題対応含む)

辻原哲也准教授、稲垣祥助教、阪本泰光教授、藤本康之准教授、中西真弓教授、關谷瑞樹准教授、奈良場博昭教授、藤原俊朗講師、高橋巖特任講師、那谷耕司教授、三部篤教授、手塚優助教、杉山育美講師、幅野渉教授、寺島潤講師、杉山晶規教授、工藤賢三教授、朝賀純一准教授、高橋宏彰助教、西谷直之教授、佐京智子助教、氏家悠貴助教、高橋寛教授、松浦誠特任教授、白石博久特任教授

【事前】 3 月下旬 ～ 4 月上旬	【 事前学習 】 各学部の学生に対して順次、学生のチーム分け、指導教員、課題症例を公表する。 学生は、指導教員への照会・相談をしつつ、学部としてチーム毎に事前学習課題に取り組む。 【 全体講義の事前受講 】
---	---

	例年当日の冒頭に行っていた全体講義をビデオ録画してオンデマンド配信し、事前に受講させる。 (医学部、歯学部、看護学部 ⇒ WebClass、薬学部 ⇒ Moodle に掲載)
【当日】	①チーム作業 アイスブレイクを兼ねた自己紹介 ⇒ 事前学習の発表 ⇒ 各学部の見解をうけてディスカッションし、最終課題「患者（または家族）への説明」の作りこみ ⇒ クライアントシナリオ（患者の人物像など）の検討 ⇒ 配役・シナリオの作成 ②最終発表 インフォームドコンセントの実演（15分程度） 質疑応答、フィードバック 5分 配当以外の症例について相互に学ぶ。

チーム編成

4学部の第6学年350名を、原則4学部、一部3学部構成で分割。1チーム学生数7～9人

	総チーム数 総症例数	1チームあたりの学生構成 (総チーム数)	指導教員数
4学部編成 医歯薬看 (A、B、C)	25チーム 3症例	基本的に 医 3 + 歯 3 + 薬 2 + 看 3 = 11人	教員1名が1～2チーム担当 医) 28名 歯) 16名 薬) 25名 看護) 28名
3学部編成 医薬看 (D)	8チーム 3症例	基本的に 医 4 + 薬 2 + 看 3 = 9人	
総計	33チーム 4症例		

4月20日（土）当日スケジュール

午前時間	午後時間	概要
～8:10	～13:40	指定の会場へ直接集合 事前アンケート実施（未回答者のみ） 名前シールの作成、貼り付け（無地のシールは会場に準備）
8:30～8:40 (10分間)	14:00～14:10 (10分間)	全体説明（伊藤智範コーディネーター）
8:40～8:50 (10分間)	14:10～14:20 (10分間)	【自己紹介・アイスブレイク】 アイスブレイクを兼ねた自己紹介を行う。
8:50～9:10	14:20～14:40	【チーム作業：事前学習課題の発表】

(20 分間)	(20 分間)	以後のチーム作業は、学生主体で進行する。 ※進行役、書記役を決めて進めてください。 司会役の進行の下、各学部の事前学習課題を発表する。 (各 5 分程度、事前学習課題のプレゼン)
9:10～9:20 (10 分間)	14:40～14:50 (10 分間)	休憩
9:20～11:20 (120 分間)	14:50～16:50 (120 分間)	【チーム作業：患者への説明内容の検討】 1.各学部の事前学習課題を活用しながら、チームで最終課題に取り組む。 2.クライアントシナリオ（患者の人物像など）をチームで検討する。 2.最終発表でのインフォームドコンセントの実演に向けて、配役とシナリオを決める。
11:20～11:25 (5 分間)	16:50～16:55 (5 分間)	休憩
11:25～12:25 (60 分間)	16:55～17:55 (60 分間)	【最終発表】 1.司会役の指導教員の進行の下、チーム毎に患者さんへのインフォームドコンセントについて、実演形式で発表する。 2.質疑応答 3.指導教員から講評を受ける。 (発表 15 分、質疑・講評 5 分)
12:25～12:30 (5 分間)	17:55～18:00 (5 分間)	事後アンケート実施（WebClass 等で公開、学生のみ） 終了後に部屋ごとに解散。

⑪ 第 110 回薬剤師国家試験について

薬学部教務委員長 奈良場 博昭

令和 6 年度も国試対策委員会を中心に第 6 学年に対する国試対策の取り組みが行われた。年度初めに、学生個々に配属分野等の教員をチューターとして設定した。主要な試験について、実施後にフィードバック講義を実施し、補習等も適宜設定した。その他にも、外部講習や全国模試を実施した。

第 110 回薬剤師国家試験が、2 月 22 日（土）及び 23 日（日）に実施された。新卒は、卒業が確定した 31 名が仙台会場にて受験した。受験は、卒業判定において不合格となった学生も可能であり、数名が受験した。今年度も、試験会場における教員の引率および受験生のサポートは実施出来なかった（宿泊場所およびバスには教員が 1 名帯同した）。第 110 回薬剤師国家試験の合格発表は、厚生労働省から 3 月 25 日（火）に行われた。本学は、新卒 31 名に対して、合格者は 27 名となり、合格率は 87.10%となり、前年度より 15%ほど上昇した。国家試験の難易度は、例年と同様であった。合格基準は全 345 問に対して、213 問以上の正解とされた。

全国での受験生が約 1 万 3 千人ほどであったが、合格者は前年と同程度で 1 万人を下回った。以下に、厚生労働省から発表された概要および本学の結果を示す。

* 第 110 回薬剤師国家試験結果の概要

実施日：令和 7 年 2 月 22 日、23 日

受験者数	13,310 人
合格者数	9,164 人
全国合格率	68.85%

〔合格基準〕

以下のすべての基準を満たした者を合格とする。

- 全問題の得点が 426 点以上
- 必須問題について、全問題への配点の 70%以上で、かつ、構成する各科目の得点がそれぞれ配点の 30%以上。
- 禁忌肢問題選択数は 2 問以下

（注）配点は 1 問 2 点（690 点満点）

	新 卒	既 卒	その他	全 体
本 学	(27／31 名) 87.10% (前年 71.79%)	(36／80 名) 45.00% (前年 34.83%)	(－) － % (－)	(63／111 名) 56.76% (前年 46.09%)
私 立	84.38% (前年 83.71%)	43.79% (前年 42.28%)	27.72% (前年 20.00%)	67.52% (前年 67.11%)
全 国	84.96% (前年 84.36%)	43.94% (前年 42.42%)	48.10% (前年 43.87%)	68.85% (前年 68.43%)

⑩令和 6 年度授業アンケートについて

教育検証部会部会長 中西 真弓

平成 25 年度より授業改善のための授業アンケートを薬学部独自に実施している。問 3～18(全 16 問)の設問について、5 点を最良として学生が評価し、良かった点と改善してほしい点についても記述する。その結果は教務課が取りまとめ、講義担当者にフィードバックするとともに、講義担当者は授業報告書の中で、どのような点が良かったか、今後どう改善するかを報告し、全教員がその情報を共有できる体制をとっている。令和 5 年度より、マークシートに代えて Web によるアンケートを導入している。これにより、学生からのコメント数が増え、授業に対する学生の考えを把握する一助となった。また、令和 6 年度より、授業アンケートの項目に「他の科目との関連性がわかる授業でしたか。」を追加し、科目の関連性の理解が重要であることを意識づけた。

1) 講義科目授業アンケート

令和 6 年度は、必修講義科目（前期 36 科目、後期 36 科目、通期 7 科目）、必修実習科目（前期 5 科目、後期 9 科目、通期 1 科目）、自由科目（前期 1 科目）の授業アンケートを実施した。その科目一覧と全体のアンケート結果を次ページに示す。授業に対する満足度（設問 18）が、4.35（5 が最良、昨年度は 4.32）、各設問の全体平均は 4.29～4.43（昨年度は 4.24～4.38）であり、昨年度の結果を若干上回った。講義担当者 3 名以内の科目では、各設問の全体平均が 4.43、担当者が 4 人以上の講義の科目では 4.38 であり、直近の 2 年度の授業アンケートの結果に大きな差異は認められず、概ね順調に授業が行われていると判断される。

2) 実習科目授業アンケート

2～6 学年の全ての学年で、実習に対する満足度（設問 18）は 4.33～4.59（5 が最良）と高かった。各設問についても、実習全科目で 4.42～4.71 と高く、特に実習への積極的な取り組み（設問 15）が 4.70 であることから、意欲的に実習に取り組む学生の様子が窺える。

4 月の第 1 回教員総会で評価の高かった科目担当者を毎年表彰しており、令和 6 年度実施の科目として、3 学年 有機薬化学 3（炭素-ヘテロ原子多重結合の化学）（河野教授）、創剤学 2（杉山（育）准教授）、放射化学（杉山（晶）教授）と 1 学年 はじめて学ぶ大学の有機化学（河野教授、稲垣助教）、薬学数学 2（寺島講師）、薬化学の基礎（辻原准教授）が表彰された。

令和6（2024）年度 授業アンケート実施科目

学年	開講期	履修	科目名	日付	曜日	時限	科目責任者
6	前期	必修	臨床薬学総合演習	4月8日	月	4	朝賀 純一
3	実習前期	必修	薬学実習2（物理化学実習）	4月16日	火	4	野中 孝昌
4	前期	必修	臨床薬学1	5月9日	木	3	松浦 誠
5	前期	必修	治療戦略概論	5月9日	木	4	西谷 直之
3	実習前期	必修	薬学実習2（有機化学実習・天然物化学実習）	5月20日	月	4	河野 富一
4	実習前期	必修	薬学実習3（フィジカルアセスメント実習）	5月24日	金	4	三部 篤
6	前期	必修	地域医療マネジメント概論	5月27日	月	3	高橋 寛
2	前期	必修	物理化学1（分子の性質と電磁波）	5月28日	火	4	野中 孝昌
4	実習前期	必修	薬学実習3（症例解析学実習）	5月31日	金	4	那谷 耕司
2	前期	必修(教養)	心理学	6月3日	月	2	藤澤 美穂
2	前期	必修	解剖学	6月14日	金	3	齋野 朝幸
6	前期	必修	総合演習	6月14日	金	3	奈良場 博昭
3	実習前期	必修	薬学実習2（衛生化学実習）	6月14日	金	4	杉山 晶規
4	前期	必修	日本薬局方概論	6月17日	月	4	杉山 育美
3	前期	必修	創剤学2	6月18日	火	4	杉山 育美
4	前期	必修	実践生化学	6月19日	水	1	關谷 瑞樹
4	前期	必修	医療統計学	6月21日	金	1	寺島 潤
2	前期	必修	細胞生物学	6月24日	月	1	奈良場 博昭
2	前期	必修	生化学1（タンパク質科学）	6月24日	月	2	中西 真弓
3	前期	必修	臨床分析化学	6月24日	月	3	藤本 康之
3	前期	必修	免疫生物学2	6月24日	月	1	白石 博久
4	通期	必修	医薬情報科学	6月24日	月	3	西谷 直之
2	前期	必修	有機薬化学1（炭素-炭素多重結合の化学）	6月25日	火	2	河野 富一
2	前期	必修	微生物学	6月25日	火	3	大橋 綾子
3	前期	必修	保健衛生学	6月25日	火	1	杉山 晶規
3	前期	必修	天然物化学1（生薬と漢方薬）	6月25日	火	2	田浦 太志
3	前期	必修	薬物動態解析1	6月25日	火	3	幅野 渉
4	前期	必修	臨床薬学2	6月25日	火	1	高橋 寛
4	前期	必修	症例・処方解析学	6月25日	火	3	三部 篤
2	前期	必修	分析化学1	6月26日	水	2	藤本 康之
2	前期	必修	生化学2（エネルギー代謝）	6月26日	水	3	關谷 瑞樹
2	前期	必修	薬理学1	6月26日	水	1	三部 篤
2	前期	必修(教養)	医療における社会・行動科学	6月26日	水	4	香川 由美
3	前期	必修	有機薬化学3（炭素-ヘテロ原子多重結合の化学）	6月26日	水	1	河野 富一
3	前期	必修	医療薬学2（内分泌・生殖器・感覚器・皮膚疾患の病態と治療）	6月26日	水	2	三部 篤
3	前期	必修	物理化学3（溶液の性質、平衡と反応速度論）	6月26日	水	3	阪本 泰光
3	前期	必修	基礎演習2	6月26日	水	4	那谷 耕司
4	前期	必修	実践医薬化学	6月26日	水	2	河野 富一
3	前期	必修	放射化学	6月27日	木	2	杉山 晶規
3	前期	必修	感染症学	6月27日	木	1	西谷 直之
3	前期	必修	医療薬学1（消化器・呼吸器・骨・関節疾患の病態と治療）	6月27日	木	3	那谷 耕司
4	前期	必修	薬事関係法規・制度2	6月28日	金	2	工藤 賢三
6	前期	自由	実践チーム医療論（病棟実習）	7月8日	月	4	工藤 賢三
4	通期	必修	医療倫理とヒューマンズム	8月28日	水	4	大橋 綾子
4	後期	必修	臨床薬学3	8月28日	水	1	工藤 賢三
2	実習後期	必修	薬学実習1（組織学実習）	9月6日	金	4	奈良場 博昭
3	実習後期	必修	薬学実習2（薬物代謝学実習）	9月11日	水	4	幅野 渉
3	実習後期	必修	薬学実習2（創剤学実習）	9月25日	水	4	杉山 育美

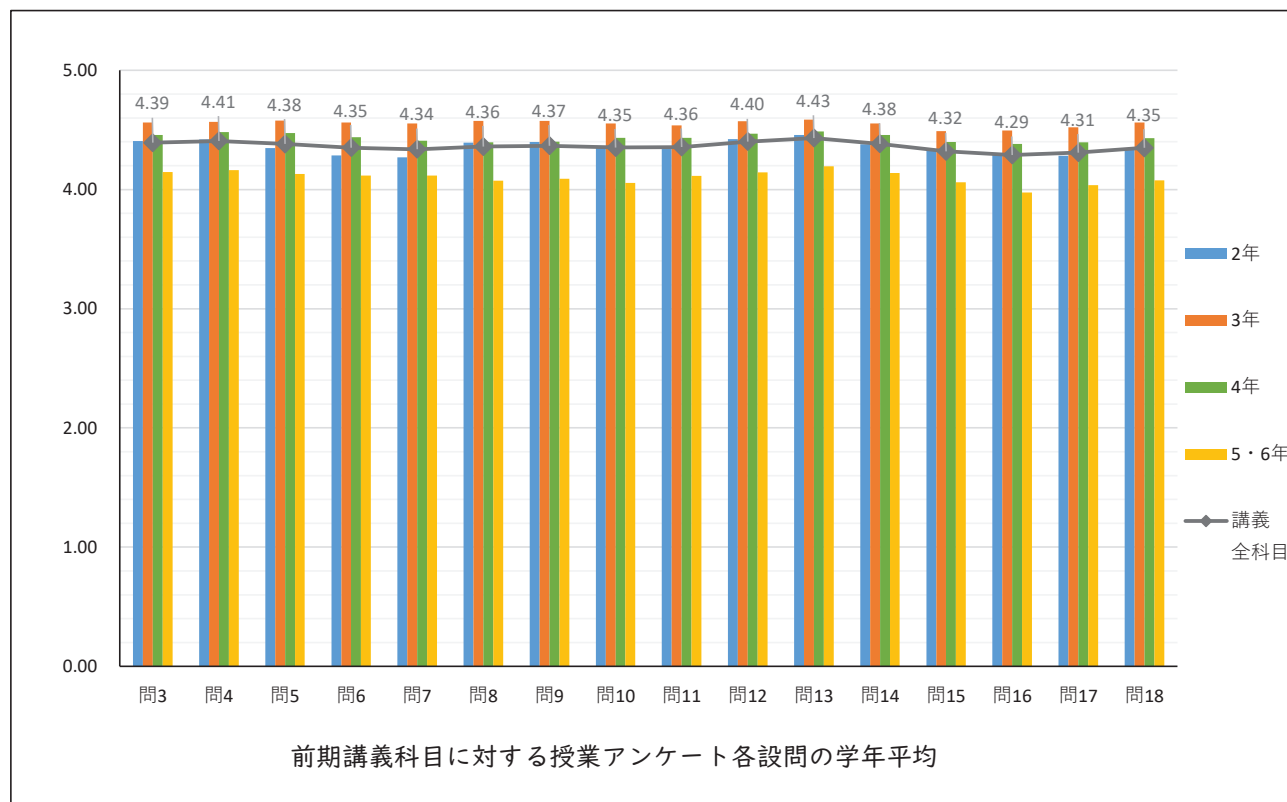
学年	開講期	履修	科目名	日付	曜日	時限	科目責任者
2	実習後期	必修	薬学実習1（分析化学実習）	10月2日	水	4	藤本 康之
4	後期	必修	実践衛生薬学	10月4日	金	2	杉山 晶規
4	通期	必修	薬学生の将来 - 多様なキャリアと他職種連携	10月4日	金	3	那谷 耕司
4	通期	必修	臨床医学概論	10月7日	月	3	那谷 耕司
3	実習後期	必修	薬学実習2（薬理学実習）	10月11日	金	4	三部 篤
3	後期	必修	薬事関係法規・制度1	10月15日	火	4	高橋 寛
2	実習後期	必修	薬学実習1（微生物学実習）	10月16日	水	4	大橋 綾子
2	実習通期	必修	早期臨床体験	10月21日	月	2	白石 博久
2	実習後期	必修	薬学実習1（生化学実習）	10月30日	水	4	中西 真弓
4	通期	必修	総合薬物治療演習	11月1日	金	1	白石 博久
3	実習後期	必修	看護体験実習	11月11日	月	4	三部 篤
2	後期	必修	化学療法学1	11月12日	火	2	西谷 直之
2	後期	必修(教養)	医療面接の基礎	11月13日	水	1	藤澤 美穂
6	通期	必修	総合講義	11月15日	金	3	河野 富一
4	実習後期	必修	実務基礎実習	11月18日	月	4	朝賀 純一
3	後期	必修	天然物化学2	11月21日	木	2	田浦 太志
2	後期	必修	創剤学1	11月27日	水	3	杉山 育美
3	後期	必修	薬物送達学	11月28日	木	4	杉山 育美
2	後期	必修	環境衛生学	12月3日	火	1	杉山 晶規
3	後期	必修	構造生物学	12月3日	火	3	野中 孝昌
3	後期	必修	応用生体防御学	12月4日	水	1	大橋 綾子
2	後期	必修	物理化学2（物質の性質、エネルギーと平衡）	12月4日	水	3	阪本 泰光
2	後期	必修	免疫生物学1	12月6日	金	4	大橋 綾子
3	後期	必修	化学療法学2	12月6日	金	1	西谷 直之
3	後期	必修	薬学実践英語2	12月6日	金	2	阪本 泰光
2	後期	必修	生化学3（ゲノムサイエンス）	12月9日	月	3	中西 真弓
3	後期	必修	医療薬学4（循環器・泌尿器疾患の病態と治療）	12月10日	火	1	三部 篤
2	後期	必修	薬学実践英語1	12月10日	火	2	白石 博久
2	通期	必修	食品衛生学	12月10日	火	4	杉山 晶規
3	後期	必修	医薬安全性学	12月10日	火	2	奈良場 博昭
2	後期	必修	分析化学計算演習	12月10日	火	3	藤本 康之
2	後期	必修	有機スペクトル解析	12月11日	水	1	河野 富一
3	後期	必修	有機生体制御化学	12月11日	水	1	辻原 哲也
2	後期	必修(教養)	データサイエンス	12月11日	水	2	長谷川 大
3	後期	必修	薬物動態解析2	12月11日	水	3	幅野 渉
2	後期	必修	分析化学2	12月11日	水	4	藤本 康之
3	後期	必修	基礎演習3	12月11日	水	4	松浦 誠
2	後期	必修	有機薬化学2（炭素-ヘテロ原子単結合の化学）	12月12日	木	1	河野 富一
2	後期	必修	基礎演習1	12月12日	木	4	河野 富一
3	後期	必修	毒性学	12月12日	木	3	杉山 晶規
3	後期	必修	医療薬学3（血液・代謝・免疫・アレルギー・神経・筋・遺伝性疾患の病態と治療）	12月12日	木	2	那谷 耕司
2	後期	必修	薬理学2	12月12日	木	2	奈良場 博昭
2	後期	必修	薬物動態学	12月12日	木	3	幅野 渉
3	後期	必修	臨床薬学入門	12月12日	木	4	松浦 誠
5	後期	必修	薬学特論（生物・薬理）	12月23日	月	5	寺島 潤
5	後期	必修	医薬品情報セミナー	2月10日	木	3	西谷 直之
5	後期	必修	薬学特論（衛生・分析・動態）	2月12日	水	2	杉山 晶規

令和6（2024）年度 講義科目に対する授業アンケート評価結果

【設問内容】 ※問 1は「氏名」、問 2は「科目名」の設問

		講義 全科目	2年	3年	4年	5・6年
問3	シラバスは授業の目標、内容、評価方法を分かりやすく示していましたか。	4.39	4.41	4.56	4.46	4.15
問4	授業はシラバスに沿って行われていましたか。	4.41	4.42	4.57	4.48	4.16
問5	他の科目との関連性が分かる授業でしたか。	4.38	4.35	4.58	4.47	4.13
問6	授業の内容は興味や関心を持てるものでしたか。	4.35	4.29	4.56	4.44	4.12
問7	授業の内容は理解できるものでしたか。	4.34	4.27	4.55	4.41	4.12
問8	配布資料、教科書などの教材は適切でしたか。	4.36	4.39	4.58	4.40	4.08
問9	板書やパワーポイントなどは適切でしたか。	4.37	4.40	4.58	4.40	4.09
問10	時間配分など、授業の進め方は適切でしたか。	4.35	4.37	4.55	4.43	4.06
問11	教員の説明は分かりやすかったですか。	4.36	4.34	4.54	4.43	4.12
問12	教員の話し方(言葉や声の調子など)は適切でしたか。	4.40	4.42	4.57	4.47	4.14
問13	教員の熱意が伝わってきましたか。	4.43	4.46	4.59	4.49	4.19
問14	教員は効果的に学生の参加(発表、自主的学習、作業など)を促しましたか。	4.38	4.38	4.55	4.46	4.14
問15	あなたは、質問、発言、自習などにより、この授業に積極的に取り組みましたか。	4.32	4.33	4.49	4.40	4.06
問16	あなたは、授業に対して予習と復習を積極的行いましたか。	4.29	4.31	4.49	4.38	3.98
問17	あなたは、シラバスの目的を達成できたと思いますか。	4.31	4.28	4.52	4.40	4.04
問18	この授業は全体として満足できるものでしたか。	4.35	4.33	4.56	4.43	4.08

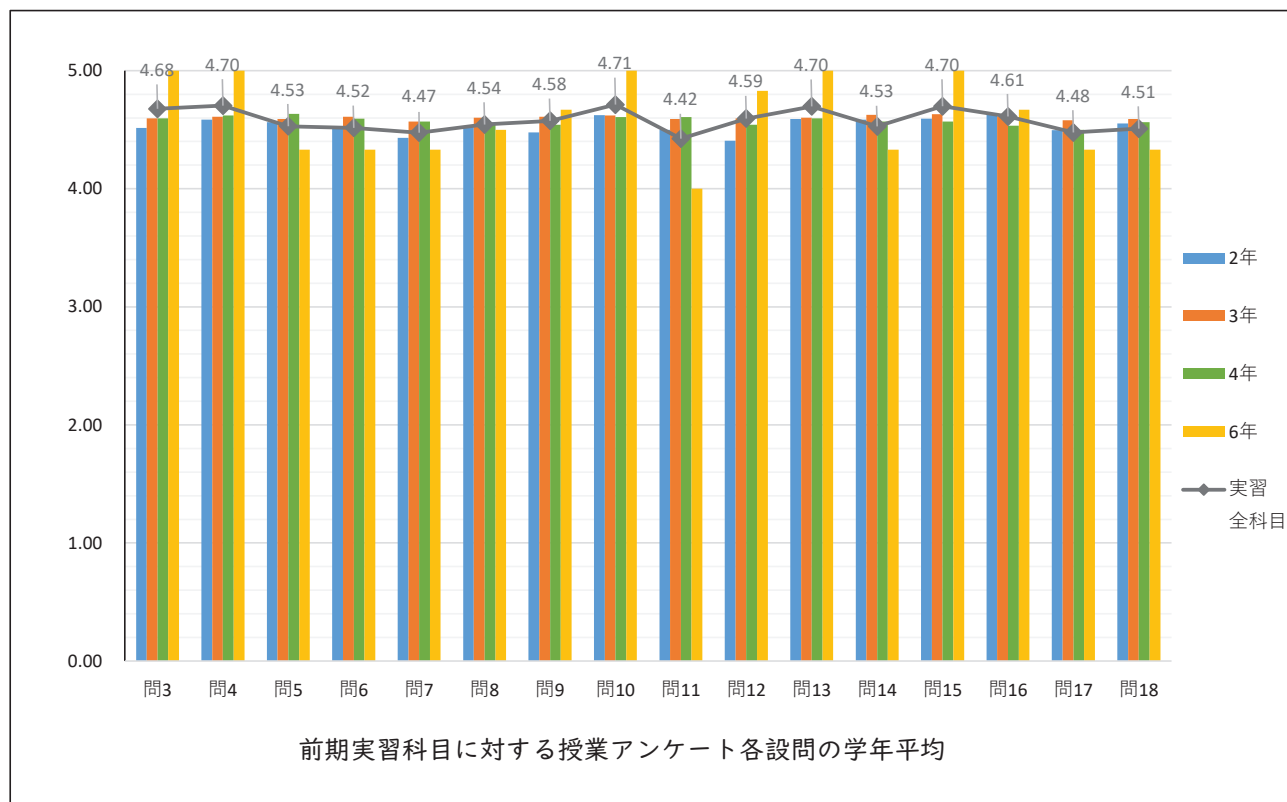
※5・6年生は実施科目数が少ないため統合して集計



令和6（2024）年度 実習科目に対する授業アンケート評価結果

【設問内容】 ※問 1は「氏名」、問 2は「科目名」の設問		実習 全科目	2年	3年	4年	6年
問3	シラバスは実習の目標、内容、評価方法を分かりやすく示していましたか。	4.68	4.51	4.60	4.60	5.00
問4	実習はシラバスに沿って行われていましたか。	4.70	4.59	4.61	4.62	5.00
問5	他の科目との関連性が分かる実習でしたか。	4.53	4.56	4.59	4.63	4.33
問6	実習の内容は興味や関心を持てるものでしたか。	4.52	4.53	4.61	4.59	4.33
問7	実習の内容は理解できるものでしたか。	4.47	4.43	4.57	4.57	4.33
問8	実習書などの教材は適切でしたか。	4.54	4.53	4.60	4.54	4.50
問9	実習内容の説明(機器・器具の取り扱いや板書などを含む)は適切でしたか。	4.58	4.48	4.61	4.54	4.67
問10	実習時の注意事項や安全対策とその説明は適切でしたか。	4.71	4.62	4.62	4.61	5.00
問11	時間配分など、実習の進め方は適切でしたか。	4.42	4.50	4.59	4.61	4.00
問12	教員・指導者の話し方(言葉や声の調子など)は適切でしたか。	4.59	4.41	4.60	4.54	4.83
問13	教員・指導者の熱意が伝わってきましたか。	4.70	4.59	4.60	4.60	5.00
問14	教員・指導者は効果的に実習への取り組みを促しましたか。	4.53	4.59	4.63	4.57	4.33
問15	あなたは、この実習に積極的に取り組みましたか。	4.70	4.59	4.63	4.57	5.00
問16	あなたは、この実習で予習とレポート作成を積極的行いましたか。	4.61	4.63	4.61	4.53	4.67
問17	あなたは、シラバスの目的を達成できたと思いますか。	4.48	4.50	4.58	4.50	4.33
問18	この実習は全体として満足できるものでしたか。	4.51	4.55	4.59	4.56	4.33

※「実習全科目」には、自由科目を含む



講義科目 総合評価 上位3科目

講義担当教員 3名以内

学年	科目名	所属	教員名	平均点	平均点（3名以内全科目）
3	有機薬化学3(炭素-ヘテロ原子多重結合の化学)	創薬有機化学分野	河野 富一 教授	4.69	4.43
3	創剤学2	創剤学分野	杉山 育美 准教授	4.67	
3	放射化学	衛生化学分野	杉山 晶規 教授	4.66	

講義担当教員 4名以上

学年	科目名	所属	教員名	平均点	平均点（4名以上全科目）
3	基礎演習2	臨床医化学分野	那谷 耕司 教授	4.63	4.38
		創薬有機化学分野	河野 富一 教授		
		創薬有機化学分野	辻原 哲也 准教授		
		生体防御学分野	錦織 健児 助教		
		情報薬科学分野	佐京 智子 助教		
		情報薬科学分野	氏家 悠貴 助教		
		薬物代謝動態学分野	幅野 涉 教授		
		構造生物薬学分野	阪本 泰光 教授		
		臨床薬剤学分野	朝賀 純一 准教授		
		天然物化学分野	浅野 孝 助教		
3	基礎演習3	地域医療薬学分野	松浦 誠 特任教授	4.57	
		創薬有機化学分野	辻原 哲也 准教授		
		臨床薬剤学分野	高橋 宏彰 助教		
		薬物代謝動態学分野	幅野 涉 教授		
		臨床医化学分野	大橋 一晶 准教授		
		天然物化学分野	浅野 孝 助教		
		生体防御学分野	錦織 健児 助教		
		情報薬科学分野	氏家 悠貴 助教		
		臨床薬剤学分野	朝賀 純一 准教授		
4	実践衛生薬学	衛生化学分野	杉山 晶規 教授	4.55	
		臨床薬剤学分野	朝賀 純一 准教授		
		衛生化学分野	米澤 穂波 助教		
		薬剤治療学分野	手塚 優 助教		
		衛生学公衆衛生学講座	丹野 高三 教授		
		非常勤講師	1名		

教養教育センター授業評価(薬学専門科目)「学生による授業の評価」及び「学生による科目全体の評価」 講義担当教員 3名以内

学年	科目名	所属	教員名	平均点	平均点（3名以内全科目）
1	はじめて学ぶ大学の有機化学	創薬有機化学分野	河野 富一 教授	4.76	4.43
		創薬有機化学分野	稲垣 祥 助教		
1	薬学数学2	薬物代謝動態学分野	寺島 潤 講師	4.73	
1	薬化学の基礎	創薬有機化学分野	辻原 哲也 准教授	4.68	

6. その他の活動

① 薬学部主催のセミナー・シンポジウム等

研究推進委員長 西谷 直之

薬学部セミナー

令和6年度は、現地ならびに現地/ZOOM ハイブリッド形式でのセミナーを実施した。第95回薬学部セミナー「拡張版・最終講義」は、研究推進委員会、圭陵会薬学部同窓会局、卒後研修部会との共催であった。実施したセミナーには、薬学部の教職員、大学院生、学部学生だけでなく、卒業生や他学部の教員にも多数ご参加いただいた。

*所属等は、講演時のものを記載した。

	開催日	演題	演者	所属
第94回	令和6年7月26日 (現地)	がん幹細胞に着目した悪性脳腫瘍再発予防薬開発研究～ゼロの基礎から始めて臨床応用に至るまで	北中 千史 教授	山形大学医学部 腫瘍分子医科学講座
第95回	令和7年3月8日 (現地/ZOOM)	カンナビノイド関連化合物の生合成研究	田浦 太志 教授	岩手医科大学薬学部 薬科学講座 天然物化学分野
		「拡張版・最終講義」 膵β細胞の機能と増殖 － cyclic ADP-ribose と Reg family タンパク質－	那谷 耕司 教授	岩手医科大学薬学部 病態薬理学講座 臨床医化学分野

②キャリア支援センターの活動

キャリア支援センター長

臨床薬学講座臨床薬剤学分野 教授 工藤 賢三

キャリア支援センターの主な活動と実績

キャリア支援センターは、「学生の社会的自立に向けた実践的な能力形成と就職活動などを支援すること」を目的として設置されており、学生一人ひとりが納得のいく就職ができるよう、職業に対する意識を高め、自分にあった職業や就職先を選択するための各種の支援活動を行っている。年度始めには、キャリア形成に対する意識と職業観を持たせ、社会性を身につけてもらうために、学年に応じた「進路総合ガイダンス」を行った（資料 1）。

就職活動においては、学生に対するアンケートの結果から、薬学部第 1 期生～12 期生に続き、第 13 期生においても就職を希望した全員をほぼ希望通りの職場に就職させることができた（資料 2, 3）。

学生が具体的に自分の将来像を描くためのプログラム等の充実に努めた。進路総合ガイダンス、業種/職種研究講演会、面接対策講座、学内個別企業研究セミナー・企業研究セミナー等を開催し、年間を通じて就職活動を支援した。例年開催している学内企業研究セミナーについては、新型コロナウイルス感染拡大以前の会場、すなわち、SGL 教室及び学生ホールを利用し、感染に十分に配慮しながら実施した。盛岡新卒応援ハローワークの専門カウンセラーによる個別相談や自己分析の仕方、エントリーシートの書き方などの指導を通じてキャリア開発に取り組み、就職活動に繋げた。また、薬学部 0B・0G インタビューブックを刷新して発行、在学生に配布し意識の啓発に努め、キャリア支援センターホームページにも掲載し誰でも閲覧可能とした。以下の 4 点の活動について特筆する。

（1）個別企業研究セミナー・企業研究セミナー：個別企業研究セミナーは、就職活動の早期化により学生がより早い時期に業種・企業等の情報を得る機会が必要との理由から、例年 3 月に開催している企業研究セミナーとは別に今年度から新たに企画・実施したものである。11 月～3 月の火・水曜日に 1 日 3 事業所限定で開催をした。合計 40 企業のセミナーを開催し、延べ 109 名の参加があった。企業研究セミナーは、3 月 1 日（土）に、病院、官公庁、製薬会社、医薬品卸、保険薬局、ドラッグストア等の全業種を対象として開催した。99 事業所から卒業生 51 名を含む人事担当者らが来学し、43 名の学生が会社概要や採用情報の説明を受け、各企業について学んだ。昨年度に引き続き、今年度も学生に企業研究シートを配布し、各事業所のブースを訪問した際にキャリアに関連する項目を評価することで、具体的かつ総合的に企業を研究できるような取り組みを行った。

（2）業種/職種研究講演会：病院薬剤師及び薬局薬剤師の仕事をテーマに講師を迎え、3 件の講演会を開催した。以下、開催日、参加学生数、所属、演者、演題の順に記す。

5 月 8 日（水） 4～5 年生 71 名

①岩手医科大学附属病院 薬剤部長 岩手県病院薬剤師会会長 工藤 賢三 氏 「病院薬剤師への招待」

②株式会社ライブリー 学術部部長 藤原 邦彦 氏 「薬局薬剤師について」

9月3日(火) 4年生39名

③本学薬学部地域医療薬学分野 特任教授 松浦 誠 氏 「いまから考えよう、自分自身の将来」

(3) キャリア実習ガイダンス(インターンシップおよび短期就労体験について):就職後のミスマッチや早期離職を防ぐことを目的に、インターンシップおよび短期就労体験の意義について解説するガイダンスを実施した。本年度は4・5年生計71名が参加し、キャリア実習に対する理解を深める機会となった。なお、2022年度の三省合意を踏まえ、本学では「インターンシップ」の呼称を「キャリア実習」へ改称している。

(4) 就職活動体験報告会:今年度は、①病院内定者(岩手医科大学附属病院)と②薬局内定者(マリン調剤薬局、アイングループ)である薬学部6年生の3名を講師として実施した。以下、開催日、参加学生数、演者の順に記す。

12月2日(月) 5年生38名

① 6学年 佐々木 愛華 さん

② 6学年 柳瀬 ゆい さん、小原 優良 さん

第1～13期生(第110回国試合格の既卒生36名を含む)計1,317名の進路について、2025年5月1日現在の業種別構成比および実績(事業所リスト)を資料2に示した。業種別では、病院(32.2%)、保険薬局(45.4%)、ドラッグストア(13.5%)、公務員(1.2%)、各種企業(1.5%)、進学(1.2%)などとなっている。

第13期生の場合、就職活動は国試後とした学生は3.7%であった。第12期生の国試後就活の割合が9.5%であったことと比較すると減少している。国試後就活は、短期間に意思決定を迫られるためミスマッチが起りやすいことから、キャリア支援センターとしては推奨していない。病院への就職者が減少傾向にある一方で、ドラッグストアや保険薬局への就職者が増加傾向にあるが、奨学金返済を考え、新卒者の給与が高い就職先を選択していることが要因の一つと考えられる。現在、薬剤師の地域・業態偏在が問題となっており、岩手県としても偏在解消、病院薬剤師不足解消に向けた薬剤師確保計画が策定されている。

卒業生1,317名の勤務地を都道府県別に集計した図表を資料3に示した。東北地区が全体の70.5%を占める。さらに就職者1,249名を分母とした場合、東北地区が全体の74.3%を占め、中でも、岩手県が499名(総数の40.0%)と最も多く、次いで宮城県が194名(同15.5%)、秋田県が90名(同7.2%)の順となっている。

厚生労働省が公開している直近の「医師・歯科医師・薬剤師統計(2022年12月31日現在)」によると、岩手県の届出薬剤師数は2,572名で、薬局(1,685名)、病院(524名)、行政機関等(31名)などに従事している。卒業生のうち222名が県内の病院に就職している状況から推して、岩手県の病院薬剤師のおよそ4割が本学出身と言える。また、行政機関等においてもおよそ3割が本学出身と推察できる。今後も継続して、東北、特に岩手県の薬剤師供給へ大きな役割を担っていくことが期待される。

卒業生の中では、本学大学院を含む大学院博士課程の修了生(博士号取得者)もあり、博

士研究員や助教などのアカデミック職に就労している。今後、卒業生の転職・離職情報の把握に努めていく予定である。

資料1：2024年度キャリア支援事業実施報告【薬学部】

資料2：薬学部卒業生の就職・進学状況【業種別】

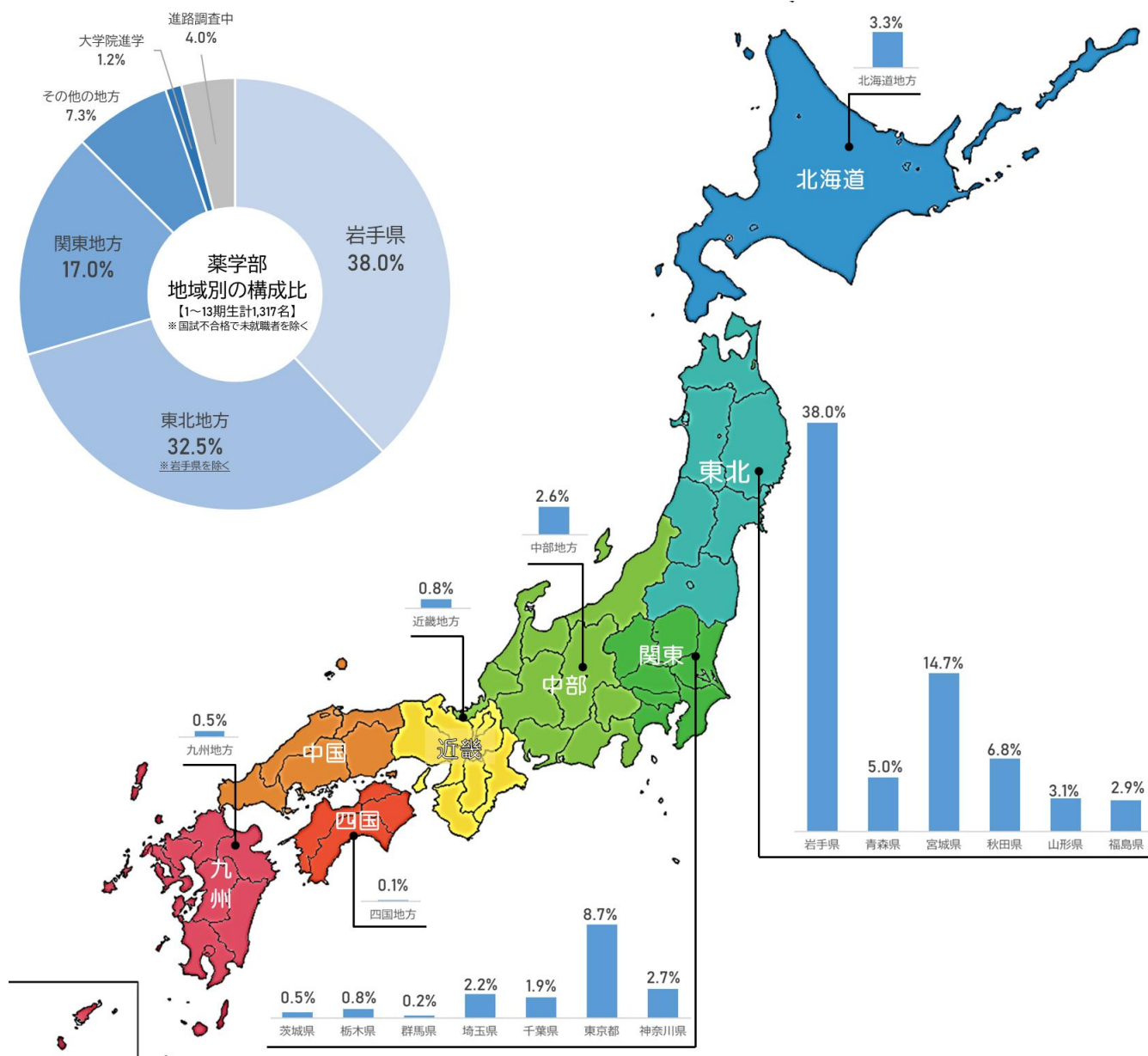
資料3：薬学部卒業生の就職・進学状況【地域別】

2024年度キャリア支援センター構成員

キャリア支援センターは、センター長（薬学部教授 工藤 賢三）以下、医学部教授2名（下 沖 収、平 英一）、歯学部教授2名（原田 英光、石河 太知）、薬学部教授3名（野中 孝昌、高橋 寛、奈良場 博昭）、看護学部教授3名（遠藤 龍人、菖蒲澤 幸子、岩渕 光子）から構成するセンター会議、工藤教授を部会長として5名の委員（野中教授、西谷教授、高橋教授、奈良場教授、松浦特任教授）から構成する薬学部会、遠藤教授を部会長として6名の委員（菖蒲澤教授、岩渕教授、小林講師、武田講師、高崎講師、高橋講師）から構成する看護学部会、及び入試・キャリア支援課のスタッフ2名（渡邊義典、高須翠）により運営している。

本年度は、センター会議を4回（6月25日、12月25日、2月27日、3月17日）開催し、各種事業内容について審議した。そのほか、薬学部会を5回（7月16日、10月22日、12月20日、2月14日、3月31日）、看護学部会を4回（4月18日、12月13日、12月20日、2月14日）開催し、それぞれ就職支援関連事業の企画・立案及び日程等について審議し、キャリア支援センター会議に上申した。

薬学部第1～13期生 進路状況(地域別)【2025年5月1日現在】



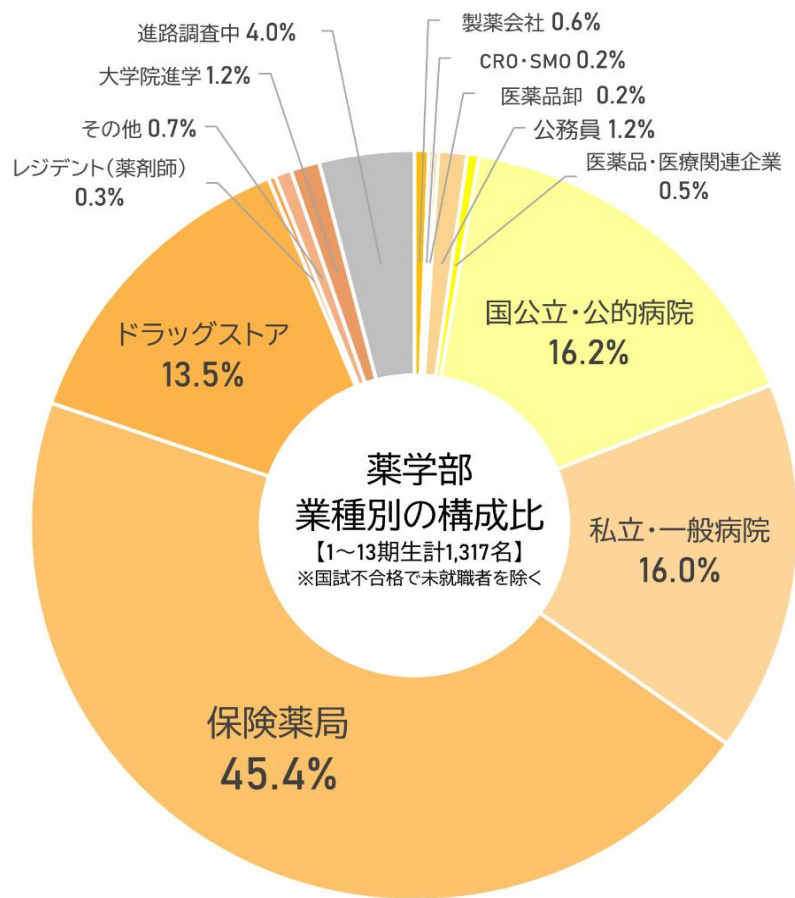
業 種	東北地方						関東地方							北海道地方	中部地方	近畿地方	中国地方	四国地方	九州地方	沖縄地方	合計
	岩手県	青森県	宮城県	秋田県	山形県	福島県	茨城県	栃木県	群馬県	埼玉県	千葉県	東京都	神奈川県								
製薬会社	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	6	0	0	1	0	0	0	0	0	8
CRO・SMO	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
医薬品卸	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
公務員	8	3	1	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	16
医薬品・医療関連企業	1	0	2	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	7
国公立・公的病院	112	19	24	27	12	4	1	1	0	0	1	3	0	4	6	0	0	0	0	0	214
私立・一般病院	110	6	18	19	1	10	1	2	0	7	4	8	8	10	6	1	0	0	0	0	211
保険薬局	213	30	116	42	20	19	5	5	2	14	9	55	14	24	15	7	0	1	7	0	598
ドラッグストア	53	8	28	0	5	4	0	3	0	7	9	36	12	6	5	2	0	0	0	0	178
レジデント(薬剤師)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	4
その他	2	0	3	1	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	9
就職者合計	499	66	194	90	41	38	7	11	2	29	25	114	36	44	34	11	0	1	7	0	1249
	38.0%	5.0%	14.7%	6.8%	3.1%	2.9%	0.5%	0.8%	0.2%	2.2%	1.9%	8.7%	2.7%	3.3%	2.6%	0.8%	0.0%	0.1%	0.5%	0.0%	94.8%
大学院進学	16																				1.2%
進路調査中	52																				4.0%
卒業生合計	1317																				100%

※国家試験不合格で未就職の者を除く
※勤務地不明の場合は本社所在地で集計

2024年度 キャリア支援事業実施報告【薬学部】

対象者	日程	時間	所要時間(分)	分類	科目名	テーマ(講義内容)	講師	会場	参加人数
1学年	4月11日(木)	11:00~12:00	60	キャリアガイダンス	キャリア支援講演会	キャリア支援について働く心構え	キャリア支援センター ジョブカフェいわて	西1-E講義室	33名
2学年	4月2日(火)	14:05~14:20	15	キャリアガイダンス	キャリアデザインⅠ	キャリア支援について	キャリア支援センター	西1-F講義室	34名
	4月25日(木)	Ⅱ時限	90	キャリアガイダンス	コミュニケーション講座Ⅰ	コミュニケーション力について	マイナビ	西1-F講義室	28名
	5月29日(水)	Ⅱ時限	90	キャリアガイダンス 業種・職種研究	自己分析・業界研究講座	自己分析・業界研究について	エムスリーキャリア	西1-F講義室	28名
3学年	4月1日(月)	13:50~14:30	40	キャリアガイダンス	キャリアデザインⅡ	キャリア支援について 薬学生の活躍フィールド	キャリア支援センター エムスリーキャリア	西1-C講義室	27名
	5月29日(水)	Ⅲ時限	90	キャリアガイダンス	コミュニケーション講座Ⅱ	コミュニケーション力について	エムスリーキャリア	西1-C講義室	24名
4学年	4月2日(火)	10:50~11:40	50	キャリアガイダンス	キャリアデザインⅢ	キャリア支援について 就職活動の心構え	キャリア支援センター 盛岡新卒応援ハローワーク	西1-D講義室	40名
	5月8日(水)	Ⅲ・Ⅳ時限	40	キャリアガイダンス (5学年と合同)	業種研究講演会	病院薬剤師への招待 ー薬学の専門性を最大限に生かそう！ー	日本病院薬剤師会理事・ 岩手県病院薬剤師会会長 工藤 賢三 氏	大堀記念講堂	34名
			40		就職支援システム講習会	求人検索NAVI操作説明	株式会社ジェイネット		
			40		キャリア実習(旧インターンシップ)について	キャリア実習の説明	エムスリーキャリア		
			20						
	9月3日(火)	Ⅰ時限	90	業種・職種研究	業種・職種研究講演会	いまから考えよう、自分自身の将来	地域医療薬学分野 特任教授 松浦誠 先生	西1-D講義室	39名
	2月26日(水)	Ⅱ時限	90	キャリアガイダンス	就活スタートアップ講座	今後の就職活動について	マイナビ	西1-D講義室	40名
5学年	4月2日(火)	13:00~14:30	90	キャリアガイダンス	前期キャリアガイダンスⅠ	キャリア支援について 就活マナーセミナー 就職情報サイト登録会	キャリア支援センター ジョブカフェいわて ほか	西1-E講義室	39名
	5月8日(水)	Ⅲ・Ⅳ時限	40	キャリアガイダンス (4学年と合同)	業種研究講演会	病院薬剤師への招待 ー薬学の専門性を最大限に生かそう！ー	日本病院薬剤師会理事・ 岩手県病院薬剤師会会長 工藤 賢三 氏	大堀記念講堂	37名
			40		就職支援システム講習会	求人検索NAVI操作説明	株式会社ジェイネット		
			40		キャリア実習(旧インターンシップ)について	キャリア実習の説明	エムスリーキャリア		
			20		就活スケジュールについて(5年生のみ)	就活スケジュールについて	キャリア支援センター		
			20						
	11月8日(金)	Ⅲ・Ⅳ時限	60	キャリアガイダンス	失敗事例から学ぶ就活ポイント講座	失敗事例から学ぶ就活のポイント	エムスリーキャリア	東2-B講義室	39名
			60		病院志望者向け講座 (情報収集～選考・小論文)	情報収集～選考・小論文	エムスリーキャリア		
			30		病院薬剤師の魅力・仕事内容について	病院薬剤師の魅力・仕事内容について	マイナビ		
	12月2日(月)	Ⅲ・Ⅳ時限	30	キャリアガイダンス	教養試験対策(公務員試験対策)	教養試験対策ガイダンス	上野法律ビジネス専門学校	東2-B講義室	38名
			15		就職活動体験報告会	病院内定者からの就活体験報告	薬学部6年生 佐々木 愛華 氏 《岩手医科大学附属病院 内定》		
			15			薬局内定者からの就活体験報告	薬学部6年生 柳瀬 ゆい 氏 《マリーン調剤薬局 内定》		
			15			薬局内定者からの就活体験報告	薬学部6年生 小原 優良 氏 《アイングループ 内定》		
			20		就職活動後期スタートアップ講座	今後の就職活動について	エムスリーキャリア		
			50		面接実践セミナー	面接対策講座Ⅰ(全体講義)	ジョブカフェいわて		
			30		履歴書・ES対策講座	履歴書・ES対策講座(講義)	エムスリーキャリア		
			10		進路総合ガイダンス	今後の就職活動について	キャリア支援センター		
	12月3日(火)	Ⅲ・Ⅳ時限	60×3	キャリアガイダンス	面接実践セミナー 履歴書・ES対策講座	面接対策講座Ⅱ(実践) 履歴書・ES対策講座(実践)	ジョブカフェいわて エムスリーキャリア	東SGLほか	31名
6学年	4月1日(月)	14:50~15:05	15	キャリアガイダンス	就職活動状況アンケート	就職活動状況アンケート	キャリア支援センター	西2-A講義室	54名
	4月15日(月)	V時限	90	企業研究	附属病院採用試験説明会	附属病院採用試験説明会	薬剤部・人事職員課	西2-A講義室	8名
学年不問	3月1日(土)	終日		企業研究	学内企業研究セミナー		病院、官公庁、製薬会社、医薬品卸、薬局、ドラッグストア等	東SGLほか	5年生:33名 4年生:10名
	随時			キャリア実習 (旧インターンシップ)	キャリア実習事前指導&マナー講座	キャリア実習参加にあたって	キャリア支援センター	キャリア支援センター	1名
	2, 3月頃	Ⅳ時限	計12コマ	公務員試験対策講座			上野法律ビジネス専門学校	西1-B講義室	3名
	7月上旬	PM		父兄懇談会(薬4~6年, 看3~4年)			キャリア支援センター長	大堀記念講堂	-
	10月下旬	PM		父兄懇談会(薬1~3年, 看1~2年)			キャリア支援センター長	大堀記念講堂	-
	毎週月曜日14:00~17:00		1回40分	個人面談・面接指導			盛岡新卒応援ハローワーク	キャリア支援センター	6年生:8名 5年生:11名

薬学部第1～13期生 進路状況(業種別)【2025年5月1日現在】



主な就職・進学実績

■製薬企業(MR) エーザイ グラクソ・スミスクライン 中外製薬 Meiji Seikaファルマ ■CRO・SMO エシック エーツーヘルスケア ■医薬品卸 バイタルネット ■公務員 防衛省航空自衛隊 厚生労働省 東海北陸厚生局 麻薬取締部 岩手県 青森県 宮城県 山形県 八戸市 ■医薬品・医療関連企業 大陽日酸 東和薬品 ニプロファーマ 日本全薬工業 富士フィルム和光純薬 ■病院 岩手医科大学附属病院 岩手県医療局(岩手県立病院) 秋田赤十字病院 秋田大学医学部附属病院 イムス明理会仙台総合病院 大崎市市民病院 川久保病院 北上済生会病院 啓愛会 国立病院機構北海道東北グループ 市立秋田総合病院 JA秋田厚生連 仙台市立病院 総合花巻病院 手稲溪仁会病院 東北大学病院 徳洲会グループ 新潟大学歯学総合病院 八戸市立市民病院 弘前大学医学部附属病院 星総合病院 明和会 盛岡赤十字病院 盛岡友愛病院 山形大学医学部附属病院	■保険薬局 アイセイ薬局 アイングループ アオキファーマシー イクミグループ いまいメディカルグループ 医薬品情報センター 岩手保健企画 ウイング オオノ(ひかり薬局・プラザ薬局) クオール クラフト(さくら薬局グループ) クリエイトエス・ディー サノ・ファーマシー サングループ シップヘルスケアファーマシー東日本 総合メディカル トミザワ薬局 日本調剤 ファーマみらい ファーマライズホールディングス メディカルシステムネットワーク(なの花薬局) メディワークス盛岡 ライブリー ラッキーバッグ ワークイン つくし薬局 ■ドラッグストア イオン東北株式会社 ウエルシア薬局 カワチ薬品 クスリのアオキ サンドラッグ スギ薬局 ツルハホールディングス マツモトキヨシ 薬王堂 ■薬系以外 ファーマプロダクト 学校法人医学アカデミー 薬学ゼミナール ■進学 岩手医科大学大学院薬学研究科 東京大学大学院医学系研究科 秋田大学大学院医学系研究科 金沢大学医薬保健学統合研究科医学専攻 慶應義塾大学大学院薬学研究科薬学専攻
他	他
他	他

③ 学生生活指導・支援

薬学部学生部長 西谷直之

年度初めには、各学年のガイダンスで学生生活について周知した。具体的には、薬剤師法・相対的欠格事由、交通事故の届出、ハラスメント、SNS 関連のトラブル、盗難、禁煙について指導した。

1 年次は、4 学部の 1 年生を担当する教養教育センター・高橋学生部長との連携のもとで様々な問題に関し対応した。教養教育センターでは、1 年生の学業と精神的な面をサポートするために教員がキャンパスサポーターとして活動しており、多くの実績を挙げてきている。加えて 1 年次においては薬学部教員によるクラス担任と教養教育センター教員による副担任が学生をサポートした。また、継続入寮制度が令和 3 年度から施行されているが、令和 6 年度は 4 名が寮生活を継続した。また、令和 7 年度に継続して入寮することを希望する学生の審査を行い、3 名の学生が継続して入寮することになった。1 人暮らしに比較して生活費の支出が抑えられるため、この制度は自宅外学生のご家庭の経済的支援としても機能し得る。

2、3 年次の学生に対しては、1 年次の薬学部担任教員が引き続きクラス担任となり、継続的に支援を行った。4～6 年次には卒業研究のため各分野に配属され、各分野所属の教員から手厚い指導を受けた。勉学の指導はもとより、精神面のサポートが必要な学生が増えており、適切に対応するとともに必要に応じて臨床心理士への橋渡しを行った。

平成 18 年に障害者権利条約が国連で策定され、本国では平成 25 年に国会で「障害者差別解消法」が制定された。平成 28 年から同法が施行され、障害者に対する「不当な差別的取扱い」や「合理的配慮の提供」といった差別解消措置が求められるようになった。これまでは、行政機関や国立大学では義務、民間業者や私立大学では努力義務とされてきた。しかし、令和 3 年 5 月の同法の改正をうけて、民間業者や私立大学においても合理的配慮が法的に義務化され令和 6 年 4 月から施行されることになっていた。他学部に先駆けて、本学部では合理的配慮に関する学部内規定を策定し、合理的配慮について具体的なアクションをとってきた。薬学部で進めてきた過去 5 年間の合理的配慮の蓄積が礎となり、令和 6 年度から全学的な合理的配慮に対応するための学生支援室が設置され活動を始めた。令和 6 年度は前年度からの更新も含め 10 名の合理的配慮について教授会の承認を得た。

矢巾キャンパスは全面禁煙であるが、敷地外での喫煙マナーについて度々指摘されてきている。禁煙に関するキャッチコピー・ポスターコンテストも 4 学部を対象に本年度もを行い、構内に掲示、禁煙の啓発活動に役立てた。

学生が主体となるクラス委員会は、学生委員長のもと、様々な活動を行い勉学の環境整備の一翼を担っている。前年度に続き今年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響で、卒業式は代表学生のみ参加する形となったが、6 年生となった 13 期生のクラス委員も卒業準備において主体的な役割を果たした。

④ 薬学部教員研修

教育研修部会長 高橋 寛

今年度は、薬学部教育研修部会では、計5回の教員研修会を実施しました。昨年度に引き続き、本学薬学部の「改訂薬学教育モデル・コア・カリキュラム」に関する研修会を計画しました。昨年度は、ディプロマ・ポリシー等の見直しを行っており、本年度は、改訂カリキュラムをブラッシュアップすることを主目標に、年度の前期に集中して3回の教員研修会を計画しました（第1回～第3回）。加えて、昨年度からニーズがあった 1)アクティブ・ラーニング、2)ICTやAIを取り入れた新たな教育手法、3)授業デザインを考えることをテーマとする研修会（第4回）を、本年度4月から法的義務となった合理的配慮の提供に関して、合理的配慮申請制度を見直すための研修会も併せて企画しました（第5回）。

令和6（2024）年度 第1回薬学部教員研修会

テーマ：「薬学部コンピテンシー見直しについて」

日時：令和6（2024）年4月30日（火）16：30～18：00

場所：東講義棟 4-C 実習室

講師：奈良場博昭 岩手医科大学薬学部教務委員長

出席者：薬学部教員 33名

現在、2年次以上の学生は薬学部卒業時コンピテンシーとして6つの能力（コンピテンス）が具体的な達成目標として設定されていますが、本年度入学者から改訂薬学教育モデル・コア・カリキュラムになり、それに伴い8つの能力（コンピテンス）（案）が示されました。（令和5年度 第23回薬学部定例教授会）今回は、改訂されたディプロマ・ポリシーに基づき、改訂コンピテンシー（案）並びにコンピテンス評価基準（案）の見直しを教員全体で行いました。

令和6（2024）年度 第2回薬学部教員研修会

テーマ：「薬学部コンピテンシー見直しについて」

日時：令和6（2024）年5月29日（水）16：30～18：00

場所：東講義棟 4-C 実習室

講師：奈良場博昭 岩手医科大学薬学部教務委員長

出席者：薬学部教員 33名

第1回で作成したコンピテンス（案）とコンピテンシー（案）とディプロマ・ポリシーの関係性を見直しを行いました。コンピテンシー毎にグループワークで見直しを行い全体で情報共有しました。

令和6（2024）年度 第3回薬学部教員研修会

テーマ：「薬学部コンピテンシー見直しについて」

日時：令和6（2024）年6月26日（水）16：30～18：00

場所：東講義棟 4-C 実習室

講師：奈良場博昭 岩手医科大学薬学部教務委員長

出席者：薬学部教員 33名

第2回で作業した内容のうち、他のコンピテンシーとの関係性や評価の基準のレベル設定の整合性を見直しを行いました。

令和6（2024）年度 第4回薬学部教員研修会

テーマ：「シミュレーションを活用した授業のデザイン」

日時：令和6（2024）年7月23日（火）16：30～18：00

場所：西講義棟 1-D 講義室

講師：万代 康弘 先生（東京慈恵会医科大学 救急医学講座 准教授）

出席者：薬学部教員 33名、他学部・教養教育教員 9名

ICTを活用したアクティブ・ラーニングなど多様なシミュレーション教育方法が開発されています。また、大学のみならず医療現場においても学習者のパフォーマンス改善にもシミュレーション教育が導入されています。この教育法の特徴として特に医療分野においては、身体的精神的安全を確保しながら、臨床的な教育を行うことができるため、シミュレーション教育の活用が増えています。今回は、医学教育や薬学教育で実際に行われているシミュレーション教育方法について学びました。

令和6（2024）年度 第5回薬学部教員研修会

テーマ：障害を抱える学生に我々はどうのように配慮できるか？

～学生たちの学びの場を守るために～

日時：令和6（2024）年12月19日（木）13:00-15:00

場所：東講義棟 4-C 実習室

講師：高橋 寛 教育研修部会部会長

大橋 綾子 教育研修部会副部会長

氏家 真梨子 健康管理センター臨床心理士

出席者：薬学部教員 33名、教養教育センター・事務局 11名

本年度から私立大学等を含む全ての大学等において、合理的配慮の提供が法的義務となりました。しかしながら、この制度は、学生からの申請から始まる制度であり、学生が学習困難を自覚していない場合、機能しづらい制度であります。ところが全国的に精神障害や発達障害を持つ学生が増えてきています。また、発達障害の学生ならではの課題や医療系学部ならではの課題もあります。今回は、本学が過去に経験した学生像をモデルとしたケーススタディにより、障害のある学生が遭遇する状況を想像し、それに対して教員がどのような支援や配慮ができるかを自由に話し合いました。

今年度は研修会を5回行い、内容も多彩となりました。本年度の研修会はいずれも、内容が教育現場と関係性が強いものであり、特にコンピテンス等の見直し作業では回数を重ねる毎に気づきの機会も多く、作業時間が短い割に本学のカリキュラム編成に参考となる内容が多くありました。

シミュレーション教育に関しては、概念はわかっているけれども、それを具体的に授業としてどこに導入すればよいかわからなかった。シミュレーターのような特別な機器や設備を使わなくても良いということがわかり、模擬患者さんなども使うこともシミュレーション教育であることが理解できた。というご意見もありました。

合理的配慮申請に関しては、予想に反して好評でありました。従来は、教員の個人対応で行ってきましたが、今後は大学として制度のもとに対応が行なわれるため、逆に合理的配慮申請がない状態では学生への対応が難しいなど複雑な問題も見えてきたようです。また、障害を抱える過去の学生の事例を共有でき、大変良かったという声が多くありました。

本年度も写真撮影や Zoom の設定など薬学部教務課事務の協力があり研修会を開催することができ、御礼を申し上げます。本年度の研修会報告書には、5回の研修会の内容が記載され、学部の教育環境を考える貴重な報告書になりました。今年度も、アンケートでいただいた貴重なご意見やご指摘を次年度以降の教員研修に活かして参りたいと思います。

令和6年度 薬学部教務委員会・教育研修部会委員

○高橋寛、大橋綾子、阪本泰光（名簿順、○部会長）

⑤ 出張講義・オープンキャンパス等

1) 高校へ出張講義等

日時	場所	出張者	テーマ
6月4日 8月1日 8月23日 9月10日 9月12日 12月2日 12月17日 12月20日 令和7年 1月16日 2月22日 3月10日 3月11日 3月12日	さいたま市立大宮北高校	阪本泰光 (構造生物薬学分野)	「大気曝露下でのタンパク質 X 線回折測定」 SSH 探究活動
6月8日	秋田県総合保健センター	奈良場 博昭 (分子細胞薬理学分野) 那谷 耕司 (臨床医化学分野)	秋田県薬剤師会主催 「薬学部進学説明会」
6月22日	國學院大學栃木高校	西谷 直之 (情報薬科学分野)	自然から得られる薬 ～天然物医薬品～
9月28日	岩手県立花巻北高校 (岩手医科大学矢巾キャンパス)	阪本泰光 (構造生物薬学分野)	「科学の甲子園」 対策実験・演習
10月12日 11月15日 12月8日	さいたま市立大宮北高校 (高エネルギー加速器研究機構放射光施設)	野中孝昌 阪本泰光 (構造生物薬学分野)	「大気曝露下でのタンパク質 X 線回折測定実験」 岩手医大-KEK-SSH 探究活動
12月23日 12月24日	岩手県立花巻北高校	田浦太志 (天然物化学分野) 藤原俊朗 (分子細胞薬理学分野) 氏家悠貴 (情報薬科学分野) 野中孝昌 阪本泰光 (構造生物薬学分野)	令和6年度 学びの祭典(冬) 2年生 全クラス 生薬と漢方薬について AI を用いた医療への応用 IoT プログラミング

令和7年 2月3日	さいたま市立大宮北高校 (RaiBoC 1ホール：市民 会館おおみや)	阪本泰光 (構造生物薬学分野)	スーパーサイエンスハイ スクール成果報告会、審査
10月16日 10月22日 令和7年 3月1日	花巻北高校	阪本泰光 (構造生物薬学分野)	総合的な探求の時間 (H× ACT) における、テーマ設 定、実験手法の助言 (宇宙 関係のテーマについて)

2) オープンキャンパス

実施日：令和6年7月27日、28日

場 所：岩手医科大学矢巾キャンパス

実施項目	担当者	内容
統括	那谷 耕司 (臨床医化学分野)	企画・運営
学部・入試紹介	河野 富一 (創薬有機化学分野)	岩手医科大学薬学部の紹介
卒業生・在校生 トーク	氏家 悠貴 (情報薬科学分野) 米澤 穂波 (衛生化学分野)	岩手医科大学薬学部卒の教員 と在校生のトーク
体験学習	松浦 誠 (地域医療薬学分野) 朝賀 純一 (臨床薬剤学分野) 高橋 寛 (地域医療薬学分野) 杉山 晶規 (衛生化学分野) 白石 博久 (薬学教育学分野) 藤本 康之 (分析化学分野) 辻原 哲也 (創薬有機化学分野) 杉山 育美 (創剤学分野) 寺島 潤 (薬物代謝動態学分野) 高橋 宏彰 (臨床薬剤学分野) 高橋 巖 (分子細胞薬理学分野) 手塚 優 (薬物治療学分野) 佐京 智子 (情報薬科学分野) 稲垣 祥 (創薬有機化学分野) 浅野 孝 (天然物化学分野) 錦織 健児 (生体防御学分野)	調剤体験
薬用植物園見学	田浦 太志 (天然物化学分野) 阪本 泰光 (構造生物薬学分野) 大橋 一晶 (臨床医化学分野)	薬用植物の説明 薬研体験
個別相談	中西 真弓 (機能生化学分野) 西谷 直之 (情報薬科学分野) 野中 孝昌 (構造生物薬学分野) 奈良場 博昭 (分子細胞薬理学分野) 大橋 綾子 (生体防御学分野) 幅野 渉 (薬物代謝動態学分野) 那谷 耕司 (臨床医化学分野)	希望者を対象とした個別相談
卒業研究展示	那谷 耕司 (臨床医化学分野)	ポスター展示

3) いわてまるごと科学・情報館

実施日：令和6年11月30日

場 所：アイーナ

実施項目	担当者	演題・内容
体験コーナー	那谷 耕司（臨床医化学分野）	からだの動きを測ってみよう！ ・血圧測定 ・酸素飽和度測定 ・心電図計測 ・心音聴診

4) 医療職を志す中・高生の集い

実施日：令和6年11月17日

主 催：岩手医科大学地域医療多職種連携推進学講座（鹿角地域）・鹿角市・小坂町

場 所：鹿角市文化の杜交流館 コモッセ

実施項目	担当者	内容
中・高生と医・ 歯・薬・看護学 部学生との交流	那谷 耕司（臨床医化学分野）	学部学生からのプレゼンテーションと中・高生からの質問への対応

5) 花巻東高等学校スポーツコース探究活動

実施日：令和6年6月27日

主 催：花巻東高等学校スポーツコース

場 所：花巻市総合体育館アネックス

実施項目	担当者	内容
アンチ・ドーピングに関する講義	杉山 育美（創剤学分野）	スポーツに関わる各業界より講師を招聘し、少人数単位での講義を実施。適宜質問に対応 スポーツコース1学年および2学年の計300名が対象

⑥ ひらめき☆ときめきサイエンス ～ようこそ大学の研究室へ～

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金、科学研究費補助金）による研究成果の社会還元・普及事業の一環として、一般の高校生を対象とした体験学習イベントを実施した（独立行政法人 日本学術振興会からの委託事業）。2024年度は、「臨床研究をやってみよう！臨床での疑問点を解決して患者さんの副作用軽減に繋げよう！」（課題番号：24HT0026）と題したプログラムが採択され、臨床研究を含むプログラムに興味をもつ県内外の高校生 16 名を対象に 8 月 3 日（土）矢巾キャンパスにて薬学研究に関する体験型学習・実習を行った。プログラムは、薬学部教員 6 名で実施し、薬学部生 10 名がサポートした。

本プログラムでは、臨床現場においてどのような問題点や疑問点があり、その課題を解決するために行う臨床研究について知ってもらう。さらに、臨床研究により明らかとなったことがどのようにして患者さんの利益に繋がるのかを学んでもらうことを目的とした。

<実施の様子>

講義①：「抗がん剤によって起こる皮膚障害」

抗がん剤によって引き起こされる皮膚障害が重篤化して本来継続すべき治療が中止となる患者がいること、そして、そのような患者を予測して治療の中止を回避できないかという臨床的な疑問が臨床研究を開始するきっかけとなった経緯を伝えた。実習①を行う上で必要となる予備的な知識についても説明した。

実習①：「皮膚障害が起こりやすい患者さんを予想してみよう！」

架空のデータを用いて皮膚障害の重篤化に関わる要因を解析（カイ二乗検定）し、どの要因が皮膚障害の重篤化と関連があるのか考えてもらった。さらに、その重篤化に関わる要因を持つ患者に対してどのような対策をすることができるのかを班で検討してもらった。

講義②：「皮膚バリア機能」

経皮水分蒸散量がなぜ皮膚バリア機能の指標となるのかについて説明した。また、皮膚障害の重篤化を予測するために、経皮水分蒸散量等の皮膚状態を測定する臨床研究を行っていることについても伝えた。

実習②：「皮膚バリア機能を測定してみよう！」

皮膚計測機器を用いて経皮水分蒸散量を測定した。さらに、軟膏の基剤として使用されているワセリンを塗布し、経皮水分蒸散量の変化について観察した。また、過去の臨床研究で得られた結果を提示し、どのような皮膚障害対策が可能かどうかを班で検討してもらった。

講義③：「軟膏剤などの皮膚障害対策」

皮膚障害対策としてどのような薬が使用されているのかを説明し、実際に臨床現場で処方される副作用対策薬（ヒルドイド[®]□ソフト軟膏、メサデルム[®]□軟膏、ロコイド[®]□軟膏、ミノマイシン[®]□カプセル）の実物をみてもらった。また、軟膏剤使用量の目安や塗る順番について班で考えてもらった。

実習③：「軟膏剤の調剤体験をしてみよう！」

処方箋や薬袋、軟膏調剤の手順について説明し、軟膏剤の混合を体験してもらった。



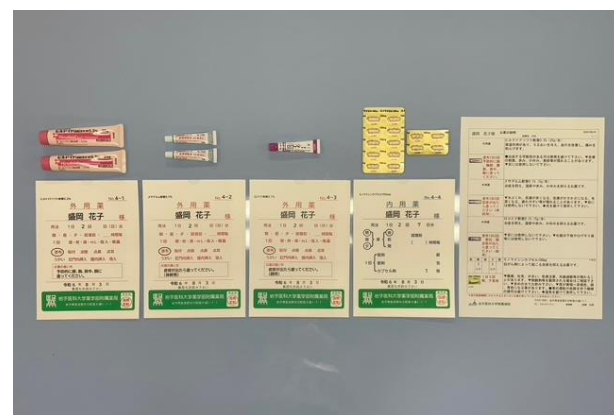
実習①（皮膚障害が起こりやすい患者さんの予測）



実習②（皮膚バリア機能の測定）



クッキータイム（教員、大学生との懇談）



皮膚障害対策薬



実習③（軟膏剤の調剤体験）



写真撮影

プログラム終了後、参加者にアンケートを実施した結果、プログラムのおもしろさ、プログラムわかりやすさ、科学（学問）への興味について否定的な回答はなかった。そのため、臨床研究を含む本プログラムへの興味が高まり、難易度も適切であったと思われた。本プログラムは臨床研究という特殊な領域であったが、今回の体験がきっかけで将来、研究者あるいは医療従事者として活躍してもらえればと思う。

臨床研究をやってみよう！臨床での疑問点を解決して患者さんの副作用軽減に繋げよう！

日 時：令和 6 年 8 月 3 日（土）9:30～16:10

実施代表者：高橋宏彰

実施協力者：教員 5 名（氏家悠貴、佐京智子、朝賀純一、工藤賢三、那谷耕司）、
学部学生 10 名（第 5 学年）

参 加 者：高校生 16 名、高校引率教員 1 名、保護者 5 名

事務担当者：研究助成課

⑦模擬患者(SP)養成にかかる広報活動および講習会

OSCE 委員会 SP 養成担当 奈良場 博昭

本年度も昨年度と同様に、模擬患者（SP）養成活動は OSCE 委員会内の SP 担当で運営されることとなった。担当は、杉山晶規（委員長）、奈良場、手塚（ST 責任者）の 3 名である。SP 講習会は、9 月 28 日（土）および 10 月 19 日（土）に実施した。また、直前講習会は 11 月 17 日（日）に行われた。

第 1 回 SP 講習会プログラム

プログラム	内容	時間	形式	担当
受付(東 2C)	ネームプレート・資料を置いた 指定座席に誘導	12:30～13:00 (30 分)	個別	適宜
挨拶	薬学部長挨拶	13:00～13:02 (2 分)	全体	河野
はじめに	挨拶(OSCE 委員長)	13:02～13:05 (3 分)	全体	杉山
新規説明会	OSCE 及び SP について	13:05～13:45 (40 分)	全体	杉山
休憩		13:45～14:00 (15 分)		
シナリオ紹介	本日のシナリオの場面設定、 患者背景、注意点	14:00～14:15 (15 分)	全体	手塚
デモ	講習会の内容に関連する模 範演技	14:15～14:25 (10 分)	全体	手塚、奈良場
今日の予定	今日の予定、チューター・薬 剤師役の紹介	14:25～14:30 (5 分)	全体	杉山
SGL 教室への移動		適宜		
自己紹介	グループ毎に分かれて自己紹 介(参加動機など)	14:40～14:45 (5 分)	グルー プ	杉山 手塚 奈良場
シナリオ理解	シナリオの確認	14:45～14:50 (5 分)	個別	
ロールプレイ (作戦タイム)	2 人で組んでロールプレイ	14:50～15:05 (15 分)	2 人組	
ロールプレイ	薬剤師役に対してロールプレ イ及びフィードバック	15:05～15:15(10 分)	グルー プ	
ロビーへの移動		適宜		
まとめ	今後の予定、アンケート記入、 資料の回収	15:15～15:30 (15 分)	全体	杉山

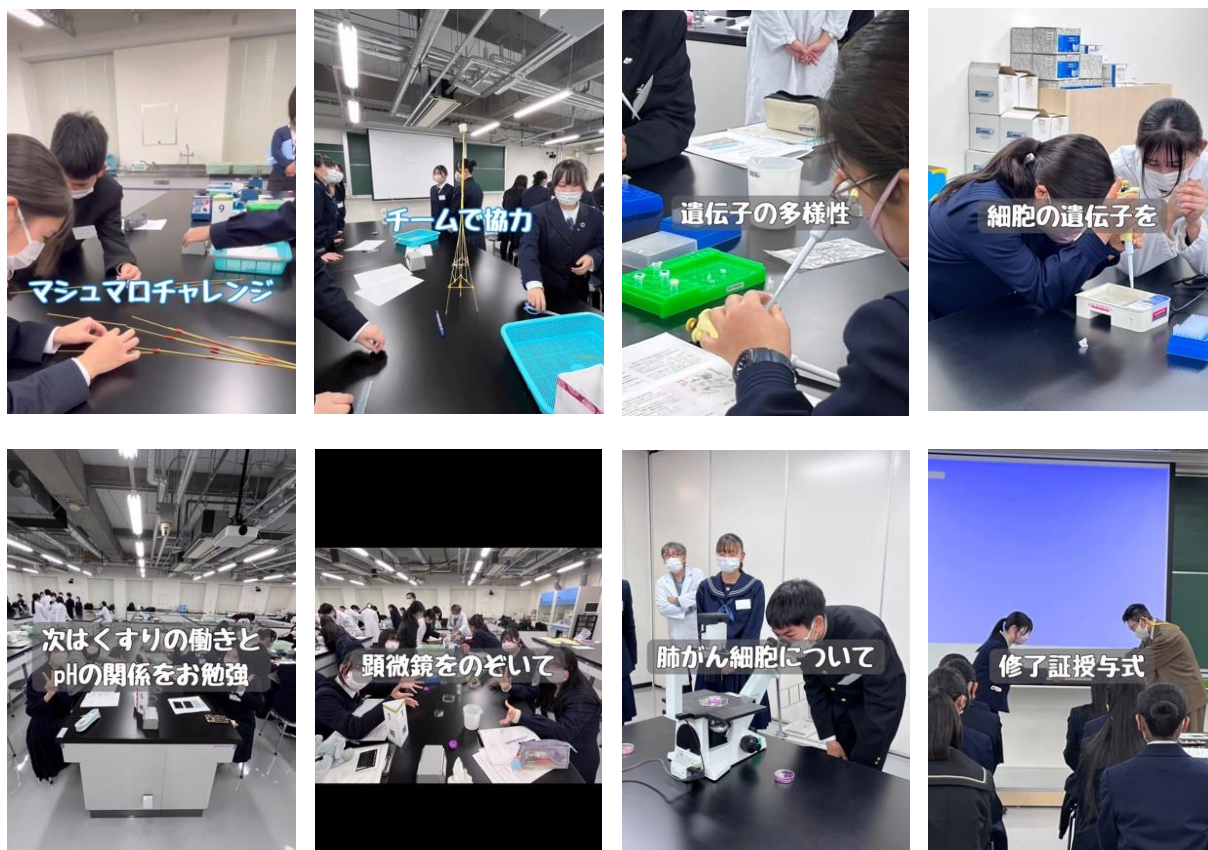
第2回 SP 講習会プログラム

プログラム	内容	時間	形式	担当
受付(東 2C)	ネームプレート・資料を置いた 指定座席に誘導	12:30～13:00 (30 分)	個別	適宜
はじめに	挨拶(OSCE 委員長)	13:00～13:02 (2 分)	全体	杉山
挨拶	薬学部長挨拶	13:02～13:04 (2 分)	全体	河野
シナリオ紹介	本日のシナリオの場面設定、 患者背景、注意点	13:04～13:20 (16 分)	全体	杉山
デモ	講習会の内容に関連する模 範演技	13:20～13:30 (10 分)	全体	手塚、奈良 場
今日の予定	今日の予定、チューターの紹 介	13:30～13:35(5 分)	全体	杉山
SGL 教室への移動		適宜		
自己紹介	グループ毎に分かれて自己紹 介(参加動機など)	13:45～13:50 (5 分)	グルー プ	杉山 手塚 奈良場
シナリオ理解	シナリオの確認	13:50～13:55 (5 分)	個別	
ロールプレイ (作戦タイム)	2 人で組んでロールプレイ	13:55～14:10 (15 分)	2 人組	
ロールプレイ	組みを入れ替えてロールプレ イ及びフィードバック	14:10～14:20(10 分)	グルー プ	
広い SGL への移動		適宜		
まとめ	今後の予定、アンケート記入、 資料の回収	14:20～14:30 (15 分)	全体	杉山

⑧ 令和6年度高大連携「ウインター・セッション」

オーガナイザー 幅野 渉

12月25日(水)、26日(木)の2日間に渡り、令和6年度高大連携事業「ウインター・セッション」を開催した。薬学部では、岩手県内の全域から38名の高校生(1,2年生)が参加した。本年度は「はたらく薬に違いが現れるのはなぜ？」をテーマに掲げ、薬の「かたち」や「動き」に焦点をあてて講義と実習を行った(次頁参照)。薬のはたらき方に違いが現れることを実験を通じて理解を深め、受講生が薬学の世界に少しでも興味を抱いてくれることを期待している。



(写真) 薬学部 HP での情報発信より抜粋

令和6年度高大連携「ウインター・セッション」薬学部実施概要

学部プログラム名:	「はたらく薬」に違いが現れるのはなぜ？
プログラム内容	マンガ「はたらく細胞」では、体内の様々な細胞が協力してはたらく様子がダイナミックに描かれています。病気を治すために投与された薬も、全身の血液中を流れる間に標的の細胞にたどり着いてはたらきます。薬の「かたち」や「動き」に焦点をあて、薬のはたらき方に違いが現れることを講義と実習を通じて体験し考えましょう。
参加人数	38 名

第1日目:12/25(水) (矢巾 C)	矢巾キャンパス 薬学部
受付 13:00~13:30	矢巾キャンパス入口
開講式 13:30~13:50	学長挨拶 大堀記念講堂
講演 13:50~14:30	全学部共通講義(学長講演) 大堀記念講堂
第1 講義 14:45~16:15	テーマ:薬学を学ぼう(講義・アイスブレイキング) 担当者:奈良場博昭、協力教員:高橋寛、田浦太志、高橋宏彰 場 所:東 4C 実習室

第2日目:12/26(木) (矢巾 C 又は内丸 C)	矢巾キャンパス又は内丸キャンパス 薬学部
第2 講義 9:00~10:30	テーマ:薬の投与と体内での動きを知る(講義・実習) 担当者:幅野渉、協力教員:辻原哲也、稲垣祥、錦織健児 場 所:東 4C 実習室
第3 講義 10:40~12:10	テーマ:薬のはたらきを制御する「かたち」と「〇〇」(講義・実習) 担当者:杉山育美、協力教員:辻原哲也、稲垣祥、錦織健児 場 所:東 4C 実習室
昼食 12:10~13:00	
第4 講義 13:00~14:30	テーマ:薬のはたらきを「代謝」から考える(実習) 担当者:幅野渉、協力教員:杉山晶規、藤本康之、高橋巖 場 所:東 4C 実習室
第5 講義 14:40~16:10	テーマ:薬学研究に使われる最新の細胞(講義・実習) 担当者:寺島潤、協力教員:杉山晶規、藤本康之、高橋巖 場 所:東 4C 実習室
閉講式 16:15~16:30	内容:修了証書授与、挨拶 担当者:奈良場博昭、那谷耕司(撮影) 場 所:東 4C 実習室

協力学生:大学院生2名、5年生 4 名、4年生 3 名

⑨ 卒後研修

卒後研修部会 西谷 直之

教育・研究を通し、薬学の進歩と地域医療の発展に貢献する人材を育成することを、本学部の目標としている。進歩・発展の著しい医療業界で活躍する薬剤師など薬事関連従事者にとって、日々の自己研鑽は欠かせない。卒後研修部会は定期的に卒後研修講座を開講し、薬事関連従事者の生涯教育の機会を提供することを使命としている。卒後研修講座は、本学部の卒業生や近隣地域に限らず全国の薬事関連従事者を対象にしており、社会に開かれた薬学部としての役割も果している。卒後研修講座は、学内委員と卒業生により構成される卒後研修部会と圭陵会薬学部同窓会局との共催で実施している。

今年度は、年度末で定年を迎えられた病態薬理学講座臨床医化学分野 教授の那谷耕司 先生の最終講義を卒業生と共有する目的で、第 19 回卒後研修講座として拡大版・最終講義を開催した。また、同講座では、卒業生に対して、2023 年度より本学部に着任されました田浦太志 先生の紹介を兼ねてご講演頂いた。那谷先生のご講演は、全学で開催される最終講義とは別に、薬学部で独自に行った拡大版・最終講義である。全学の最終講義よりも講演時間を大幅に延長し、演題「膵 β 細胞の機能と増殖 - cyclic ADP-ribose と Reg family タンパク質 -」について 60 分間ご講演頂いた。ご出身の富山医科薬科大学時代から前任地である東北大学を含め、長年にわたる膵臓 β 細胞の機能の分子レベルでのご研究についてご紹介頂いた。また、ご自身が研究者を志した背景などにも触れて頂き、若い卒業生にとっては新鮮な内容もあったと思われる。那谷先生のご講演の前に、2023 年度より薬科学講座 天然物化学分野の教授に着任された田浦先生に演題「カンナビノイド関連化合物の生合成研究」について 60 分間ご講演頂いた。アサ（大麻草）に含まれる生理活性物質として広く知られるカンナビノイドの生合成や利用価値などについてお話しいただいた。また、田浦先生は、本学部の附属薬用植物園の園長もお勤めで、同園や関連イベント、それらの SNS についてのご紹介も頂いた。

「拡大版・最終講義」は、矢巾キャンパスでの現地開催に加えてオンラインでライブ配信した。遠隔地の多くの同窓生の皆様にもオンラインでご参加いただき、現地とオンライン合計で 30 名の方々にご参加いただいた。

本年度の研修講座の詳細は以下に示す。

岩手医科大学薬学部 -第19回卒後研修講座-

日時 2025年3月8日（土）14:00～16:30
会場 岩手医科大学矢巾キャンパス **西2-A講義室**
Web (Zoom) にて配信予定
主催 圭陵会薬学部同窓会局、岩手医科大学薬学部卒後研修部会
共催 岩手医科大学薬学部研究推進委員会
対象 岩手医科大学薬学部卒業生・在学生、他大学薬学部卒業生
参加費 無料
単位 なし

<プログラム>

14:00～14:10 開会の挨拶

14:10～15:10 講演1

「カンナビノイド関連化合物の生合成研究」

岩手医科大学 薬学部 薬科学講座 天然物化学分野
教授 田浦 太志 先生

15:20～16:20 講演2（最終講義）

「 β 細胞の機能と増殖

– cyclic ADP-riboseとReg familyタンパク質–

岩手医科大学 薬学部 病態薬理学講座 臨床医化学分野
教授 那谷 耕司 先生

16:20～16:30 閉会の挨拶

申し込み方法

下記URL又はQRコードより参加登録してください。
登録用URL: <https://forms.gle/kTAajDPRUet2TvG17>
Zoomで参加する方には、当日までに参加用URL及びパスワードをお知らせします。
問合わせ先: 圭陵会薬学部同窓会局
keiryokai.yakugaku@gmail.com (担当: 岡沼)

参加申込用QRコード



⑩プレスリリース、記事等

岩手日報2024年5月18日付

岩手日報社の許諾を得て転載しています

被災地で実感 薬剤師の役割

岩手医大生、現地訪問

大
槌

岩手医大（小笠原邦昭学長）の薬学部2年生10人は15日、東日本大震災で被災した大槌町の薬局を訪れ、地域医療を守る薬剤師の心得を学んだ。

同町小槌のつくし薬局本店では藤田佳克管理薬剤師（41）が店内を案内。ケアマネジャーやヘルパーらと連携した患者対応を紹介し、「薬局だけで患者の実態を理解するのは困難。多職種とコミュニケーションを取り、互いを尊重しながら仕事をしていくことが大切だ」と伝えた。

津波で町内にあった店舗が全壊した同薬局。この日は、被災直後



メモを取りながら、藤田佳克さん（左）の話に耳を傾ける学生

に避難所で薬の処方にあたった薬剤師からも体験談を聞いた。

藤根佳奈さん（20）は「人手も薬も限られた当時、『薬剤師としての知識が試された』という話が印象

に残った。今勉強していることが将来生かされるのだと感じた」と、やる気を高めた。

14、16日には別のグループが宮古、大船渡、陸前高田市を訪れた。

薬学部白衣授与式が挙行されました

5月10日（金）、大堀記念講堂において令和6年度薬学部白衣授与式が挙行されました。この式は、「実務実習」にて臨床の場に第一歩を踏み出す5学年に白衣を授与し、医療に大きく貢献できる薬剤師を目指す心構えを新たにすることを目的に行われます。

式では、河野薬学部長の挨拶に始まり、畑澤博巳岩手県薬剤師会長、工藤賢三岩手県病院薬剤師会会長から期待の言葉が送られました。続いて代表学生に白衣と名札が授与されました。学生代表の伊藤陽菜さんは「高度で良質な医療の実践と地域そして社会への貢献を目指し、勉学に励み、本学の建学の精神である「誠の人間」を目指し、誠心誠意臨みます」と力強く決意表明し、それぞれの実習先に向かいました。



代表学生宣誓

マツキヨココカラ&カンパニー 奨学金授与式が挙行されました

11月11日（月）、東研究棟1階会議室において、マツキヨココカラ&カンパニーから本学薬学部学生への地域に貢献できる優秀な薬剤師を育成することを目的とした、奨学金授与式が挙行されました。

式では、薬学部4年生水野月花さん、横山愛理さん、5学年大森聖也さんに対し奨学金が授与され、マツキヨココカラ&カンパニーの小部真吾常務取締役と同社に入社した本学部卒業生で奨学金受給者であった高橋健太さんから激励のことばが送られました。学生からは、奨学金受給に対する感謝の気持ちと奨学生としての決意が述べられました。



左から：河野薬学部長、水野さん、横山さん、大森さん、
初鹿妙子人材開発部長

臨床薬学講座地域医療薬学分野に配属している薬学部6年生の長澤 茉依さんが 日本薬学会で優秀発表賞を受賞しました

薬学部地域医療薬学分野所属の6年生長澤 茉依さんが日本薬学会第144年会において、優秀発表賞(ポスターの部)を受賞しました。北海道・東北地域の私立薬学部生では唯一の受賞です。研究は、ChatGPTを用いて作成した医薬品情報とくすりのしおりの内容を比較し、ChatGPTが生成する情報の精度に焦点を当てました。この研究は、1,268演題の中から選ばれたものであり、その成果は大きな注目を集めています。

(文責：臨床薬学講座地域医療薬学分野 特任教授 松浦 誠)



薬学部6年生の小宅 真由 さんが 日本薬理学会北部会においてポスター優秀発表賞を受賞しました

この度、薬学部6年生の小宅真由さんが第75回日本薬理学会北部会にて「食道がん高リスク因子となる口腔内レンサ球菌*Streptococcus anginosus*におけるプロトン輸送ATPaseの役割」を発表し、ポスター優秀発表賞を受賞しました。

*S. anginosus*は、口腔内レンサ球菌の一種で、食道がんの高リスク因子であることが近年明らかにされ注目されています。本研究では、同菌のプロトン輸送ATPase遺伝子欠損株を作製し、F型酵素は耐酸性に、A型酵素は塩基性・高塩濃度条件での増殖に重要であることを明らかにしました。これらの成果は、*S. anginosus*の感染によって引き起こされる疾患の予防・治療薬の開発につながると考えられます。

小宅さんは、5年生から本研究に携わり、薬局・病院実習も行いながら毎日精力的に実験に取り組み、本研究成果を得ました。今後は進学し、将来は研究者になることを目指しており、今後のますますの活躍を期待しています。

(文責：生物薬学講座機能生化学分野 准教授 関谷 瑞樹)



関谷准教授、小宅さん、中西教授

Ⅱ.各分野の教育業績

薬科学講座 創薬有機化学分野

Department of Pharmaceutical Sciences
Division of Medicinal and Organic Chemistry

教 授 河野 富一 (かわの とみかず)

平成 3 年 大阪大学理学部卒業

平成 8 年 大阪大学大学院理学研究科有機化学専攻博士後期課程修了、博士 (理学)

前職：岩手医科大学薬学部有機合成化学講座准教授

准教授 辻原 哲也 (つじはら てつや)

平成 15 年 立命館大学理工学部卒業

平成 19 年 大阪大学大学院理学研究科化学専攻博士後期課程中途退学

平成 20 年 博士 (理学)

前職：岩手医科大学薬学部薬科学講座創薬有機化学分野助教

助 教 稲垣 祥 (いながき しょう)

平成 18 年 福井大学工学部卒業

平成 20 年 福井大学大学院工学研究科生物応用化学専攻博士前期課程修了

平成 30 年 博士 (工学)

◆◆ 講座の自己点検・評価 ◆◆

2024 年度は河野教授、辻原准教授、稲垣助教の分野スタッフ 3 名体制で学生教育に取り組んだ。特に、分野配属の 4 学年 4 名、5 学年 7 名、6 学年 6 名については、必修科目である『卒業研究 1』および『卒業研究 2』を通じて、研究能力、コミュニケーション能力、および自己研鑽能力の醸成を図った。講義関連では、学生により深い理解を促せるように演習を織り交ぜ、丁寧に講義を進めた。講義・実習科目として、1 学年『薬学入門』や『はじめて学ぶ大学の有機化学』、および『薬化学の基礎』、2 学年『薬学実践英語 1』や『有機薬化学 1』、『有機薬化学 2』、『基礎演習 1』、および『有機スペクトル解析』、3 学年『有機薬化学 3』、『有機生体制御化学』、『基礎演習 2、3』、および実習科目である『薬学実習 2』、4 学年『実践医薬化学』と『総合薬物治療演習』、5 学年『薬学特論』、6 学年『総合講義』と『総合演習』を担当した。今年度開講の講義の多くを河野が担当し、一部の講義を辻原、稲垣が担当した。実習科目についてはすべての教員が担当した。河野は、薬学部長、学内および学部内の多岐にわたる委員会活動や教育活動に関わる委員長や議長、委員、責任者として活動した (学内委員等の項参照)。また、学外関連事項として、第 109 回薬剤師国家試験問題検討委員会【物理・化学・生物】部会に出席した。さらに、第 81 回東北地区認定実務実習指導薬剤師養成ワーク

ショップのディレクターも務めた。辻原は、薬学部教務委員会部会員や教育活動に関わる担当者や責任者、指導教員を務めた（学内委員等の項参照）。また、学外関連事項として第109回薬剤師国家試験問題検討委員会【物理・化学・生物】部会および第19回有機化学系教科担当教員会議に出席し、令和6年度高大連携事業ウィンターセッションでは協力教員を務めた。稲垣は、薬学部教務委員会 CBT 実施委員会委員や教育活動に関わる担当者や指導教員を務めた（学内委員等の項参照）。また、学外関連事項として、令和6年度高大連携事業ウィンターセッションでは協力教員を務めた。なお、各教員が1学年『早期体験学習』と4学年『実務基礎実習』の指導教員、および5学年『実務実習（薬局）』と『実務実習（病院）』の担当教員として教育活動に関わった。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

2024年度に本分野が担当した主な講義・実習について、以下にその詳細を述べる。

『薬学入門』（1年次通年）担当者：河野（1コマ）

「命と向き合う医療人としての使命」、「社会へ貢献するために必要な礎」を提示し、生涯にわたって向上心と研究心を持ち続けることの重要性を自覚させることに重点をおいた薬学への入門科目である。ここでは、薬学部新生に対して、薬学部6年間の学び、1年生で学んで欲しいことのほか、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーについて説明した。

『はじめて学ぶ大学の有機化学』（1年次前期）担当者：河野（1コマ）、稲垣（13コマ）

高校有機化学と大学有機化学との橋渡し教育に力点を置いた講義である。本講義では、大学で初めて有機化学を学ぶ上で重要な基礎事項、特に有機分子の官能基の識別や立体構造、構造式の書き方（ルイス構造式、ケクレ構造式、骨格構造式、および共鳴構造式）について講義を行い、その理解を更に深めるために適宜演習を取り入れた。毎回の講義の理解度は確認問題により把握し、学生の疑問点については毎講義時に配布する確認問題の質問欄に記載することを促し、次回講義で学生全体にフィードバックした。また、確認問題で理解不足が懸念される内容については、改めて説明を追加するなど学生の疑問点を解消するように努めた。授業アンケート結果からこの質問の受付および全体へのフィードバックが有効に機能したことが伺えた。次年度はさらに効果的に演習を取り入れていく予定である（BestTeacher 表彰科目）。

『薬化学の基礎』（1年次後期）担当者：辻原（14コマ）

本講義では、有機化合物の性質や反応性、構造を理解するための原子や分子の構造および化学結合などの基本事項について講義を行った。毎回の講義の理解度は小テストにより確認し、学生の疑問点については質問を受け付け、次回の講義で学生全体に向けて解説した。小テストで理解不足が懸念される内容については、改めて演習の機会を設けるなど学生の疑問を解消するように努めた。また、適宜補講を行って講義内容の理解に遅れが生じないように配慮した（BestTeacher 表彰科目）。

『有機薬化学 1』(2 年次前期) 担当者：河野 (8 コマ)、稲垣 (6 コマ)

本講義では、アルケン、アルキンおよび芳香族化合物などの不飽和炭素-炭素結合を有する有機化合物の命名法、構造、性質および反応について講義を行った。毎回、講義内容に関する確認問題を配布し、講義内容の理解度を確認した。また、学生の疑問点に関しては、配布した問題用紙に用意してある質問欄に記載することを促し、学生の疑問点を抽出し、次回講義時に全体へのフィードバックを実施した。次年度以降もこの取り組みを継続していく予定である。

『薬学実践英語 1』(2 年次後期) 担当者：河野 (2 コマ)

本講義は、薬学研究に必要とされる実践的英語を身につけるために必要な科学英語の基礎的知識および技能を習得することを目的としている。今年度は、主に、薬局に OTC 薬を求めにきた外国人に対する薬の説明場面をシミュレートした講義を展開した。具体的には、薬の説明に最低限必要な英会話を確認し、発表練習する形式での運用を行った。

『有機薬化学 2』(2 年次後期) 担当者：河野 (13 コマ)

有機ハロゲン化合物、アルコール、フェノール、エーテル、エポキシド、アミンなどの重要な有機化合物の命名法、構造、性質、合成法および反応について講義を行った。毎回の講義の理解度はミニ演習で確認し、学生の疑問点については質問を受け付け、次の講義で学生全体に向けて解説した。ミニ演習で理解不足が懸念される内容については、改めて説明を追加するなど学生の疑問を解消するように努めた。今年度も適宜補講を行って講義内容の理解に遅れが生じないように配慮した。昨年度同様、各学生の意志で演習課題に取り組むように促した。この学生による自主的取り組みについての学生からの評価は高く、学習意欲向上にもつながった。

『有機スペクトル解析』(2 年次後期) 担当者：河野 (12 コマ)

医薬品成分のほとんどは有機化合物であり、その分子構造を明らかにすることは、化学的性質や生理作用を理解する上で極めて重要である。本講義では、有機化合物の構造解析に用いられる核磁気共鳴法や質量分析、赤外分光法、そして紫外可視分光法などの原理や測定法、そして得られるスペクトルデータの解析法を演習形式で学び、特に、核磁気共鳴測定法においては、最終的には、学生が化合物名から構造式の NMR スペクトルを予測できるようになることを目指した。今年度も講義に使用する全資料を初回講義時に配布し、この科目の全体像を提示したうえで、各コマの講義を実施した。事前に講義内容を知ること、昨年度以上にアウトプットの時間を取ることができ、学生には大変好評であった。この取り組みは次年度も継続する。『有機薬化学 2』と同様、宿題を出すことは一切せず、各学生の意志で演習課題に取り組むように促した。この学生による自主的取り組みについての学生からの評価は高く、学習意欲向上にもつながった。

『基礎演習 1』(2 年次後期) 担当者：河野 (1 コマ)、稲垣 (2 コマ)

本科目は、薬科学系・医療薬学系の科目について、2 学年前期で学んだ内容の要点をまとめ、振り返り学習を目的としている。具体的には、『有機薬化学 1』で学んだ知識の定着度を確認した。各コマで、問題演習に取り組んでもらい、学生自身に講義内容の定着度を確認してもらった。演習内容について、解説を行って講義時間内に学生の疑問を解消するように努めた。

『有機薬化学 3』(3 年次前期) 担当者：河野 (12 コマ)

炭素-ヘテロ原子二重結合をもつ有機化合物について講義した。2 学年時に履修している『有機薬化学 1』および『有機薬化学 2』の継続性を念頭に講義を実施した。昨年度同様、今年度も宿題を出すことは一切せず、各学生の意思で演習課題に取り組むように促した。その結果、予想通りであるが、自主的取り組みをした学生の最終成績は上位に固まり、反対に、取り組みを行わなかった学生は下位に固まった。理解が難しいと思われる單元については、講義の内容をコンパクトに纏めた講義ビデオを作成し、講義実施日までに視聴するようにした。このような取り組みは学生から大変高い評価を受けている。次年度以降もこの取り組みを継続していく予定である (BestTeacher 表彰科目)。

『基礎演習 2』(3 年次前期) 担当者：河野 (1 コマ)、辻原 (1 コマ)

本科目は、薬科学系・医療薬学系の科目について、2 学年後期で学んだ内容の要点をまとめ、振り返り学習を目的としている。具体的には、『有機薬化学 2』で学んだ知識の定着度を確認した。問題演習に取り組んでもらい、学生自身に講義内容の定着度を実感してもらった。演習内容について、解説を行って講義時間内に学生の疑問を解消するように努めた。

『有機生体制御化学』(3 年次後期) 担当者：辻原 (22 コマ)

講義前半は主に、医薬品と生体分子との相互作用について化学的な観点より説明した上で、プロドラッグ、ファーマコフォア、バイオアイソスターなど医薬品開発や薬効発現メカニズムの考察などにおいて必要不可欠な事柄を酵素や受容体、DNA、およびイオンチャネルに作用する医薬品について実例と共にそれぞれ解説した。後半は、医薬品に含まれる基本構造とその化学的性質に関する基本的知識について触れたのち、医薬品に含まれる主要な骨格の構築方法や官能基の変換について解説した。さらに、目的の化合物を如何にして合成するかを講義した。今年度より毎回の講義の理解度は小テストにより確認し、学生の疑問点については質問を受け付け、次回の講義で学生全体に向けて解説した。小テストで理解不足が懸念される内容については、改めて演習の機会を設けるなど学生の疑問を解消するように努めた。次年度は、学生がより学修しやすいよう講義内容の構成を見直す。具体的には、創薬化学の内容を先に学修し、その後に生体分子の構造と化学的性質、そして医薬品の作用と化学構造に関する内容を学修する。各トピックの理解度の確認は、中間テストおよび定期試験でそれぞれ行う予定である。

『基礎演習 3』(3 年次後期) 担当者：辻原 (1 コマ)

本科目は、薬科学系・医療薬学系の科目について、3 学年前期で学んだ内容の要点をまとめ、振り返り学習を目的としている。具体的には、『有機薬化学 3』で学んだ知識の定着度を確認した。問題演習に取り組んでもらい、学生自身に講義内容の定着度を実感してもらった。演習内容について、解説を行って講義時間内に学生の疑問を解消するように努めた。

『薬学実習 2 (有機化学実習・天然物化学実習)』(3 年次前期) 担当者：分野全教員 (18 コマ)

今年度は、有機化学実習と天然物化学実習を合同で行った。実習項目は、「イントロダクション」、「薄層クロマトグラフィーによる化合物の分析」、「混合物中の成分の分離と精製」、「アスピリンの合成」、「グリニャール反応」、「生薬確認試験」、「オウバクからのベルベリンの単離と化学」、「NMR を用いる構造解析」、そして「薬草園見学」である。実習書通りに実験を行うだけではなく、フラスコの中でどのような反応が起こっているのか、講義で学んだ知識とのつながりを意識させるよう指導を行った。また、各分野の学部 4、5 学年生にティーチング・アシスタントとして本実習に参加してもらい、安全面に関して全体に目が行き届くようにした。学部生にとっては学生指導を経験する機会となるよう配慮した。

『実践医薬化学』(4 年次前期) 担当者：河野 (12 コマ)

今年度も例年同様、これまで学んできた有機薬化学の知識を疾患毎にスクラップ・アンド・ビルドし、医薬品を化学的な視点から学ぶ上で必要となる基本的知識について講義した。テーマとなる疾患を事前に学生に伝えて予習を促した上で講義を行った。講義範囲が広いため、学生には講義トピックを事前に通知し、そのトピックに関して事前にまとめたレポートを作成させ、その内容を moodle サイトを通じて電子データとして送信するように求めた。次年度以降もこの取り組みを継続していく予定である。

『総合薬物治療演習』(4 年次通年) 担当者：河野 (2 コマ)

今年度は、化学物質の基本的性質と反応および合成について整理し、演習を中心とした講義を実施した。また、演習課題については分野教員全員で作成した。次年度についても同様な形式で実施する予定である。

『卒業研究 1』(4 年次通年) 担当者：分野全教員

年度初期に分野で取り組んでいる研究テーマを紹介した後、実験に関わる安全教育を行った。その後、各指導教員のもとで最新の研究テーマに沿った英語文献の和訳に取り組みせ、その内容について発表会を行った。また、研究機器の使い方の講習を行い、実際に合成実験に取り組んだ。『卒業研究 1』を通して、基本的な実験手技(反応実施・後処理・精製・構造決定)を修得させるとともに特に実験が当初の目的通りに進まないときに、どうすれば目的に沿う結果が得られるようになるのかといった課題解決型の論理的思考力が向上するように指導を工夫した。

『実務実習（薬局）（病院）』（5 年次通年）担当者：分野全教員

実習施設（薬局・病院）で実習する所属学生の指導を担当した（II-IV 期 全 7 名 延べ 9 施設）。今年度も、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて昨年度と同様に初回訪問時や中期訪問は行わなかったものの、日報や週報から読み取れる学生の実習に対する取り組み方や態度について助言を行い、必要に応じて指導を行った。実習修了後には、学内の実務実習成果発表会に向けて発表スライドを作成させ、適宜必要な指導を行った。

『薬学特論（衛生・分析・動態）』（5 年次後期）担当者：河野（2 コマ）

5 年次の基礎学力の確認に力点を置いた講義である。事前に公開した関連分野のビデオを視聴した後で講義を受けるように指示し、当日は、アウトプットに重点をおいた講義を実施した。特に、広く浅くではなく、一つの領域のみについて重点的な問題演習を行った。学習範囲の負担が減ることで、より深くかつ主体的な学びの機会となった。ビデオ視聴の回数から考えると、視聴比率は 60%程度と思われ、この比率の向上が今後の課題である。

『総合演習』（6 年次前期）および『総合講義』（6 年次通年）担当者：河野（2 コマ、4 コマ）

今年度は、化学物質の基本的性質と反応やターゲット分子の合成、そして医薬品に含まれるコアとなる構造について、学生の理解が深まっていないと思われる部分について演習を交えて復習を行った。講義内容としては、これまでの 6 年間で学んできた内容の総まとめを行った。また、『総合講義』の定期試験にあたる総合試験の後には、フィードバック講義を行い、かつ、成績中下位者に対しては単元別の補講も実施した。

『卒業研究 2』（5・6 年次通年）担当者：分野全教員

本分野の卒業研究では、創薬や医療に資する有機分子の設計・化学合成を主な研究テーマとし、研究の立案・実施、そしてその評価を行い、他者とディスカッションすることで研究テーマに対する理解を深め、成果を論文としてまとめて発表することを目的としている。今年度は、5 学年 7 名に対しては各指導教員のもとで研究テーマを与えて実施した。各学生の卒業研究の進捗状況は指導教員が確認し、適宜ディスカッションを行った。最終的に研究成果を整理し、卒業論文としてまとめる準備を行った。また、論理的に考える力を養成する目的で、5 学年 7 名に対して頻出する薬剤についての重要項目や有機化学に関するトピックについて臨床薬剤学分野と合同で勉強会を年 9 回開催し、問題を考える上で必要となる基本的な知識やその使い方、関連する事柄を考えさせる機会を各学生に与えた。さらに、グループディスカッションでは、ディスカッションの運営方法や参加する一員としての役割を考えさせ、実践する機会となるように配慮した。6 学年 5 名の学生に対しては 5 年次に設定した研究を継続して実施し、研究成果を卒業論文としてまとめさせ、さらに学部卒業研究発表会に向けて発表用ポスターおよび発表原稿を作成させた。そして、発表練習会を通してプレゼンテーションスキルが向上するように指導した。

その他にも、1 学年『早期体験学習（研究室見学）』や『早期体験学習（模擬体験）』、3 学年『チーム医療リテラシー』、4 学年『実務基礎実習』、そして 6 学年『4 学部合同セミナー』などについて担当した。

◆◆ 社会貢献 ◆◆

所属学会及び委員等

河野 富一：日本薬学会、日本化学会、有機合成化学協会、日本癌学会、日本ケミカルバイオロジー学会、日本薬学会化学系薬学部会、日本薬学会医薬化学部会、日本がん分子標的治療学会、一般社団法人日本私立薬科大学協会薬剤師国家試験問題検討委員会【物理・化学・生物】部会 委員、一般社団法人薬学教育協会有機化学系教科担当教員会議 委員

辻原 哲也：日本薬学会、日本薬学会化学系薬学部会、日本化学会、有機合成化学協会、一般社団法人薬学教育協会有機化学系教科担当教員会議 委員、第 81 回東北地区認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ タスクフォース

稲垣 祥：日本薬学会、日本化学会、有機合成化学協会

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学内委員等

河野 富一：教学運営会議、入学試験センター、全学自己評価委員会、全学研究推進委員会、矢巾キャンパス危機管理委員会、医学部放射線障害予防委員会、圭陵会副会長、圭陵会学術振興会役員、全学環境保全委員会、バスケットボール部薬学部部長、生命科学技術研究センター運営委員会、有機溶媒管理ワーキンググループ

学部内委員等

河野 富一：薬学部長、薬学部広報・入試検討委員会、薬学部自己評価委員会（委員長）、薬学部倫理委員会、薬学部実務実習連絡会議（議長）、薬学研究科教務委員会、薬学部一般選抜試験 矢巾試験場会場責任者、クラス担任（3 学年）、薬学共用試験 CBT・OSCE 統括責任者、1 学年『早期体験学習』研究室見学担当者、高大連携事業 ウィンターセッション第 1 講義『薬学を学ぼう』担当者

辻原 哲也：薬学部教務委員会教育検証部会、薬学部教務委員会総合試験部会、薬学部研究推進委員会、薬学共用試験 OSCE 現状復帰係、1 学年『早期体験学習』模擬体験責任者・研究室見学担当者、3 学年『薬学実習 2』安全講習担当者、3 学年『チーム医療リテラシー』チューター、4 学年『実務基礎実習』指導教員・実務事前学習到達度試験評価者・臨床能力評価試験評価者、6 学年『4 学部合同セミナー』指導教員、高大連携事業 ウィンターセッション協力教員

稲垣 祥：薬学部教務委員会 CBT 実施委員会、薬学共用試験 OSCE 現状復帰係、1 学年『早期体験学習』模擬体験担当者・研究室見学担当者、4 学年『実務基礎実習』指導教員・実務事前学習到達度試験評価者・臨床能力評価試験評価者、6 学年『4 学部合同セミナー』指導教員、高大連携事業 ウィンターセッション協力教員

◆◆ その他の特記事項 ◆◆

河野 富一：2024 年度「学生による授業評価」において、『有機薬化学 3（炭素—ヘテロ原子多重結合の化学）』は高評価（薬学部第 1 位）が得られ、教員総会にて表彰された（2025 年 4 月 1 日）。

2024 年度「学生による授業評価」において、教養教育センター（1 学年）Best Teacher（薬学部第 1 位）として表彰された（2025 年 4 月 1 日）。

辻原 哲也：2024 年度「学生による授業評価」において、教養教育センター（1 学年）Best Teacher（薬学部第 3 位）として表彰された（2025 年 4 月 1 日）。

第 81 回東北地区認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップにおいて、タスクフォースを務めた（2024 年 9 月 22-23 日、盛岡）。

登録販売者試験を受験し、合格した（2024 年 10 月 1 日）。

稲垣 祥：2024 年度 SciFinder 利用講習会を企画・実施した（2024 年 9 月 6 日）。

2024 年度「学生による授業評価」において、教養教育センター（1 学年）Best Teacher（薬学部第 1 位）として表彰された（2025 年 4 月 1 日）。

薬科学講座 天然物化学分野

Department of Pharmaceutical Sciences

Division of Natural Product Sciences

教 授 田浦 太志（たうら ふとし）

平成 6 年 九州大学薬学部卒業

平成 9 年 九州大学大学院薬学研究科製薬化学専攻博士課程中途退学

平成 11 年 博士（薬学）九州大学

前職：富山大学学術研究部薬学・和漢系准教授

助 教 浅野 孝（あさの たかし）

平成 12 年 共立薬科大学薬学部卒業

平成 17 年 千葉大学大学院医学薬学府博士課程修了、博士（薬学）

前職：千葉大学大学院薬学研究院研究員

◆◆ 分野の自己点検・評価 ◆◆

令和 5 年 4 月に着任した田浦教授、および浅野助教のスタッフ 2 名体制で講義実習等を分担するとともに、分野配属となった 4～6 年生、計 8 名の卒業研究指導にあたった。

研究面では、植物が生産する薬効成分の生合成メカニズムを酵素および遺伝子のレベルで解明し、生合成酵素を活用した物質生産に展開する研究と、植物培養技術を活用したバイオテクノロジーによる二次代謝研究を主要なテーマに設定している。本年度 5、6 年生各 2 名の研究指導は昨年度より継続して主に浅野が担当し、4 年生 4 名については両教員が分担して指導することで、各自のテーマにて着実に卒業研究を進展させている。

教育面では、田浦は 3 年次「天然物化学 1（生薬と漢方薬）」、「天然物化学 2」を担当し、さらに 4 年次「総合薬物治療演習」、6 年次「総合演習」、歯学部 5 年次「和漢薬特別講義」などを分担した。また浅野は 2 年次「分析化学計算演習」、「基礎演習 1」、3 年次「基礎演習 2」、「基礎演習 3」、さらに 4 年次「実務基礎実習」、「実践生化学」を分担した。加えて 3 年次「薬学実習 2」では、分野として天然物化学実習を担当し、また、両教員とも 1 年次「早期体験学習」、6 年次「総合講義」を分担するなど、専門分野を中心に多様な科目に貢献している。

当研究室の教育活動では、天然物が多様な構造と生物活性を有する重要な化合物群であることを認識させ、医薬資源として如何に活用されるかなど、天然物化学を総合的に理解してもらうことを目指しているが、化学構造や生合成過程の複雑さから講義だけでは十分な理解を得られない場合もあり、実習・実験を通して化合物にふれることにより理解が深まることを期待している。また、薬用植物園の担当研究室として、学生が生きた植物に親しむことで生薬や天然物に対する興味関心を深める機会を増やしたいと考えている。

地域貢献等に関して、田浦は12月23日および24日に開催された花巻北高等学校「学びの祭典」に参加し、漢方薬に関する出前講義および実習を担当した。また、「薬用植物に親しむ会」と題する一般市民向けの講座を新たに立ち上げ、計6回にわたり講義実習を行うことで、薬用植物に関する知識の普及に努めた。加えて昨年度より継続の薬用植物園Instagramは年度内にフォロワー500人を数え、薬用植物の魅力を広く発信している。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

田浦が担当した3年前期「天然物化学1（生薬と漢方薬）」では、オリジナルの講義資料を用いて重要生薬とその含有成分の構造や薬効などについて概説するとともに、漢方の考え方や漢方処方への成り立ちなどについて説明した。生薬の解説では、薬効用途だけでなく漢方における役割（薬能）にも言及し、漢方薬の処方構成が理解しやすくなるよう配慮した。また3年後期「天然物化学2」では、天然物を化学構造別にまとめて重要事項を解説するとともに、香辛料、染料、食品、化粧品等に関わる解説も含めて、天然物に関する知識を深め、興味関心を高められるよう努めた。各講義資料や小テストはMoodleにアップロードし、必要に応じて学生が復習できるように配慮している。

浅野が担当した2年後期「分析化学計算演習」（2コマ）では、濃度計算と化学反応式の基本事項に関する演習を行った。また3年前期の天然物化学実習では、漢方配合生薬の鑑別、確認試験法、オウバクからベルベルリンの抽出と単離を行い、さらに薬用植物園見学を実施した。本実習は主に浅野が担当し、各項目を田浦がサポートした。

分野配属された4～6年生は、いずれも学業および実務実習等で時間的制約が大きいなか、研究にも可能な限り取り組んでおり、6年生の2名は新たな成果をもって学会発表に貢献し、また卒業研究を無事完了することができた。

◆◆ 社会貢献 ◆◆

所属学会及び委員等

田浦 太志：日本薬学会ファルマシアアドバイザー、日本生薬学会代議員、日本農芸化学会、日本植物バイオテクノロジー学会、薬学教育協議会生薬学・天然物化学教科担当委員会委員

浅野 孝：日本薬学会、日本生薬学会、日本植物バイオテクノロジー学会

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学内委員等

田浦 太志：薬用植物園園長、倫理審査委員会委員、華道部部长、東洋医学研究会部長

学部内委員等

田浦 太志：薬用植物園管理運営委員会委員長、薬学教育評価委員会委員、広報委員会委員

浅野 孝：薬用植物園管理運営委員会委員、OSCE委員会委員

薬科学講座 構造生物薬学分野

Department of Pharmaceutical Sciences

Division of Structural Biology

教 授 野中 孝昌（のなか たかまさ）

昭和 62 年 東京大学薬学部製薬化学科卒業

平成 元 年 東京大学大学院薬学系研究科製薬化学専攻修士課程修了

平成 4 年 長岡技術科学大学大学院工学研究科材料工学専攻博士後期課程修了、
博士（工学）

前職：長岡技術科学大学工学部生物系教授

教 授 阪本 泰光（さかもと やすみつ）

平成 9 年 長岡技術科学大学工学部生物機能工学課程卒業

平成 11 年 長岡技術科学大学大学院工学研究科生物機能工学専攻修士課程修了

平成 14 年 長岡技術科学大学大学院工学研究科材料工学専攻博士後期課程単位取得
退学

平成 17 年 博士（薬学）昭和大学大学院薬学研究科（論文）

前職：昭和大学保健医療学部講師、昭和大学医学部、薬学部、歯学部、昭和大学診療放射
線専門学校兼任講師

◆◆ 分野の自己点検・評価 ◆◆

教育・研究・社会貢献活動について、コロナの影響がほぼなくなり、コロナ前に近い活動ができた。卒業研究では、微生物 DPP 化合物複合体の構造解析、ヒトリゾチームの高分解能構造解析を行った。研究活動については、歯周病菌及び多剤耐性菌のペプチド分解機構を担うペプチド分解酵素阻害剤の SBDD を行い、抗菌性を有する化合物の導出に成功し、神戸学院大学、神戸大学、長岡技術科学大学とペプチド型細菌ジペプチジルペプチダーゼ 7 阻害剤の特許権を取得した。さらに、既存抗菌薬と同程度の濃度で抗菌効果を有する化合物の開発に成功し、神戸大学、新潟大学、長岡技術科学大学と抗菌性ジペプチド化合物の特許を出願した。多発性骨髄腫の新たな治療薬開発を富山大学とともに進めている。標的分子と新規化合物との共結晶化、回折強度データ収集を実施し、次年度以降の構造解析の目処がたった。

社会貢献活動については、花巻北高校の地域活性化プロジェクト UP 花巻に協力し、講義、実習等を複数回にわたって実施、大宮北高校の SSH 探究活動において、大気曝露下でのタンパク質結晶回折実験法の開発に協力し、放射光施設での演習・実験を含む支援を実施した。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

【物理化学1】2回に1回を反転授業として、事前ビデオ視聴・予習テスト受験-小試験-解説講義-復習テスト受験のサイクルを回した。

【物理化学2】【物理化学3】講義中のミニテストをその場で集計し、正答率の低いものについては理解を促した。講義終了時の確認テストで、類似問題を解かせ、翌週の講義で解説を行った。

【構造生物学】最初から7回の講義の内、3回を反転授業として、事前ビデオ視聴・予習テスト受験-小試験-解説講義-復習テスト受験のサイクルを回した。最後の3回では履修済みあるいは履修中の他科目との関連を特に意識した講義を実施した。オンラインでの予習テストを用いて、講義内容を事前に把握させるよう努めた。

【卒業研究1】生体分子の基本的な取り扱いを習得することを目的とし、組換え緑色蛍光タンパク質（GFP）の発現と精製およびSDS電気泳動を実施した。さらに、GFPのペーパーモデルと分子構造を可視化するソフトウェアを用いて、タンパク質の立体構造に関する演習を行った。その後、実験について結果をまとめ、講座内の発表会でプレゼンテーションを行った。このほか、実務基礎実習の予習として、注射剤の配合変化や簡単な調剤演習を実施した。

【卒業研究2】各自が薬剤の標的となり得るタンパク質に対して、結晶化および立体構造と機能に関する研究、酵素阻害剤の高次スクリーニングを行った。また、プロテインデータバンクに登録されているタンパク質と薬剤の相互作用に関する考察に取り組んだ。ヒトリゾチームと糖鎖複合体の高分解能構造解析に向けて、精製とサーマルシフトアッセイによる特性評価を行った。

【薬学実習2】リゾチームの結晶化実験、結晶構造解析演習、ショ糖の加水分解反応の旋光度測定を行った。実習中に実験結果の取りまとめをさせ、口頭試問により実習内容の理解度の確認を行なった。

【デジタルトランスフォーメーション入門】

情報システムを担うLinuxに関する演習、情報と現実をつなげるIoT機器の作成とプログラミング、AI、電子カルテの演習を行なった。電子カルテや医療システムに関しては、アクセス取締役の新上氏を招いて講義と演習を実施した。

【薬学英语2】薬局への来訪者対応のロールプレイを学生同士で実施した。また、米国の医療に関するケーススタディ教材を取り入れ、検査値と疾患の関係についての問題解決型の学習を実施した。学生の英語能力の評価については、国際標準であるCEFRスコアを算出可能なEFsetを実施し、英語のリスニングおよび読解能力を評価した。

◆◆ 社会貢献 ◆◆

所属学会及び委員等

野中孝昌：日本結晶学会、日本蛋白質科学会、日本生物物理学会、日本生化学会、日本薬学会
日本コンピュータ化学会、日本農芸化学会、日本放射光学会、日本教育工学会
日本生化学会評議員、薬学教育協議会物理化学系教科担当教員

阪本泰光：日本薬学会、日本生化学会、日本分子生物学会、日本結晶学会、日本蛋白質科学会、国際感染症学会、日本ケミカルバイオロジー学会、PF-UA タンパク質結晶構造解析ユーザーグループ、放射光構造生物学会
さいたま市立大宮北高等学校スーパーサイエンスハイスクール運営指導委員
大阪大学蛋白質研究所共同研究員、薬学教育協議会物理化学系教科担当教員
Space BD 株式会社ライフサイエンス事業アドバイザー、岩手県立花巻北高校「学校運営協議会」委員・会長

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学内委員等

野中孝昌：医用画像情報センター運営委員会、医学部放射線障害予防委員会、推薦入学試験面接委員

阪本泰光：公的研究費等内部監査

学部内委員等

野中孝昌：クラス担任、CBT 実施委員会委員（委員長）、広報委員、教務委員会

阪本泰光：CBT 実施委員会（CBT 管理者）、教科課程部会委員、実習委員会委員、研究推進委員会、教員研修委員会

◆◆ その他特記事項 ◆◆

講演活動等

野中孝昌

さいたま市立大宮北高校「大気曝露下でのタンパク質 X 線回折測定実験」

岩手医大-KEK-SSH 探究活動

令和 6 年 10 月 12 日、11 月 15 日、12 月 8 日

さいたま市立大宮北高校、高エネルギー加速器研究機構（実施場所）

岩手県立花巻北高等学校令和 6 年度 学びの祭典（冬）2 年生

令和 6 年 12 月 23 日、24 日

阪本泰光

さいたま市立大宮北高校「大気曝露下でのタンパク質 X 線回折測定」

岩手医大-KEK-SSH 探究活動

令和 5 年 6 月 4 日、8 月 1 日、23 日、9 月 10 日、9 月 12 日、12 月 2 日、12 月 20 日

令和 7 年 1 月 16 日、3 月 10 日、11 日、12 日

さいたま市立大宮北高校（Web）

令和 7 年 2 月 22 日

さいたま市立大宮北高校

岩手県立花巻北高等学校 科学部 研究指導

令和 6 年 9 月 28 日

岩手医科大学矢巾キャンパス

岩手県立花巻北高等学校 探究活動指導

令和 6 年 10 月 16 日、22 日 令和 7 年 3 月 1 日

さいたま市立大宮北高校「大気曝露下でのタンパク質 X 線回折測定実験」

令和 6 年 10 月 12 日、11 月 15 日、12 月 8 日

さいたま市立大宮北高校、高エネルギー加速器研究機構

岩手県立花巻北高等学校令和 6 年度 学びの祭典（冬）2 年生

令和 6 年 12 月 23 日、24 日

岩手県立花巻北高等学校

さいたま市立大宮北高校 SSH 成果報告会 評価

令和 7 年 2 月 3 日

ReIBol ホール（市民会館おおみや）

薬科学講座 分析化学分野

Department of Pharmaceutical Sciences
Division of Analytical Biochemistry

准教授 藤本 康之 (ふじもと やすゆき)

平成 3 年 東京大学薬学部卒業

平成 9 年 東京大学大学院薬学系研究科博士課程修了、博士 (薬学)

前職：帝京大学薬学部助手

◆◆ 分野の自己点検・評価 ◆◆

今年度の第 1 学年から、薬学部の講義・実習が新規カリキュラムに移行した。当分野は主に第 2 学年以上の学年の講義・実習を担当しており、「分析化学 1」、「分析化学 2」、「分析化学計算演習」(2 学年)、「臨床分析化学」(3 学年)の各科目、および、実習科目として「薬学実習 1 (分析化学実習)」(2 学年)を従来の現行カリキュラムにて実施した。また、分野所属の 5・6 年生には卒業研究や卒業論文の作成を指導した。

研究の面では、構造予測プログラムを用いた膜タンパク質の立体構造予測に取り組んだ。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

今年度から、本学薬学部のカリキュラムが一新されることとなり、今年度の第 1 学年から新規カリキュラムでの講義・実習がスタートしている。今年度の第 2 学年が従来のカリキュラムで履修する最後の学年となる。当分野は主な担当科目として、2 学年「分析化学 1」、「分析化学 2」、「分析化学計算演習」、3 学年「臨床分析化学」の講義を担当した。この他、2 学年「薬学実習 1 (分析化学実習)」を始め、6 学年の「総合演習」や「総合講義」、2 学年の「早期臨床体験」などを分担した。分野配属学生 (5 年生－6 年生)には卒業研究を指導した。これらは、いずれも、従来のカリキュラムでの実施となっている。また、新規カリキュラムへの移行にともない、昨年度まで第 1 学年を対象に実施されていた「分析科学入門」は閉講となった。

講義等の主な内容であるが、2 学年「分析化学 1」では、容量分析として各種の滴定を取扱い、「分析化学 2」では、クロマトグラフィー、元素分析法、確認試験法、純度試験法を講義した。また、「分析化学計算演習」では、主に物質の量や濃度、水溶液の pH、分配平衡に

についての計算問題による演習を実施した。3 学年「臨床分析化学」では、主にイムノアッセイ法、酵素分析法、電気泳動法、画像診断法について講義した。これらの講義においては、解説講義がメインであるが、毎回演習問題を出題していることに加え、問題演習の回も設けている。授業アンケートにおいても、演習問題で理解度をチェックできる点や演習問題の解説が役に立つとのいう点で評価が得られていた。

実習科目である2年生を対象とした「薬学実習1（分析化学実習）」では、昨年度に引き続き、ピストン式マイクロピペット（いわゆるピペットマン等）の適切な使用方法の確認のための講習、紫外可視分光光度法（サラゾスルファピリジンのスペクトル測定と定量）、容量分析（酸化還元滴定によるアスコルビン酸の定量）、定性分析（無機イオンの定性反応、アミノ酸のニンヒドリン反応、バイルシュタイン反応を含む炎色反応）、オープンカラム方式によるゲル濾過クロマトグラフィー、HPLC チャートを用いたクロマトグラムの波形解析（ピーク高さ、半値幅の測定、ピーク面積、分離度、分離係数、シンメトリー係数、理論段数の算定、等）、臨床分析（簡易型心電計を用いた心電図測定、簡易血糖測定装置の使用、パルスオキシメータによる血中酸素分圧（SpO₂）測定、試験紙法による尿糖・尿タンパク質測定、イムノクロマトグラフィー（妊娠検査薬を用いた絨毛性ゴナドトロピン測定と検出限界の把握））を実施した。実習終了後に課題レポートの提出を求めた。欠席者には後日、追実習（定性分析の学習項目）を行った。学生からのアンケートの回答では、音声聞き取りづらいとの意見が多くみられたので、改善を要する。

この他、分担科目として実践チーム医療論に参加した。附属病院での実習を通じて治療戦略や治療薬の使用法を学ぶ内容だが、最後の成果発表会等においても学ぶべき事柄が多く、印象的であった。

◆◆ 社会貢献 ◆◆

所属学会及び委員等

藤本康之：日本生化学会、日本薬学会

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学内委員等

藤本康之：岩手医科大学報編集委員

学部内委員等

藤本康之：教科課程部会委員、総合試験部会委員、OSCE 委員会委員

生物薬学講座 機能生化学分野

Department of Biological Pharmacy

Division of Biochemistry

教授 中西 真弓（なかにし まゆみ）

平成元年 東京大学薬学部卒業

平成6年 東京大学大学院薬学系研究科博士課程修了、博士（薬学）

前職：岩手医科大学薬学部機能生化学講座准教授

准教授 關谷 瑞樹（せきや みずき）

平成15年 東北大学薬学部卒業

平成20年 東北大学大学院薬学研究科博士後期課程修了、博士（薬学）

前職：岩手医科大学薬学部機能生化学講座助教

研究補助員 河野 貴久子（かわの きくこ）

平成3年 神戸学院大学栄養学部卒業

◆◆ 講座の自己点検・評価 ◆◆

教授1名（中西）、准教授1名（關谷）、研究補助員1名（河野）の計3名の体制で研究室を運営した。スタッフ全員で学生の教育と研究、メンタルヘルスケアに努め、6年生は2名が卒業、5年生は全員進級、4年生は3名進級となった。6年生と4年生で原級留置となった学生各1名に対して、今後もサポートを続けたいと考えている。令和6年度に担当した講義・実習について、試験の成績、学生による科目アンケート、レポートから判断して、十分に教育効果があったと考えている。研究面では、骨吸収、インスリン分泌、歯牙形成、口腔内病原細菌の耐酸性獲得などにおけるプロトン輸送 ATPase の機能に着目して研究を進め、その成果を学会や学術論文として発表した。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

第1学年を対象とした「早期体験学習」では、關谷が不自由体験の引率や指導を行った。「アドバンスト生物」では、がんの転移および骨代謝における生体内酸性環境の影響について、「薬学入門」では科学の発展と創薬について、中西が講義を行った。中西と關谷は「基礎生化学」を担当し、生化学などの専門科目につながる基礎知識を習得させるため、生体分子の構造や機能、及び酵素の役割や医薬品の標的としての重要性を講述した。また、中西は、

今年度より2年生から1年生に移動した「生化学1（タンパク質科学）」を担当し、タンパク質の構造と機能、酵素反応速度論および酵素の活性調節機構について講述した。基礎生化学と生化学1について、定期試験問題の解説と補講を行った。

第2学年を対象として、中西は「生化学1（タンパク質科学）」を担当し、上述の内容の講義を行った。關谷は「生化学2（生体エネルギー）」を担当し、解糖系、クエン酸回路、酸化的リン酸化といった代謝経路において、摂取した栄養素がどのようにエネルギーへ変換されるのかを解説した。また、脂質、核酸、アミノ酸の合成や代謝について、疾病や医薬品との関連性を含めて講述した。中西は、「生化学3（ゲノムサイエンス）」を担当し、遺伝情報の保存と発現の流れ、および関連する疾患と医薬品について解説した。生化学1・2・3について、定期試験問題の解説と補講を行った。關谷は「基礎演習1」、「分析化学計算演習」を担当し、生化学1・2、及びキレート滴定に関する問題演習を行った。「薬学実習1（生化学実習）」では、生体分子の性質および酵素反応に関する知識を復習し、生体分子の基本的取扱いを習得させた。実習への取り組みに関して自己評価を導入したことで、学生の学習態度が向上した。また、十分予習をさせたことで、学生の手技の習得と理解は進んだと考えている。実習に関する課題をSGDにより取り組ませて実習最終日に発表させた。学生へのアンケートによると、このSGDと発表が、実習内容についての理解を深めるのに役立っていることがわかった。

中西は、第1学年から第3学年のクラス担任として、成績交付時などに学生と面談し、生活態度や学習方法について助言した。

第4学年を対象として、「実践生化学」「総合薬学治療演習」「卒業研究1」「実務基礎実習」を担当した。「総合薬学治療演習」と「実務基礎実習」は、他分野とともに分担した。「実践生化学」では、これまで学んできた生化学の総復習をした。毎回の講義の後、復習のためにMoodleで問題を提供し、多くの学生が取り組んだ。「卒業研究1」では、基本的な実験操作、プロトコルの作成ならびに結果の考察ができるようになるために、關谷が中心となってタンパク質の定量実験を行った。また、文献の検索や英語論文の読解にも取り組んだ。当分野でこれまでに行われた卒業研究の背景や内容についてまとめ、卒業研究1の研究セミナーとして分野内で発表させた。加えて、CBT対策として4月～10月にかけて平日ほぼ毎日宿題を提出させ、定期的に確認テストを実施した。

第5学年（第4学年の3月を含む）を対象とした「卒業研究2」は、アンギノーサスレンサ球菌のプロトン輸送ATPase回復株の作製、アンギノーサスレンサ球菌プロトン輸送ATPase検出系の確立、インスリン顆粒輸送因子Rab27とプロトンポンプV-ATPaseの結合というテーマで実施し、どの学生も一定以上の成果をあげることができた。得られた成果は、分野内で卒業研究セミナーとして報告させた。「実務実習」においては、分野所属の学生について、日報・週報の記載を指導、実習を進める上での助言をした。分野内で実務実習報告会を実施し、処方解析や気づきについて発表させた。

第6学年を対象とした「卒業研究2」では、研究の総まとめとして、必要な追加実験および卒業論文作成を指導した。特に大きな成果をあげた6年生1名は、第76回日本薬理学会北部会で発表し、ポスター優秀発表賞を受賞した。中西と關谷は「総合講義」と「総合演習」を分担して受け持ち、生化学分野についての総まとめと演習を行った。また、総合試験の作問、

解説をおこなった。分野に配属された学生の総合試験・国家試験対策をサポートした。また、關谷は4学部合同セミナーのチューターを担当し、異なる学部の学生とのディスカッションが活発にできるように配慮した。

中西は、主査として大学院生1名の最終審査を行い、研究の方針やデータの解釈、まとめ方などについて指導した。

◆◆ 社会貢献 ◆◆

所属学会及び委員等

中西真弓：日本薬学会、日本生化学会 評議員

關谷瑞樹：日本薬学会、日本生化学会

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学内委員等

中西真弓：空手道部・薬学部長、圭陵会学術振興会選考委員

關谷瑞樹：圭陵会広報委員、病原体等安全管理委員会、岩手医科大学准教授講師会尚絅会幹事

学部内委員等

中西真弓：教育検証部会（部会長）、広報・入試検討委員会、薬学部教務委員会、薬学部研究推進委員会、1～3学年クラス担任

關谷瑞樹：教科課程部会、国試対策委員会

生物薬学講座 生体防御学分野

Department of Biological Pharmacy

Division of Immunobiology

教 授 大橋 綾子（おおはし あやこ）

昭和 62 年 東京大学薬学部薬学科卒業

平成 4 年 東京大学大学院薬学系研究科生命薬学専攻博士課程修了、博士（薬学）

前職：大阪大学大学院薬学研究科講師

助 教 錦織 健児（にしこり けんじ）

平成 15 年 神奈川大学理学部応用生物科学科卒業

平成 21 年 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻博士課程修了、博士（理学）

◆◆ 分野の自己点検・評価 ◆◆

令和 6 年度は、大橋教授、錦織助教の分野スタッフ教員 2 名の体制で教育・研究活動を行った。本年度、生体防御学分野にて卒業研究に従事した学生は 6 年生 1 名、5 年生 4 名（卒業研究に関しては薬学教育学分野 1 名を含めると 5 名）、4 年生 1 名であった。教育面では、生物系講義科目として、微生物学、免疫生物学 1、応用生体防御学を分野として担当した。また実習科目として、薬学実習 1（微生物学実習）、卒業研究 1、卒業研究 2、遺伝子導入技術を学ぶ（隔年開講自由科目）を実施した。研究面では、線虫をモデル生物として、生体内物質代謝や異物排除に関与する輸送体蛋白質や分子シャペロン蛋白質の機能と、細胞内オルガネラ形成との関連に着目した研究を進めた。分野配属学生ならびに 1～3 学年までの担任をするクラス学生に対しては、面談等を通じて個別の学習指導やメンタルヘルスケア、その他学生支援（合理的配慮を含む）に努めた。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

2024 年度に本分野教員が担当した講義・実習は、1 年生の薬学入門、早期体験学習、2、3 年生の微生物学、免疫生物学 1、薬学実習 1、早期臨床体験、応用生体防御学、基礎総合演習 2・3、4 年生の医療倫理とヒューマニズム、総合薬物治療演習、卒業研究 1、5-6 年生の卒業研究 2、および 6 年生の総合講義、総合演習である。これらの他にも、実習系自由科目を開講し、学生の研究への関心を深めることに努めた。また、4 年生の実務基礎実習や OSCE のサポート、5 年生の薬局実習先との面談（オンライン対応）を通して、実務系の教育にも取り組んだ。大学院教育に関しては、大学院薬学研究科における審査を分担、協力した。

薬学入門（1 年次通年）：「微生物学 感染症と薬」を大橋が担当した。インフルエンザを

例にウイルスの感染メカニズム、薬と作用点、ワクチンなどによる感染予防法について概説した。新型コロナウイルスの情報を追加して解説した。

早期臨床体験（2 年次通年）：生命倫理に関するパートを担当した（大橋 9 コマ、錦織 2 コマ）。第 1 回は生命倫理の導入講義、第 2、3 回は教材映画「ロレンツォのオイル」（1992 年）の視聴、第 4～7 回は課題とした映画における「患者の生きる権利」「チーム医療」「登場人物の多様な倫理と価値観」に関する PBL/SGD を行った。SGD の一部に、昨年度導入したディベートを今年も実施し、各課題の肯定派・否定派の立場で議論する機会とした。第 8～9 回は、班ごとにプレゼンテーション（スライドを用いた口頭発表）を行った。また課題とした新聞形式プロダクト制作は個人作品とした。発表会及び新聞プロダクトには、投票によるピア評価を導入し、議論や発表に貢献した学生を表彰した。また、同科目の「被災地と災害時の薬剤師の役割を学ぶ」のパートでは、事前・事後学習の SGD 並びに発表会の司会進行を大橋が分担した。

微生物学（2 年次前期）：全 13 コマのうち講義は大橋（9 コマ）と錦織（2 コマ）が分担し、演習（2 コマ）は 2 名で担当した。講義には改訂モデル・コアカリキュラム準拠教科書と独自プリントを用いた。学部の試験方針に合わせ、演習問題となる毎回の確認問題は、基本復習用として配布し、簡略化した問題を次回の講義内に解くこととした。また教科書の演習問題から基本問題を選び課題とした。確認問題とフィードバック（大橋）や、moodle を活用した演習の連動・質問コーナー（錦織）などにより学習効果を高める工夫を行った。演習の一部で、学生による作問を学生同士が回答し合う課題を実施した。定期試験終了後、試験問題をもとに補講を行った。

免疫生物学 1（2 年次後期）：演習を含む全 11 コマを大橋が担当した。免疫の基本的な概念や特徴の理解を目標として、免疫の基本用語を徹底して講義した。毎回終了時の確認問題とフィードバックに加えて、事前に課題に指定した演習問題の解説を行い、学生の復習を促した。また、時間内に 3 名程度で論述課題を話し合い、意見をまとめる演習を実施した。定期試験終了後、再試対象者に向けて試験問題の解説と補講を行った。

薬学実習 1（2 年次後期）：微生物学実習（12 コマ）を分野として担当した。大きな変更点は実習開催時期で例年より早く 10 月に実施した。具体的な実習項目としては、「滅菌法と無菌操作」、「細菌の純培養と確認培養」、「グラム染色」、「常在菌・環境細菌の分離と消毒」、「薬剤感受性試験」、「大腸菌の接合」、「イムノクロマトグラフィー法を用いたインフルエンザウイルスの検出」を行った。実習内の待ち時間を利用して、動画を用いた PBL（課題解決型学習）も行った。更に、実習レポートの作成における注意点や評価のポイントを丁寧に講義し、レポートの質的向上を促した。

基礎演習 2（3 年次前期）：錦織が 1 コマ担当。免疫生物学 1 の内容から、免疫の全体像を把握できるよう意識した内容にした。具体的には免疫担当細胞に関する確認テストを行い、その解説を通して全体像の概略を示した。時間内に自主学習が終了するように対象範囲を縮小した。

基礎演習 3（3 年次後期）：錦織が 1 コマ担当。免疫生物学 2 の内容に関して演習および講義を行った。インターロイキンに関する確認テストを行い、その解説を通して、基礎演習 2 で

把握した全体像の中で細胞同士がどのように分子的に連携しているかを示した。時間内に自主学習が終了するように対象範囲を縮小した。

応用生体防御学（3 年次後期）：免疫生物学 1、免疫生物学 2 並びに微生物学の学習を踏まえつつ、細胞生物学やゲノムサイエンスなどの生物系薬学の知識を取り入れながら、より高度な内容を取り入れた独自科目である。分野スタッフ 2 名（大橋 2 コマ、錦織 3 コマ）、薬学教育学分野白石特任教授（2 コマ）に加え、非常勤講師として丹治貴博博士（医療創生大学薬学部准教授 1 コマ）と黒田英介博士（名古屋大学医学系研究所病原細菌学助教、本学薬学部 1 期生 1 コマ）を迎え、実施した（論述式中間試験 1 コマを含み、全 10 コマ）。学期末の定期試験の他、中間試験として資料持ち込み可の論述問題を例年通りに実施した。再試対象者に向けて試験問題の解説と補講を行った。授業アンケートでは、非常勤講師に他大学で働く本学薬学部卒業生が加わったことを良いとする回答が得られた。

医療倫理とヒューマニズム（4 年次通年）：オムニバス形式の通年科目（2 単位 全 17 コマ）で、科目責任者・コーディネーターを大橋が担当した。ヒューマニズムや行動科学、ナラティブメディシン、薬害、医療安全、患者の講話などの内容を含む構成としている。オムニバス形式を採用し、本学部の薬学部教員、教養教育センター教員、医学部教員（附属病院遺伝カウンセラー）に加え、学外からは岩手県薬剤師会理事（防災対策委員）、薬害被害者、地元在住がん患者、文学部教授（医療と死生学を担当）、医療過誤取材記者、模擬患者(SP)研究会代表（患者対応ロールプレイを担当）を講師に招聘した（一部オンラインで実施）。また今年度も、各講師が指定する自由選択レポート課題（毎年内容は見直している）を取り入れ、表彰するとともに発表会で紹介した。ガイダンスで本科目の意義と特徴、成績評価方法を説明し、各回に行う小テストの集計、SGD での発表、レポートのとりまとめとレポート賞の表彰、最終評点のとりまとめを行った。

総合薬物治療演習（4 年次通年）：微生物学（大橋）に関連する演習講義を 1 コマ担当した。事前に学生が受けた試験問題の選択肢を活用し大幅改変問題を作成した。この改変問題を多数解かせた後、解説講義を行った。関連知識を結びつけて復習する重要性を説いた。

卒業研究 1（4 年次通年）：今年度配属された 4 年生 1 名に対して開講した。実験器具の使用法の習得を通して実験記録の書き方を学ばせ、作成した計算ドリルを毎回解かせることで、研究や薬剤師業務に必要な計算力の向上に努めた。英文読解に加え、和文総説や研究テーマに関連する課題を通じて背景理解を促した。その後は、本分野卒業生の卒業論文を読ませ、テーマに沿った実験を遂行した。

実務実習（病院・薬局）（5 年次通年）：分野所属学生 4 名の実務実習の巡回指導（電話、電子メール、Zoom を使用）を大橋、錦織が分担して行った。また、日報や週報の作成においてウェブツールを用いて指導を行った。実務実習発表会に向けた分野内発表練習を開催し、処方解析や気づきなどを披露しあうことで、学生相互の理解を促した。実務実習発表会では、座長および審査を行った。

卒業研究 2（5、6 年次）：分野配属の 6 年生 1 名、5 年生 4 名に対し、独立したテーマを与えて実施した（テーマ 1 腸内顆粒 HEBE 顆粒を形成しない変異体における生殖腺関連の表現型の解析、テーマ 2 腸細胞内顆粒状オルガネラ HEBE 顆粒の内在性因子の同定に向けた解

析、テーマ3 ペプチド輸送体線虫ホモログ *haf-4*, *haf-9* 遺伝子発現の加齢変動の解析、テーマ4/5 腸細胞内複屈折顆粒の蓄積に関する医薬品の影響)。卒業研究の進捗状況と成果は実験記録ノートや参考文献を元に発表資料の作成を指導した。卒業研究中間報告を4年生に各自の研究を紹介する形式で実施し、発表した。また6年生は、5年次に進めた研究の総まとめにあたり、不足する実験を実施して卒業論文を作成するよう指導した。6年生は、学部主催の卒業研究発表会にて発表した。直接の担当教員の指導で書き上げた卒業論文を元に、直接担当以外の教員による査読を踏まえ、よりよい論文になるように完成させた。例年、卒業論文は卒業論文集として分野でまとめ、製本した上で配付している。

総合講義・演習(6年次)：当分野担当教科のうち、微生物学について大橋が担当し、これまでの学習で十分定着していない点を中心に解説した。また、試験直後のフィードバック講義、並びに秋と冬の補習講義も担当した。留年生に関しては昨年から引き続き錦織が担当した。

遺伝子導入技術を学ぶ(自由科目、2-4年)：当分野と薬学教育学分野が提供している2つの自由科目のうち、もう1つの自由科目「遺伝学に親しむ」と隔年開催をしている。今回1名の受講者を得て、線虫を用いた遺伝子導入技術に関する講義ならびに基礎的実験を行った。講座研究費での購入が許可されたマイクロインジェクション装置を活用し、蛍光蛋白と融合したタンパク質を発現する遺伝子導入線虫を得ることができた。

その他：分野、所属委員会担当業務として以下の教育業務を担当した。早期体験学習(分野見学)(1年生)、早期臨床体験(南昌病院見学引率(錦織))(2年生)、実務基礎実習・総復習・実技試験の評価者や放送係(4年生)、薬学共用試験の実施準備・監督・評価者等(4年生)、総合演習・総合試験作問(6年生)、国試対策個別指導・補習講義(6年生)、個人面談(学業相談、生活改善指導、就職支援等)(全学年の担当クラス・分野配属学生)等

◆◆ 社会貢献 ◆◆

所属学会及び委員等

大橋綾子：日本生化学会(評議員、東北支部評議員)、日本薬学会(Biol. Pharm. Bull.編集委員、ファルマシア地区通信委員)、日本分子生物学会、岩手医学会、厚生労働省(医道審議会薬剤師分科会 薬剤師国家試験制度改善検討部会 専門委員)、文部科学省(高等教育局 大学設置・学校法人審議会 大学設置分科会薬学専門委員)、薬学教育評価機構(評価基準・要綱検討委員、評価基準要綱英訳ワーキング委員)、岩手県(保健福祉部 岩手県薬剤師確保対策検討会 委員)、いわて女性研究者支援ネットワーク委員、Frontiers in physiology (Invertebrate physiology Review Editor)、

錦織健児：日本生化学会、日本分子生物学会、日本動物学会、日本比較免疫学会、岩手医学会、消費者庁セカンドオピニオン事業(査読委員)

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学内委員等

大橋綾子：研究者支援室設置準備委員会委員長、生命科学技術研究支援センター運営委員会委員、組換え DNA 安全委員会委員、岩手医科大学共済会代議員、推薦入学試験面接委員、前期一般入学試験委員

学部内委員等

大橋綾子：教務委員会教育研修部会副部長、教務委員会教育検証部会員、第 5 学年学年長、クラス委員（1、2、3 年生クラス担任）、薬学教育協議会微生物学教科担当教員会議委員、アーチェリー部代表部長、薬学研究会部長

錦織健児：総合試験部会委員、薬学部ホームページワーキンググループメンバー、ハンドボール部薬学部顧問

病態薬理学講座 分子細胞薬理学分野

Department of Pathophysiology and Pharmacology

Division of Molecular and Cellular Pharmacology

教授 奈良場 博昭（ならば ひろあき）

平成 3 年 北里大学薬学部卒業

平成 8 年 北里大学大学院薬学研究科博士課程修了、博士（薬学）

前職：岩手医科大学薬学部臨床薬学講座薬学教育学分野

講師 藤原 俊朗（ふじわら しゅんろう）

平成 11 年 岩手大学工学部卒業

平成 13 年 岩手大学大学院工学研究科 博士前期課程修了 工学修士 取得

平成 17 年 岩手県立大学大学院ソフトウェア情報学研究科 博士後期課程修了

博士（ソフトウェア情報学） 取得

平成 24 年 博士（医学） 取得（岩手医科大学・乙第 728 号）

前職：岩手医科大学医学部脳神経外科学講座 助教

特任講師 高橋 巖（たかはし いわお）

平成 6 年 玉川大学農学部卒業

平成 21 年 東北大学大学院医学系研究科博士課程修了、博士（医学）

前職：株式会社江東微生物研究所

◆◆ 講座の自己点検・評価 ◆◆

分子細胞薬理学分野には、奈良場博昭教授が令和 5 年 4 月 1 日より学部内配置移動により着任し、更に、藤原俊朗講師が令和 5 年 8 月 1 日より昇進および学内配置移動により着任した。このため、2024 年度（令和 6 年度）は、高橋巖特任講師とともに 3 名の専任教員により、教育・研究活動が行われた。教育関連では、1 年の準備教育科目、低学年の基礎教育科目および薬理系科目、高学年の臨床教育および総合学習科目など多くの科目において、各教員が講義担当を担った。また、実習科目においても基礎薬学の科目、体験型教育科目、臨床準備教育科目において、学生の指導にあたった。他学部の授業科目の兼任講師についても講義を担当した。大学院教育においても、特論科目の講義を行うとともに、研究科生の審査担当を担った。今年度は 6 年生が 2 名、5 年生が 1 名、当分野に配属されており、卒業研究やそれぞれの学年に対応した教育を行った。更に、学内外の教務や教育関連の委員会、講習会や研修会にも積極的に参加した。研究に関しては、専任教員 3 名の全員が最近、この部署の所属になったこともあり、各自のこれまでの研究分野での進展を目指した。なお、今後それぞれの専門性を活かした研究面での協力体制も検討していく予定である。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

分子細胞薬理学分野としては、2年後期「薬学実習1（組織学）」、4年「実務基礎実習」、4年「卒業研究1」および5・6年「卒業研究2」を担当した。

奈良場教授は、科目責任者として、1年前期「基礎機能形態学」、1年後期「機能形態学」、2年前期「細胞生物学」および「解剖学」、2年後期「薬理学2」、3年後期「医薬安全性学」、6年「総合演習」および「総合講義」を担当した。自由科目の科目責任者としては、3年「放射科学実習」、4・5年「医療手話コミュニケーション」、6年「実践チーム医療論」を担当した。それ以外に幾つかの科目の講義担当および医学部3年「薬理学」の講義も担当した。多職種連携教育では、3年「チーム医療リテラシー」および6年「4学部合同セミナー」のファシリテーターを担当した。

藤原講師は、奈良場教授が科目責任者となっている大学院講義「病態薬理学特論」の一部（2コマ）を担当した。また、学外非常勤講師として、岩手女子高等学校看護科4年「病態生理学」、岩手看護専門学校1年「病理学Ⅲ」および同専門学校1年「情報科学」を担当した。また、医学部脳神経外科学講座での職務を兼務していることから、同講座大学院生の研究指導を合わせて担当した。

高橋特任講師は、科目責任者として、5年後期「薬学特論（生物・薬理）」を担当した。分担者として、1年後期「機能形態学」、2年前期「細胞生物学」および2年後期「基礎演習1」を担当した。実習科目では、1年後期「早期体験学習」、2年通年「早期臨床体験」、2年後期「薬学実習1（組織学）」、4年後期「実務基礎実習」を担当した。また、4～6年の「卒業研究1・2」を担当した。多職種連携教育では、3年「チーム医療リテラシー」および6年「4学部合同セミナー」のチューターを担当した。

◆◆ 社会貢献 ◆◆

所属学会及び委員等

奈良場 博昭：日本薬理学会（学術評議員）、日本炎症・再生医学会（評議員）、日本薬学会、日本生化学会、日本RNA学会、日本薬学教育学会、教科担当教員会議（薬理部会）委員、薬剤師国家試験検討委員会（薬理部会）委員、薬科学教科担当教員会議委員

藤原 俊朗：

日本脳循環代謝学会	幹事（2020～）
日本磁気共鳴医学会	教育委員（2020～）および代議員（2021～）
日本コンピュータ外科学会	評議員（2014～）
国際磁気共鳴医学会	学会員（2015～）
国際脳循環代謝学会	学会員（2020～）
日本脳神経外科学会、日本脳神経外科コンgres、ほか	

高橋 巖：日本薬学会、日本糖質学会、日本糖尿病学会、日本生化学会、ヨーロッパ糖尿病学会

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学内委員等

奈良場 博昭：全学教育推進機構委員、入試センター委員、キャリア支援センター委員、多職種連携教育ワーキンググループ、全学自己評価委員、全学自己評価委員会作業部会

学部内委員等

奈良場 博昭：教務委員長、研究科教務委員長、薬学部自己評価専門部会長、キャリア支援センター薬学部会委員、クラス担任（1～3年）、教員評価委員

藤原 俊朗：教科課程部会委員、研究担当主任（医学部脳神経外科学講座）

高橋 巖：CBT委員会委員、実務実習部会委員

病態薬理学講座 臨床医化学分野

Department of Pathophysiology and Pharmacology

Division of Medical Biochemistry

教 授 **那谷 耕司**（なた こうじ）

昭和 59 年 富山医科薬科大学医学部卒業

昭和 63 年 東北大学大学院医学系研究科博士課程修了、医学博士

前職：東北大学大学院医学系研究科生物化学分野助手

准教授 **大橋 一晶**（おおはし かずあき）

平成 5 年 東京大学薬学部卒業

平成 10 年 東京大学大学院薬学系研究科博士課程修了、博士（薬学）

前職：大阪大学大学院薬学研究科助教

◆◆ 分野の自己点検・評価 ◆◆

那谷耕司教授は、平成 19 年 4 月 1 日に東北大学大学院医学系研究科から赴任した。平成 20 年 4 月 1 日には大橋一晶准教授が大阪大学大学院薬学研究科から、平成 21 年 4 月には高橋巖助手と Nausheen Jamal 助手が東北大学大学院医学研究科から赴任した。高橋助手と Jamal 助手は平成 22 年 4 月に助教に任命された。Jamal 助教は平成 30 年 3 月で退職した。令和 4 年 8 月 1 日には、高橋助教が分子細胞薬理学分野に異動となった。令和 6 年 3 月の時点で、分野の人員は教授 1 名、准教授 1 名である。

当分野の主な担当科目は、医療薬学 1, 3, 臨床医学概論, 薬学生の将来, 総合薬物治療演習, 総合講義, 総合演習, 薬学実習 3 など、これらの講義・実習を通じて病気全般について病因、病態、検査法、治療法を教育する。また、卒業研究を通じて、糖尿病の病態解明と治療法の開発を志向した基礎研究、薬用資源植物の分子系統学に関する研究を行うことを目的としている。現在これらの教育、研究を鋭意遂行している。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

2024 年度に臨床医化学分野が担当した科目は、「早期体験学習」（1 年次）, 「早期臨床体験」（2 年次）, 「薬学実践英語 1」（2 年次）, 「医療薬学 1, 3」（3 年次）, 「臨床医学概論」（4 年次）, 「薬学生の将来」（4 年次）, 「総合薬物治療演習」（4 年次）, 「医療倫理とヒューマニズム」（4 年次）, 「薬学実習 3（症例解析学実習）」（4 年次）, 「実務基礎実習」（4 年次）, 「卒業研究 1」（4 年次）, 「卒業研究 2」（5, 6 年次）, 「総合講義」「総合演習」（6 年次）, 「4 学部合同セミナー」（6 年次）, 「実践チーム医療論」（6 年次）である。

早期体験学習（1年次後期）：「病院見学」を那谷教授が、「テスラ見学・ドクターヘリ見学」を大橋准教授が担当した。

早期臨床体験（2年次通年）：「薬学共用試験および薬剤師国家試験について考える」というテーマでプレゼンテーションをさせた。那谷教授と大橋准教授が6回担当した。

薬学実践英語1（2年次後期）：生化学関連の英語教材を使って、専門用語・熟語を学ばせた。大橋准教授が2回担当した。

医療薬学1（3年次前期）：病理学総論および消化器系、呼吸器系、骨・関節の疾患の病態、臨床検査、治療について講義した。那谷教授が14回、大橋准教授が2回担当した。

医療薬学3（3年次後期）：血液、代謝、免疫・アレルギー、脳血管障害、神経・筋疾患、遺伝性の疾患の病態、臨床検査、治療について講義した。那谷教授が11回、大橋准教授が7回担当した。

薬学生の将来（4年次通年）：薬学部を卒業後に関わる様々な職業（臨床薬剤師、行政薬剤師、医師、看護師、製薬企業勤務者（創薬、開発、医療情報担当者）、医学教育・研究者など）の特色について、実際にその職業に従事されている方々に講義をしていただくオムニバス形式の授業である。那谷教授と大橋准教授で取り纏めを行った（全8回）。

臨床医学概論（4年次通年）：岩手医科大学医学部・歯学部の教員および外部講師に基礎医学、臨床医学について講義をしていただくことで、主に医療現場での「診療」について理解を深めるオムニバス形式の授業である。那谷教授と大橋准教授で取り纏めを行った（全15回）。

総合薬物治療演習（4年次通年）：3，4年次で実施した医療薬学系講義のまとめとして、那谷教授が1回担当した。

医療倫理とヒューマニズム（4年次通年）：移植医療における医療倫理についての講義を、那谷教授が1回担当した。

薬学実習3（症例解析学実習）（4年次前期）：医療薬学、薬理学等の講義を通して習得した種々の疾患の病態、薬物治療に関する知識に基づき、指定された症例について必要な情報を収集し、適切な疾患名、治療法を考える内容の実習である。那谷教授、大橋准教授が薬学部4年生の指導に当たった。

実務基礎実習（4年次後期）：「在宅での薬学的管理（フィジカルアセスメント）」の講義1回を那谷教授が、実習16回を那谷教授、大橋准教授が分担して担当した。脈拍・血圧・SpO₂・呼吸音・浮腫の測定・診察について、薬学部4年生の指導に当たった。

総合講義・演習（6年次通年）：6年間で行われた講義・実習で学習した重要事項を復習し、知識の整理統合を目指す講義である。那谷教授が3回、大橋准教授が1回授業を担当することで、医療薬学系の講義・実習を通して習得した知識の再確認を行った。

4学部合同セミナー（6年次前期）：医学部、歯学部、薬学部、看護学部の6年生がチームを作り、提示された症例についてそれぞれの学部の特徴を活かしてSGLを実施し、そのプロダクトのプレゼンテーションを行う内容である。那谷教授、大橋准教授が薬学部学生の事前学習とプレゼンテーションを指導した。

実践チーム医療論（病棟実習）（6年次前期）：医学部内科系講座で医師の指導の下、外来や

病棟で実習を行う自由科目である。那谷教授が参加した学生の指導、プレゼンテーションでの質疑等を担当した。

卒業研究 1（4 年次通年）：臨床医化学分野に配属になった 4 年生 1 名に対して、卒業研究 2 に向けた準備として那谷教授がイントロダクションと英語論文の抄読を担当した。その後、大橋准教授が中心となって研究指導を行った。

卒業研究 2（5，6 年次通年）：臨床医化学分野に配属になった 5 年生 1 名、6 年生 2 名に対して、那谷教授、大橋准教授が研究指導を行った。分野内で研究報告会を実施し、6 年次の卒業研究発表会および卒業論文の作成に備えた。

実務実習（5 年次通年）：大橋准教授が、附属病院および保険薬局で実習を行っている学生の指導を担当した。

医学部薬理学講義（3 年次前期）：那谷教授が「糖尿病」「脂質異常症」に関する授業を 1 回担当した。

その他：薬学部各学年のクラス担任（那谷教授）として、新入生ガイダンスを行うとともに、大橋准教授とともに前期試験、後期試験終了後等に担当クラスの学生に対して個人面談を行い、学生の学習意欲向上につとめた。卒業研究で配属となっていた薬学部 6 年生に対しては、大橋准教授がチューターを担当し、国家試験対策の指導を行った。

学生に対する教育以外にも、那谷教授が盛岡第三高等学校「スーパーリサーチハイスクール」の運営指導委員会委員、黒沢尻北高校「きたかみ世界塾」のアドバイザーとして指導にあたった。

◆◆ 社会貢献 ◆◆

所属学会及び委員等

那谷耕司：日本生化学会（評議員）、日本糖尿病学会、日本薬学会、日本糖質学会、日本臨床化学会（評議員）、アジア糖尿学会、青森県量子科学センター動物実験委員会委員（委員長）

大橋一品：日本生化学会、日本薬学会、日本植物分類学会、国際植物分類学会

市民講演会、卒後研修会、高校や予備校等での講演などの活動

1. 盛岡第三高校 SRH 運営指導委員会を担当（那谷教授）。
2. 黒沢尻北高校「きたかみ世界塾」助言者を担当（那谷教授）。
3. 2024 年度「オープンキャンパス」を担当（那谷教授、大橋准教授）。
4. 2024 年度「いわてまるごと科学・情報館」を担当（那谷教授）。
5. 2024 年度「高大連携ウィンターセッション」を担当（那谷教授）。

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学内委員等

那谷耕司：動物研究センター センター長、動物実験委員会委員（委員長）、動物研究センター運営委員会委員、全学自己点検評価委員会作業部会委員、入学試験センター自己評価専門部会委員、研究費不正使用防止委員会委員、シミュレーションセンター運営委員会委員、入学試験選抜委員会委員、令和7年度薬学部前期一般入学試験面接委員、軽音楽部部長、さんさ踊り部部長

大橋一品：植物園副園長、東洋医学研究会部長

学部内委員等

那谷耕司：広報・入学検討委員会委員（委員長）、薬学教育評価委員（委員長）、クラス担任

大橋一品：教務委員会総合試験部会委員、教務委員会教科課程部会委員、教務委員会 OSCE 委員会委員、広報・入試検討委員会委員、薬用植物園管理運営委員会委員、クラス副担任

病態薬理学講座 薬剤治療学講座

Department of Pathophysiology and Pharmacology

Division of Pharmacotherapeutics

教授 三部 篤 (さんべ あつし)

平成 2 年 東京薬科大学薬学部薬学科卒業

平成 7 年 東京薬科大学大学院薬学研究科博士後期課程修了、博士 (薬学)

前職：岩手医科大学薬学部薬剤治療学講座特任教授

助 教 手塚 優 (てづか ゆう)

平成 16 年 帝京大学薬学部卒業

平成 18 年 帝京大学大学院薬学研究科博士前期課程修了、修士 (薬学)

平成 27 年 帝京大学にて博士 (薬学) 取得

前職：岩手医科大学医学部附属病院薬剤部

◆◆ 講座の自己点検・評価 ◆◆

三部 篤教授、手塚 優助教と 2 人で教育指導と研究を行った。

○ 教育について

- 1) 本年度の担当科目：a) 1 年生：薬学入門 (三部、分担)、早期体験学習 (三部、手塚、分担) b) 2 年生：薬理学 1 (三部、科目責任者)、c) 3 年生：医療薬学 2 (三部、科目責任者)、医療薬学 4 (三部、手塚、科目責任者)、d) 4 年生：医療倫理学とヒューマニズム (三部、分担)、症例・処方解析学 (三部、科目責任者)、総合薬物治療演習 (三部、手塚、科目責任者)、実践衛生薬学 (手塚、分担)、e) 5 年生：治療戦略概論 (三部、分担) f) 6 年生：総合講義 (三部、分担)、総合演習 (三部、手塚、分担) の 12 科目を担当し、補助教材としてプリントなどを用いて講義した。また、3 年生を対象とした薬学実習 II (薬理学実習) (三部および手塚、科目責任者)、看護体験実習 (三部および手塚、科目責任者) および 4 年生を対象とした薬学実習 III (フィジカルアセスメント実習、三部および手塚、科目責任者)、実務基礎実習 (手塚、分担) を行った。それぞれの講義および実習において、授業アンケートでの学生評価も良く、教育効果は上がっていると自己評価した。
- 2) 4 学部合同セミナー、早期体験学習、薬学部 OSCE、薬学部 CBT など：薬剤治療学分野教員 (手塚、分担) は薬学部全体で行う学生指導にも積極的に参加することで、学生とのコミュニケーションの構築に努め、良好な結果を得た。
- 3) 卒業研究指導教員としての責務 (三部および手塚)：4-6 年生の卒業研究 (卒業研究 1 および卒業研究 2) に関しては、学生それぞれに個別の研究テーマを与え、研究を進め、良好な研究結果が得られた。

4) 実務実習指導員としての責務：本年度は、公済会薬局(むつ市) (担当学生数 1 名 担当三部)、つくし薬局盛岡駅前店 (担当学生数 2 名 担当三部)、石神の丘薬局 (担当学生数 1 名 担当手塚)、国立病院機構盛岡医療センター (担当学生数 1 名 担当手塚)、中通調剤薬局 (担当学生数 1 名 担当手塚)、秋田大学医学部附属病院 (担当学生数 1 名 担当手塚) の指導を行った。また、実習生が Web ツールを用い、毎週実務実習の内容をまとめているが、その内容に関してコメントすることで、実習生や実習施設とのコミュニケーションを取り、指導員としての責務を果たした (三部)。

○ 担任としての責務 (三部)：1 年生、2 年生、3 年生の担当学生への指導を行い (各学年 2 ～3 回)、とくに成績の不良である学生あるいは出席状況が不良の学生については個別に呼び出し、学習指導を行った。卒業研究 1 のために分野配属された 4 年生については、薬学 CBT が実施されるまで学習指導を行った。その後、共用試験合格者には 5 年生への準備として、研究課題をそれぞれに与え、2～3 月の期間に卒業研究のトレーニングを行った。

○研究について：本学医学部眼科学講座、本学医学部薬理学講座 (情報伝達医学分野) との共同研究を行い、研究成果を学会等で発表し、その後に論文化を行っている。学会、研修会などへの参加：研究成果の発表及び情報収集を第 75 回日本薬理学会北部会などで積極的に行った。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

1 年生への教育：

A) 講義科目名「薬学入門」(三部担当 1 コマ)

「先端医療を支える薬の開発」－ 昔から行われてきた創薬の手法と現在行われている創薬法を比較しながら、創薬の難しさを説明した。その上で、先端医療で用いられている薬物を解説した。

B) 早期体験学習 (調剤体験 2 コマ 手塚担当)

調剤体験では、実薬を用いて調剤体験を行う模擬体験実習の担当者として指導に携わった。

2 年生への教育：

A) 薬理学 1 (三部担当 16 コマ 科目責任者)

薬理学 1 では 1 年次の基礎薬学系科目で学習した知識を基盤に、正常および病的状態にある生体での薬物の作用、薬物とその受容体結合、細胞内・細胞間情報伝達、および薬物用量と作用の関係を 4 コマで解説した。その後、様々な領域の薬物の薬理作用を各論として解説した。授業アンケートでの学生からの評価も高く (5 段階中 4.48)、教育効果も上がっていると考えられた。

3 年生への教育：

A) 医療薬学2 (三部担当 20 コマ 科目責任者)

多くの病気は、ホルモンなどの産生・分泌調節機構の不調や、身体機能が環境と食生活の変化などに対応できないことにより発症する。本講義では、内分泌調節機構、内分泌疾患、内分泌関連医薬品、感覚器疾患およびその治療薬などについて講義した。講義内容は、1) ホメオスタシスとフィードバック機構、2) 下垂体前葉ホルモンの生理作用および関連疾患と治療薬、3) 下垂体後葉ホルモンの生理作用および関連疾患と治療薬、4) 甲状腺ホルモンおよび副腎ホルモンの生理作用、関連疾患と治療薬、5) 性ホルモンの生理作用および関連疾患と治療薬、6) 目、耳および鼻などの感覚器疾患とその治療薬、7) 皮膚疾患とその治療薬について教科書、プリントを用いて講義した。授業アンケートでの学生からの評価も高く(5段階中4.61)、教育効果も上がっていると考えられた。

B) 医療薬学4 (三部および手塚担当、14 コマ 科目責任者)

循環器疾患と泌尿器疾患とそれらの治療薬に関して講義した。具体的な講義内容は、1) 高血圧とその治療薬、2) 不整脈とその治療薬、3) 心不全とその治療薬、4) 虚血性心疾患とその治療薬、5) 血液疾患とその治療薬、6) 泌尿器疾患とその治療薬に関して、教科書、プリントを用いて講義した。授業アンケートでの学生からの評価も高く(5段階中4.55)、教育効果も上がっていると考えられた。

C) 薬学実習2 (薬理学実習) (三部、手塚担当 科目責任者)

薬理学実習では、薬理学や医療薬学で学んだ知識を実際に活用する術を学ぶため、1日2コマ、4日間実施された。最初の4日間は実際にマウスを用いて、マウス保定および投与の練習、向精神薬による全身麻酔薬の作用増強の確認、利尿薬の作用発現実験およびマウスの腸管からの栄養素吸収に対する各種薬物の作用を観察した。最終日である5日目は、ラットの血圧シミュレーションプログラムを用いて、アゴニスト-アンタゴニストの反応性などを学んだ。そして、授業アンケートでの学生からの評価は5段階中4.54であり、教育効果も上がっていると考えられた。

D) 看護体験実習 (三部、手塚担当 科目責任者)

看護体験実習では、薬学部3年生が看護活動を自ら実践することを通して、患者との接し方や患者に共感することの大切さを学ぶ。また、患者対応に必要な心理学的および行動科学的な基礎能力を培い、患者とのコミュニケーションを通して得られた各種情報から患者の抱えている問題点を見いだす努力を行い、それらに配慮できる態度を養うのが目的である。この実習科目の企画および運営を担当した。また、看護体験実習を実施する前に、血圧、脈拍測定などのフィジカルアセスメントのトレーニングが必要であるため、事前学習を実施した。本実習は、3年生にとって、初めて実際の医療現場を体験する機会になる。実習は4日間実施された。5日目には看護体験実習を通じて成長できたことに関し、PBLを行い、班ごとに発表会を行った。看護体験実習は、授業アンケートでの学生からの評価も高く(5段階中4.79)、教育効果も上がっていると考えられた。

4-6年生への教育：

A) 症例・処方解析学 (三部担当 9 コマ 科目責任者)

本講義は、代表的な8疾患（がん、高血圧症、糖尿病、心疾患、脳血管障害、精神神経疾患、免疫・アレルギー疾患、感染症）に関する薬物治療の症例解析能力を身につけることを目的として行われた。講義は、医療現場で実際にあった症例や処方に関して学生が自分で資料を用いて解析し、最後に担当教員が解説していく形式で行われた。担当教員は、二瓶哲非常勤講師（附属病院薬剤部）（1コマ）、西谷教授（1コマ）、松浦特任教授（5コマ）および三部（9コマ）である。授業アンケートでの学生からの評価は（5段階中 4.35）であった。

B) 医療倫理とヒューマニズム（三部担当 1コマ）

「医薬品と医療倫理（1）医薬品販売」というタイトルで、現在問題になっているインターネットでの薬物の販売および遠隔服薬指導について解説した。その後、学生1人1人に考えさせ、レポートを提出させた。

C) 総合薬物治療演習（三部 20コマ、手塚 10コマ 科目責任者）

本科目では、4年間の薬学教育の復習とまとめを行い、薬学専門科目の知識を統合し、薬物治療に関する能力を身につけることを目的として開講され、白石特任教授と三部が運営を担当した。本科目の前半部分では、薬学部の教員が分担して、広範囲の専門分野に渡る知識のまとめを講義した。後半部分では、症例・処方解析学で行った様々な症例課題を多数取り組ませた。各々の学生は様々な情報ソースを駆使して課題を調べ、その結果をレポートとして提出した。そのレポートの評価は手塚助教が行った。本科目により専門性の高い薬物治療に関する知識を身につけ、適切な薬物治療を考察できるようになると考えられた。

D) 実践衛生薬学（手塚担当 1コマ）

実践衛生薬学では、手塚が担当し、「学校薬剤師の業務」について具体的な例を上げながら説明した。実際に複数校の学校薬剤師を兼務している手塚助教の説明により、学校薬剤師の仕事に対する理解が深まったと思われる。

E) 卒業研究1（三部、手塚担当）

卒業研究1は、研究を行う上で必要な基本的な考え方および基礎的な手技操作の習得を目的として行われた。実際には、ベンチワークとして欠かせないピペッティングのトレーニングとして、Lowry法によるタンパク定量およびアルカリホスファターゼ活性を測定した。また、動物実験を行う前のトレーニングとして、マウスへの薬物投与方法、保定法、採血法などを訓練した。また、表現型解析に必要な解剖学的知識を身につけるため、心臓、脳、肺などの主要臓器の単離トレーニングを行った。その上で、麻酔薬の効果と投与量の計算、利尿薬の利尿作用など、実際にマウスを使用して検証した。さらに卒業研究1内で英語の試薬解説書などを読解させた。

F) 薬学実習Ⅲ（フィジカルアセスメント実習）（三部、手塚担当 科目責任者）

本実習の目的は、代表的な疾患治療薬の作用および選択基準を理解し、臨床での治療薬の適否を議論できる能力を身に付けさせることである。実習は、地域医療学分野の高橋寛教授、松浦誠特任教授と薬剤治療学分野教員で実施された。実習では、前半（月曜日-火曜日）に脈拍、血圧などのバイタルサインの測定や触診、視診といった「フィジカルアセスメント」によって患者さんから直接情報を得るトレーニングを行った。実際には、グループごとに異なる血圧、心拍数をセットしてある患者シミュレータを用いて、それらのバイタルサインの測

定を行った。後半では様々な状況の症例に関して、グループ毎にインタビューし、その結果をグループで議論分析し、その結果を発表会でプレゼンテーションさせる形で行った。授業アンケートでの学生からの評価は（5段階中 4.54）であった。

G) 卒業研究（三部、手塚）

5～6年生の卒業研究に関しては、学生それぞれに個別の研究テーマを与え、研究を進めた。また、個々の学生毎に分野職員が指導責任者として担当し、それぞれのプロジェクト毎に直接指導し、学生毎に卒業研究発表を行わせ、卒業論文をまとめさせた。また、英語論文の読解力を養うため各学生の研究テーマに関連する論文紹介を行わせた。

H) 治療戦略概論（三部担当 2 コマ）

本講義は、最新の治療薬及び治療方法に関するガイドラインを学ぶことを目的として行われた。2 コマの講義では、高血圧症、糖尿病、心不全、心房細動、虚血性心疾患に関する最新の治療薬やガイドラインを紹介した。

I) 総合講義および総合演習（三部担当 3 コマ、手塚担当 1 コマ）

総合講義および総合演習では、種々の内分泌疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、感覚器疾患の特徴的症候、治療薬について解説、講義、演習を行った。（三部）

学校薬剤師として知っておくべき知識として学校環境衛生検査（空気検査、水質検査）および乱用薬物について解説、講義、演習を行った。（手塚）

◆◆ 社会貢献 ◆◆

所属学会及び委員等

三部 篤：日本薬学会、日本薬理学会（学術評議員）、日本循環薬理学会、日本薬剤師会、岩手県薬剤師会

手塚 優：日本薬学会、日本生化学会、薬学教育学会、日本病院薬剤師会、日本薬剤師会、岩手県薬剤師会、岩手県病院薬剤師会、日本薬理学会、小児臨床薬理学会

その他

三部 篤：岩手県立盛岡第三高等学校 学校薬剤師、岩手県立葛巻高等学校 学校薬剤師

手塚 優：盛岡市学校薬剤師会 会長、矢巾町学校薬剤師（矢巾町立矢巾中学校、矢巾町立矢巾北中学校、矢巾町立矢巾東小学校、矢巾町立徳田小学校、矢巾町立煙山小学校、矢巾町立不動小学校）盛岡市立太田東小学校 学校薬剤師、津志田保育園 学校薬剤師

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学内委員等

三部 篤： 1) 動物研究センター運営委員会委員 2) 動物実験委員会委員
3) 剣道部薬学部部長 4) 硬式テニス部薬学部部長

学部内委員等

三部 篤： 1) 教務委員会委員 2) 大学院教務委員会委員 3) 薬学部広報委員会委員
4) 薬学部動物実験委員会委員 5) 薬学部動物研究センター運営委員会委員
手塚 優： 1) 実務実習部会委員 2) OSCE 委員会委員

◆◆ その他特記事項 ◆◆

早期体験学習（三部、手塚）、薬学部 OSCE（手塚）、薬学部 CBT（手塚）

医療薬科学講座 創剤学分野

Department of Clinical Pharmaceutical Science

Division of Advanced Pharmaceutics

准教授 杉山 育美（すぎやま いくみ）

平成 16 年 北陸大学薬学部卒業

平成 18 年 静岡県立大学大学院薬学研究科博士前期課程修了

平成 22 年 博士（薬学）静岡県立大学大学院薬学研究科（論文）

前職：岩手医科大学薬学部医療薬科学講座創剤学分野 講師

◆◆ 講座の自己点検・評価 ◆◆

2024 年度（令和 6 年度）は 1 名の専任教員により教育・研究活動を行った。

教育関連では、例年通りに創剤学 1、創剤学 2、薬物送達学、日本薬局方概論及び創剤学実習（薬学実習 2）、自由科目としてアンチ・ドーピングを開講した。更に、6 年生 3 名の卒業研究 2 を指導し、卒業研究発表会に臨むとともに、卒業論文を作成させた。また、5 年生 1 名の卒業研究 2、4 年生 2 名の卒業研究 1 を担当した。

杉山は、上記科目の科目責任者の他、3 年生の実践薬学英語 2、4 年生の総合薬学治療演習、6 年生の総合講義および総合演習を担当した。また、事前実務実習や早期体験学習で学生指導にあたった他、オープンキャンパス、ウインターセッションを担当し学外へむけた活動にも携わった。特にウインターセッションでは 1 講義を担当し、高校生へ大学で学ぶことについて講義した。

学内委員としては CBT 実施委員会委員、ホームページワーキンググループのメンバーとしてInstagramを担当した。学外では岩手県体育協会スポーツ医・科学委員会委員、アンチ・ドーピング部会員、女性アスリート部会員、いわてグルージャ盛岡のスポーツファーマシストとして活動した。スポーツファーマシスト活動の一環として国民スポーツ大会である SAGA2024 および第 79 回国民スポーツ大会冬季大会にて、岩手県選手団の結団式でアンチ・ドーピング指導をするとともに本部役員として選手団に帯同した。北上支部会における 3 校の学校薬剤師としては、薬物乱用防止教室を開催および学習環境の検査を行い各校にて指導を行った。令和 6 年度薬学教育協議会日本薬局方教科検討委員会委員として担当者会議に出席し、日本薬局方に関する教育について意見を述べた。

社会貢献に関しては、岩手県スポーツ協会、岩手県文化スポーツ部、岩手県薬剤師会、県立不来方高等学校、花巻東高等学校からの依頼講演を行った。盛岡シティマラソンでは自由科目アンチ・ドーピングを受講した学生とともに、会場にてアンチ・ドーピングの啓発活動を実施した。さらに、学校薬剤師として薬物乱用講義を実施するとともに学校環境を整備した。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

2 年次の後期に開講した創剤学 1 は山内貴非常勤講師とともに物理薬剤学から創剤学にいたる基礎的な部分を講義した。薬剤師国家試験の重要な部分を占める内容の基礎として物理学的側面からのアプローチをはかる必要があり、医薬品および薬物治療との関連性を示しながら講義を行った。また、海外における薬剤師業務について山内講師にご講義いただき、環境により変化する剤形の在り方について学ぶ機会を設定した。

3 年次開講講義では、前期の創剤学 2 は創剤学 1 との関連性を示しつつ日本薬局方に収載されている剤形に関し講義をするとともに、Drug Delivery System (DDS) について詳細に講義を行った。DDS 関連製剤の一環として動物の薬物治療について獣医師である鈴木一由非常勤講師にご講義いただいた。後期には、創剤学 1 および創剤学 2 講義内容を基礎として薬物送達学を開講し、製剤学分野での新規の剤形創生を果たす DDS の最新の知見を講義した。関連講義として、医学部血液腫瘍内科学講座の伊藤薫樹教授に臨床現場における DDS の実態についてご講義いただいた。後期に実施した薬学実習 2 の創剤学実習では、衛生化学分野の米澤穂波助教および佐塚泰之非常勤講師にお手伝いいただき、日本薬局方に規定されている製剤試験法を実施するとともに最先端の DDS キャリアの調製をプログラムに組み込んだ。本実習は薬学部特有の実習であり、医薬品の研究、開発、製造の分野で実際に行われている項目をその内容としている。

4 年次開講講義において、日本薬局方概論では 2～4 年次で開講した創剤学関連講義の集約をはかるとともに CBT や国家試験を意識した内容を含め、薬剤師に必要な重要な知識に関し新たな知見を交えて講義した。後期の総合薬学治療演習では、医薬品との関連性を重点的に講義した。また、4 年生に対して自由科目としてアンチ・ドーピングを開講し、希望者と盛岡シティマラソンにて課外活動を行うなど、薬剤師取得後のスポーツファーマシストへの理解を深められる内容を企画した。

創剤学 1、創剤学 2、薬物送達学、日本薬局方概論のいずれの講義においても、各回の講義の最初に前回の講義内容に関する小テストにて習熟度をチェックするとともに、これにより出席を確認した。2、3 年生に対しては、再試験前に対象者に補講を実施した。授業アンケートの結果はいずれの講義も 4.0 以上であり、特に創剤学 2 については薬学部全科目の 2 位として表彰された。授業は板書で行い、学生が黒板を写す時間を十分に設け、時間に余裕をもって授業を進めていることが学生の内容理解の向上をもたらし、授業アンケートの高得点につながったと考えている。

その他、科目担当者として薬学実践英語 2、総合講義、総合演習に携わった。6 年次開講の総合講義および総合演習では、6 年間の総まとめを行った。総合試験後のフィードバック講義に加えてジャンプアップ講義、ブレイクスルー講義を行った。また、CBT 実施委員会委員、OSCE 誘導係、事前実務実習のチューター、4 学部合同セミナーチューター、早期体験学習も担当した。

卒業研究については、卒業研究 2 にて 6 年生 3 名、5 年生 1 名を指導し、学生はひとり 1 テ

ーマで研究を担当して卒業研究発表会に挑んだ。5年生は昨年に引き続き2度目の学会発表を行った。6年生は卒業研究発表会にて論理的な発表およびディスカッションを行い、卒業論文の完成に至った。4年生の卒業研究1は、2名の所属学生を指導した。卒業研究1、2の研究テーマは創剤学の基礎研究から臨床研究にまで幅を広げており、様々な展開がはかられている。6年生は卒業、薬剤師国家試験に向けて様々な講義を受けるとともに各自で勉強していくことになるが、チューターとして杉山が3名の学生の勉学面、精神面を支えるとともに指導を行った。

また、杉山が指導責任者として大学院薬学研究科博士課程4年1名の研究指導を行い修了に至った。

◆◆ 社会貢献 ◆◆

所属学会及び委員等

杉山育美：日本薬剤学会（代議員）、日本DDS学会（評議員）、日本薬学会、日本癌学会、日本医療薬学会、日本がん転移学会、アメリカ癌学会、岩手県体育協会スポーツ医・科学委員、同アンチ・ドーピング部会委員、同女性アスリート部会委員、公認スポーツファーマシスト

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学部内委員等

杉山育美：CBT実施委員会委員、OSCE誘導担当、広報委員ホームページワーキンググループInstagram担当、オープンキャンパス担当、高大連携ウインターセッション担当、実務実習指導薬剤師養成ワークショップ参加

◆◆ その他特記事項 ◆◆

杉山育美：

各種講演

1. 岩手県立不来方高等学校スポーツ総合演習 講師
「スポーツとアンチ・ドーピング」
2. 花巻東高等学校スポーツコース探究活動 講師
3. 酪農学園大学獣医学部・看護学部 講師
「薬剤師から見た獣医臨床薬理学」
4. 岩手県スポーツ協会 アンチ・ドーピング研修 講師
5. 花巻市薬剤師会研修会 座長
6. 岩手県立黒沢尻工業高等学校 薬物乱用防止教室 講師
「薬物乱用防止教室」

7. 公認スポーツ指導者研修会 講師
「アスリートサポートに必要な薬・サプリメント・プロテインの知識」
8. 国民スポーツ大会 岩手県選手団結団式 アンチ・ドーピング講習 講師
「アンチ・ドーピングのために注意すべきポイント」
9. 徳島大学大学院医歯薬学研究部 DDS研究センター 特別講演会 講師
「機能性付与を目指した古くて新しいDDS製剤」
10. 北上市立南中学校 薬物乱用防止教室 講師
「薬物乱用防止教室」
11. 遠野市スポーツ少年団 指導者スポーツ推進委員 ドーピング研修 講師
「今日から使えるアンチ・ドーピングの基礎知識」
12. 北上市立南小学校 薬物乱用防止教室 講師
「薬物乱用防止教室」
13. 岩手県スーパーキッズ（中学生）アンチ・ドーピング研修 講師
「アンチ・ドーピング」
14. 岩手県スポーツ協会 女性アスリートサポートセミナー2024 講師
「ハラスメントと寄り添いの境界線を考える」
15. 岩手県スーパーキッズ（小学生）アンチ・ドーピング研修 講師
「アンチ・ドーピング」
16. 岩手県薬剤師会 令和6年度アンチ・ドーピング研修会 講師
「女性アスリートの健康を守る」

授業アンケート

令和6年度授業評価「創剤学2」第2位（4.68）

学校薬剤師

岩手県立黒沢尻工業高等学校、北上市立南中学校、北上市立南小学校

調剤支援

はなぞの薬局（奥州市）

その他

1. 北東北エリアマガジン rakra web 版「いますぐ話したくなる薬の豆知識」担当
2. 国民スポーツ大会 SAGA2024 帯同（岩手県団本部役員）
3. 盛岡シティマラソン アンチ・ドーピング啓蒙活動
4. 第79回国民スポーツ大会冬季大会スケート競技会 帯同（岩手県団本部役員）

医療薬科学講座 薬物代謝動態学分野

Department of Clinical Pharmaceutical Sciences
Division of Pharmacodynamics and Molecular Genetics

教授 幅野 渉 (はばの わたる)

平成元年 東京理科大学薬学部卒業

平成3年 東京理科大学薬学部博士前期修士課程修了

平成13年 博士(医学)(岩手医科大学)

前職：岩手医科大学薬学部医療薬科学講座薬物代謝動態学分野准教授

講師 寺島 潤 (てらしま じゅん)

平成8年 金沢大学理学部卒業

平成13年 金沢大学大学院自然科学研究科博士後期課程修了、博士(学術)

前職：岩手医科大学薬学部医療薬科学講座薬物代謝動態学分野助教

◆◆ 分野の自己点検・評価 ◆◆

薬物代謝動態学分野は、2024年5月現在、教授 幅野渉、講師 寺島潤の2名で構成されている。幅野は、薬学部教務委員会総合試験部会の部会長として六学年総合試験の実施体制の整備と実施における統括責任者を務めた。また、同委員会教科課程部会委員およびOSCE委員として、薬学部教科課程の編成とOSCEの実施を担当した。寺島は、薬学部教務委員会教育検証部会委員として、薬学部教員の授業改善に向けた方策の検討と推進に取り組んだ。当分野が担当する主な講義科目は、一学年の薬学入門、薬学数学2、二学年の薬物動態学、基礎演習1、三学年の薬物動態解析1、薬物動態解析2、基礎演習2、基礎演習3、四学年の医薬情報科学、医療統計学、総合薬物治療演習、五学年の薬学特論(生物・薬理)、薬学特論(衛生・分析・動態)、六学年の総合講義・総合演習である。当分野担当の実習科目は、三学年の薬学実習2のうち薬物代謝学実習、四学年の実務基礎実習、卒業研究1、五、六学年の卒業研究2であった。また、五学年学生の実務実習(薬局、病院)に係る巡回指導を行った。当分野は、薬物動態学・薬力学の側面から安全かつ有効な薬物治療の施行や、健康を保つ生活習慣の指導ができる人材育成を目指しており、おおむねその目標達成に向けた教育活動、研究活動が展開できていると考えている。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

3名の一学年の学生について、幅野がクラス担任となり、4月、7月、9月に面談を行った。分野配属となる四学年4名、五学年5名、六学年8名については、それぞれ教員1名がチュ

ーターとなり、卒業研究の指導と学習の支援にあたった。定期試験で合格点に達しなかった各学年の学生については、再試験の前に面談を実施し学習状況の確認と指導を行った。

当分野が主に担当する薬物動態学の各科目では、患者ごとに有効で安全な薬物治療を実践するために必要な知識と技能の習得が目標となる。導入科目である一学年の「薬学入門」では、生体内での薬物の動きの原則を理解し、肝初回通過効果やバイオアベイラビリティ等の基本用語を知ることにより目的を絞った。これらの用語は他の科目の授業でも登場することが予想されるため、学生が各科目と薬物動態とのつながりを意識しながら学べる効果を期待した。二学年後期の「薬物動態学」では、薬物動態の基本である吸収・分布・代謝・排泄（ADME）過程におけるメカニズムについて、機能形態学等で学んだ知識を確認しつつ、さらに薬物動態の視点から理解が深まるように講義を進めた。この時期に学生が知っている薬物はまだ多くないため、個々の薬物の動態の違いについては三学年以後に学べるように配慮した。三学年前期の「薬物動態解析 1」は、血中や尿中の薬物濃度の推移を解析するために必要となる薬物速度論の基本理論と技法を学ぶ科目である。薬物動態学を苦手とする学生ほど、薬物動態パラメータの定義や意義を理解せずに、計算式の暗記に頼る傾向がある。患者に対する最適な薬物治療を実施することが最終の目標であることを意識させ、演習課題を解くことで理解が深まるよう努めた。三学年後期の「薬物動態解析 2」は、「薬物動態学」と「薬物動態解析 1」で学んだ知識や技法を活用し、患者ごとに異なる薬物動態を考慮したより詳細な解析技法を学ぶ科目である。生理的な要因や病態、薬物相互作用等によって薬物の血漿タンパク質との結合や臓器クリアランス等が変動するメカニズムを理解し、これらの指標を用いて患者の薬物動態の変動を評価する技法を修得させた。一方、同時期には当分野が担当する「薬物代謝学実習」が開講された。同実習では、薬物代謝酵素の遺伝子多型や遺伝子発現の誘導を実測することを通じて、薬物代謝酵素の変動要因に関する知識と解析技法を修得することを目的とした。講義科目の内容と重複するため、薬物代謝過程の諸問題について理解が深まることを期待した。

寺島が担当している四学年の医薬情報科学（科目責任者：情報薬科学分野の西谷教授）では、医薬品開発過程で発出される情報の種類、加工、収集、提供、作成、テラーメイド薬物治療を目指した薬物代謝酵素等の遺伝子多型を含めて解説を行った。寺島が担当した医療統計学（共通教育センターの高橋教授と分担して担当）では、治験等、医薬品開発の各段階において必要となる統計学的解析について解説した。すなわち、前者では医薬品の適正使用に役立つ医薬情報の種類と内容について学び、後者では医薬情報の評価、加工、提供に必要な統計学的処理の方法を学ぶことができるよう配慮した。これらの科目を同時期に行うことは有意義であると考えている。

五学年の薬学特論（生物・薬理）と薬学特論（衛生・分析・動態）では、寺島が生物、幅野が動態領域の講義をそれぞれ担当し、六学年の総合講義・総合演習への橋渡しとなる基礎知識の確認と演習を行った。

四学年後期の実務基礎実習では、当分野は「疑義照会・他職種への情報提供」を担当した。

四学年の卒業研究 1、五学年、六年生の卒業研究は、薬物代謝に関連する遺伝子のエピジェネティクスによる発現制御と薬物応答性（幅野）、腸内細菌叢が分泌する短鎖脂肪酸が大腸が

ん細胞の薬物代謝能力に与える影響(寺島)からテーマを選定して各学生が研究に従事した。

六学年の総合講義と総合演習では、幅野は薬物動態学(薬剤)と疫学(衛生)の分野、寺島は個別化医療(病態・薬物治療)の分野の総合的な知識の確認を行った。また、修得した知識をいかにして医薬品の適正使用につなげるか、ということにも注力した講義を行った。

◆◆ 社会貢献 ◆◆

所属学会及び委員等

幅野 渉：日本薬物動態学会(代議員)、日本薬学会、日本癌学会

薬剤師国家試験問題検討委員会薬剤部会委員、薬剤学教科担当教員

岩手県薬事審議会委員

寺島 潤：日本薬物動態学会(評議員)、日本分子生物学会、日本癌学会、日本組織培養学会、日本薬学会

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学内委員等

幅野 渉：組換え DNA 安全委員会委員、生命科学技术研究センター運営委員会委員、研究者支援室設置準備委員会委員、男子排球部薬学部部長

寺島 潤：共済会代議員、尚綱会幹事

学部内委員等

幅野 渉：総合試験部会部会長、教科課程部会委員、OSCE 委員会委員、薬学部研究推進委員会委員

寺島 潤：国試対策委員、教育検証部会

医療薬科学講座 衛生化学分野

Department of Clinical Pharmaceutical Sciences

Division of Health Chemistry

教 授 杉山 晶規（すぎやま あきのり）

昭和 63 年 東京理科大学薬学部卒業

平成 5 年 東京大学大学院薬学系研究科博士課程修了、博士（薬学）

前職：岩手医科大学医療薬科学講座衛生化学分野准教授

助 教 米澤 穂波（よねざわ ほなみ）

平成 30 年 岩手医科大学薬学部卒業

令和 4 年 岩手医科大学大学院薬学研究科博士課程修了、博士（薬学）

研究員 小笠原 信敬（おがさわら のぶたか）

平成 11 年 東京薬科大学薬学部卒業

平成 13 年 東京薬科大学大学院修了

平成 30 年 岩手医科大学薬学研究科博士課程修了、博士（薬学）

現職：株式会社リペリコ

◆◆ 分野の自己点検・評価 ◆◆

今年度は教授 1 名、助教 1 名の常勤計 2 名及び、非常勤講師（外部 2 名と他学部からの兼任講師 1 名）4 名、他分野教員 5 名の協力を得て、教育・研究活動を行った。教育面について、本分野は 1 年次の薬学入門（杉山）、早期体験学習（杉山）、2 年次の食品衛生学（杉山）と環境衛生学（杉山）、早期臨床体験（杉山、米澤）、3 年次の保健衛生学（杉山、米澤と他分野 1 名）、毒性学（杉山）、放射化学（杉山と非常勤 1 名）、薬学実習 II 衛生化学実習（杉山、米澤）、4 年次の実践衛生薬学（杉山、米澤と他分野 2 名と他学部 1 名）、卒業研究 1（杉山、米澤）、実務実習事前学習（杉山、米澤）及び総合薬物治療演習（杉山）、5 年次の薬学特論（衛生・分析・動態）（杉山）、卒業研究 2（杉山、米澤）、6 年総合演習、（杉山、米澤）及び総合講義（杉山、米澤）の一部あるいは全コマ、4 学部合同セミナー（杉山）を担当した。杉山は食品衛生学、環境衛生学、保健衛生学、放射化学、毒性学、実践衛生薬学、薬学特論（衛生・分析・動態）、総合演習の科目責任者をそれぞれ務め、円滑に教育活動を実践できた。医学部の講義の一部を担当し、学部間協力にも参加した。委員としては、国試対策委員長として学部長の指揮の元、国試対策の実施にあたった。OSCE 委員長として、OSCE の実施を統括し実施した。FD 活動には欠かさず積極的に参加した。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

本分野では、衛生薬学分野の科目全般を主担当として教育活動を行っている。食品衛生学、環境衛生学、保健衛生学、放射化学、毒性学、薬学実習 2（衛生化学実習）、実践衛生薬学、薬学特論（衛生・分析・動態）が該当し、杉山が科目責任者を務めた。他に総合学習的な科目として、総合薬物治療演習、総合演習、総合講義、実務基礎実習も分担担当した。卒業研究 1、2 では、分野配属生に研究指導を行った。また、他学部への講義協力として、医学部の薬理学の 2 コマ（x2 回）を杉山が担当した。以下に各講義科目について具体的に記す。

(1) 2 年次の科目：食品衛生学（通年）、環境衛生学（後期）、通年の食品衛生学では杉山 22 コマ、環境衛生学では杉山が 14 コマを担当した。食品衛生学では、前期に「栄養素とその代謝、機能性食品、食事摂取基準、栄養素摂取状況」について、後期に、「食品の変質、食品添加物、保健機能食品、遺伝子組換え食品、食品汚染物質、食中毒及び食品衛生行政」について講義を行った。環境衛生学では、衛生薬学の中の「生活環境と健康」について、薬学生が生活環境を学ぶ意義を説明し、地球環境と大気・室内環境、水環境と廃棄物について講義を行った。また、実地学習として都南浄化センター見学を行い、座学で学んだ知識の現場での活用状況を体験させた。講義は、教科書とパワーポイントスライドを用い、また講義資料を配布し、重要箇所がわかりやすく学習できるように配慮した。また、学習成果の途中経過を知るために中間試験を実施し、実施後に個人カルテを配布し、学習の進捗状況を他の学生と比較することを含めて把握・分析させ、学力の向上を図った。講義ごとに宿題プリントを配布した。提出された宿題を添削し、次回講義で返却後フィードバックを行い、日々の復習や知識の定着と自己分析力の醸成を図った。講義終盤には演習課題を配布し、講義全体のまとめに役立てさせた。今年度の授業アンケートでも「説明や授業資料が分かりやすい」、「宿題としての確認問題があって復習しやすい」、「試験の過去問配付もありがたい」などの意見をもらった。講義資料の pdf については moodle にアップし、タブレット機器使用者の利用に役立った。定期試験と再試験の間の時期に、理解度を高めるためのフィードバック講義を行った。

(2) 3 年次の科目：保健衛生学（前期）、放射化学（前期）、毒性学（後期）

前期の保健衛生学では杉山が 8 コマ、米澤が 5 コマ、他分野の教員が 2 コマ、放射化学では杉山が 9 コマ、非常勤講師が 2 コマ、毒性学は杉山が全コマを担当した。保健衛生学では「保健統計や疫学、感染症や生活習慣病、職業病、労働衛生管理」について講義を行った。毒性学では、「化学物質の毒性の特徴や発現機構、毒性評価法、法律による規制、中毒解毒法など」について講義を行った。放射化学では「電離および非電離放射線の性質と物質との相互作用、放射線の生体への影響、放射性医薬品の製造と取扱い、放射線に関する法規と防護」について講義を行った。講義は、教科書とパワーポイントスライドを用い、講義資料も配布して重要箇所がわかりやすく学習できるように配慮した。学習成果の途中経過を知るために中間試験を実施し、実施後に個人カルテを配布し、学習の進捗状況を他の学生と比較することを含めて把握・分析させ、学力の向上を図った。講義ごとに宿題プリントも配布し、提出された宿題は、次回講義で添削・返却しフィードバックを行い、日々の復習や知識の定着、

自己分析力の醸成を図った。放射化学の講義終盤には演習課題を配布し、講義全体のまとめに役立てさせた。今年度の授業アンケートでも「宿題があることでその日の復習を簡単にできるところがよい」、「説明が分かりやすい」などの意見をもらった。講義資料の pdf について moodle にアップし、タブレット機器使用者の利用に役立てた。保健衛生学と毒性学において実施したグループワークの 1 コマにそれぞれについても、問題なく実施できた。また、定期試験と再試験の間の時期に、理解度を高めるためのフィードバック講義を行った。

(3) 実習：薬学実習 2- 衛生化学実習（3 年次前期）

今年度の薬学実習 2 衛生化学実習は分野教員が 2 名で 6 日間（12 コマ）に渡り、2 年次の衛生関連講義で座学として習ったことについて理解を深めること、実際の測定法を習得することなどを目的として実習が実施できた。実習の材料としては、例年同様、日々の生活で毎日、口にする食品や、自宅の水道水、大学近郊の環境水など身近なものを実験材料に用いることで、実習への取り組みやすさを配慮すると共に、日々の食品・環境衛生の向上に対する態度も養われるように工夫した。教材としては、実習項目ごとにわかりやすく整理した実習書を作成し配布した。レポートについても基本フォームを作成・配布し、利用させた。実習班の構成員を 2 名（一部 3 名）とし、学生一人一人が必ず手を動かし実験するよう配慮した。最終日のみ 4 名（一部 3 名）で 1 班の実習とした。実習のまとめとして、実習内容に関するテストを行い、知識の習熟度のさらなる向上を図った。授業アンケートの結果では、「丁寧なアドバイスや注意事項が分かりやすい」、「実習書も説明も分かりやすい」以前テストの実施時間が短いと指摘されたが、20 分から 30 分に変更してからは不満の声はなく適切であったと思われる。

(4) 卒業研究 1（4 年次通年）

今年度は 3 名の学生が新たに配属になり卒業研究を行った。主目的として、研究の基本となる手技や考え方の習得及び、コミュニケーション能力の向上を図った。具体的には、卒業研究に向けた実験操作の原理や手技を身につけるために培養細胞を用いた薬剤処理実験、増殖能測定試験、ウェスタンブロッティングなどを行って、その結果をまとめ、分野内で発表した。また、科学英語論文を読んでその概要の説明をさせた。

(5) 実践衛生薬学（4 年次後期）

実践衛生薬学は杉山が科目責任者となり、3 年次までの衛生薬学関連科目の復習に加えて、疫学研究や栄養研究の専門家による現場での応用例に関する講義や保健所や学校薬剤師における衛生薬学関連の業務内容に即した話など、より実践的でアドバンスな内容となるように講義を設定している。当分野の教員 2 人に加え、1 名の非常勤講師及び他分野の先生 2 名の協力を得て専門的な講義を実施した。教科書とパワーポイントスライドを用いるとともに、必要なプリントを配布して重要箇所がわかりやすく学習できるように配慮した。また適宜、演習プリントを配布して日々復習する習慣付けと知識の定着を図った。アンケートでは「忘れていたところが復習できて良かった」という意見をもらった。講義の設定意図が学生の要

望に合っていると思われる。講義終了から定期試験日まで日数が短いという不満は今年度もなかったが、講義中に使用する指示棒の不具合による異常音の発生について「不快である」と指摘があり、学習環境を損なわないよう配慮が必要である。

(6) 総合薬物治療演習（4 年次後期）

当分野担当分では杉山が、衛生薬学関連科目で 3 年次までに学んだことのうち、同時期に実施される「実践衛生薬学」で取り扱わなかった内容を中心に復習を行った。また、最近の法改正や衛生関連の新しい話題についても補足した。講義では講義資料を配付し、パワーポイントを用いて講義した。講義の終わりには演習を行い、復習と知識の定着に役立たせた。

(7) 実務基礎実習（4 年次後期）

当分野では、所属教員 2 名（杉山、米澤）が計数調剤を実務家教員と協力して分担担当し指導に当たった。今年度も実務家教員が主体となり、実習内容について吟味し、日々の到達度実技試験を行わず、手技の上達よりも「薬や現場の知識を調剤から学ぶこと」を目的として取り組ませた。実習運営は円滑に行うことができた。本実習の仕上げとなる到達度確認試験等の実施にも協力した。

(8) 薬学特論（衛生・分析・動態）（5 年次後期）

本科目では杉山が科目責任者となり、他分野教員 2 名と協力しながら、講義を行った。衛生薬学分野では 4 コマ実施したが、衛生の広範なテーマから、保健統計、食中毒、毒性試験、廃棄物にテーマを絞り、実施した。これらは 5 年生の実務実習にも関連する内容でありまたこの時期以降は薬学部での学習の総まとめの時期にもなるので、その始まりとして取り組みやすい内容として設定した。アンケートでは、衛生関連のポジティブな意見は特になかったが、過去に指摘された「テストまでの期限が短い」というネガティブな意見もなかった。

(9) 卒業研究 2（5, 6 年次通年）

今年度は 5 年生 3 名、6 年生 4 名の学生が、卒業研究 1 の内容を引き継ぎながら、その内容を発展させて卒業研究を行った。教員は 2 名で指導にあたった。6 年生は、卒業研究発表会で自身の研究結果をまとめ発表し、卒業論文を完成させた。このうち 2 名は、仙台で行われた学会でも成果を発表した。5 年生も卒研の時期に順調に研究を進めた。

(10) 総合講義及び総合演習

当分野担当分を杉山と米澤が担当し、衛生薬学の全範囲の中で国家試験でも問われる可能性が高く、また薬学部卒業生として知っておくべき重要な事柄について、また、最近の新しい話題などについてアドバンスな内容も含めて講義した。パワーポイントスライドと配布プリントを用いた。各試験の後には、フィードバックとして解説講義を行い、知識の修正と定着を図った。解説については、印刷物を配布し、後からも確認しやすいように配慮した。

(11) 薬理学（医学部 3 年次前期、2 年次後期）

器官毒性と中毒の解毒法に関する講義を杉山が 2 コマを 2 回行った。

◆◆ 社会貢献 ◆◆

所属学会及び委員等

杉山晶規：日本薬学会、日本生化学会、日本分子生物学会、日本癌学会

米澤穂波：日本薬学会、日本癌学会、日本がん分子標的治療学会

市民講演会、高校での講演などの活動

その他

杉山晶規：岩手県薬事関係試験検討会委員

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学内委員等

杉山晶規：図書委員、環境保全委員、ソフトテニス部薬学部長

学部内委員等

杉山晶規：国試対策委員会（委員長）、教務委員会委員、総合試験部会委員、OSCE 委員会（委員長）、クラス担任、薬学教育協議会 教科担当協議会（衛生薬学、放射科学担当）、私立薬科大学協会薬剤師国家試験問題検討委員会委員（幹事）

米澤穂波：教務委員会 CBT 小部会委員、広報委員会委員

◆◆ その他特記事項 ◆◆

杉山晶規：オープンキャンパス 7 月 27 日（土）、28 日（日）調剤体験

米澤穂波：オープンキャンパス 7 月 27 日（土）、28 日（日）：在校生ライブトーク担当

臨床薬学講座 臨床薬剤学分野

Department of Clinical Pharmacy,
Division of Clinical Pharmaceutics and Pharmacy Practice

教 授 工藤 賢三 (くどう けんぞう)

昭和 58 年 東北薬科大学卒業

平成 15 年 博士 (医学)、岩手医科大学

前職：岩手医科大学薬学部臨床薬剤学講座准教授・附属病院薬剤部副薬剤部長
(薬剤部長として現在も兼務)

准教授 朝賀 純一 (あさか じゅんいち)

平成 14 年 東京理科大学薬学部卒業

平成 16 年 京都大学大学院薬学研究科博士前期課程修了、修士 (薬学)

平成 19 年 京都大学大学院薬学研究科博士後期課程修了、博士 (薬学)

前職：岩手医科大学附属病院薬剤部主任薬剤師 (副薬剤部長として現在も兼務)

助 教 高橋 宏彰 (たかはし ひろあき)

平成 15 年 東北薬科大学薬学部薬学科卒業

平成 17 年 東北薬科大学大学院薬学研究科博士前期課程修了、修士 (薬学)

令和 6 年 博士 (薬学)、岩手医科大学

前職：岩手医科大学附属病院薬剤部薬剤師 (主任薬剤師として現在も兼務)

◆◆ 講座の自己点検・評価 ◆◆

令和 6 年度は、教授 1 名 (工藤賢三)、准教授 1 名 (朝賀純一)、助教 1 名 (高橋宏彰) の 3 名体制で分野運営を行った。当分野の教員は全て本学附属病院薬剤部の薬剤師 (教授・薬剤部長、准教授・副薬剤部長、助教・主任薬剤師) を兼務しており、附属病院との密な連携とともに臨床現場のリアリティを教育する実務家教員としては大変に良い環境を提供している。また、朝賀准教授は、附属病院薬剤部で教育・研修部門担当薬剤長を兼務し、高橋助教は同部門の主任薬剤師として、実務実習の実習内容のコーディネートを主体的に行い、実務実習の質向上に大きく寄与している。

学生の分野配属においては、4 学年は 2 名、5 学年は 1 名、6 学年は 8 名で、配属学生の総数は 11 名であった。また、研究員は 3 名 (本学附属病院薬剤部から 1 名、他 2 名) であった。分野に配属された学生に関しては、卒業研究を指導するとともに学習相談や生活相談、チューターとして国試対策の支援を行った。クラス担任として、2 学年と 3 学年に関しては、適宜面談などを行い、学習相談や生活相談の支援を行った。

当分野教員の 2024 年度の担当した科目は、1 年次では、早期体験学習、3 年次では、基礎演習 2、基礎演習 3、臨床薬学入門、薬事関係法規・制度 1、4 年次では、臨床薬学 1、臨床薬学 3、薬事関係法規・制度 2、医療倫理学とヒューマニズム、実践衛生薬学、症例・処方解析学、総合薬物治療演習、実務基礎実習、卒業研究 1、5 年次では実務実習（病院）、実務実習フォローアップ実習、卒業研究 2、6 年次では、臨床薬学総合演習、実践チーム医療論（病棟実習）、4 学部合同セミナー、総合演習、総合講義、フィードバック講義、卒業研究 2 の講義や実習を担当した。臨床系である当分野は、薬学教育モデルコアカリキュラムに従った授業や実習ができるよう臨床系科目の担当者と打ち合わせを適宜行い、講義や実務基礎実習に反映させた。講義や実務基礎実習については、学生の意見等も参考にしながら、また、最新の医療動向を反映させながら、講義内容、実習スケジュール、実習テキストを適宜改訂し、学生のニーズや学習効率に配慮した実習に心掛けた。

委員会として、教務委員会（工藤）、実務実習部会（朝賀：副部長、高橋）、教科課程部会（朝賀）、卒後研修部会（朝賀）、OSCE 委員会（朝賀）、キャリア支援センター会議（工藤：センター長）、キャリア支援センター薬学部会（工藤：部長）、教育検証部会（工藤）などの各種委員会の委員として参加し、その責務を果たした。また、附属病院内の各種委員会の委員としてもその責務を果たした。

さらに、当分野は医学部の講義や実習及び附属病院高度看護研修センターにおける特定行為教育課程の講義も担当した。また、大学院医学研究科の講義も行い、医学部や附属病院の教育にも大きく寄与している。

今年度も配属学生を受け入れ卒業研究に対応してきたが、附属病院と連携した臨床系講座らしいテーマで研究を行うこともできた。さらに、高橋助教が申請した研究成果公開促進費が採択され、「ひらめき☆ときめきサイエンス」を高校生対象に行った。

当分野の教員は全て附属病院薬剤部も兼務し、薬剤部の運営に関わっている。医療現場の薬剤師として質的向上等に寄与する研修会などに関与し、多くの社会貢献も行った。さらに、看護学校等の講義も担当した。今年度もバランス良く、学生教育、研究、社会貢献等を行い、臨床系講座としてほぼ満足できる成果であったものとする。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

令和 6 年度は、1 学年については早期体験学習の模擬体験（朝賀、高橋、各 4 コマ）、病院見学（朝賀 2 コマ）を担当した。早期体験学習の病院見学のコーディネートは当分野が行った。3 学年については、基礎演習 2（朝賀 2 コマ）、基礎演習 3（朝賀 1 コマ、高橋 2 コマ）、臨床薬学入門（高橋 3 コマ）、薬事関係法規・制度 1（朝賀 2 コマ）を担当した。4 学年については、臨床薬学 1（科目責任者：松浦・工藤；工藤 3 コマ、高橋 3 コマ）、臨床薬学 3（科目責任者：工藤・松浦；工藤 1 コマ、朝賀 2 コマ、高橋 1 コマ、非常勤講師遠野 1 コマ・小原 1 コマ）、薬事関係法規・制度 2（科目責任者：工藤；工藤 8 コマ、非常勤講師小林 1 コマ・佐藤（信） 1 コマ）、症例・処方解析学（工藤 1 コマ）、医療倫理とヒューマニズム（工藤 1 コマ）、実践衛生薬学（朝賀 1 コマ）、総合薬物治療演習（工藤 1 コマ）、実務基礎実習（科目責任者：工藤・朝賀；工藤 69 コマ、朝賀 83 コマ、高橋 73 コマ）などの講義や実習を担当した。

6 学年については、臨床薬学総合演習（朝賀・松浦；工藤 7 コマ、朝賀 8 コマ、高橋 4 コマ）、総合講義（工藤 3 コマ、朝賀 3 コマ、高橋 1 コマ）、総合演習（工藤 1 コマ、朝賀 1 コマ）、実践チーム医療論（工藤、朝賀、高橋各 23 コマ）、4 学部合同セミナー（工藤 2 コマ、朝賀 4 コマ、高橋 4 コマ）などを担当した。

講義・演習及び実習の際には、再度、学習方針、教育成果、到達目標を確認し、学生に分かり易い講義に心掛けた。実務基礎実習（実務実習事前学習）は、コマ数も極めて多いことから、実務家教員だけでは実習に対応できないため、例年通り各講座から実習チューターとして教員のサポートを受けて実施した。変化する今後の OSCE にも対応できるよう内容を検討しながら実施した。実技部分では実習講義後に実習を行う、という順次性を持たせることにより実技の理解を促し、さらに総合復習、到達度試験、臨床能力評価試験、補習などを行うことにより、実務実習の事前学習として知識・技能・態度の修得の担保を図った。昨年度から追加したアドバンス実習として薬歴記載、粉碎・簡易懸濁法の演習及び実習を継続して行った。また、筋注ワクチン投与実習も看護学部教員の協力により今年度も継続して行うことができた。学生及び社会のニーズに配慮することで、学生個々の評価も高いものとなっている。実技の修得が難しい学生に対しては、教員の協力を得ながら補習等、修得のサポートを行った。OSCE では、再試験はあったものの最終的には全員合格させることができた。

6 年次には、アドバンス講義として、平成 30 年度より臨床薬学総合演習を開講している。この科目は、これまでの基礎の知識や実務実習での経験等を踏まえ、代表的な 8 疾患を患者背景に注意して処方解析・チェック、処方提案、服薬指導や患者モニタリングと、臨床で必要な項目を総合的に理解できるように準備した科目である。学生は臨床的考え方と知識の統合ができたものと思われる。また、自由科目である実践チーム医療論を今年も開講することができた。当該科目は、アドバンス臨床実習であり、医学部（附属病院）の内科学講座 8 分野の医師のもとで実習を行うものである。この実習では、患者の診療過程等を学ぶことにより、処方箋が交付されるまでの過程やチーム医療における薬剤師の役割が理解できる本学に特徴的な科目と考えている（詳細は「実践チーム医療論（病棟実習）」の項参照）。後期においては、総合試験（法規・制度・倫理及び実務領域）の問題作成および解説講義を行った。

講座配属となった 4 学年の 1 名の学生について卒業研究 1 の指導を実施した。卒業研究 2 を実施する前に、疾患研究、文献検索法の修得、英文論文の抄読・プレゼン、附属病院の実際の処方箋を元にした処方解析等を行い、薬物療法を理解するとともに卒業研究の動機付けを行った。その後、研究テーマに従って研究を開始した。5 学年、6 学年については、それぞれ 1 名と 6 名の学生に対して卒業研究 2 の指導を行った。また、自由参加ではあるが、創薬有機化学分野との学生と教員の合同セミナー開催により、有機化学と臨床系科目の理解を深める学習支援を行った。6 学年については、チューターとして適宜面談と進路や学習指導を行った。

学部外の教育として、医学部の兼任講師となり 3 学年及び 2 学年の薬理学講義（工藤：薬物動態、医薬品開発、各 1 コマ）及び 3 学年及び 2 学年薬理学実習（工藤、朝賀、高橋：各 6 コマ）を行った。また、4 学年の老年医学（工藤：高齢者の薬物療法、1 コマ）、大学院医学研究科講義も担当した。附属病院高度看護研修センターにおける特定行為教育課程の臨床薬

理の研修サポート等を担当した。

このように当分野は、他分野の臨床系教員と特に臨床系科目において連携しながら講義・実習等、実務に関する教育を行い、成果を上げている。また、薬学部の実務関連の講義・実習のみならず、全学的な臨床薬学及び薬物療法に係わる教育に幅広く携わっている。

◆◆ 社会貢献 ◆◆

所属学会及び委員等

工藤賢三：日本薬学会（東北支部幹事）、日本薬理学会（学術評議員）、日本臨床薬理学会（北海道・東北支部 支部世話人）、日本医療薬学会（代議員）、医薬品相互作用研究会（理事）、日本ジェネリック医薬品・バイオシミラー学会（評議員）、私立医大病院薬剤部研究会（評議員）、日本臨床腫瘍薬学会、日本化学療法学会、日本TDM学会、岩手医学会、日本臨床栄養代謝学会、日本唾液腺学会、レギュラトリーサイエンス学会、日本摂食嚥下リハビリテーション学会、日本臨床疫学会、日本災害医療学会

日本病院薬剤師会（常務理事、広報・出版部部長）、東北病院薬剤師会（副会長）、岩手県病院薬剤師会（会長）、岩手県薬剤師会（常務理事）、東北臨床研究審査機構 ACTIVATO（共同臨床研究審査委員）、病院・薬局実務実習東北地区調整機構（支部委員）、岩手県薬学薬事関係者懇話会（世話人）、薬剤師・看護師のためのリウマチセミナー岩手（代表世話人）、岩手県薬剤師確保対策検討会構成員、日本病院薬剤師会東北ブロック第13回学術大会組織委員会委員

朝賀純一：日本医療薬学会、日本化学療法学会、日本臨床栄養代謝学会、日本臨床腫瘍薬学会、日本エイズ学会、日本褥瘡学会、日本災害医療学会、日本くすりと糖尿病学会、日本ジェネリック医薬品・バイオシミラー学会、日本病院薬剤師会（業務委員会）、医薬品相互作用研究会（編集委員）、東北病院薬剤師会（学術連絡委員会委員長）、岩手県病院薬剤師会（副会長）、岩手糖尿病療養指導士会（理事）、盛岡薬剤師会（理事）、岩手県後発医薬品安心使用促進協議会委員、第12回日本くすりと糖尿病学会学術集会実行委員

高橋宏彰：日本薬学会、日本医療薬学会、医薬品相互作用研究会、日本癌治療学会、日本がんサポーターズケア学会、日本緩和医療学会、日本病院薬剤師会、岩手県病院薬剤師会（教育・研修委員会委員、選挙管理委員会委員）

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学内委員等

工藤賢三：「全学関係」：教学運営会議、キャリア支援センター会議（キャリア支援センター

長)、臨床研究支援センター運営委員会、環境保全委員会、圭陵会監事、共済会幹事

「附属病院関係」：薬剤部運営委員会、附属病院運営会議、総合医療安全対策委員会、臨床部長会議、薬事委員会、医薬品購入委員会、医療の質向上推進専門部会、臨床倫理委員会、治験審査委員会、治験運営委員会、臨床研究審査委員会、化学療法委員会、化学療法センター運営委員会、臨床研修運営委員会、臨床研修委員会、小児科専攻医委員会、特定行為管理委員会、特定行為研修管理委員会、病院職員勤務環境改善委員会、緩和ケア業務運営委員会、医療情報システム運営委員会、放射線障害予防委員会、災害対策委員会、防火・防災管理委員会、附属病院管理者連絡会議、腎センター運営委員会、臨床免疫センター運営委員会、教育研修推進委員会、医療安全に係る外部監査委員会、総合移転整備計画専門部会、病院検討部会など

朝賀純一：「全学関係」：省エネ推進委員会、共済会代議員

「附属病院関係」：医薬品安全管理責任者、総合医療安全対策委員会、医療安全推進委員会、医療安全に係る外部監査委員会、薬事委員会、医薬品購入委員会、治験運営委員会、薬剤部運営委員会

学部内委員等

工藤賢三：教務委員会、キャリア支援センター薬学部会、教育検証部会、第2学年：第9班クラス担任、第3学年：第9班クラス担任

＊その他、薬学教育関係団体における担当

- ・日本私立薬科大学協会 薬剤師国家試験問題検討委員会（法規・制度・倫理 部会）
- ・薬学教育協議会 薬学と社会教科担当教員会議、レギュラトリーサイエンス分野教科担当教員会議

朝賀純一：実務実習部会副部会長、教科課程部会、卒後研修部会、OSCE 委員会

＊その他、薬学教育関係団体における担当

- ・薬学教育協議会 薬学と社会教科担当教員会議、医薬品情報学担当会議担当教員

高橋宏彰：実務実習部会

＊その他、薬学教育関係団体における担当

- ・日本私立薬科大学協会 薬剤師国家試験問題検討委員会（実務部会）

◆◆ その他の特記事項 ◆◆

受賞・表彰等

高橋宏彰：Postdoctoral Award（日本医療薬学会）、日本薬学会東北支部奨励賞（日本薬学会東北支部）

兼任講師・非常勤講師等

工藤賢三：本学医学部兼任講師（老年医学、薬理学、薬理学実習）、
本学大学院医学研究科兼任講師

朝賀純一：本学医学部兼任講師（薬理学実習）、岩手女子高等学校看護科 非常勤講師

高橋宏彰：本学医学部兼任講師（薬理学実習）

テキスト編集協力等

工藤賢三、朝賀純一：マツキヨココカラ&カンパニー著、医薬品登録販売者試験対策テキスト 2025、じほう、2025

工藤賢三、朝賀純一：マツキヨココカラ&カンパニー著、医薬品登録販売者過去問題集 2025、じほう、2025

臨床薬学講座 情報薬科学分野

Department of Clinical Pharmacy,
Division of Integrated Information for Pharmaceutical Sciences

教授 西谷 直之（にしや なおゆき）

平成 6 年 昭和大学薬学部卒業

平成 8 年 昭和大学薬学部博士前期修士課程修了

平成 13 年 博士（薬学）

前職：岩手医科大学薬学部情報薬科学講座准教授

助教 佐京 智子（さきょう ともこ）

平成 11 年 共立薬科大学薬学部薬学科卒業

平成 19 年 東京医科歯科大学大学院医歯薬総合研究科博士課程修了、博士（医学）

前職：岩手医科大学薬学部細胞病態生物学講座助教

助教 氏家 悠貴（うじいえ はるき）

平成 26 年 岩手医科大学薬学部卒業

前職：岩手医科大学附属病院薬剤部（現在も兼務）

名誉教授・研究員 上原 至雅（うえはら よしまさ）

昭和 45 年 東京大学薬学部卒業

昭和 51 年 薬学博士

前職：岩手医科大学薬学部微生物薬品創薬学講座教授

◆◆分野の自己点検・評価 ◆◆

教育では、1 学年のアドバンスト生物、薬学入門、早期体験学習を担当した。2 学年では化学療法学 1、早期臨床体験を担当した。3 学年では、感染症学、化学療法学 2、基礎演習 2、チーム医療リテラシー、放射科学実習を担当した。4 学年では医薬情報科学、症例・処方解析学、薬事関係法規・制度 2、総合薬物治療演習、卒業研究 1、実務基礎実習を担当した。5 学年では、治療戦略概論、医薬品情報セミナー、卒業研究 2 と実務実習の施設担当を行った。6 学年では、臨床薬学総合演習、卒業論文の作成指導、総合講義、総合演習、4 学部合同セミナー、実践チーム医療論を担当した。西谷教授は、薬学部学生部長として全学学生部長会議をはじめ各種委員会において多くの活動に加わり、全学ならびに薬学部の運営に貢献した。

研究面では、文部科研費等の競争的研究資金や企業との共同研究の課題の方向に沿った研究を精力的に行った（研究に関する詳細については、研究業績集に収載）。これらの成果を大

学広報活動にも活かした。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

西谷教授は、1 学年の薬学入門（1 コマ）とアドバンスト生物（1 コマ）においてがん分子標的治療薬について講義した。2 学年では、後期に「化学療法学 1」（10 コマ）を担当し、抗感染症薬の薬理について講義した。3 学年では、前期に「感染症学」（7 コマ）を担当した。院内感染対策等については、医学部臨床検査医学講座の協力を得て、感染症専門薬剤師（小野寺直人 講師）による授業（5 コマ）を行った。症例を示しながら臨床とのつながりを意識させる講義を行った。後期には、「化学療法学 2」（10 コマ）を担当し、主に抗悪性腫瘍薬の薬理と薬物治療について講義した。4 学年では、「医薬情報科学」（7 コマ）を担当し、医薬品開発過程で生み出される医薬品情報とその収集方法や根拠に基づく医療（Evidence-based Medicine, EBM）の概念について講義した。そのうち 1 コマは、医薬品医療機器総合機構（PMDA）の奥裕介非常勤講師に医薬品の開発過程で生じる医薬品情報について講義いただいた。「薬事関係法規・制度 2」で非臨床試験や医薬品開発のコンセプト（1 コマ）について講義した。「症例・処方解析学」（1 コマ）を分担し、より実践的で総合的な考察力を身につけることを目的にがん薬物治療について講義を行った。「実務基礎実習」では、医薬品情報の収集・加工・提供の講義・実習を担当した。また、スモールグループディスカッションや調剤技術に関する実習（19 コマ）も担当した。その他、総合薬物治療演習（3 コマ）や臨床薬学 3（1 コマ）を担当した。5 学年では、「治療戦略概論」で乳がん、大腸がん、肺がんの最新のガイドラインを概説した（5 コマ）。さらに、卒業研究、実務実習施設を担当した。実務実習後の「医薬品情報セミナー」（6 コマ）を担当し、実務実習期間とその前の 1 年間に上市された医薬品について情報提供し、新薬に関する情報について実習施設間のバラツキの軽減を試みた。また、新薬の適応疾患とその治療に用いられる既存薬についても復習し、重要 8 疾患を総復習した。6 学年では「4 学部合同セミナー」（5 コマ）、「臨床薬学総合演習」（7 コマ）、総合講義（4 コマ）、総合演習（1 コマ）を主に担当した。4 学部合同セミナーに用いる課題作成にも貢献した。講座配属された 4～6 年生について、卒業研究を指導した。また、6 学年配属学生のチューターとして、卒業までの学修や国家試験対策の相談役を務めた。大学院薬学研究科では副指導教員や主査・副査を務めた。

佐京助教は、3 学年「化学療法学 2」（2 コマ）、「基礎演習 2」（2 コマ）、「チーム医療リテラシー」（8 コマ）、6 学年「臨床薬学総合演習」（8 コマ）、「総合講義」（3 コマ）、「4 学部合同セミナー」、「卒業研究 1」、「卒業研究 2」、その他、国家試験対策として「ブレイクスルー/ジャンプアップ講義」を分担した。「化学療法学 2」では、悪性腫瘍概論、緩和療法などについて講義を行った。学生の理解を深めるため、それぞれの項目で画像やイラストなどを活用した分かり易い説明を心掛け、講義の終わりには小テストを行い、Moodle 上でフィードバックを行った。また、応用力醸成のため、講義や定期試験には症例問題や計算問題などを積極的に取り入れた。「基礎演習 2」では、「生化学 3」の生命情報を担う遺伝子：組換え DNA に関連する事項と「環境衛生学」の主に大気汚染に関する範囲について演習・講義を行った。「臨床薬

学総合演習」では、大腸がんのコンパニオン診断、薬物治療と調剤上の注意点について講義などを行った。「総合講義」では、衛生の大気汚染分野について講義を行った。低学年で使用した講義資料から特に重要となる項目を抜粋し解説、関連する過去の国家試験問題を提供し、問題を解きながら理解を深められるような工夫を行った。実習項目は、2 学年「早期臨床体験」、4 学年「実務基礎実習」を担当した。「早期臨床体験」では、災害時避難所運営を学ぶためのカードゲームホスト、ケアセンター南昌見学の引率を担当した。「実務基礎実習」では、散剤調剤、デバイスを用いた服薬指導、保険薬局での患者対応と服薬指導、ワクチン静注、アドバンス実習（粉砕調剤、簡易懸濁）、実技試験、補習などを担当した。4 学年薬学共用試験において、CBT では補助試験監督、OSCE では ST 責任者を担当した。分野配属 4 年生 6 名、5 年生 1 名、6 年生 1 名に対して、4 年生は動物講習会、新規 RI 講習会、Sci-Finder 講習会の手配、5、6 年生は個別テーマの実験と卒業論文の作成、国家試験勉強法などを指導した。6 学年の国家試験対策チューターとして担当学生と面談を行い、総合試験結果を基に国家試験に向けた学習法、就職活動や生活習慣について聞き取りやアドバイスをを行った。

氏家助教は、1 学年の早期臨床体験において調剤模擬体験を担当した。3 学年前期に実施した「基礎演習 2」（1 コマ）では、2 学年後期に実施された「感染症学」の範囲について、演習を通じて要点を整理できるよう努めた。また、後期に担当した「化学療法学 2」では、抗がん剤の副作用および肺がんと胃がん、大腸がんにおける代表的なレジメンとコンパニオン診断薬の関係について、実務での経験を交えながら講義を行った。自由科目として 1-3 学年を対象に開講したデジタルトランスフォーメーション入門では、ヒトの表情を分類する AI モデルの構築を学生自身が実践するコンピューター演習を行い、AI に対する理解が深まるよう努めた。4 学年では、実務基礎実習において計数調剤、軟膏調剤、疑義照会、病棟での初回面談、無菌操作と注射剤の調製（1 回目）、在宅での薬学的管理①、デバイスを用いた服薬指導を担当した。また、OSCE では ST 責任者を務め、試験が円滑に遂行されるよう努めた。5 学年前期に実施した治療戦略概論では 1 コマを担当し、主に支持療法の使用方法などを含む実践的な内容について講義した。6 学年前期に行われた臨床薬学総合演習（4 コマ）及び総合演習（1 コマ）では、課題症例を通してがん化学療法における支持療法について講義した。その他、自由科目である実践チーム医療論を担当した。卒業研究 2 では、5 年生 2 名を担当し基本的な実験手技の獲得に向け指導を行った。また、6 学年配属学生のチューターとして、卒業までの学修や国家試験対策の相談役を務めた。

◆◆ 社会貢献 ◆◆

所属学会及び委員等

西谷直之：日本がん分子標的治療学会（監事、評議員）、日本癌学会（評議員）、日本薬学会（東北支部会幹事）、日本分子生物学会、日本感染症学会、日本細胞生物学会、日本ケミカルバイオロジー学会、米国細胞生物学会（The American Society for Cell Biology）、ナショナルバイオリソースプロジェクト「ゼブラフィッシュ」運営委員、Frontiers review editor in Cellular Biochemistry

佐京智子：日本癌学会、日本薬学会、日本がん分子標的治療学会、日本臨床腫瘍薬学会、日本生化学会

氏家悠貴：日本薬学会、日本がん分子標的治療学会、日本医療薬学会

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学内委員等

西谷直之：学生副部長、健康管理センター運営委員会委員、主陵会常任幹事・薬学部同窓会
局長、主陵会学生支援事業選考委員会委員、総合情報センター運営委員、サッカー
一部薬学部長、IMM いわて東北メディカル・メガバンク機構データ管理部門 副
部門長

佐京智子：柔道部薬学部長

氏家悠貴：研究者支援室設置準備委員会、主陵会幹事

学部内委員等

西谷直之：薬学部学生部長、卒後研修部会長、薬学部研究推進委員長、薬学部自己評価委員、
教務委員、広報・入試検討委員、研究科教務委員、キャリア支援センター薬学部
会員、クラス担任（第1学年10班、第2学年10班、第3学年10班）

佐京智子：OSCE 委員会委員

氏家悠貴：教務委員会 OSCE 委員会委員、卒後研修委員会委員

◆◆ その他特記事項 ◆◆

西谷直之：令和6年度 国学院栃木高等学校 大学出張講義 「自然から得られる薬～天然物
医薬品～」(令和6年6月22日)

令和6年度 オープンキャンパス・個別相談(令和6年7月28日)

推薦入試合格者入学前スクーリング チューター(令和7年2月15日)

令和6年度岩手県立盛岡第三高等学校 SRH 課題研究中間発表会 指導助言者(令
和7年2月21日)

佐京智子：令和6年度 フレッシュマン・デー サポート(令和6年4月26日)

令和6年度 オープンキャンパス・調剤体験(令和6年7月27日、28日)

令和6年度 ひらめき★ときめきサイエンス サポート（令和6年8月3日）
令和6年度 大学入学共通テスト 大船渡会場 試験補助監督（令和7年1月18、
19日）
推薦入試合格者入学前スクーリング チューター（令和7年2月15日）

氏家悠貴：令和6年度 オープンキャンパス・在学生ライブトーク・調剤体験（2024年7月
27日、28日）
令和6年度 ひらめき☆ときめきサイエンス（2024年8月3日）
令和6年度 高大連携事業・学びの祭典・花巻北高等学校（2024年12月23、24
日）
令和6年度 大学入学共通テスト 大船渡会場 試験補助監督（2025年1月18、
19日）

臨床薬学講座 地域医療薬学分野

Department of Clinical Pharmacy,
Division of Community Healthcare and Pharmaceutical Sciences

教 授 高橋 寛 (たかはし ひろし)

昭和 58 年 東京薬科大学薬学部卒業

前職：(有) ミヨシファーマシー

特任教授 松浦 誠 (まつうら まこと)

平成 3 年 東日本学園大学薬学部卒業

平成 17 年 博士 (医学)

前職：岩手医科大学薬学部地域医療薬学分野准教授

◆◆ 講座の自己点検・評価 ◆◆

4 年生に対しては、薬物治療の知識や病態の再確認を行い、卒業研究に関する文献の読み合わせも行った。特に地域医療に関連する文献を読み、今後薬剤師として求められる能力について話し合った。

5 年生は、2 期からの実務実習であったため、卒業研究のテーマ選定や、それに関連する論文の読みあわせを行った。実務実習中は、実務実習指導・管理システムを活用して、日報や週報の確認を行い、学生の進捗度を確認し、成長を促すために指導薬剤師と情報交換を行った。

6 年生に対しては卒業研究 2 の指導および卒業論文作成の指導を行った。国家試験対策を行いながらも、限られた時間の中で学生一人ひとりが考えたテーマに取り組み、全員が卒業研究発表会にてポスター発表を行い、卒業論文にまとめることができた。

今年度は結果として、6 年生は 6 名中、3 名が原級留置となり、卒業生 3 名は全員国家試験に合格した。

各学年の学生と時間を共有する機会を確保し、学生とコミュニケーションを取る努力を行った。しかしながら、学生間の横のつながりは維持できたが、授業日程の重なりが少なく、4 年から 6 年の学年を超えた縦のつながりはあまり構築できなかった。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

令和 6 年度は薬学入門 (高橋)、早期体験学習 (高橋、松浦)、早期臨床体験学習 (高橋)、臨床薬学入門 (松浦)、基礎演習 3 (松浦)、薬事関係法規 1 (高橋)、臨床薬学 1 (松浦)、臨床薬学 2 (高橋)、症例・処方解析学 (松浦)、地域医療マネジメント概論 (高橋、松浦)、医療手話コミュニケーション (高橋)、臨床薬学総合演習 (松浦)、多職種連携地域医療演習 (高橋) について科目

責任者あるいはコーディネーターとして担当した。

その他に1年生では薬学入門（高橋、3コマ）、早期体験学習（高橋、10コマ、松浦、2コマ）、2年生では早期臨床体験（高橋、24コマ）、3年生では薬事関係法規・制度1（高橋、8コマ）、臨床薬学入門（松浦、7コマ）、看護体験実習（松浦、8コマ）、基礎演習3（松浦、12コマ）、4年生では医療倫理とヒューマニズム（高橋、4コマ、松浦、2コマ）、臨床薬学1（松浦、5コマ）、臨床薬学2（高橋、14コマ）、臨床薬学3（高橋、1コマ、松浦、1コマ）、症例・処方解析学（松浦、5コマ）、総合薬物治療演習（高橋、1コマ）、薬学実習3（フィジカルアセスメント実習）（高橋、10コマ、松浦、8コマ）、実務基礎実習（高橋、53コマ、松浦、54コマ）、5年生では治療戦略概論（松浦、5コマ）、医薬品情報セミナー（松浦、4コマ）を担当した。5年生では病院および薬局での実務実習（高橋、松浦）を担当し、実習施設と大学間の調整を行った。6年生では、総合講義（高橋、5コマ、松浦、5コマ）、地域医療マネジメント概論（高橋、1コマ、松浦、1コマ）、臨床薬学総合演習（高橋、8コマ、松浦、6コマ）、総合講義・演習（松浦、4コマ）を担当した。さらに自由科目として全学推進機構で実施する地域医療課題解決演習（高橋、6コマ、松浦、2コマ）を担当した。また、薬学部自由科目として、一般用医薬品入門（高橋、4コマ）、多職種連携地域医療演習（高橋、8コマ）、医療手話コミュニケーション（高橋、8コマ）を担当した。

高橋教授は、実務科目を主に担当する以外に、1学年から6学年までの科目を担当して医療人育成の教育の視点で学生全体を見る役割を担当した。

1 学年では、早期体験学習にて地域包括ケアの重要性を学習させるために地域の介護施設等の見学や矢巾町近隣で薬局見学のコーディネートを行った。

2 学年では、早期臨床体験で介護老人保健施設を併設する南昌病院での介護体験実習を行った。コロナ禍ではあったが実習を受け入れていただき、リハビリを行っている患者さんに対し理学療法士と一緒にコミュニケーションをとりながらリハビリの見学をした。午後からは昼食として病院食を試食し、簡易懸濁法の実習を行った。この介護体験実習に向けて、学内でコミュニケーションの授業と認知症サポーター研修を実施した。また、介護体験実習終了後に地域医療を考える授業を行い、地域包括ケアシステムについて学んだ。また、実際に患者さんとコミュニケーションを取る授業においては、元他大学の教員で複数の疾患を抱える患者さんに来校していただき、学生が患者さんに直接質問をしたり、話を傾聴したりする体験を行った。授業後の学生の感想文には、患者さんに対する感謝の言葉がたくさん書かれていた。さらには、10年後に薬剤師として活躍している自分を模造紙に表現することも試みた。学生が個々に考えている自分を表現できる時間となり、楽しんで作業に取り組んでいた。時間としては不十分であるが低学年のうちに、医療だけでなく福祉や介護の重要性やコミュニケーション能力の必要性を学ぶ機会を作った。

3 学年では、薬事関係法規1において、授業の最後に確認テストを毎回行った。QRコードを活用して、google フォームで問題を作成し、スマートフォンから回答してもらい、次の授業時に振り返りと解説講義を行い、学習の支援を行った。このように、繰り返し学習を行うことで、学習の理解度は上がっていた。

4 学年では、臨床薬学2においては、セルフメディケーションの支援に必要な症候学や一般用医薬品の使い方に関する部分を補強した。また、地域医療に関しては現役の薬剤師に非常勤講師を依頼し、現在行われていることの情報提供などでグループワークをサポートしていただいた。

さらに、災害時の薬剤師の活動について、実際に熊本地震で避難所の運営責任者を担当した薬剤師に來校していただき、当時の熊本地震の災害時の薬剤師の役割についてご講義をいただいた。さらには、鹿児島県の離島、奄美大島の病院薬剤師から地域医療の実践と薬剤師の役割についてご講義いただいた。現役の薬剤師からの講義内容は学生にとって魅力的な内容であった。

6 学年では、地域医療マネジメントを担当し、地域医療における多職種連携について実践的な知識が身につくよう考慮し、事前課題の提出と2回のレポートの提出を課題とした。毎回、出欠フォームのアンケートにて、講義内容でどのような気づきが得られたのかを確認しているが、多職種の話が聞けてよかったと声が多い反面、相変わらず開講時期をもっと早くすべきだという批判的な意見もあった。この時期には総合講義や総合演習といった科目が並行して実施されており、そちらの勉強に時間がとられている背景もあると思われるが、レポート内容は年々充実してきていた。また、出欠の確認は Google フォームを活用し、授業中にスマホから意見を述べる方法（mentimeter 等）を取り入れた参加型の授業を心がけた。また、配布物や授業で使ったスライド等は全て moodle 上に登録し、スマホから閲覧できるようにし、感想文もオンラインで提出できるようにするなど、コロナ対策も合わせて ICT への移行を行った。

松浦誠特任教授は実務家教員として実務系科目を担当し、第3学年後期臨床薬学入門、薬学基礎演習3、第4学年前期臨床薬学1の科目責任者および総合講義・演習のコーディネーターを担当した。

臨床薬学入門においては実務科目の入り口として臨床における心構えや薬剤師業務に必要な知識（処方箋の基礎、疑義照会、剤形ごとの調剤方法、医薬品の供給と管理など）に加えて調剤に必要な計算が出来るように指導した。

第4学年の臨床薬学1においては臨床薬学入門の内容を基盤として代表的な8疾患の実践的な薬物療法の教授に加えて近年薬剤師の役割として重要となっている医薬品の安全管理、代表的な疾患の薬学管理など、臨床現場において対応できるよう実践的な内容について指導した。臨床薬学入門、臨床薬学1の授業においては講義の予習・復習のポイントをまとめる講義ポートフォリオを活用し、単元の理解すべきポイントを整理できるようにするとともに、講義終了時もしくは次回講義開始時に小テストを実施することで知識の定着を確認した。小テストは Google フォームを利用し、授業中に配布した QR コードを読み取ることで専用の小テストを受験できるように ICT を活用している。また、小テストは出席確認を兼ねて実施した。このことで、学生が正しく理解しているか否かの確認が容易となり、不十分な理解だと判断される場合は次回講義時に再度説明を行うことで理解できるよう努めた。

また、臨床薬学入門、臨床薬学1授業は教科書の内容に基づき、要点をスライドにまとめて講義を行うことで情報が過多にならないよう配慮した。また、薬剤師業務の急激な変化に教科書が対応できていないところもあり、リフィル処方箋や電子処方箋の運用など将来的に重要となる内容については、薬剤師国家試験での出題有無に関わらず講義内容に含めた。講義で用いるハンドアウトについて印刷媒体は講義開始時に配布したが、予習の資料とするために講義の1週間前を目処に moodle に PDF 形式にてファイルをアップロードした。また、積極的に ICT を活用している学生が増えてきていることもあり、講義終了時ではなく事前に配布するよう配慮した。

第4学年の事前実務実習においては水剤調剤、病棟における初回面談、服薬指導、持参薬鑑別

について担当した。実務実習の基本となることを鑑みて、学生が主体となって取り組むことで能動的な態度が身につくよう指導した。

国家試験対策においてはチューターとして2名担当し、学生個々の特性に合わせた学修方法をデザインし実践し学生の成績向上に努めた。

◆◆ 社会貢献 ◆◆

所属学会及び委員等

高橋 寛：日本医療薬学会（代議員）、日本腎臓病薬物療法学会、日本臨床薬理学会、アプライド・セラピューティック学会（評議委員）、日本老年薬学会（理事）、日本静脈経腸栄養学会、日本薬剤師会

松浦 誠：日本薬学会、日本医療薬学会（認定薬剤師第22-02-0082号）、日本医療薬学会（認定指導薬剤師第22-03-1031号）、日本緩和医療薬学会、American Society of Health-System Pharmacists（北米医療薬学会）、The American Society for Cell Biology（米国細胞生物学会）、PHR 協会、医薬品相互作用研究会、日本薬剤師会、日本病院薬剤師会

社会的活動等

高橋 寛：岩手県学校薬剤師会（盛岡市立見前中学校学校薬剤師）

松浦 誠：岩手県学校薬剤師会（岩手県立紫波総合高等学校学校薬剤師、岩手県立雫石高等学校学校薬剤師）、盛岡夜間急患診療所薬剤師

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学部内委員等

高橋 寛：教育研修部会長、キャリア支援センター薬学部会委員、薬学教育協議会ヒューマニティ関連教科担当教員会議委員

松浦 誠：実務実習部会部会長、薬学部広報・入試検討委員会委員、実習委員会委員、国家試験対策委員会委員、キャリア支援センター薬学部会委員、キャリア支援委員会薬学部会委員、薬学部自己評価専門部会委員、自己点検・評価ワーキンググループ、岩手医科大学実務実習連絡会議委員、薬学教育協議会実務実習教科担当教員会議委員

◆◆ その他特記事項 ◆◆

市民講演会、学外での講演活動

1. 高橋 寛：第79回東北地区認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ

青森大学薬学部

2024年6月1日（土）-2日（日）

2. 高橋 寛：健康サポートのための薬剤師の対応研修会

- 岩手県薬剤師会館 2024 年 7 月 7 日 (日)
3. 高橋 寛：岩手医科大学地域医療多職種連携推進講座 (鹿角)
鹿角市文化の杜交流館コモッセ 文化ホール 2024 年 7 月 9 日 (火)
4. 高橋 寛：鹿角薬剤師会生涯教育
鹿角市福祉保健センター 2024 年 7 月 9 日 (火)
5. 高橋 寛：第 80 回東北地区認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ
福島県薬剤師会館 2024 年 7 月 14 日 (日) -15 日 (月・祝)
6. 高橋 寛：見前中学校 1 学年「職業講話」
見前中学校 2024 年 7 月 17 日 (水)
7. 高橋 寛：健康サポートのための多職種連携研修会
岩手県薬剤師会館 2024 年 8 月 4 日 (日)
8. 高橋 寛：第 81 回東北地区認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ
岩手県薬剤師会館 2024 年 9 月 22 日 (日・祝) -23 日 (月)
9. 高橋 寛：秋田県栄養士会 令和 6 年度生涯教育研修会
秋田県社会福祉会館栄養士会事務所 2024 年 9 月 28 日 (土)
10. 高橋 寛：岩手県栄養士会 令和 6 年度生涯教育研修会
いわて県民情報交流センター (アイーナ) 8 階 会議室 804A 2024 年 9 月 29 日 (日)
11. 高橋 寛：第 82 回東北地区認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ
宮城県薬剤師会館 2024 年 10 月 13 日 (日) -14 日 (月・祝)
12. 高橋 寛：令和 6 年度第 1 回薬局ビジョン推進セミナー (オンライン Zoom)
岩手県薬剤師会館 2024 年 10 月 30 日 (水)
13. 高橋 寛：薬物乱用防止教育
見前中学校 2024 年 11 月 20 日 (水)
14. 高橋 寛：第 3 回盛岡医療センター院外処方箋疑義照会簡素化プロトコル運用協議会・地域
連携薬剤師研修会 国立病院機構盛岡医療センター第 3 研修室 2025 年 3 月 6 日 (木)
15. 高橋 寛：宮城県病院薬剤師会 令和 6 年度 第 2 回薬学教育委員会研修会
東北医科薬科大学 小松島キャンパス (カフェテリア) 2025 年 3 月 22 日 (土)

学外での委員等

高橋 寛：

病院・薬局東北地区調整機構 WS 小委員会代表

日本私立薬科大学協会薬剤師国家試験問題検討委員会委員 (法規・制度・倫理)

日本薬剤師会 健康サポート薬局研修委員会

日本老年薬学会 理事

日本医療薬学会地域薬学ケア専門薬剤師認定委員会

薬学教育協議会 薬学教育者ワークショップ実施委員

日本アプライドセラピューティクス (実践薬物治療) 学会 評議員

岩手県 岩手県薬事関係試験委員

岩手県薬剤師会 理事・実務実習受入対策委員、薬局ビジョン委員
厚生労働省 薬害を学び再発を防止するための教育に関する検討会
厚生労働省 登録販売者の資質向上のあり方に関する研究の研究班
松浦 誠：
日本私立薬科大学協会薬剤師国家試験問題検討委員会委員（実務部会）
岩手県病院薬剤師会広報・会員拡充委員会委員
岩手県病院薬剤師会実務実習対策委員会委員
圭陵会広報局編集委員会委員
病院・薬局実務実習東北地区調整機支部委員
病院・薬局実務実習東北地区調整機大学間小委員会委員
PHR 協会技術委員会委員

臨床薬学講座 薬学教育学分野

Department of Clinical Pharmacy

Division of Pharmaceutical Education

特任教授 白石 博久（しらいし ひろひさ）

平成 8 年 東京大学薬学部製薬化学科卒業

平成 13 年 東京大学大学院薬学系研究科機能薬学専攻博士課程修了、博士（薬学）

前職：岩手医科大学薬学部生物薬学講座生体防御学分野特任教授

◆◆ 分野の自己点検・評価 ◆◆

白石特任教授により、教員 1 名の体制で当分野への配置転換後 2 年目の教育活動を行った。当分野の配属学生は 5 年生 1 名、卒業研究を指導した学生は 5 年生 1 名であった。

本学着任以来担当してきた 2~4 年次および 6 年次の生物系講義・実習科目、前年度より分担している 4 年次、6 年次の実務系演習・実習科目、3 年次の「チーム医療リテラシー」および 6 年次の「4 学部合同セミナー」のファシリテーターに加えて、1 年次の「薬学入門」「早期体験学習」と 2 年次の「早期臨床体験」の科目責任者も担当することとなった。

第 1~3 学年の学年長として低学年の修学状況の把握とサポートにあたると共に、第 4 学年の教務担当として CBT 対策を主導した。更に 6 年生留年生 29 名の自習環境の整備、折々の面談や卒業に向けたメンタルサポートを担当した。

2 期 6 年目の薬学部教科課程部会長として、令和 6 年度カリキュラムの履行、定期試験・再試験の実施や補習プログラムの調整、並びに令和 7 年度のカリキュラム編成・シラバス作成を中心的に担うと共に、令和 4 年度改訂版薬学教育モデル・コア・カリキュラムに対応した本学薬学部独自の教育プログラムの第 2 学年のシラバス作成を主導した。

大学院教育に関しては、医学部の「先端生命・医療画像技術特論」の兼任講師として、一コマ分のビデオ配信講義を担当し、レポート評価を行った。

◆◆ 教育の概要 ◆◆

2024 年度に本分野教員が担当した薬学部における講義・実習は、下記の通りである。

薬学入門（1 年次通年）：科目責任者として、科目全体をオーガナイズすると共に、DP に関するグループワーク 1 コマ、まとめのグループワーク 1 コマを担当した。（当年報の「早期体験学習」の項を参照）

早期体験学習（1 年次後期）：科目責任者として、科目全体をオーガナイズすると共に、事前ガイダンス 1 コマ、グループ討議 6 コマ、地域包括ケアに関する講義 2 コマ、不自由体験の事前説明 1 コマを担当した。

早期臨床体験（2 年次通年）：生命倫理に関するパート（6 コマ、大橋綾子教授）のうち 3 コマを共同で担当した。科目責任者として「被災地と災害時の薬剤師の役割を学ぶ」をオーガナイズし、18 コマを担当した（当年報の「早期臨床体験」の項を参照）。

薬学実践英語 1（2 年次後期）：全 12 コマ中、白石（科目責任者）が 2 コマを担当した。内容は前年度に倣った。昨今その精度が益々向上している翻訳サイト、アプリや生成 AI の活用も認め、内容の理解を優先するよう指導した。

薬学実習 1（2 年次後期）：微生物学実習（12 コマ）を生体防御学分野スタッフと協力して担当した。詳細は、生体防御学分野年報参照。

免疫生物学 2（3 年次前期）：白石が全 12 コマを担当した。生体防御機構が破綻した時に生じるアレルギーや自己免疫などの疾患、免疫不全症、臓器移植、免疫寛容、免疫の医療応用などの基礎を理解させることを目標とした。第 6 回と第 12 回の講義にそれまでの講義の総復習の為に演習問題を提供した。課外の補習講義や、再試験に向けた解説講義も実施した。

応用生体防御学（3 年次後期）：論述式中間試験 1 コマを含む全 10 コマのオムニバス講義のうち、白石は 2 コマを担当した。詳細は生体防御学分野の年報を参照。

チーム医療リテラシー（3 年次前期）：当科目は、全人的医療を実現する上での多職種連携の必要性を理解することを目的として、医歯薬看護学部と医療専門学校の学生が一堂に集って実施されている。白石はファシリテーター兼チューターとして、3 日間 6 コマの司会とグループワークの評価を担当した。

総合薬物治療演習（4 年次通年）：CBT 対策、国家試験対策も見据えて 4 年生までの全科目の総復習を目的としたオムニバス形式の演習講義 25 コマと、5 年次実務実習に耐えうる薬物治療の能力を 10 コマの症例処方解析演習と 9 コマの自習型演習のコンビネーションで養う、5 単位 44 コマから成る総合演習科目である。科目責任者・コーディネーターを白石が担当している。白石は免疫学に関連する演習講義を 1 コマ担当した。更に、科目責任者、4 年生の教務担当教員として、科目全体のスケジューリングや中間試験（6 回）・期末試験（1 回）・再試験をとりまとめ、演習後半では 20 コマの監督を担当した。

卒業研究 1（4 年次通年）：今年度当分野に配属された 4 年生はいなかった。

実務基礎実習（4 年次後期）：手洗いとガウン着脱の指導を中心として、グループワークや総合復習、到達度試験の実施・評価など、50 コマ（前年度から 7 コマ増）を担当した。

実務実習（病院・薬局）（5 年次通年）：分野配属の 5 年生 1 名のために、実習先薬局、病院と情報共有を行い、実習先薬局（秋田県横手市）には中期訪問を行った。一方、実習先病院にはスケジュールの都合で一度も訪問できず、メール上での情報共有を行った。また、ネットワークツールによる日報・振り返り（週報）の確認やコメントバックを行った。実務実習成果発表会における評価者を担当した。

4 学部合同セミナー（6 年次前期）：IPE の総まとめとして医歯薬看の最終学年の学生が一堂に介して PaperPatient の症例からその治療方針を決めて患者・家族に説明を行う当科目において、ファシリテーター兼チューターとして、司会とグループワークの評価を担当した。

臨床薬学総合演習（6 年次前期）：6 年次までに学習してきた薬学領域の全ての学修内容を踏まえ、薬物療法の実践および地域保健医療への参画・実践への知識や応用能力の修得を目指

した当科目において、精神疾患に関する演習講義やグループ討議（4コマ）、および補習講義を担当した。

卒業研究 2（5、6年次）：5年生1名に対し研究指導を行った。

総合講義・演習（6年次）：生体防御学（免疫）を含む担当教科について、基本的かつ重要な知識の理解と定着を目指して解説した（2コマ）。また、試験直後のフィードバック講義、並びに秋と冬の補習講義も担当した。

遺伝子導入技術を学ぶ（自由科目、2-4年）：生体防御学分野が提供しているもう一つの自由科目「遺伝学に親しむ」と隔年開催の開催年にあたり、1名の受講者を得て、線虫を用いた遺伝子導入手法に関する講義ならびに、基礎的実験を行った。新規購入した遺伝子導入機器（インジェクター）と受講者の根気により、蛍光タンパク質を発現する遺伝子導入線虫を得ることに成功した。

その他：分野、所属委員会担当業務として以下の教育業務を担当した。薬学共用試験の主任監督（4年生）、総合演習・総合試験作問（6年生）、外部模試3回の実施準備と試験監督（4年生）、国試対策個別指導・秋冬の補習講義（6年生）、個人面談（学業相談、生活改善指導、就職支援等）（全学年の担当クラス・分野配属学生）等

◆◆ 学内委員等 ◆◆

学内委員等

全学教育推進機構委員会委員、岩手医科大学共済会役員、岩手医科大学大学報編集委員会委員、組換え DNA 実験安全委員会委員・薬学部安全主任、病原体等安全管理委員会薬学部安全主任者

学部内委員等

教科課程部会部会長、教務委員会委員、CBT 実施委員会委員、薬学部広報・入試検討委員会委員、薬学部 DP・CP 作成ワーキンググループコアメンバー、薬学部ホームページワーキンググループメンバー、第1・2・3年学年長、第4学年教務担当、写真部薬学部部長、岩手医科大学管弦楽団薬学部部長

◆◆その他 特記事項◆◆

- ・令和6年度 第1回岩手医科大学薬学部実務実習連絡会議 令和6年12月11日、矢巾キャンパス（教科課程部会長として参加）
- ・令和6年度 推薦入試合格者によるスクーリング 令和7年2月15日 矢巾キャンパス（オーガナイザー）

岩手医科大学薬学部 教育年報 第 18 号

令和 7 年 9 月発行

発行 岩手医科大学薬学部

〒028-3694 岩手県紫波郡矢巾町医大通一丁目 1 番 1 号

編集 岩手医科大学薬学部教務委員会 教育検証部会
(工藤 賢三、白石 博久、中西 真弓) (五十音順)

